一文字の有無が神学を分ける

第一部　創世記 18 章 19 節の翻訳史

太 田 修 司 著

２０１７年１０月

A History of the Translation of Genesis 18:19 in the Reformation Era

October 2017

vvptv140@ybb.ne.jp,

一文字の有無が神学を分ける　第１部　創世記 18 章 19 節の翻訳史

はじめに

> For I have known him, to the end that he may command his children and his household after him, that they may keep the way of the LORD, to do righteousness and justice; to the end that the LORD may bring upon Abraham that which He hath spoken of him.（創世記 18 章 19 節．JPS Tanakh 1917）

一橋大学の古典語科目「ギリシア語Ⅱ」（新約聖書等の原典講読）を長年担当する中で、いわゆる七十人訳聖書の創世記と出エジプト記をギリシア語原文で読む機会に恵まれた。周知のように、七十人訳聖書（前３世紀以後アレクサンドリアで翻訳）は、当時彼らが手にしていたヘブライ語本文からのギリシア語訳であるから、今日伝えられている旧約聖書（マソラ本文）との間に内容上さまざまな違いがあるのは当然である。大きな違いとして目につくのは、創世記でいうと、イスラエルの先祖たちの系図、生存年数、人数等に関する記述（たとえば 11：12―25、46：20―22）等である。それらと比べると、ここに取り上げる本文の相違は、全く目立たない、小さな違いでしかない。だがこれは、本文の意味の確認やアブラハム物語全体の解釈だけでなく、それらに基づくユダヤ・キリスト教の教えの根幹と深くかかわっている。本書の第 1 部「創世記 18 章 19 節の翻訳史」では、まず、創世記 18 章 19 節の古代における本文形態（サマリア五書、七十人訳、ウルガータ訳）を確認し、次に、宗教改革期の新しいラテン語訳と主要な日常語訳（独語、仏語、英語）をその底本とされたヘブライ語聖書（マソラ本文）と共に検討する。ここから明らかになるのは、ごく例外的な一例を除き、宗教改革期（本書では１５世紀後半から１７世紀第一四半期までを指す）のマソラ本文に基づくラテン語訳聖書と日常語訳聖書の中に、本節の意味を正確に伝えたものはない、という驚くべき事実である。これに対しては、「当時のヘブライ語研究の水準は確かに今日から見れば低かったが、創世記 18 章 19 節のヘブライ語は現代の各国語訳ではおしなべて正しく訳されるようになったのだから、それでよいではないか」という反応があるかもしれない。しかし、これを聖書翻訳の歴史的改善を示す一例として片づけるわけにはいかない。創世記 18 章 19 節は、釈義的にも神学的にも重要な意味をもつはずなのに、宗教改革者たちの信仰義認論は本節を無視して構築されたように見えるからである。本節と真剣に向き合うならば、パウロのいう「信による義」を全く新たな光の下にとらえ直すことが可能になるであろう。この問題は本書の第 2 部「アブラハムの選びと信仰義認」で掘り下げることにしたい。

創世記 18 章 19 節に関する限り、たとえばルター訳とオリヴェタン聖書はマソラ本文よりもサマリア五書、七十人訳、ウルガータ訳、あるいはタルグムに近い。両者の違いは結局一文字（ו ウァウ）の有無（マソラ本文にはこれがある）に帰着する。これを無視したように見えるルター訳を直ちに誤訳と決めつけることはできないが、聖書の翻訳として ו を訳出するか否かは決定的に重要なはずである。これを訳文に反映させることは、主がアブラハムを「知った」（「選んだ」という含意をもつ）ことを明示的に語る本文がアブラハム物語に含まれることを意味する。しかも、18 章 19 節は「義」という最重要語を含み、これは当然 15 章 6 節のアブラハムの「信仰義認」と関係するはずだ（18 章 19 節は創世記本文の新しい層に属するという現代の資料批判に影響されたためか、今日のパウロ研究者たちは本節に注目しようとしない。パウロはマソラ本文とは異なる七十人訳を用いたに違いないから問題にならない、

という先入見も捨てるべきだ)。アブラハムが選ばれた理由と目的は、いったいどこにあるのだろうか。ユダヤ教はこの根本問題を考察してきた。本書の第２部では、第二神殿時代のユダヤ教文書と古代のラビたちの解釈を見渡しながら、使徒パウロおよびイエスの思想と関連づけてアブラハムの選びと「信による義」（注１）の問題を考察することにしよう。だがそこへ進む前に、創世記 18 章 19 節が宗教改革期の翻訳聖書においてどのように訳されたかを、一次資料に照らして確認する必要がある。（注２）

※聖書各書の名称は、原則として『聖書 新共同訳』の書名を使用した。

※聖書本文等の日本語訳は、特記のない限り、著者自身のものである。

※ラテン語文献の解釈について一橋大学講師井阪民子氏から貴重なご助言をいただいた。一橋大学名誉教授土岐健治氏から、全体的な問題点と誤記の誤り等をご指摘していただいた。この場をかりて深く感謝申し上げる。

※ヘブライ語の文法用語は、左近義慈編著・本間敏雄改訂増補『ヒブル語入門［改訂増補版］』教文館、2011 年による。

※人物の名前と生没年等のデータは基本的に『キリスト教人名辞典』（日本基督教団出版局、1986 年）によったが、より一般的な人名表記を使用したり、他の信頼できる資料に基づいて生没年等のデータに差し替えた項目もある。

※使用する一次資料の書名には、WorldCat の書誌情報に準じて、コロンやコンマを適宜施した。

第１章　創世記 18 章 19 節の本文形態

１．マソラ本文（ＭＴ）と七十人訳（ＬＸＸ）の比較

まず最初に、創世記18章19節の本文を、現在広く用いられているラールフス編の七十人訳（1Ga）と今日の標準的な旧約聖書校訂本（BHS．1Ha）とで比較してみよう（ヘブライ語は右から左に読む。以下、比較のため、日常語訳も含め原則としてすべて直訳調で訳す）。

ＬＸＸ

ᾔδειν γὰρ ὅτι συντάξει τοῖς υἱοῖς αὐτοῦ καὶ τῷ οἴκῳ αὐτοῦ μετ᾽ αὐτόν, καὶ φυλάξουσιν τὰς ὁδοὺς κυρίου ποιεῖν δικαιοσύνην καὶ κρίσιν· ὅπως ἂν ἐπαγάγῃ κύριος ἐπὶ Αβρααμ πάντα, ὅσα ἐλάλησεν πρὸς αὐτόν.

というのは、わたしは知っていたからだ。彼（アブラハム）が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に命じ、そして彼らが正義（注３）と裁きを行うべく主の道（pl.）を守るだろう、ということを。主がアブラハムの上に、彼に向かって話したすべてのことをもたらすために。（注４）

ＭＴ

כִּ֣י יְדַעְתִּ֗יו לְמַעַן֩ אֲשֶׁ֨ר יְצַוֶּ֜ה אֶת־בָּנָ֤יו וְאֶת־בֵּיתוֹ֙ אַחֲרָ֔יו וְשָֽׁמְרוּ֙ דֶּ֣רֶךְ יְהוָ֔ה לַעֲשׂ֥וֹת צְדָקָ֖ה וּמִשְׁפָּ֑ט
לְמַ֗עַן הָבִ֤יא יְהוָה֙ עַל־אַבְרָהָ֔ם אֵ֥ת אֲשֶׁר־דִּבֶּ֖ר עָלָֽיו׃

というのは、わたしは彼（アブラハム）を知ったからだ。彼が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に命じ、そして彼らが義と裁きを行うべく、ヤハウェの道を守るために。ヤハウェがアブラハムの上に、彼に向かって話したことを来たらせるために。

これらを比べると、「わたしは彼を知った」と「わたしは知っていた」との違い、および、「知った」に続く接続語の意味（機能）の違いを除き、両者は概ね一致していることが分かる。違いは大きくないように見えるが、無視することはできない。また、七十人訳聖書がこのように訳した理由も問題になる。

もしも七十人訳の翻訳者がマソラ本文と同じヘブライ語テクストを用いたとすれば、それをこのように訳したとはまず考えられない。ましてや語末の１文字を無視したとは考えられない。というのは、少なくとも創世記に関する限り、ＢＨＳのマソラ本文と同じヘブライ語を訳したと思われる箇所については、七十人訳の翻訳は概ね直訳的だからである。このことは、ヘブライ語聖書を参照しながら七十人訳を読んだ経験をもつ者の大多数が認めるであろう（注５）。相違の理由は別のところにあるに違いない。この点については、サマリア五書（ＳＰ）の本文が手がかりになる（サマリア五書とその特徴については 4Hn 第３章参照）。すなわち、サマリア五書の創世記 18 章 19 節の本文（1Hc）は以下のとおりだが、これはマソラ本文の **יְדַעְתִּיו** を **ידעתי**（わたしは知った）に変え、**יְצַוֶּה** の暗黙の主語 **אַבְרָהָם** を明示した形になっている（ＭＴとの相違箇所を太字で示す）。それ以外の違いはない。ＢＨＳの欄外注記は **יָדַעְתִּי** という異読がサマリア五書に現れることを指摘し、さらに七十人訳の ᾔδειν も同列のものとして扱っている。

ＳＰ

כי **ידעתי** למען אשר יצוה **אברהם** את בניו ואת ביתו אחריו ושמרו דרך יהוה לעשות צדקה

ומשפת למען הביא יהוה על אברהם את אשר דבר עליו:

とするなら、七十人訳聖書の翻訳者が用いた本文は、サマリア五書に近い形のもの（אברהם は含まない）であったと推測してよさそうである。ידעתי というヘブライ語の完了形を ᾔδειν と訳したのは解釈の問題であって、ヘブライ語の本文の違いに起因したのではあるまい。

２．タルグム

ＢＨＳはサマリア五書と同列の異読として、七十人訳のほかタルグム・オンケロス（ＴＯ）、タルグム偽ヨナタン（ＴＰＪ）、およびウルガータ訳（ＶＵＬ）も挙げている。それらをここで一通り確認することにしよう（注６）。

ＴＯ

אֲרֵי גְלֵי קדמי בְדִיל דִיפַקֵיד יָת בְנוֹהִי וְיָת אֱנָשׁ בֵיתֵיה בָתְרוֹהִי וְיִטְרוּן אוֹרחָן
דְתָקְנָן קֳדָם יוי לְמַעֲבַד צְדַקתָא וְדִינָא בְדִין דְיֵיתֵי יוי עַל אברהם יָת דְמַלֵיל עֲלוֹהִי:

というのは、わたし（主）の前に明かされているからだ。彼（アブラハム）が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家の者たちに命じ、そして彼らが義と裁きを行うべく、主の前にまっすぐな道（pl.）を守るために。主がアブラハムの上に、彼に向って話したことを来たらせるために。

ＴＰＪ

ארום גלי קדמיי חסידותיה בגין דיפקד ית בנוי וית אינש ביתיה בתרויי
ויטרון ארחן דתקנן קדם ייי למעבד צדקתא ודינא בגין דייתי{ה} עילוי
אברהם ית טבתא דמליל עלוי

というのは、わたし（主）の前に彼（アブラハム）の敬虔が明かされているからだ。彼が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家の者たちに命じ、そして彼らが義と裁きを行うべく、主の前にまっすぐな道（pl.）を守るために。彼〔主〕がアブラハムの上に、彼に向って話した良いことどもを来たらせるために。

ＴＯの本文には複数の異読が存在し綴り字の相違も見られるが、ここで逐一取り上げる余裕はない。要は、ＭＴの「わたしは彼を知った」が「わたしの前に明かされている」に言い換えられていることである。エイバーバック（1Aa, 108f.）によると、ＴＯがこう訳した理由は、「“知”は通常限定的性質のものなので、特定の人や対象と関連する“知る”という語を、神に適用することはできない。ある時点で何らかの事物に知を限定する仕方で、神の全知を制限することはできない」ということにある（出 2：25、3：7、33：17 参照）。しかし、「わたしの前に明かされている」という訳によってこの困難を避けると、後続部分と構文上うまくつながらないという問題が生じる。גְלֵי קדמי の重要な異読である ידעתיניה（ヘブライ語 יְדַעְתִּיו の文字どおりの訳）の根底には、そうした認識があるのであろう（以下に見るように、「コンプルートゥム多言語聖書」に収録されたＴＯはこちらの読みをとっている）。ＴＰ

Ｊは、具体的な語を付加する点で、ＴＯよりも敷衍的である。

３．古ラテン語訳とウルガータ訳

宗教改革期の聖書翻訳者たちは、古ラテン語訳（Itala, Vetus Latina）を見なかったと思われるが、ウルガータ訳との比較のために見ておきたい。

Ｉｔａｌａ（1La''）（行間に七十人訳を示す）

Scio enim quia constituet filiis suis, & domui suae post se, & custodient vias Domini,
ᾔδειν γὰρ ὅτι συντάξει τοῖς υἱοῖς αὐτοῦ καὶ τῷ οἴκῳ αὐτοῦ μετ᾽ αὐτόν, καὶ φυλάξουσιν τὰς ὁδοὺς κυρίου
& facere justitiam & judicium: ut adducat Dominus in Abraham omnia quae locutus est ad eum.
ποιεῖν δικαιοσύνην καὶ κρίσιν· ὅπως ἂν ἐπαγάγῃ κύριος ἐπὶ Αβρααμ πάντα, ὅσα ἐλάλησεν πρὸς αὐτόν.

というのは、わたしは知っているからだ。彼が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に命令し、そして彼らは、主の道（pl.）を守るであろうということ、そして正義と裁きを行うことを。主がアブラハムに対して、彼に向かって話したすべてのことをもたらすために。

古ラテン語訳は七十人訳本文の逐語訳になっている。ᾔδειν の訳はともかく、「道」は七十人訳と同じく複数形であり、& facere justitiam & judicium という不定法も元のギリシア語と同様である。facere の前に et を置いたのは、ποιεῖν を目的ではなく結果の意味にとって先行部分と続けたからであろう。

ＶＵＬ（1La）

scio enim quod praecepturus sit filiis suis, et domui suae post se, ut custodiant viam Domini, et faciant iustitiam et iudicium: ut adducat Dominus propter Abraham omnia quae locutus est ad eum.

というのは、 わたしは知っているからだ。彼〔アブラハム〕が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが主の道を守り、そして正義と裁きを行うように、命じるであろうことを。主がアブラハムのために、彼に向って話したすべてのことをもたらすために。

ウルガータ訳を古ラテン語訳と比較すると、訳文を改善しつつも、scio および quia（ここでは ＝quod）という訳語は受け継いだことが分かる。ヘブライ語本文に従って「道」を単数形に訳し、ぎこちない不定法も読みやすく直している。しかし、七十人訳および古ラテン語訳と同じく「彼を」（יְדַעְתִּיו の末尾の ו）を省いている。この点は、マソラ本文に基づく宗教改革期の多くのラテン語訳（第３章）と根本的に異なる。ヒエロニムス（347～419／20）はどういうヘブライ語本文を用いたのだろうか。（1La の本文には句読点がないので、便宜上ＶＵＬ^{SC}と同じに区切る）。

４．古代から現代に至る創世記 18 章 19 節の本文と翻訳の二系統

以下に詳述する内容をかいつまんでまとめておこう。マソラ本文に基づくヘブライ語聖書の印刷本が最初に現れたのは１５世紀後半である（注７）。ルターは 1494 年にイタリアのブレシアで出版されたヘ

ブライ語聖書（1Hg）を翻訳の底本に用いた。その後 1524／25 年に、ヤコブ・ベン・ハイーム校訂の「第二ラビ聖書」（1Hj）が出版されると、標準公認本文として聖書翻訳者たちの広く使用するところとなり、二十世紀初期のキッテル（Rudolf Kittel　1853―1929）編の *Biblia Hebraica* 第一版、第二版（ＢＨＫ 1Hb）にも受け継がれた（4Hn, 71f.; 4Hg, 71）。ベン・ハイーム校訂本は、よりすぐれた写本を使用したＢＨＫ第三版（1937 年完成）およびそれに取って代わった現在のＢＨＳとはもちろん多くの点で異なるが、創世記 18 章 19 節の本文については、ＢＨＳおよびＢＨＫと（そして 1494 年のブレシア版とも）基本的に一致する。そうなると、本節に関する限り、ルター以後の翻訳聖書は、カトリック訳は別として、実質上同じヘブライ語本文から訳したことになるから、そのすべてが יְדַעְתִּיו（イェダアティーヴ）の末尾の一文字 ו（ウァウ）――「彼を」――を訳出しているはずだが、実状はそうではない。ここで全体を見渡すため、ו を訳出しているか否かを基準に、宗教改革期に世に出た創世記 18 章 19 節の本文と翻訳の二系統を概観しておくことにしよう。ただし、翻訳上の問題は ו の扱いに尽きるわけではなく、それをどういう意味にとるか、またそれと密接に関連する לְמַעַן אֲשֶׁר（レマアン・アシェル）の解釈も、それと同程度に重要である。さまざまな翻訳を見比べれば、問題の所在がはっきりするであろう。

① マソラ系の本文と翻訳

ＭＴ、ＴＯ異読。パグニヌス訳、チューリヒ聖書（ドイツ語、ラテン語）、ミュンスター訳（ו のとり方は二通り）、ティンダル以後の英語訳（ו のとり方は二通り）、ジュネーヴ聖書（フランス語）、トレメリウスのラテン語訳、ピスカートル訳（ラテン語、ドイツ語）。

② サマリア五書系の本文と翻訳

ＳＰ、ＬＸＸ、ＶＵＬ、ＴＯ、ルター訳、ルフェーブル訳、オリヴェタン訳、カステリョ訳（ラテン語、フランス語）、ディーテンベルガー訳、ブノワ訳、ドゥエイ聖書。

第２章　15～16 世紀のヘブライ語聖書と多言語聖書の印刷本

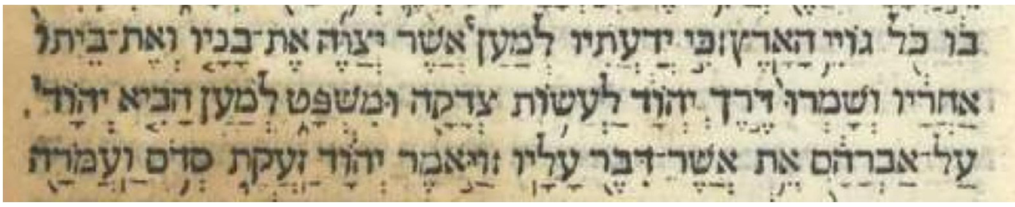
１．最初期のヘブライ語聖書印刷本

1450 年頃グーテンベルクによって活版印刷技術が発明されると、早くも 1477 年にヘブライ語聖書の印刷出版が、まず詩編（Ginsburg No.1）から始まった（4Ha，779－94 頁に非常に詳しい説明がある。以下同様）。５年後の 1482 年には五書（Ginsburg No.2）がボローニャで刊行され、その後の数年間に預言者と諸書も各地で出版された。この五書の本文には母音記号とアクセント記号がつけられ、タルグム・オンケロスとラシ（4Ba; 3Gd, 261ff.）の注解（下記参照）も含まれていた。これらを受けて旧約聖書全体の最初の印刷本（Ginsburg No.6. 4Hc, 62）が出版されたのは 1488 年――エラスムス（Desiderius Erasmus 1469［66？］―1536）によるギリシア語新約聖書刊行の 28 年前――のことである。この聖書は残存数が極めて少なく、創世記については電子ファイルも用意されていないようだが、一応文献表に含めておく（1Hf)。五書末尾のあとがきには、「イスラエル・ナータン〔1483 年、北イタリアのソンチーノに印刷所を設立〕の息子ヨシュア〔Joshua Solomon ben Israel Nathan Soncino〕が 1488 年のイーヤルの月の 11 日〔4 月 22 日〕（4Hf, 281 w. n26）に、ボローニャ在住の印刷業者アブラハム・ベン・ハイームの手で 24 の書を仕上げ、ソンチーノで印刷した」という主旨の言葉が記してある（4Ha，821)。(24 という数については、下記「７．ミュンスターのラテン語対訳ヘブライ語聖書」と注 15 を参照)。タイトル頁はない。本文には母音記号とアクセント記号がついているが、1482 年の五書とは異なり、タルグムも注釈もついていない。本書はごくわずかしか刊行されなかったが、これを大金をはたいて購入した者の中にヨハネス・ロイヒリン（Johannes Reuchlin　1455―1522）がいた（4Bg, 117)。これに続く旧約聖書全体の第二の印刷本（Ginsburg No.9）は、1491 年から 1493 年にかけてナポリ（ナプレス）のソンチーノの印刷所で作られた。

旧約聖書全体の印刷本の第三版（Ginsburg No. 13．1Hg）は、1494 年５月（4Hf, 283）にブレシアで出版された。これはルターのドイツ語訳の底本に用いられたことでつとに有名である（4Ha, 880; 4Ga, 356; 4Hc, 81; 3Ge, 99)。編集と印刷はソンチーノ家のゲルショム・ベン・モーシェ（Gershom ben Moses．ヨシュア・ソロモンの甥で 1534 年に死去）によって行われた。それ以前の本と同様、これにもタイトル頁はなく、頁番号も振られていない。章の番号もない（注８)。本文には母音記号とアクセント記号があるが、タルグムも注釈もついていない。全体は５つの部分から成り、次の順序で配列されている。(１）モーセ五書、(２）メギロート（雅歌、ルツ記、哀歌、コヘレトの言葉、エステル記）(注９)、(３）前の預言者（ヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記)、(４）後の預言者（イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書、ホセア書等の十二小預言書)、(５）諸書（詩編、箴言、ヨブ記、ダニエル書、エズラ・ネヘミヤ記、歴代誌)。エズラ記とネヘミヤ記は完全な一体をなし（柱は「エズラ｣)、サムエル記、列王記、歴代誌は上下に分けられていない。印刷はかなり粗末で、判読困難な箇所や柱が抜けている頁も多い（柱の誤りも数頁に見られる)。詩編のみ二段組で印刷され、この部分に柱はない。

２．1494 年ブレシア版ヘブライ語聖書の創世記 18 章 19 節（**Ginsburg No. 13**）(1Hg)

この聖書の創世記 18 章 19 節は次のようになっている。


בו כל גויי הארץ׃ כי ידעתיו למען אשר יצוה את בניו ואת ביתו
אחריו ושמרו דרך יהוד לעשות צדקה ומשפט למען הביא יהוד
על אברהם את אשר דבר עליו׃ ויאמר יהוד זעקת סדם ועמרה

一方、ＢＨＳの本文は次のとおりである。

כִּ֣י יְדַעְתִּ֗יו לְמַ֩עַן֩ אֲשֶׁ֨ר יְצַוֶּ֜ה אֶת־בָּנָ֤יו וְאֶת־בֵּיתוֹ֙ אַחֲרָ֔יו וְשָֽׁמְרוּ֙ דֶּ֣רֶךְ יְהוָ֔ה לַעֲשׂ֥וֹת צְדָקָ֖ה וּמִשְׁפָּ֑ט לְמַ֗עַן
הָבִ֤יא יְהוָה֙ עַל־אַבְרָהָ֔ם אֵ֥ת אֲשֶׁר־דִּבֶּ֖ר עָלָֽיו׃

両者を比べると、何よりもまず、大切なはずの神名が 2 箇所とも正確に記されていないことに気づく。印刷の不備であろうか。神名の ה にはホレム（･）がついている（もちろんユダヤ人は「イェホーヴァー」などと発音しなかった）。さらに、あるべきはずのダゲシュ（בֵּיתוֹ, בָּנָיו, יְדַעְתִּיו）がない点も、ＢＨＳの本文と異なっている。しかし、これらの不備によって本文の意味が変わるわけではあるまい。ルターが明白に訳出しなかった重要な文字（ו）も確かに印刷されている。

３．コンプルートゥム多言語聖書（**The Complutensian Polyglot Bible.　Ginsburg No. 19**）（1Hh）

1494 年ブレシア版の次に出た旧約聖書全体の印刷本（第四の版）は、イタリアのペーザロで 1511 年と 17 年にゲルショム・ソンチーノによって刊行された２巻本（Ginsburg No.18）である（4Hc, 142f.）。この本はきわめて希少なものらしく、完全な状態のものは残っていない。研究者もこれにはほとんど言及していないので、ここでは存在を確認するだけにしておこう。

これに続く聖書全体の印刷本（キリスト教徒によるのでヘブライ語旧約聖書だけでなくギリシア語新約聖書も含む）は、スペインの枢機卿フランシスコ・ヒメネス（Francisco Jiménez de Cisneros　c. 1436－1517）によって編集されたコンプルートゥム多言語聖書である（Ginsburg No. 19）。ヒメネスは、トレド（優れたヘブライ語写本が揃っていた）の大司教となった後の1500年（4Bj, 25. 4Hf, 287 によれば1498年）に、人文学を専門に研究するサン･イルデフォンソ学院（Colegio Mayor de San Ildefonso）をマドリード州アルカラ・デ・エナーレス（コンプルートゥムはその古いローマ名）に設立した。コンプルートゥム多言語聖書の翻訳は1502年に開始され（4Bj, 28）、ヒメネスのスタッフの中には、ディエゴ・ロペス（Diego López de Zúñiga／Jacobus Stunica　d. 1531．エラスムスのギリシア語新約聖書の批判者として有名）、デメトリウス・デュカス（Demetrius Ducas of Crete／Demetrius Ducas Cretensis／Δημήτριος Δούκας　c. 1480—c. 1527．ギリシア語部分の主幹）、アルフォンソ・デ・サモラ（Alfonso／Alonso de Zamora　c. 1474—1544．ユダヤ教のラビからカトリックに改宗したヘブライ語学者）、アントニオ・デ・ネブリハ（Elio Antonio de Nebrija／Aelius Antonius Nebrissensis　1441／44—1522．ラテン語・スペイン語学者）らがいた（4Bj, 27f.; 4Hf, 288）。ヒメネスが大学設立と写本収集に費やした金銭は莫大な額にのぼった（大学に寄付した金額は14,000ドゥカート、７つのヘブライ語写本を集めるのに4,000ドゥカート）。(4Bj, 25; 3Ge, 50)。（注10）

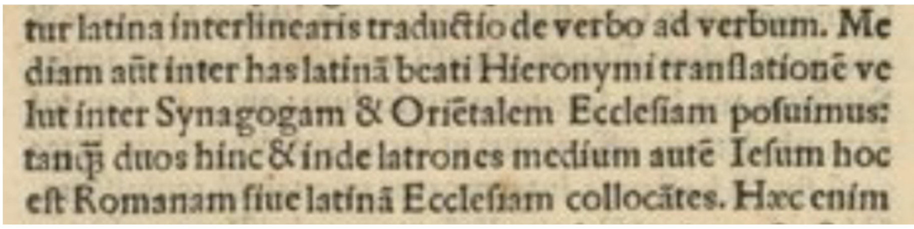
聖書がアルカラで印刷されたのは 1514 年から 17 年にかけてだが（4Bj, 28; 4Hf, 288）、教皇レオ１０世（在位 1513―21）に献呈されて出版の認可がおりたのは 1520 年、実際に世に出たのは 1522 年頃であった（4Bj, 35; 3Ge, 50）。本書は 6 巻から成る二折判で、印刷されたのはわずか 600 部、かかった費用は 50,000 ドゥカート以上であった（4Bj, 34; 4Hf, 288）。第四巻末尾の奥付には、1517 年 7 月 10 日という日付が記されている。各巻の内容は次のとおり。（１）モーセ五書（ヘブライ語本文、アラム語タルグム、そのラテン語訳、ラテン語行間訳のついた七十人訳、ウルガータ訳)。(２）ヨシュア記、士師記、ルツ記、サムエル記上下、列王記上下、歴代誌上下、マナセの祈り（タルグムとそのラテン語訳は付いていない)。(３）エズラ記、ネヘミヤ記、トビト記、ユディト記、エステル記（付加を含む)（注 11)、ヨブ記、詩編、箴言、コヘレトの言葉、雅歌、知恵の書、シラ書。(４）イザヤ書、エレミヤ書、哀歌、バルク書、エゼキエル書、ダニエル書（付加を含む)、十二小預言者、マカベア書一、二、三。(５）新約聖書 (ギリシア語本文とウルガータ訳。四福音書、パウロの手紙、ヘブライ人への手紙、使徒言行録、公同の手紙、ヨハネの黙示録の順。パウロの手紙の前に「使徒聖パウロの旅」というギリシア語の文章が置かれている)。(６）アルフォンソ・デ・サモラによる旧約聖書のヘブライ語とアラム語の辞書（vocabularium.　第 4 章§3 参照)、ヘブライ語とアラム語の人名辞典、ヘブライ語文法の簡単な説明、その他。われわれの主たる関心事は創世記なので、その部分の構成をもう少し詳しく見ることにしよう。

第一巻のタイトル頁（図版参照）にはヒメネス枢機卿の紋章が中央に描かれ、その上下に文字が配されている。本の表題に当たるのは下方の文字である。多言語による旧約聖書の史上初の印刷本であって、ヘブライ語、ギリシア語、カルデア語（アラム語）のモーセ五書本文をラテン語訳と共に収録したことをうたっている。紋章の上側に掲げられた文章（Haec tibi pentadecas tetragonon respicit illud. Hospitium petri et pauli ter quinque dierum. Namque instrumentum vetus hebdoas innuit: octo Lex noua signatur. ter quinque receptat vtrumque.）の意味は不明瞭で、定説はないようである（直訳「この 15 は、あなたのために、あの四角形をながめ渡す。ペトロとパウロの〔相互の〕歓待は 5 日の三倍。確かに、7 は古い契約をほのめかし、8 によって新しい契約が示される。三度で 5 は、二つのうちのどちらも受け入れる」)。「15」は 15 の四角形から成る盾の紋章を指し、それがまた完全性を表わす比喩として意図されているのだろうか。ペトロとパウロの「〔相互の〕歓待」は、ガラテヤ書 1 章 18 節でパウロが言及したペトロのもとでの「十五日間」の滞在を指すのであろう（4Bj，30)。創世記の本文の前には、作品の刊行を許可する教皇レオ１０世の大勅書、ヒエロニムスのモーセ五書序文、ヘブライ語の語根についてのごく簡単な説明を含む、10 の文書が置かれている（4Ha, 909)。

創世記を含む五書の頁構成は次のようになっている（見開き２頁ごと。タルグムの欄は上段よりも高さが低い)。

ヘブライ語の語根	ヘブライ語本文	ヒエロニムスのウルガータ訳	七十人訳とそのラテン語行間訳	七十人訳とそのラテン語行間訳	ヒエロニムスのウルガータ訳	ヘブライ語本文	ヘブライ語の語根
アラム語の語根	タルグムのラテン語訳	タルグム		タルグム		タルグムのラテン語訳	アラム語の語根

ウルガータ訳がヘブライ語本文と七十人訳の間の位置を占めることについて、ヒメネスが読者に宛てた第二の序文に次の記述がある。

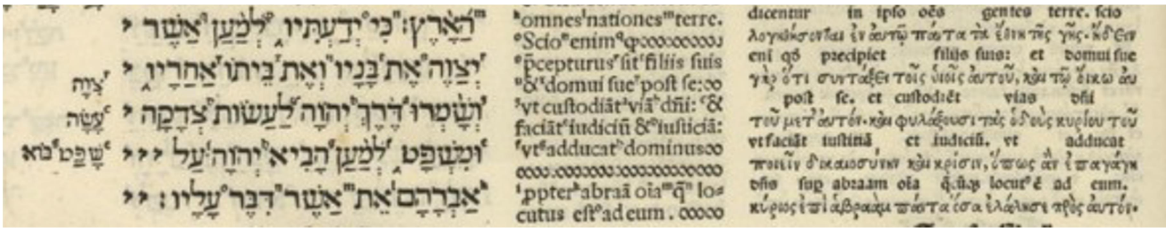

tur latina interlinearis traductio de verbo ad verbum. Me
diam aũt inter has latinã beati Hieronymi translationẽ ve
lut inter Synagogam & Oriẽtalem Ecclesiam posuimus:
tanq̃ duos hinc & inde latrones medium autẽ Iesum hoc
est Romanam siue latinã Ecclesiam collocãtes. Hæc enim

Mediam autem inter has latinam beati Hieronymi translationem velut inter Synagogam & Orientalem Ecclesiam posuimus: tanquam duos hinc & inde latrones medium autem Iesum[.] hoc est Romanam siue latinam Ecclesiam collocantes.

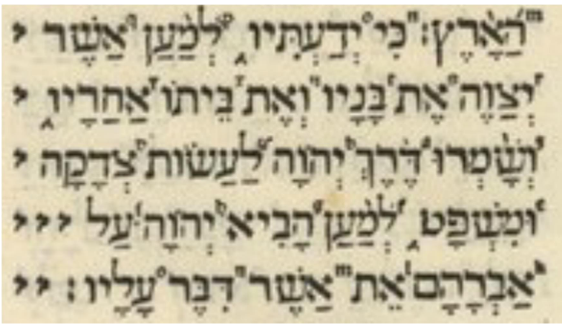
だが一方、中間のものとして、これらの間に、祝福されたヒエロニムスのラテン語訳を、言うなればシナゴーグ〔ヘブライ語本文〕と東方教会〔ギリシア語訳〕の間に、置いた。ちょうど二人の盗賊をこちらとあちら〔左右〕に、だがイエスを中間のものとして〔置いた〕ように。これが、ローマのあるいはラテンの教会を〔適切に〕配置するものである。(4Ha, 911f.; 4Bj, 29f.)。

4．コンプルートゥム多言語聖書の創世記 18 章 19 節

本書における創世記 18 章 19 節（左から、ヘブライ語の語根、ヘブライ語本文、ウルガータ訳、七十人訳とその行間訳）は次のようになっている。ヘブライ語本文の行末の文字 ׳（ヨード．必要に応じて複数重ねられる）は空白を埋めるためのものである（拡張文字を用いた第二ラビ聖書［下記］と比較）。



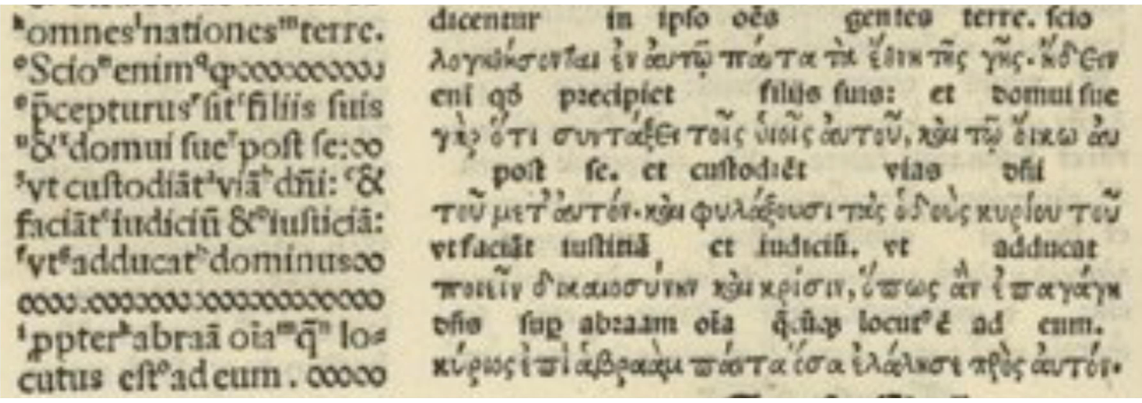
ヘブライ語本文を拡大すると、次のようになる。単語の右肩のアルファベットは、ウルガータ訳との対応関係を示す。比較のため、ＢＨＳの本文を下に掲げる。



כִּ֣י יְדַעְתִּ֗יו לְמַ֨עַן֩ אֲשֶׁ֨ר יְצַוֶּ֜ה אֶת־בָּנָ֣יו וְאֶת־בֵּיתוֹ֙ אַחֲרָ֔יו וְשָֽׁמְרוּ֙ דֶּ֣רֶךְ יְהוָ֔ה לַעֲשׂ֥וֹת צְדָקָ֖ה וּמִשְׁפָּ֑ט לְמַ֗עַן הָבִ֤יא יְהוָה֙ עַל־אַבְרָהָ֔ם אֵ֥ת אֲשֶׁר־דִּבֶּ֖ר עָלָֽיו׃

見てのとおり、アクセント記号をほとんど省いているが、これは独自の方針によっている（4Ha, 914ff.）。母音記号は付されているが、不備が多い。本節だけでも、ハテフパタハがパタハになっているもの（אֲשֶׁר, לַעֲשׂוֹת ,אַחֲרָיו）、ダゲシュの抜けているもの（מִשְׁפָּט ,יְצַוֶּה）があり、אֶת や עַל と次の語を結ぶマッケーフも欠けている（4Hn, 229）。1494 年ブレシア版と同じく、神名 יְהוָה の ה にホレムがついている。ただし、これらによって本文の意味が変わることはあるまい。יְדַעְתִּיו の語末の ו も保存されている。

これに対応するウルガータ訳は下記のとおり（左欄）。リシャール・シモンによると、古ラテン語訳写本とヘブライ語本文に照らして訂正したラテン語テクストを収録したとのことだが（3Ga, 516）、本節の本文は、ＶＵＬ^{SC}（1La'）と基本的に同じである（iudicium & iusticiam という語順）。もちろん、語末の ו は訳出していない。



Scio enim quod praecepturus sit filiis suis & domui sue post se: vt custodiant viam domini: & faciant iudicium & iusticiam: vt adducat dominus propter abraam omnia quae locutus est ad eum.

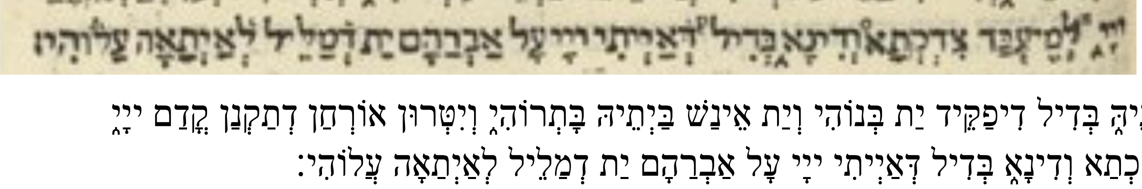
七十人訳に施された行間訳（各行の上部）は次のとおり。

scio enim quod precipiet filiis suis: et domui sue post se. et custodient vias domini vt faciant iustitiam et iudicium. vt adducat dominus super abraam omnia quae locutus est ad eum.

この訳では、七十人訳の συντάξει と φυλάξουσιν（共に未来時称）をそれぞれ precipiet, custodient と直説法未来形に訳し、δικαιοσύνην καὶ κρίσιν に合わせて iustitiam et iudicium（正義と裁き）という語順にしているほか、複数形の ὁδοὺς（道）を vias と複数形に訳し、さらに ἐπὶ Αβρααμ を super abraam（アブラハムの上に）と正しく訳している。ただし、冒頭の ᾔδειν は現在形に訳している。

その七十人訳だが、この本文（右欄）には（われわれの常識からすると）不備が多い。複母音の気息記号とアクセント記号の位置がずれており、ἤδειν, ἐπαγάγῃ, οἴκῳ の下書きのイオタが落ちている（新約聖書の本文も奇妙な点が多い）。興味ぶかいことに、ποιεῖν の前に τοῦ が挿入されている。また、Αβρααμ が ἀβραάμ となっているが、この語形は「アブラハムの遺訓」（2 世紀頃の旧約聖書偽典）やユリアヌス『ガリラヤ人駁論』（4 世紀）、さらにはエウセビオスの著作にも現れる。ゲッティンゲン版七十人訳聖書（1Gb）はコンプルートゥム多言語聖書を資料に数えておらず、従ってその欄外注記にこれらの読みは取り上げられていない。（この聖書の編集者が用いたギリシア語写本の問題はけっこう厄介らしい）（注 12）。

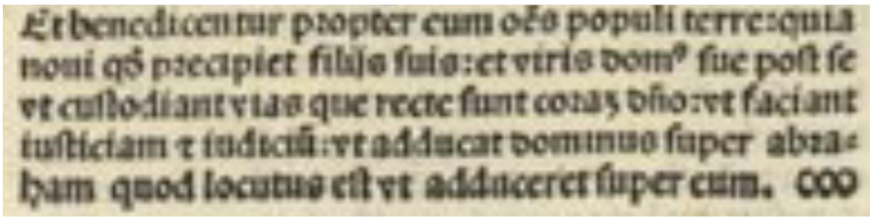
最下段のタルグムの本文（右欄）は、次のとおり。



אֲרֵי יְדַעְתִּינֵּיהֿ בְּדִיל דִּיפַקֵּיד יַת בְּנוֹהִי וְיַת אֱינַשׁ בַּיְתֵיהּ בָּתְרוֹהִיֽ וְיִטְּרוּן אוֹרְחַן דְתַקְנַן קֳדָם יְיָ
לְמֵיעְבַּד צִדְקְתָא וְדִינָא בְּדִיל דְּאַיְיתִי יְיָ עַל אַבְרָהָם יַת דְּמַלֵּיל לְאַיְתָאָה עֲלוֹהִי:

というのは、わたしは彼〔アブラハム〕を知ったからだ。彼が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家の者たちに命じ、そして彼らが義と裁きを行うべく、主の前にまっすぐな道（pl.）を守るために。主がアブラハムの上に、彼の上に来たらせようと話したことを来たらせるために。

19 節の冒頭部分は אֲרֵי יְדַעְתִּינֵּיהּ で始まっている（２番目の語の נ にはダゲシュが付いているように見える）。先に指摘したように יְדַעְתִּינֵּיהּ はヘブライ語 יְדַעְתִּיו に対応するが、今日では異読として扱われる。לְאַיְתָאָה （「来たらせようと」）もＴＯの標準的な校訂本にはない異読である。第一章で見た本文とは単語、綴り、母音記号の付け方にかなりの違いが見られる（残念ながら著者にそれらの違いを説明する力はない）。この部分のラテン語訳（左欄）は次のとおり。


Et benedicentur propter eum oēs populi terre: quia noui qđ precipiet filijs suis: et viris dom⁹ sue post se vt custodiant vias que recte sunt coraʒ dño: vt faciant iusticiam ⁊ iudiciū: vt adducat dominus super abra-ham quod locutus est vt adduceret super eum.

quia noui quod precipiet filijs suis: et viris domus sue post se vt custodiant vias que recte sunt coraz [sic] domino: vt faciant iusticiam et iudicum: vt adducat dominus super abraham quod locutus est vt adduceret super eum.

というのは、わたしは知ったからだ。彼が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家の者たちに、彼らが主の前にまっすぐな道 (pl.) を守るように、命じるであろうことを。彼らが正義と裁きを行うために。主がアブラハムの上に、彼の上にもたらそうと話したことをもたらすために。

vias（pl.）は、タルグムの אוֹרְחָן （道）に対応する（LXX と同じ）。vt adduceret は לְאַיְתָאָ の直訳である。だがこのラテン語訳は、יְדַעְתִּינֵּיהּ（わたしは彼を知った）に続く部分を正確に訳していない。アラム語をウルガータ訳と七十人訳に近づけて訳している。

５．第二ラビ聖書（**The Second Rabbinic Bible**．**Ginsburg No. 23**）（1Hj）

中世の諸家の注解を豊富に収録したラビ聖書（Rabbinic Bible）と呼ばれるヘブライ語聖書の最初のもの（「第一ラビ聖書」）は、アントワープ（アントウェルペン）からヴェニス（ヴェネツィア）へ移住して印刷工房を構えたダニエル・ボンベルク（Daniel Bomberg　1470［80？］—1550）の手で 1516～17 年に印刷された聖書で、編集者はフェーリクス・プラテンシス（Felix Pratensis 1460？—1539）である（Ginsburg No. 20）。プラテンシスは、プラート（イタリア）生まれのユダヤ人だが、自らキリスト教に改宗した後 1518 年にアウグスティヌス会に入ってユダヤ人の改宗を奨励した。ユダヤ教側からは背教者として扱われている（3Bd）。それもあって、本書がユダヤ人の間に広く受け入れられることはなかった。本書は 4 巻から成り、ウルガータ訳と同じ章区分が導入されている。五書についてはマソラ本文を中心に、さまざまなマソラ注釈、ＴＯ、中世の主要な注解（ラシ、キムヒらのもの）を収録している（注

解者の顔ぶれについては、4Hg, 65 の表 1 を参照)。ＭＴとＴＯには母音記号とアクセント記号がついている。聖書の全文書を大きな版で提供したことから、מִקְרָאוֹת גְּדוֹלוֹת (大きな聖書) と呼ばれる (4Hd)。メランヒトン（Philipp Melanchthon 1497―1560）は本書をいち早く入手した。同じ頃、ロイヒリン（Johannes Reuchlin 1455―1522）も手に入れたらしい。1530 年までにはブツァー（Martin Bucer/Butzer 1491―1551）、ミュンスター（Sebastian Münster 1488－1552）、エコランパディウス（Johannes Oecolampadis／Hausschein 1482―1531）も所有していたと言われる（4Hg, 67, 78f.; 4Hf, 492)。しかし、著者自身は見ることができなかったので、これ以上の説明は省きたい。

ラビ聖書の第二版（｢第二ラビ聖書｣）(1Hj）は、1524―25 年にヤコブ・ベン・ハイーム・イブン・アドニヤ（Jacob ben Ḥayyim ibn Adonijah c. 1470―c. 1538）によって編集された 4 巻構成の二折判で、これもダニエル・ボンベルクがヴェニス（ויניציא）で出版した（4Ha, 956ff.; 4Hg, 68f.; 3Ge, 52f.)。(3Bd によれば、ヤコブ・ベン・ハイームはチュニスの出身で、16 世紀初頭に勃発した迫害を逃れて故郷を離れ、最終的にヴェニスに定住した。だが厳密にいえば、彼の生地も正確な名前も不明である［1Hj’］)。初版との大きな違いは、正確な写本のみに基づく本文校訂、それらの写本の母音記号とアクセント記号の一貫した使用、そして充実したマソラ注釈にある（4Hg, 68)。多くの書についてアブラハム・イブン・エズラ（Abraham ben Meir ibn Ezra 1092／93―1167）(3Gd, 266ff.）の注解を（部分的にダヴィド・キムヒの注解と入れ替えて）採録したことも、大きな特徴である。前述のように、本書はその後長い間、標準公認校訂本文として版を重ねた。本書の編集方針と編集作業については、第一巻の冒頭に置かれた編者自身の詳しい序文（1Hj’）からいくつかのことが知られる。この中でヤコブは、ダニエル・ボンベルクとの出会い、本書の編集を引き受けた経緯、さらに作業の苦労について語っている。全巻の構成は次のとおり。(１）五書（ＴＯおよびラシ［Rashi＝Rabbi Shelomoh ben Yitzḥaki 1040―1105］とイブン・エズラの注解を含む)、(２）前の預言者（つまりヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記。サムエル記と列王記はどちらも上下に分けられ、タルグム・ヨナタン（ＴＪ＝Targum Jonathan. תרגום יונתן בן עוזיאל）と、ラシ、ラダク［Radak＝Rabbi David Kimḥi 1160―1235］、ラルバグ［Ralbag＝Rabbi Levi Ben Gershom 1288―1344］の注解を含む)、(３）後の預言者（つまりイザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書、十二小預言書。ＴＪ、ラシの注解、イブン・エズラまたはラダクの注解を含む)、(４）諸書（ダニエル書、エズラ記、ネヘミヤ記、歴代誌上下にタルグムは付いていない。注解者は書によって異なる)。（注解者の顔ぶれについては、4Hg, 69 の表 2 と 4Ha の詳しい説明を参照)。

第一巻をより詳しく見てみよう（4Ha, 958ff. 等による)。聖書本文の前にはヤコブ・ベン・ハイームの序文、旧約聖書全体の二通りの目次（キリスト教の章区分、セダーリーム）(注 13)、およびイブン・エズラの五書序文等が置かれている。聖書本文の頁ごとに、中央にマソラ本文とタルグムが左右に配置され、それらの間にマソラ・パルヴァ（Masora parva)、上下にはマソラ・マグナ（Masora magna）が記され（注 14)、外側の欄にはラシとイブン・エズラの注解が印刷されている。左右の配置は見開きで対称になるように工夫されている（ヘブライ語本文とラシの注解が見開きの内側、タルグムとイブン・エズラの注解が外側)。

図に示した第一巻のタイトル頁について簡単に説明しておきたい。上部の大きな文字（שער יהוה החדש 主の新しい門）は、本の表題と言えなくもないが、本書がこの名前で呼ばれることはない。その

下の四角の外周に反時計回りで記された大きな文字は、箴言 3 章 16－18 節の本文である（ＢＨＳとは若干異なる）。

ארך ימים בימינה בשמאלה עשר וכבוד דרכיה דרכי נעם וכל נתיבותיה שלום עץ חיים היא למחזיקים בה וחמכיה מאשר

〔知恵の〕右の手には長寿があり、左の手には富と、誉がある。その道は楽しい道であり、その道筋はみな平安である。知恵は、これを捕える者には命の木である、これをしっかり捕える人はさいわいである（口語訳）。

中央には（いわゆるラシ書体の）小さな文字で、出版者がこの作品にどれほどの文書を収録したかを具体的に示している（われわれが馴染んでいる方形文字で再現）。

זהו שיעור מה שהדפסנו בחיבור זה. ראשונה החומש עם תרגום ופי' רש"י ון' עזרא: והנביאים ראשונים עם פי' רש"י וקמחי ורלב"ג: והנביאים האחרונים ישעיה עם פי' רש"י ואבן עזרא. ירמיה ויחזקאל עם פי' רש"י וקמחי. תרי עשר עם פי' רש"י ואבן עזרא: ... כל אלו מוגים עם רב העיון כפי כח האפשר ונדפסו במצות דניאל יצ"ו בן קרניאל בומבירגי ז"ל, פה ויניצייא הבירה בסייעתא דשמיא:

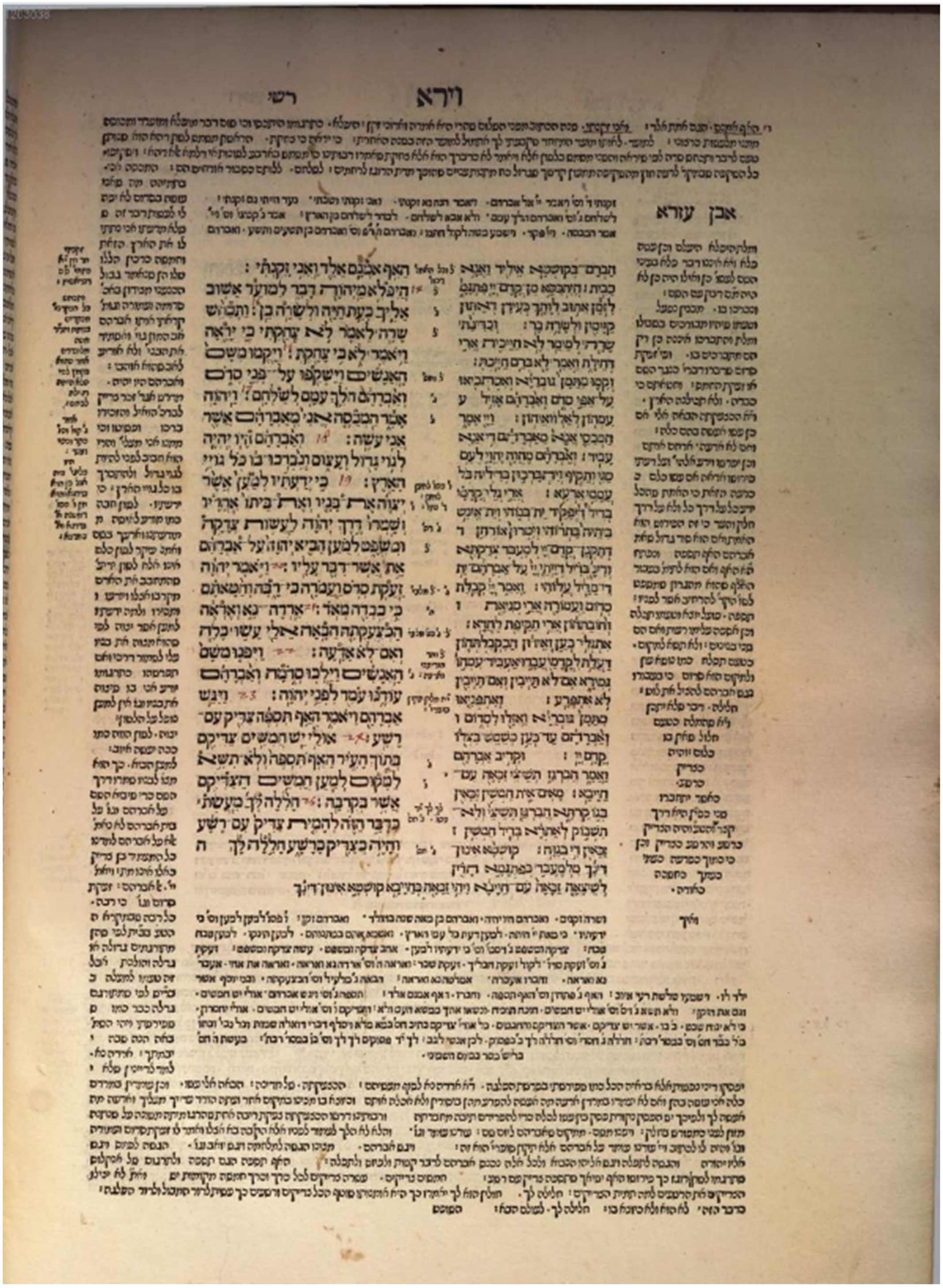
すなわち、五書をタルグム（ＴＯ）およびラシとイブン・エズラの注解（פירוש=פי'）と共に（החומש עם תרגום ופי' רש"י ון' עזרא）、前の預言者をラシとキムヒとラルバグの注解と共に（והנביאים ראשונים עם פי' רש"י וקמחי ורלב"ג）、後の預言者（הנביאים אחרונים）については、イザヤ書をラシとイブン・エズラの注解と共に（ישעיה עם פי' רש"י ואבן עזרא）、エレミヤ書とエゼキエル書をラシとキムヒの注解と共に（ירמיה ויחזקאל עם פי' רש"י וקמחי）、十二小預言書をラシとイブン・エズラの注解と共に（תרי עשר עם פי' רש"י ואבן עזרא）、等々である。

また、末尾には、「故コルネリウス・ボムベルクの息子ダニエルの功績によって印刷された」（ונדפסו במצות דניאל יצ"ו בן קרניאל בומבירגי ז"ל）と書かれている（יצ"ו は יִשְׁמְרֵיהוּ צוּרוֹ וִיחַיֵּהוּ 「彼の岩が彼を守り、彼を生かしてくださるように」の意）。

宗教改革期のキリスト教徒は本書の価値を認めて、盛んに利用した。その中には、ブツァー（前記参照）、ブクストルフ（Johann／Johannes Buxtorf　1564—1629）、ドルシウス（Johanness Drusius　1550—1616）、ミュンスター（前記参照）、ペリカン（Konrad Pellican／Pellicanus　1478－1556）、スカリゲル（Joseph Justus Scaliger　1540—1609）らがいた（4Hg, 70, 78f.）。また、エティエンヌ（Robert Estienne／Robertus Stephanus　1503—59）は本書の本文を用いたヘブライ語聖書を、1539—1544 年と 1544—1546 年に出版した（3Ge, 53f.; 4Hg, 70）。こうして本書は、1937 年にＢＨＫ第三版が出るまで広く使い続けられた。

６．第二ラビ聖書の創世記 18 章 19 節

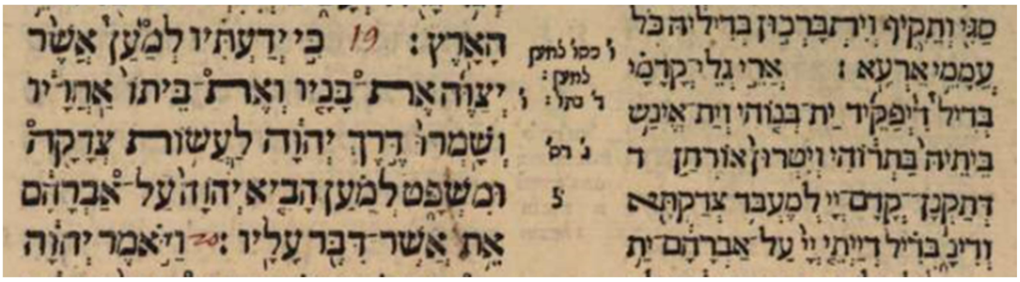
本節を含む頁の全体は次のとおりである（1Hj）。


וירא רשי
אבן עזרא

頁の上端には「柱」として、創世記のこの段落（18 : 1—22 : 24）つまりパラーシャーを示す **וירא**（直訳「そして彼は見られた」）が掲げられ、中央の欄には、左にヘブライ語本文、右に一回り小さな字でＴＯが印刷されている。これらには母音記号とアクセント記号がついている。この欄の上側の３行と下側の１０行にはマソラ・マグナが記されている。これらの外側には、イブン・エズラの注解（**יבן עזרה**）

とラシの注解（**רשי**）が右と左に印刷されている。ラシの注解の外側に印刷されているのは、中央に書ききれなかったマソラ・パルヴァである（4Ha, 958）。

18 章 19 節の本文を拡大したものを以下に示す。

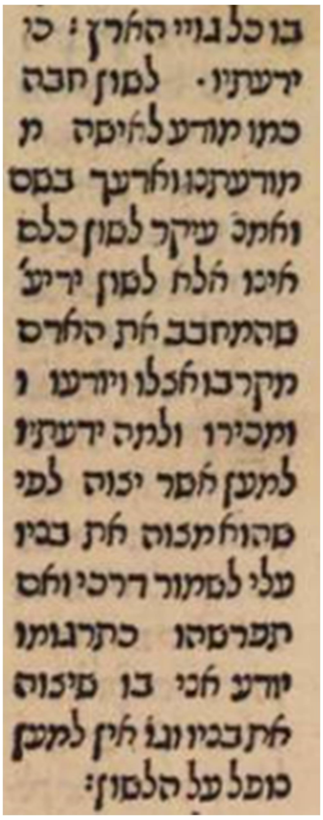


これをＢＨＳ（下記）と比べると、母音記号もアクセント記号もよく一致していることに気づく（この刊行本がＢＨＳの元になったことからすれば、当然だが）。

כִּ֣י יְדַעְתִּ֗יו לְמַ֩עַן֩ אֲשֶׁ֨ר יְצַוֶּ֜ה אֶת־בָּנָ֤יו וְאֶת־בֵּיתוֹ֙ אַחֲרָ֔יו וְשָֽׁמְרוּ֙ דֶּ֣רֶךְ יְהוָ֔ה לַעֲשׂ֥וֹת צְדָקָ֖ה וּמִשְׁפָּ֑ט לְמַ֗עַן
הָבִ֤יא יְהוָה֙ עַל־אַבְרָהָ֔ם אֵ֥ת אֲשֶׁר־דִּבֶּ֖ר עָלָֽיו׃

ＴＯの本文（右側）は אֲרֵי גְלֵי קֳדָמַי で始まっている。これは、コンプルートゥム多言語聖書とは異なる（異読ではない）本文である。

二人の注解者のうち、イヴン・エズラは本節について何も言っていない。一方、ラシは実に興味ぶかい、重要なことを述べているので、その最初の部分を見ておこう。彼の説明が語根（**ידע**）に基づいている点に注意。19 節の注解の拡大図を以下に示す（ここに出てくる מ と ו は隙間を埋めるためのもので、意味はない）。聖書の引用語句を太字で示す（1Dc も参照）。



כי :........
ידעתיו. לשון חבה כמו
מודע לאישה מ
מודעתנו ואדעך בשם
ואמנם עיקר לשון כלם
אינו אלא לשון ידיעה
שהמחבב את האדם
מקרבו אצלו ויודעו ו
ומכירו ולמה **ידעתיו**
למען אשר יצוה לפי
שהוא מצוה את בניו
עלי לשמור דרכי ואם
תפרשהו כתרגומו
יודע אני בו שיצוה
את בניו וגו' אין למען
נופל על הלשון:

「わたしは彼を知ったからである」――親愛（חִבָּה）の言い回し。そのように、「彼女〔ナオミ〕の夫の親戚」〔ルツ 2 : 1　מוֹדַע לְאִישָׁהּ〕、「〔ボアズは〕わたしたちの親戚〔ではありませんか〕」〔ルツ 3 : 2　מֹדַעְתָּנוּ〔הֲלֹא בֹעַז〕〕、「またわたしは名をもってあなたを知った」〔出 33 : 17 וָאֵדָעֲךָ בְּשֵׁם〕。だが本当のところ、これらすべての言い回しの根本（עִיקָּר）は、知ること（יְדִיעָה）の表現にほかならない。というのは、人を愛する者は、彼を近づかせる者であって、彼の傍らにおり、また彼を知る者（וְיוֹדְעוֹ）、さらに彼を認める者（מַכִּירוֹ）だからである。では、なぜ「わたしは彼を知った」（יְדַעְתִּיו）のか。「彼が命じるため」である。彼はその息子たちに、わたしのために、わたしの道（pl.）を守るように命じる者であるから。しかし、もしあなたがこれをその翻訳〔タルグム〕のように、「わたしは彼について、彼が彼の息子たちその他に命じるであろう・・・ことを知っている（יוֹדֵעַ）」と解するなら、למען は〔本節の〕意味（文脈）に合わない。

ラシは יְדַעְתִּיו をＴＯのように現在のこととして解することに反対している。そうとると、למען〔「～ために、～ように」〕とつながらないからである。יוֹדֵעַ（知っている）は גְּלֵי קדמי（わたしの前に明かされている）をヘブライ語に訳し直したものである。アラム語 בְּדִיל は「～ために」の意味に解されるのが普通だが（前記参照）、その根本義は「～に当てはまる事柄について」なので（3Bj）、これ以下が主に知られている内容を指すと見て「ということ」の意味にとることも可能であろう。そうとるとタルグムの意味は確かに明瞭になるが、ヘブライ語の原意からは離れることになる。この解釈は宗教改革期のキリスト教徒の学者の大多数に受け入れられたように見える。

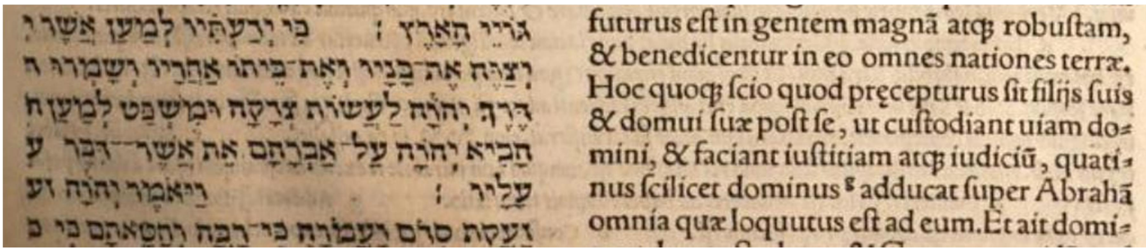
７．ミュンスターのラテン語対訳ヘブライ語聖書（1Hk，1Hk'）

ドイツのヘブライ語学者・地理学者セバスティアン・ミュンスター（Sebastian Münster　1488－1552）は、マインツ近郊のインゲルハイムで生まれ、1505年にフランシスコ会の修道院（ハイデルベルク）に入った。当初はとりわけ天文学の研究を熱心に進めた。1509年、ルーファハの神学校に派遣されたときにコンラート・ペリカンと出会い、彼に感化されてヘブライ語の勉強を始めた。1521年にはハイデルベルクに移って1529年までそこでヘブライ語を教え（25年からハイデルベルク大学教授）、同年、フランシスコ会を離れて改革派に転じる一方で、1529年からバーゼル大学のヘブライ語の教授職を務めた（4Hff, 268f.）。アラム語の文法書（*Chaldaica grammatica.* Basileae, 1527）とヘブライ語の辞書（後述）を著し、浩瀚な世界地理書『一般宇宙誌』（*Cosmographia universalis*．Basileae, 1554）の著者としても知られる。ミュンスターがバーゼルでヘブライ語聖書の新版（２巻本）を編集出版したのは、1534―35年のことである。とはいえ、彼はヘブライ語の写本を自ら集めて校訂したわけではない。プラテンシスが編集した第一ラビ聖書の本文を採用したうえで、自分のラテン語訳を対訳形式で掲げ、さらに二種類のラビ聖書に収録されたラビたちの注解の縮約版を収録したのである（4Hg，74）。彼が目指したのは、ヘブライ語聖書の難解な箇所を言語学的に明らかにすることであった。リシャール・シモンは、「ミュンスターは彼の翻訳において、すべてのプロテスタントの中で最も正確で忠実であった」、「ミュンスターが彼の翻訳につけた注釈は、ヘブライ語と聖書の文体を知るうえでとても役立ちうる」と評価する一方で、ラビたちの注解からとった、本文の解明に全く役立たない事項を不必要に盛り込んだことを批判している（3Ga, 322f.）。

ここに取り上げるのは、ミュンスターのラテン語対訳ヘブライ語聖書の第一巻（モーセ五書と前の預言者）である（1Hk）。本書のヘブライ語の表題は מִקְדַשׁ יְיָ׃ עֶשְׂרִים וְאַרְבַּע סִפְרֵי הַמִּכְתָּב הַקָּדוֹשׁ（「主の聖なるもの、聖なる書き物の二十四の書」）である。（「二十四」はユダヤ教の伝統的な聖書諸文書の数え方。サムエル記上下、列王記上下、歴代誌上下、エズラ記とネヘミヤ記を、それぞれ１つに数えるほか、十二小預言書もひとまとめにするので、旧約文書は３９ではなく２４になる）（注15)。表題の最下行には、「天の助けにより、ここバーゼルの町で、ゼバスティアン・ミュンスターの指示のもとに印刷された」（נדפס פה בעיר באזל על ידי ז" מ" בסייעתא דשמיא）とある。本書は、ミュンスターによる２種類の挨拶文（ヘブライ語学者たちへのヘブライ語の文章、キリスト教徒へのラテン語の文章）で始まり、それに旧約聖書についての踏み込んだ序文が続き、その後に創世記のヘブライ語本文がラテン語訳と共に掲げられる。各章の末尾には注釈が置かれている。本書は特にスイスの改革派神学者たちが評価・活用した（4He, 35)。カルヴァンと英語訳の翻訳者たちも盛んに用いた。これにたいし、ルターの評価は二面的なものであった（後述)。

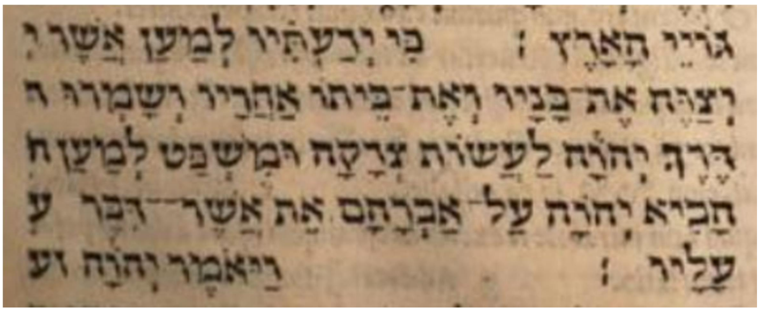
８．ミュンスターの聖書（初版と再版）の創世記18章19節（**1534年、1539／46年**）

次に、この聖書における創世記18章19節のヘブライ語本文とそのラテン語訳を示す。


גויי הארץ ׃ כי ידעתיו למען אשר י
יצוה את בניו ואת ביתו אחריו ושמרו ד
דרך יהוה לעשות צדקה ומשפט למען ה
הביא יהוה על אברהם את אשר דבר ע
עליו ׃ ויאמר יהוה זע
זעקת סדם ועמרה כי רבה וחטאתם כי כ

futurus eſt in gentem magnã atq; robuſtam,
& benedicentur in eo omnes nationes terræ.
Hoc quoq; ſcio quod præcepturus ſit filijs ſuis
& domui ſuæ poſt ſe, ut cuſtodiant uiam do-
mini, & faciant iuſtitiam atq; iudiciũ, quati-
nus ſcilicet dominus [g] adducat ſuper Abrahã
omnia quæ loquutus eſt ad eum. Et ait domi-

ヘブライ語本文を拡大すると、次のようになる。


גויי הארץ ׃ כי ידעתיו למען אשר י
יצוה את בניו ואת ביתו אחריו ושמרו ד
דרך יהוה לעשות צדקה ומשפט למען ה
הביא יהוה על אברהם את אשר דבר ע
עליו ׃ ויאמר יהוה זע

見てのとおり、母音記号は付されているが、アクセント記号はない。第二ラビ聖書とは異なり、יְהוָֹה の ה にホレムが付いている。その他の点は変わりない。だが、これがラビ聖書の初版を再現したものだとすると、第二ラビ聖書と比べて見劣りすることは確かである。

この部分のラテン語訳は次のとおりである。

Hoc quoque scio quod praecepturus sit filijs suis & domui suae post se, ut custodiant uiam domini, & faciant iustitiam atque iudicium, quatinus scilicet dominus adducat super Abraham omnia quae loquutus est ad eum.

このこともまたわたしは知っている。〔すなわち〕彼〔アブラハム〕が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが主の道を守り、そして正義と裁きを行うように、命じるであろうことを。確かに主がアブラハムの上に、彼に向って話したすべてのことをもたらすために。

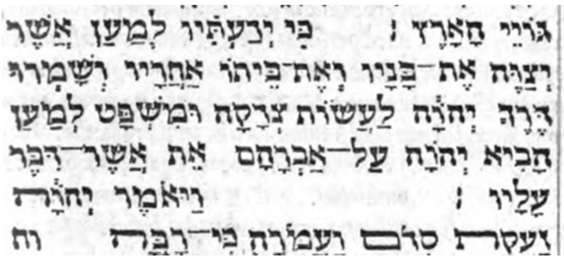
何よりも יְדַעְתִּיו の末尾の ו を訳出している。この時期の聖書翻訳者でこれを省略しなかった者は、他にパグニヌス（1528年）とティンダル（1530年）くらいしかいない。だが、この訳は十分正確とは言えぬであろう。יְדַעְתִּיו という完了形の解釈（scio と訳す）と、ו のとり方が疑問である（男性形の人称代名詞語尾を中性の意味にとったのだろうか）。また目的節を導く לְמַעַן אֲשֶׁר もウルガータと同じ（quod）に訳している。節後半の לְמַעַן を quatinus（＝quatenus 「〜ために」）と訳した点も特徴的である（3Bm は quatenus の主要な意味として「〜の限り」、「〜であるから」を挙げているが、ネオ・ラテン語では ut の代わりに目的を表わすのに用いられることがある。4La, 18, 20）。だがこの訳語は他の翻訳者たちには浸透しなかった。

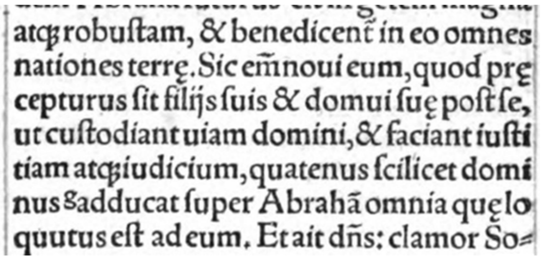
ミュンスターはキムヒのヘブライ語辞書とタルグム・オンケロスを参照することが多かったらしいが

（4Hg, 74)、当然ラシの注解（すでに第一ラビ聖書に収録）も知っていたはずである。それを読んだうえでの訳文なのだろうか。残念ながら、この訳についてミュンスターは何の訳注もつけていない。本節の注釈は g の箇所１つだけであり、章末には g Adducat.] Impleat promissiones, sicut et, quae loquutus est, capitur pro pollicitus est.（Adducat は「彼は諸々の約束を果たす」の意。ちょうど quae loquutus est が「彼は約束した」の意味で受け取られるのと同様である」）と書かれている。

容易に想像できることだが、ヘブライ語本文とラテン語訳を並べたこの聖書は、同時代の聖書翻訳者たちによって重宝されたらしい。創世記18章19節については、ルターの創世記講義（1535年開始)、カヴァデイルによる大聖書（1539年)、ラテン語版チューリヒ聖書（1543年)、そして主教訳聖書（1568年）が、ミュンスターの1534―35年の訳文を（部分的に）利用したと推測される。

しかし、ミュンスターの訳はこれが最終ではなかった。第一巻の再版（1546年［1Hk’]. 本文の前に聖書の出来事のラテン語による索引と、注釈で説明するヘブライ語の語句の索引を追加）では、本節のラテン語訳が少し改善されている（adducat の注釈 g は初版と同じ)。1539年のラテン語聖書（1Le. 第3章§4参照）に収録されたミュンスターの訳もこれと同じなので、訳文の改善はその時点でなされたのであろう（cf. 4Hf, 270)。1546年版の問題の箇所は次のとおりである。後ほど見るように、この新訳はドイツ語版チューリヒ聖書（1531年。2Gh）の訳文とよく似ている。もちろん、後者の出版が先であるから、もしも影響関係があるとすれば、ミュンスターの方がドイツ語版チューリヒ聖書を参考にしたことになる。


גויי הארץ׃ כי ידעתיו למען אשר
יצוה את בניו ואת ביתו אחריו ושמרו
דרך יהוה לעשות צדקה ומשפט למען
הביא יהוה על אברהם את אשר דבר
עליו׃ ויאמר יהוה
זעקת סדם ועמרה כי רבה


atq; robuſtam, & benedicent in eo omnes
nationes terrę. Sic enim noui eum, quod prę
cepturus ſit filijs ſuis & domui ſuę poſt ſe,
ut cuſtodiant uiam domini, & faciant iuſti
tiam atq; iudicium, quatenus ſcilicet domi
nus g adducat ſuper Abrahā omnia quę lo
quutus eſt ad eum. Et ait dn̄s: clamor So=

ヘブライ語本文に変わりはないが、対応するラテン語訳は次のように変わっている。

> Sic enim noui eum, quod praecepturus sit filijs suis & domui suae post se, ut custodiant uiam domini, & faciant iustitiam atque iudicium, quatenus scilicet dominus adducat super Abraham omnia quae loquutus est ad eum.
> というのは、このようにわたしは彼を知ったからだ。〔すなわち〕彼が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが主の道を守り、そして正義と裁きを行うように、命じるであろうことを。確かに主がアブラハムの上に、彼に向って話したすべてのことをもたらすために。

改善されたのは Sic enim noui eum, quod の部分であり、この訳ではヘブライ語の完了形 יְדַעְתִּיו がラテン語の完了形に訳され、語末の重要な ו も、人称代名詞語尾三人称単数男性形として解されている（ミュンスターが scio を棄てて noui という完了形の訳語を選んだことを重視すべきである)。しかし、

לְמַעַן אֲשֶׁר の解釈は初訳（quod）と変わりない。なお、創世記18章19節に関する限り、ミュンスターの1539／1546年の改版は、初版ほどには（参照されたとしても）活用されなかったように見受けられる。

９．アントワープ多言語聖書（**The Antwerp Polyglot Bible**）（1Hl）

次に見るのは、やや時代が下るが、1568年から1573年にかけてアントワープ（アントウェルペン）で作られた８巻構成の多言語聖書である（4Hmに詳しい紹介がある。3Ge, 54f.; 3Gn, 395f. も参照）。これは、当時有能な印刷業者として広く知られた、アントワープのクリストフェル・プランタン（Christopher Plantin　c. 1514［c. 1520？］―89年。ダニエル・ボンベルクからヘブライ語の印刷設備を入手［4Hm, 12］）の構想から始まった。彼は、当時非常に希少となっていたコンプルートゥム多言語聖書の改訂版を世に出すことを計画し、スペイン王フェリペ２世（在位1556―98年）の援助の下、王から派遣されたアリアス・モンタヌス（Benito Arias Montanus　1527－98年）の編集協力を得て、この聖書を完成させた。モンタヌスは、バダホス県フレヘナル・デ・ラ・シエラ（Fregenal de la Sierra）で生まれ、最初はセビリアの大学で学んだが、その後アルカラ大学に進んで学びを続け、1560年にレオンのサン・マルコス修道院に属するサンティアゴ騎士団（La Orden de Santiago）の教授職に就いた。彼はヘブライ語を含む東方の言語に堪能であり、その豊かな学識のゆえに当時から名を知られ、1566年にはフェリペ王の王付き司祭に指名された。新たな多言語聖書の編集監督を命じられたのは、その２年後のことである（4Bl, 1ff.)。

最初に本書の構成を見ておこう。全体の表題は Biblia Sacra Hebraice, Chaldaice, Graece & Latine であり、下方の四角い枠の中に “Philippi II. Reg. Cathol. Pietate, et Stvdio ad Sacrosanctae Ecclesiae Vsvm”（「王フェリペ２世の公教的敬虔と、聖なる教会の使用に向けた熱意によって」）と書かれている。最下段には、“Christoph. Plantinvs Excvd. Antverpiae”（「クリストフェル・プランタンがアントワープで作成した」）という記述がある。表紙に描かれた柱や樹木や動物の絵にも意味が込められているが（イザ 11 章等の題材）、説明は省略する。本書の初版の全部分を網羅したファクシミリ版が存在せず、不完全なコピーしか利用できないため、全体の構成を知るには第一巻の序文末尾に掲げられた３つのリスト（Ordo librorvm Veteris Testamenti［旧約諸文書の順序］, Ordo librorvm Novi Testamenti［新約諸文書の順序］, Sacri apparatvs partivm series compactoribvs observanda［聖書研究に資するさまざまな道具を並べた一覧表．以下の６～８巻を指す］）に頼らざるを得ない。それによると――（１）モーセ五書。（２）ヨシュア記、士師記、ルツ記、サムエル記上下と列王記上下（Regulum I. II. III. IIII）、歴代誌上下（巻末にはマナセの祈りのウルガータ版も収録されている）。（３）エズラ記、ネヘミヤ記、第三エズラ書（ラテン語）、第四エズラ書（ラテン語）（Esdrae I. II. III. IIII）、トビト記、ユディト記、エステル記、ヨブ記、詩編、箴言、コヘレトの言葉、雅歌、知恵の書、シラ書。（４）イザヤ書、エレミヤ書、バルク書、エゼキエル書、ダニエル書、十二小預言書、マカベア書一および二。（５）新約聖書（四福音書、使徒言行録、パウロの手紙、ヘブライ人への手紙［パウロが書いたという扱い］、ヤコブ書等公同の手紙、黙示録）。（６）ヘブライ語辞書の付属したヘブライ語文法解説、シリア・カルデア語辞書の付属したカルデア語（アラム語）文法解説、シリア語辞書の付属したシリア語文法解説、ギリシア語辞書の付属したギリシア語文法解説。（７）ラテン語行間訳のついたヘブライ語旧約聖書（欄外に動詞の語根を示す）、ラテン語行間訳のついたギリシア語新約聖書、ヘブライ語の特殊な用法の書棚（librum＝librarium？）。そし

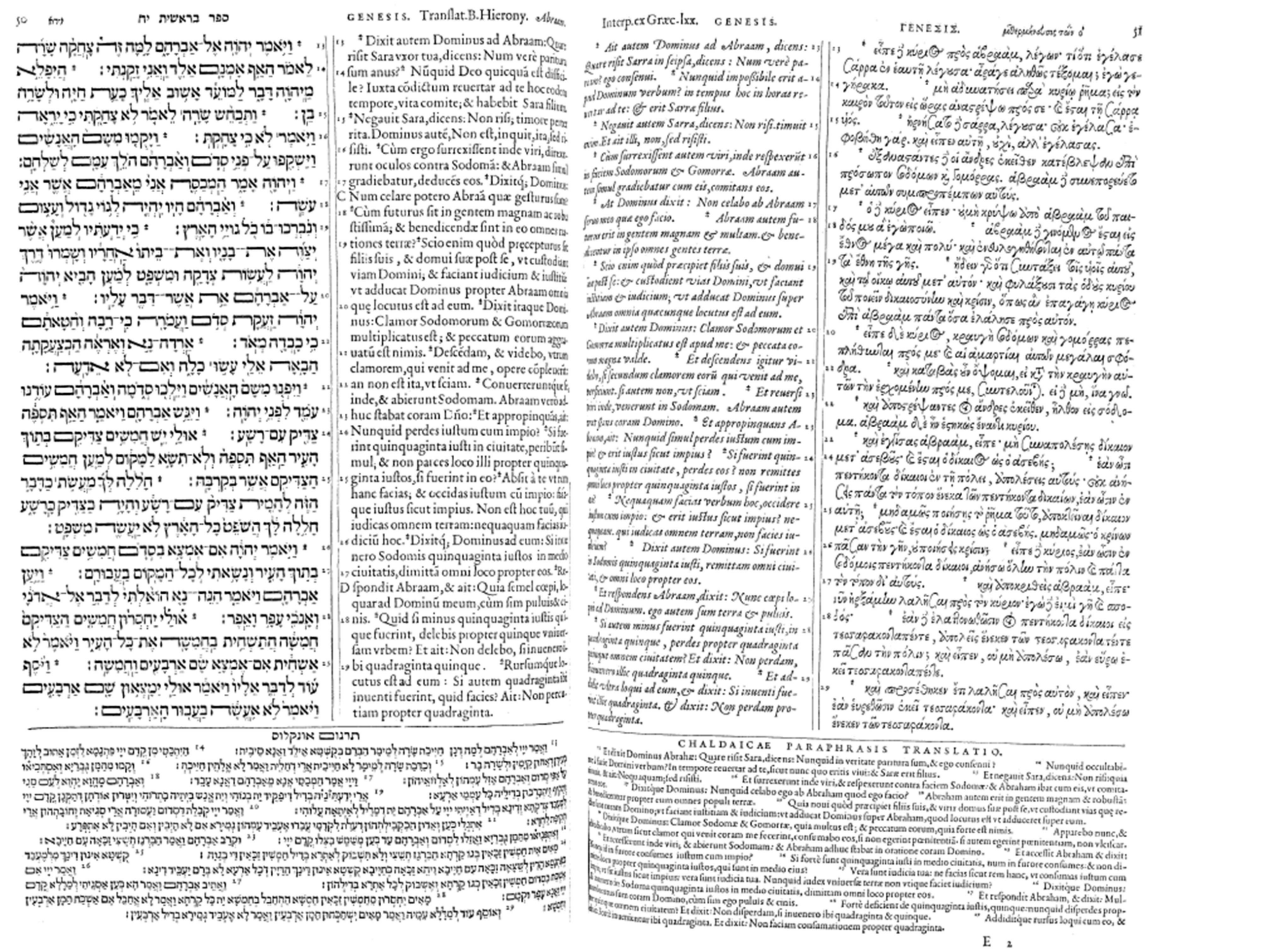
て（８）ヨセフ、エレミヤ、ノア、ダニエルら聖書の著名人を題材にした文章、聖書索引、ヘブライ語・アラム語・ギリシア語・ラテン語の固有名詞、ヘブライ語・アラム語・ギリシア語・ラテン語本文の異読等、多数の文書。

第一巻ではすべての書にＴＯがついている。第二巻では、歴代誌を除く各書にＴＪがついており、本文の配置は第一巻と同じ（次節参照）。第三巻のエステル記、ヨブ記、詩編、箴言、コヘレト書、雅歌にもタルグム（「諸書のタルグム」）がついている。第四巻のすべての預言書にＴＪがついている。第三巻のエズラ記、ネヘミヤ記と第四巻のダニエル書にタルグムはついていない。第五巻（新約聖書）は上下２段構成であり、上の大きな段にギリシア語本文（コンプルートゥム多言語聖書からとったもの）が、シリア語訳（シリア文字表記）、シリア語訳本文のラテン語訳、ウルガータ訳と並置されている（見開きの右端にギリシア語本文、左端にシリア語訳）。この聖書のギリシア語の書体は、読むのに慣れを要する独特のものである。下の小さな段には、ヘブライ文字表記のシリア語訳が印刷されている。ペトロの手紙二、ヨハネの手紙二と三、ユダの手紙、および黙示録にシリア語訳はついていない。旧約聖書と新約聖書は最初の５巻に収録され、聖書研究の道具や資料を集めた残りの３巻から内容的に区別されるが、以上の全体が一つの作品として扱われる。なお、第六巻には、パグニヌスのヘブライ語辞書の縮約版が収録されているが（第一巻序文のリストでは Grammaticam Hebraicam cum Hebraico Dictionario）、これは第４章（ヘブライ語の辞書）で見ることにする。なお、本作品に続く多言語聖書として、パリ多言語聖書（Paris Polyglot　1628～45年）とロンドン多言語聖書（London Polyglot　1653～57年）があるが、宗教改革期以後のものであり、本書の課題と直接関係するわけでもないので、説明は省略する。

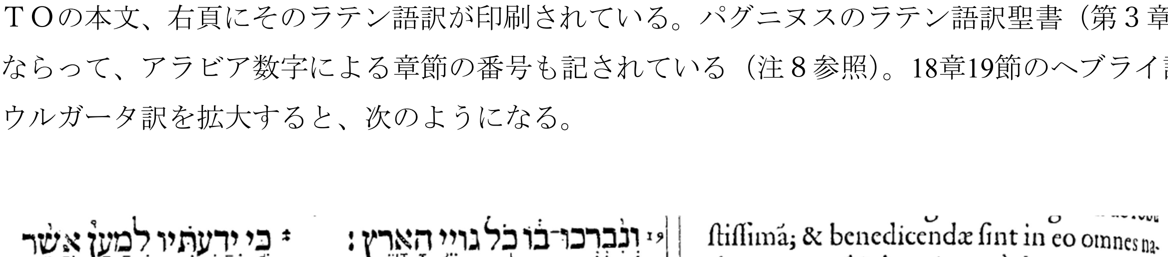
10. アントワープ多言語聖書の創世記 18 章 19 節

本書の第一巻は、モーセ五書の本文の前に、アリアス・モンタヌスによる２つの序文、フェリペ王らによる複数の手紙、いくつもの認可状、特権状、目次等、多くの文書が配置されている。五書は、主としてヘブライ語で記された中表紙で始まる（表紙図版参照）。最上部に שער בית יי הקדמוני 「いにしえの主の家の門」という言葉が掲げられ、中段にはヘブライ語で「トーラーの五つの書」(חמשה חומשי [חוּמְשֵׁי] תורה)、「トーラーの翻訳（タルグム）」、ギリシア語で「五書」、ラテン語で「モーセの五書」と記され、さらに下段には箴言21章1節 פַּלְגֵי מַיִם לֶב־מֶלֶךְ בְּיַד־יְהוָה עַל־כָּל־אֲשֶׁר יַחְפֹּץ יַטֶּנּוּ׃ （「王の心は、主の手のうちにあって、水の流れのようだ、主はみこころのままにこれを導かれる」口語訳）が印刷されている。母音記号等の付け方はＢＨＳとやや異なる。

創世記18章19節を含む50－51頁は次のとおり。



見開き２頁の上の段は４つの欄から成り、左から順にヘブライ語本文、ヒエロニムスのラテン語訳（ウルガータ訳）、七十人訳聖書のラテン語訳、七十人訳聖書の本文が記され、下方の低い段には、左頁にＴＯの本文、右頁にそのラテン語訳が印刷されている。パグニヌスのラテン語訳聖書（第３章§３）にならって、アラビア数字による章節の番号も記されている（注８参照）。18章19節のヘブライ語本文とウルガータ訳を拡大すると、次のようになる。

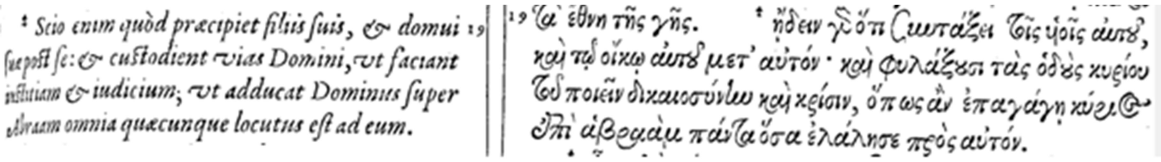


19 וְנִבְרְכוּ־בוֹ כֹּל גּוֹיֵי הָאָרֶץ׃ כִּי יְדַעְתִּיו לְמַעַן אֲשֶׁר
יְצַוֶּה אֶת־בָּנָיו וְאֶת־בֵּיתוֹ אַחֲרָיו וְשָׁמְרוּ דֶּרֶךְ
יְהוָה לַעֲשׂוֹת צְדָקָה וּמִשְׁפָּט לְמַעַן הָבִיא יְהוָה
20 עַל־אַבְרָהָם אֵת אֲשֶׁר־דִּבֶּר עָלָיו׃ וַיֹּאמֶר

ſtiſſimă; & benedicendæ ſint in eo omnes na-
19 tiones terræ? *Scio enim quòd preceptur9 ſit
filiis ſuis, & domui ſuæ poſt ſe, vt cuſtodiant
viam Domini; & faciant iudicium & iuſtitia
vt adducat Dominus propter Abraam omnia
20 quę locutus eſt ad eum. *Dixit itaque Domi-

ヘブライ語本文には、母音記号とアクセント記号がついている。コンプルートゥム多言語聖書（1Hh）の本文を基本に第二ラビ聖書で修正したとのことだが（3Ge, 54）、母音記号もアクセント記号もかなり改善されている。対応するウルガータ訳は、ＶＵＬ^{SC}（1La'）の本文と――従ってまたコンプルートゥ

ム多言語聖書の本文とも——基本的に同じである。七十人訳とそのラテン語訳は次のとおり。

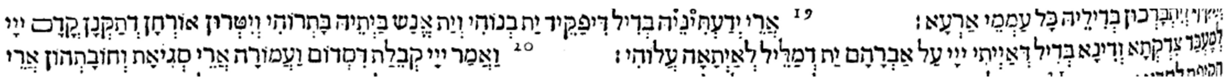

19 Scio enim quòd præcipiet filiis suis, & domui suę post se: & custodient vias Domini, vt faciant iustitiam & iudicium; vt adducat Dominus super Abraam omnia quæcunque locutus est ad eum.

19 τὰ ἔθνη τῆς γῆς. ᾔδειν γὰρ ὅτι συντάξει τοῖς υἱοῖς αὐτοῦ, καὶ τῷ οἴκῳ αὐτοῦ μετ᾿ αὐτόν· καὶ φυλάξουσι τὰς ὁδοὺς κυρίου τοῦ ποιεῖν δικαιοσύνην καὶ κρίσιν, ὅπως ἂν ἐπαγάγῃ κύριος ἐπὶ ἀβρααμ πάντα ὅσα ἐλάλησε πρὸς αὐτόν.

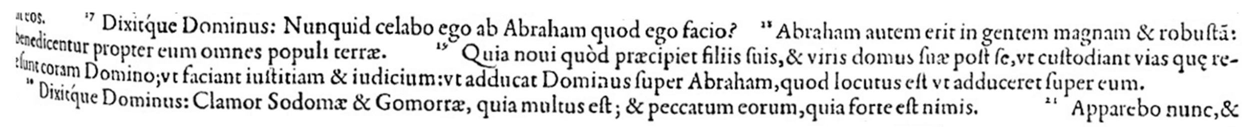
この七十人訳本文もコンプルートゥム多言語聖書からとられたものであろう。ποιεῖν の前に τοῦ が挟まれ、ἀβραὰμ という形も同じである。そのラテン語訳もコンプルートゥム多言語聖書と基本的に同じである（quaecunque「何であれ彼に向って言ったことすべてを」と、意味が強調されている）。

Scio enim quòd praecipiet filiis suis, et domui suae post se: et custodient vias Domini, ut faciant iustitiam et iudicium; ut adducat Dominus super Abraam omnia quaecunque locutus est ad eum.

一方、タルグムの本文は次のようになっている。


ויתברכון בדיליה כל עממי ארעא׃ 19 ארי ידעתיניה בדיל דיפקיד ית בנוהי וית אנש ביתיה בתרוהי ויטרון אורחן דתקנן קדם ייי
למעבד צדקתא ודינא בדיל דאייתי ייי על אברהם ית דמליל לאיתאה עלוהי׃ 20 ואמר ייי קבלת דסדום ועמורה ארי סגיאת וחובתהון ארי

これはコンプルートゥム多言語聖書と同じく יְדַעְתִּינֵיהּ という読みをとっているが、語の綴りと母音記号の付け方には若干の違いがある（בְנוֹהִי, אֱנַשׁ 等）。対応するラテン語訳（coraz は coram に訂正されている）に、綴りや句読点以外の違いはない。


17 Dixitque Dominus: Nunquid celabo ego ab Abraham quod ego facio? 18 Abraham autem erit in gentem magnam & robustã: benedicentur propter eum omnes populi terræ. 19 Quia noui quòd præcipiet filiis suis,& viris domus suæ post se,vt custodiant vias quę recte sunt coram Domino;vt faciant iustitiam & iudicium:vt adducat Dominus super Abraham,quod locutus est vt adduceret super eum.
20 Dixitque Dominus: Clamor Sodomæ & Gomorræ, quia multus est; & peccatum eorum,quia forte est nimis. 21 Apparebo nunc,&

Quia noui quòd praecipiet filiis suis, & viris domus suae post se, vt custodiant vias quae recte sunt coram Domino; vt faciant iustitiam & iudicum: vt adducat Dominus super Abraham, quod locutus est vt adduceret super eum.

第３章　宗教改革期のラテン語訳聖書

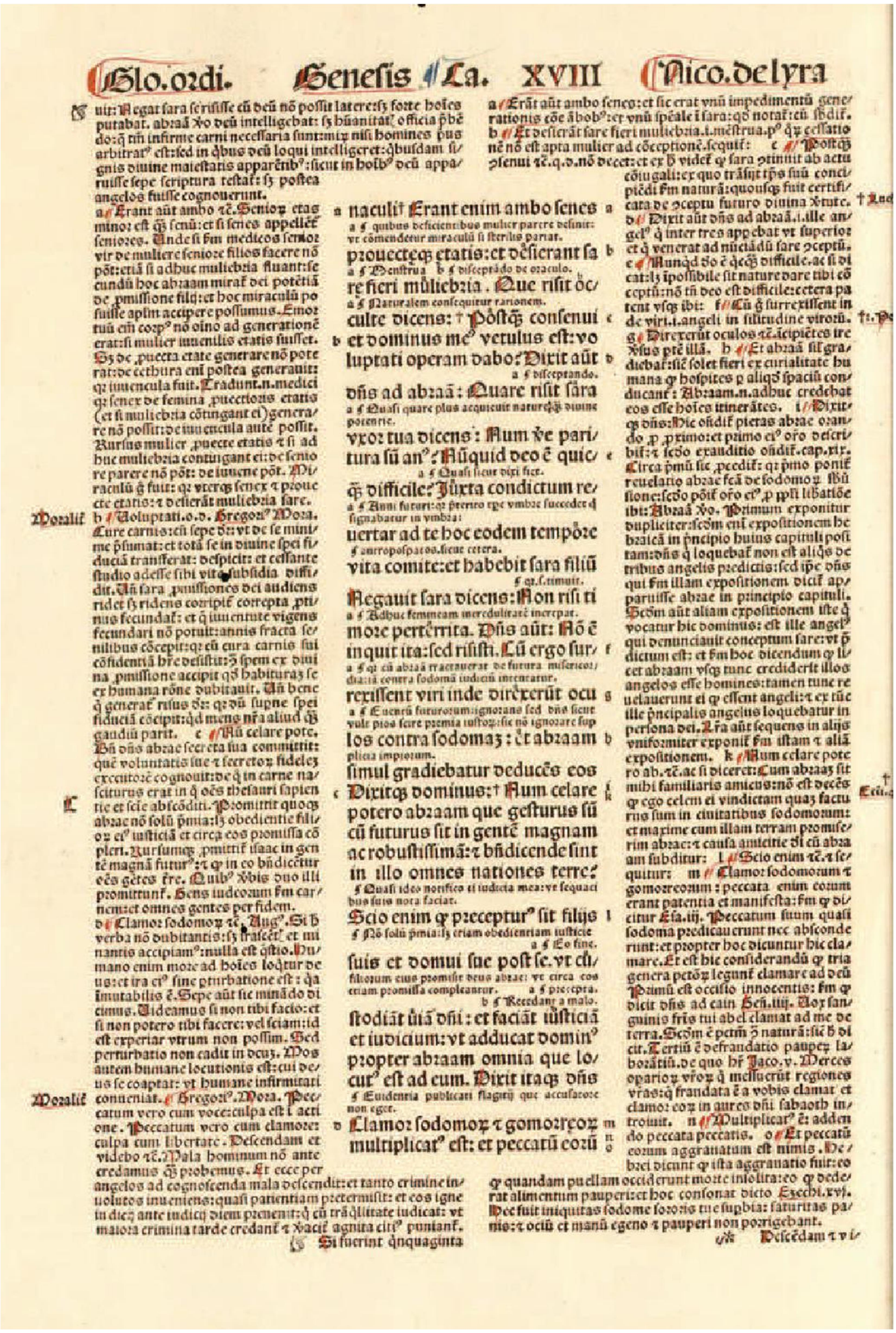
旧約聖書を原典から訳した翻訳者たちは、ヘブライ語聖書だけを見ていたのではもちろんない。彼らは既存の翻訳、とりわけウルガータ訳聖書と、教父たちの注解、そしてヘブライ語学者たちの著した辞書を活用した。ラビたちの解釈も（間接的であれ）参照した。ヒエロニムスが５世紀初頭にヘブライ語本文に照らして改訂・完成したウルガータ訳が、ヨーロッパで広く一般に用いられるようになったのは８世紀末と言われるが、その後校訂の努力が重ねられたにもかかわらず、筆写の誤りや挿入が原因で本文伝達の純粋さが保たれず、さまざまな混乱が生じた。それだけでなく、ヒエロニムスの訳はヘブライ語原典の訳として必ずしも正確でないという認識も、ウルガータ訳の不備を指摘する翻訳者たちを中心に徐々に広まっていった。ウルガータ訳聖書はトリエント公会議で唯一公認の聖書正典と宣言されたが（1546年）、最初の批評校訂版が出版されたのは1592年である（シクスト・クレメンティーナ版．3Br,「ウルガタ訳聖書」参照）。それまでの間、聖書の日常語訳とほぼ同時期に（年表参照）、カトリック、プロテスタント双方の側から、新しいラテン語訳聖書が刊行された（パグニヌス、ミュンスター、カステリョ、エティエンヌ、トリメリウスら）。これらが聖書翻訳者や学者たちの大きな助けになったことは言うまでもない。以下、主要なものを年代順に取り上げて概観するが、その前に、ヴィッテンベルク時代のルターも使用したと推測される、注解付ウルガータを見ておくことにしたい（以下、創世記に限定して話を進める）。

１．1498年出版の注解付ウルガータ（1Lb）

ここに取り上げるのは、セバスティアン・ブラント（Sebastian／Sebastianus Brant　1457—1521．ドイツの詩人・法律家）が編集し、ヨハン・フローベン（Johann Froben　c. 1460—1527）がヨハネス・ペトリ（Johannes Petri　1441—1511）の協力を得て1498年にバーゼルで出版した、注解付ウルガータ訳聖書の第一巻（モーセ五書）である。これは、ルターが用いた参考書の１つと考えられている（3Gn，311）（注16）。本書は、ヴァラフリードゥス・ストラーボ（Walafridus Strabo　c. 808—849，ドイツのベネディクト会修道院長）ら教会教父たちの標準的注解を集めた聖書注解集録（glossa ordinaria）（3Gd, 294ff.）と、ランのアンセルムス（Anselmus de Laon　1050—1117．カンタベリのアンセルムスの弟子）に帰される行間注と、リラ（リール）のニコラス（Nicolas de Lyre／Nicolaus Lyranus　c. 1270—1349．フランスのフランシスコ会士）（4Bc; 4Bd; 3Gn. 240ff.; 3Gd, 219, 304f.; 4Hf, 49-51）による聖書の語義的・倫理的注解（*Postilla litteralis et moralis in Vetus et Novum Testamentum*）、ブルゴスのパウルス（Paulus Burgensis／Paul of Burgos　c. 1351—1435．ラビの教育を受けたユダヤ人改宗者で、ブルゴスの大司教を務めた）（3Gd, 272ff.）によるニコラスの注解への批判的追加（Additiones）、パウルスの見解に対するマッティアス・デーリング（Matthias Döring　c.1390—1469．ドイツのフランシスコ会士で、歴史家・神学者）の反論（Replicationes）

等で構成されている。聖書本文の前には、ブラントの挨拶文、聖書の正典諸文書と非正典諸文書の解説、ニコラスの3つの序文（聖書全体の紹介、著者の意図と順序、聖書の倫理）、パウルスによるニコラスの聖書注解への追加、ニコラスを擁護するデーリングの反論の序文等、多くの文書が置かれている。

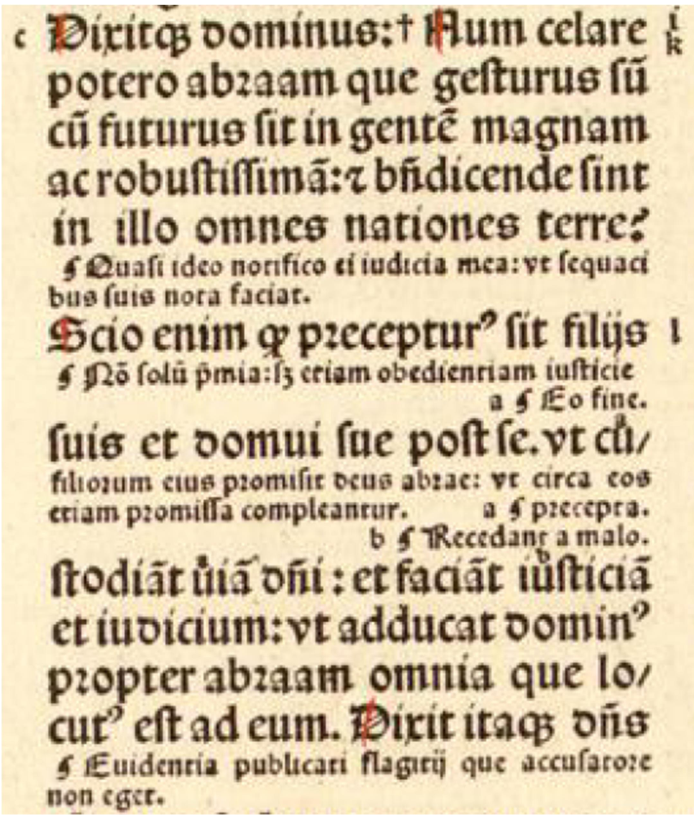
創世記18章19節を含む頁は次のとおりである。



Glo. ordi. Genesis Ca. XVIII Nico. de lyra

naculi. Erant enim ambo senes
et prouectęq; etatis: et desierant sa
re fieri muliebria. Que risit oc
culte dicens: Postq; consenui
et dominus meus vetulus est: vo
luptati operam dabo? Dixit aūt
dñs ad abraā: Quare risit sara
vxor tua dicens: Num vere pari
tura sū anus? Nūquid deo ē quic
q; difficile? Iuxta condictum re
uertar ad te hoc eodem tempore
vita comite: et habebit sara filiū
Negauit sara dicens: Non risi ti
more perterrita. Dñs aūt: Non ē
inquit ita: sed risisti. Cū ergo sur
rexissent viri inde direxerūt ocu
los contra sodomā: et abraam
simul gradiebatur deducēs eos
Dixitq; dominus: Num celare
potero abraam que gesturus sū
cū futurus sit in gentē magnam
ac robustissimā: et bñdicende sint
in illo omnes nationes terre?
Scio enim q; precepturus sit filijs
suis et domui sue post se. vt cu
stodiāt viā dñi: et faciāt iusticiā
et iudicium: vt adducat dominus
propter abraam omnia que lo
cutus est ad eum. Dixit itaq; dñs
Clamor sodomorū et gomorreorū
multiplicatus est: et peccatū eorū

頁中央に創世記のウルガータ訳本文が記されている（17－19節）。以下に拡大図を示す。


c Dixitq3 dominus:† Num celare i k
potero abraam que gesturus sũ
cũ futurus sit in gentẽ magnam
ac robustissimã: ꝛ bñdicende sint
in illo omnes nationes terre?
¶ Quasi ideo notifico ei iudicia mea: vt sequaci
bus suis nota faciat.
Scio enim ꝙ preceptur⁹ sit filijs l
¶ Nõ solũ pmia: sꝫ etiam obedientiam iusticie
a ¶ Eo fine.
suis et domui sue post se. vt cu/
filiorum eius promisit deus abrae: vt circa eos
etiam promissa compleantur. a ¶ precepta.
b ¶ Recedant a malo.
stodiãt uiã dñi: et faciãt iusticiã
et iudicium: vt adducat domin⁹
propter abraam omnia que lo/
cut⁹ est ad eum. Dixit itaq3 dñs
¶ Euidentia publicati flagitij que accusatore
non eget.

Scio enim quod precepturus sit filijs suis et domui sue post se. vt custodiant uiam domini: et faciant iusticiam et iudicium: vt adducat dominus propter abraam omnia que locutus est ad eum.

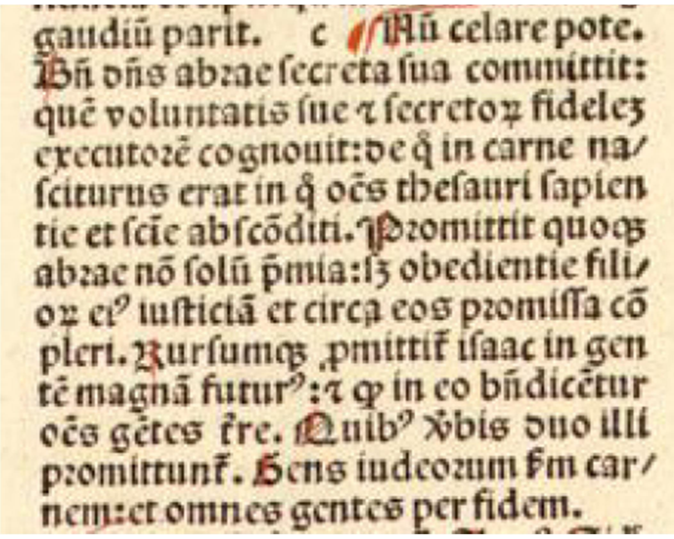
この本文は今日の校訂版（1La）と基本的に一致している。

本文には行間注が施されている（a Eo fine［〜を目的として］と a precepta［教え］は vt custodiant uiam domini の注。b Recedant a malot［悪から離れる］は faciant iusticiam et iudicium の注。)。

Quasi ideo notifico ei iudicia mea: vt sequacibus suis nota faciat. Non solum premia: sed etiam obedientiam iusticie filiorum eius promisit deus abrae: vt circa eos etiam promissa compleantur. それゆえ、あたかも「わたしはわたしの諸々の裁きを彼に知らせる、彼が彼に従う者たちにそれらを知らせるために」。特権だけでなく、彼の息子たちの正義への服従をも、神はアブラハムに約束した。彼らについても約束が果たされるために。

この説明は、当然ながら「わたしはアブラハムを知った」ことを考慮していない。

本文の周囲には、左側に聖書注解集録（Glo.ordi.)、右にリラのニコラスの注解（Nico.de lyra）が印刷されている。17節 Dixitque dominus: Num celare の左側の文字 C によって合図される注解集録の記述は、次のようになっている（聖書の引用句をイタリックで示す)。



c　*Num celare potero*（17節）. Bene dominus abrae secreta sua committit: quem voluntatis sue et secretorum fidelez[sic] executorem cognouit: de quo in carne nasciturus erat *in quo [sunt] omnes thesauri sapientie et scientie absconditi*.〔コロ2 : 3〕. Promittit quoque abrae non solum premia: sed obedientie filiorum eius iusticiam et circa eos promissa compleri. Rursumque promittitur isaac *in gentem magnam futurus*（18節）: et quod *in eo benedicentur omnes gentes terre*（18節）. Quibus verbis duo illi promittuntur. Gens iudeorum secundum carnem: et omnes gentes per fidem.

注解者はこの部分を、キリストと結びつけて解している。すなわち、主はアブラハムにご自分の秘密を委ね、彼をご自分の意志と秘密の忠実な実行者として知った。そのアブラハムから、「そのうちに知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」〔キリストが〕肉において現れることになっていた。主はまたアブラハムに、特権だけでなく、彼の息子たちの服従の正義と、彼らについて約束が果たされることを約束する。注解者はアブラハムが「大いなる種族となり」「彼によって地のすべての種族が彼によって祝福される」という約束（18節）を、イサク（10節参照）と結びつけている。これらの言葉によって予告されているのは、肉によるユダヤ民族と、信仰によるすべての種族である。この解釈は、ガラテヤ書におけるパウロの解釈を想起させる点で非常に興味ぶかいが、主が「アブラハムを知った」という（選びの）事実を素通りしている。とはいえ、本文自体がこうなっているのだろうから、これはやむを得ぬことである。

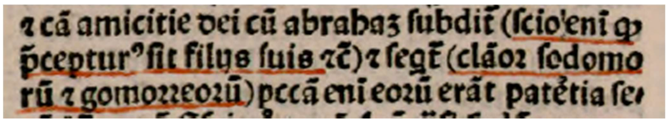
他方、本文右側のニコラスの注解の文字 1 で合図される箇所は、次のようになっている。



Scio enim etc. et sequitur:

というのは、わたしは・・・知っているからだ。そして以下の文。

ここに18章19節についての注解はない。ニコラスはラシから大きな影響を受けたと言われているのだが（彼は先人の誰よりも徹底してラシの注解書を研究した［3Gd, 219］）、ここでラシの解釈に全くふれていないのはどういうわけだろうか。念のため、1488年に出版された彼の *Postilla super totam Bibliam*（1De）を見ても同じである。


ꝛ cā amicitie dei cū abrahaȝ subdit (scio enī q
p̄ceptur⁹ sit filiis suis ꝛc̄) ꝛ seq̄t (clāoꝛ sodomo
rū ꝛ gomorreoꝛū) pccā enī eoꝛū erāt patētia se

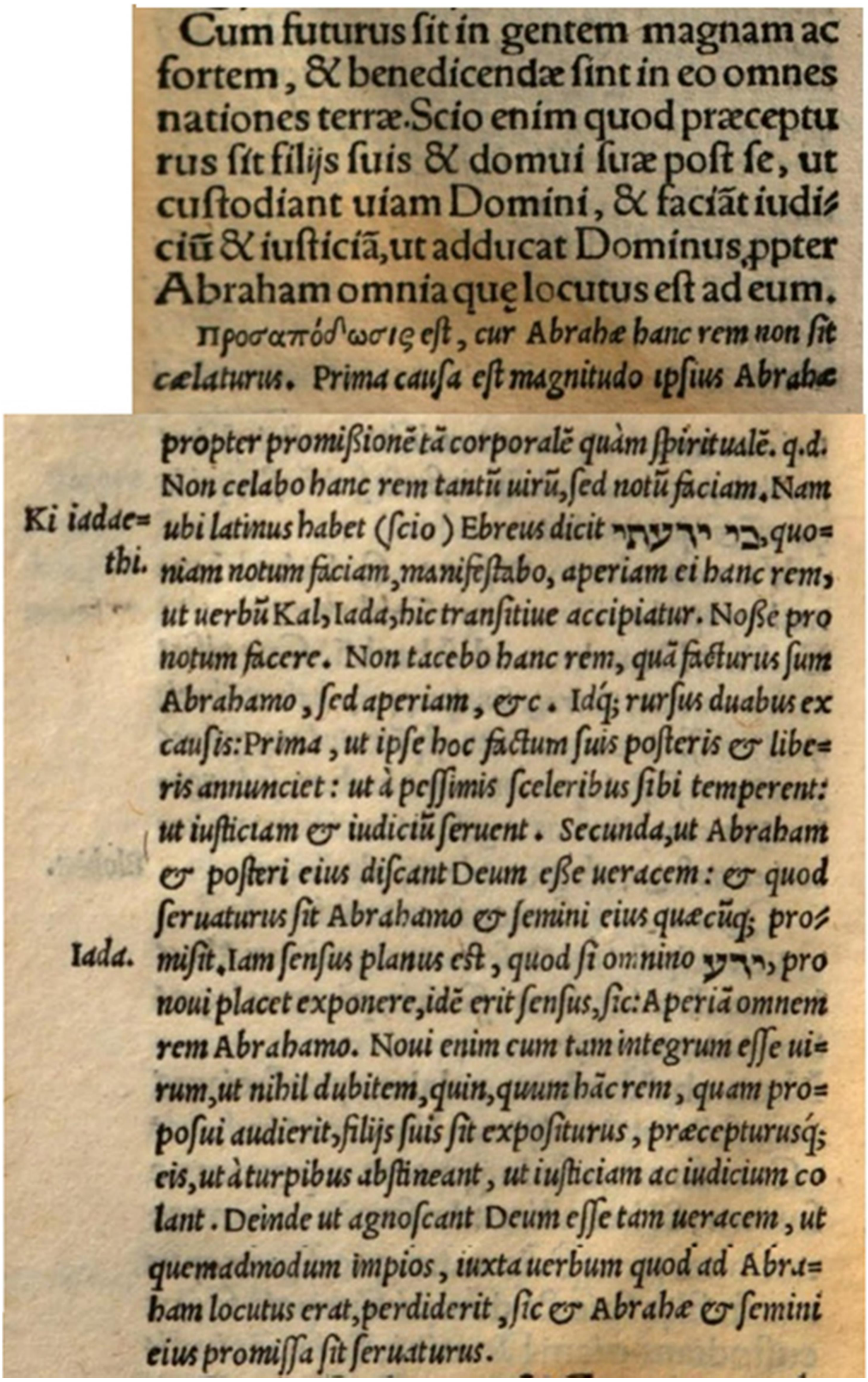
さらに、18章の末尾にまとめて印刷されたニコラスの倫理的注解（Moraliter）、ブルゴスのパウルスによるニコラスの注解への追加（４項目）、および、それに対するマッティアス・デーリングの応答にも、19節の問題の語句についての記述はない。Additio IIII でパウルスは、創世記18章23節以下のアブラハムの嘆願の言葉と響き合うエレミヤ書5章1節（Circuite vias hiersalem ... et quaerite in plateis eius, an inueniatis virum facientem iudicium et querentem fidem, et propitius ero eius.「エルサレムの道々を行きめぐり・・・その街路で、裁きを行い信仰を求める者に出会うかどうか、捜してみよ。そうすれば、わたしはそれ〔エルサレム〕を憐れもう」）を引用しながら、19節の内容――子孫に正義と裁きを行わせるようにとのアブラハムへの命令――について論じ、デーリングも Replica の中でそれに応じているが、Scio enim quod という訳自体については二人とも何も言っていない。“Si Lyra non lyrasset, nemo doctorum in bibliam saltasset”（「もしリラが竪琴を奏でなかったなら、学者たちの誰も聖書に向って踊らなかっただろう」）という有名な言葉（4Bc, 196; 4Gi, 76; 3Gn, 240f.）が伝えられているが、リラは重要な一節を飛ばしてしまったのではないか。なおルターは、リラのニコラスがあまりにも字義にこだわり、ユダヤ教的（ラビ的）解釈や中世の釈義方法に寄りかかっている、と感じていたらしい（4Gl, 192; 4Bd, 120; 4Gi, 76）。

２．ツヴィングリの創世記注解（1Lc）

次に、翻訳聖書ではないが、ツヴィングリ（Huldrych／Huldreich／Ulrig Zwingli　1484―1531）の創世記および出エジプト記解釈を伝えるためにレオ・ユート（Leo Jud　1482―1542）らがツヴィングリの生前に出版した、『創世記注釈集録』（*Farrago annotationum in Genesim*, 1527）を見ておこう。レオはツヴィングリの親しい友人また助言者で、彼の両親はカトリック教徒であった（4Lb, 47）。本書はツヴィングリの著作ではないため、彼の考えをどの程度忠実に伝えているか疑問視されることもある。しかし、彼自身が一部を校閲し自分の名を冠することを許した作品なので（4Hf, 422）、彼の使用したヘブライ語聖書との関連やチューリヒ聖書（後述）の訳文との関連を見るためにも重要である。

ツヴィングリは創世記18章18―19節のラテン語訳本文を引用しながら、次のように解釈

する（p. 189f.）。


Cum futurus sit in gentem magnam ac
fortem, & benedicendæ sint in eo omnes
nationes terræ. Scio enim quod præceptu
rus sit filijs suis & domui suæ post se, ut
custodiant uiam Domini, & faciãt iudi=
ciũ & iusticiã, ut adducat Dominus ppter
Abraham omnia quę locutus est ad eum.
Προσαπόδωσις est, cur Abrahæ hanc rem non sit
cælaturus. Prima causa est magnitudo ipsius Abrahæ
propter promißionẽ tã corporalẽ quàm spiritualẽ. q.d.
Non celabo hanc rem tantũ uirũ, sed notũ faciam. Nam
Ki iaddae= ubi latinus habet (scio) Ebreus dicit כי ידעתי, quo=
thi. niam notum faciam, manifestabo, aperiam ei hanc rem,
ut uerbũ Kal, Iada, hic transitiue accipiatur. Noße pro
notum facere. Non tacebo hanc rem, quã facturus sum
Abrahamo, sed aperiam, &c. Idq; rursus duabus ex
causis: Prima, ut ipse hoc factum suis posteris & libe=
ris annunciet: ut à pessimis sceleribus sibi temperent:
ut iusticiam & iudiciũ seruent. Secunda, ut Abraham
& posteri eius discant Deum eße ueracem: & quod
seruaturus sit Abrahamo & semini eius quæcũq; pro=
Iada. misit. Iam sensus planus est, quod si omnino ידע, pro
noui placet exponere, idẽ erit sensus, sic: Aperiã omnem
rem Abrahamo. Noui enim cum tam integrum eße ui=
rum, ut nihil dubitem, quin, quum hãc rem, quam pro=
posui audierit, filijs suis sit expositurus, præcepturusq;
eis, ut à turpibus abstineant, ut iusticiam ac iudicium co
lant. Deinde ut agnoscant Deum eße tam ueracem, ut
quemadmodum impios, iuxta uerbum quod ad Abra=
ham locutus erat, perdiderit, sic & Abrahæ & semini
eius promissa sit seruaturus.

聖書の引用文はウルガータ訳（1La）と概ね一致するが、18節の ac fortem, & benedicendae sint in eo という部分は異なっている。これはツヴィングリ独自の訳だろうか、記憶からの

引用だろうか。一方、19節の本文はウルガータ訳（VUL[SC]）と一致している。注釈部分の欄外の Ki iadaethi および Iada という見出し語から、彼がヘブライ語の動詞 ידע に注目して創世記の本文を解釈したことが分かる。

Προσαπόδωσις est, cur Abrahae hanc rem non sit celaturus. Prima causa est magnitudo ipsius Abrahae propter promißionem tam corporalem quam spiritualem. q. d. Non celabo hanc rem tantum uirum, sed notum faciam. Nam ubi latinus habet (scio) Ebreus dicit כי ידעתי, quoniam notum faciam, manifestabo, aperiam ei hanc rem, ut uerbum Kal, Iada, hic transitiue accipiatur. Noße pro notum facere. Non tacebo hanc rem, quam facturus sum Abrahamo, sed aperiam, etc. ... Iam sensus planus est, quod si omnino ידע, pro noui placet exponere, idem erit sensus, sic: Aperiam omnem rem Abrahamo. Noui enim eum tam integrum esse uirum, ut nihil dubitem, quin, quum, hanc rem, quam proposui, audierit, filijs suis sit expositurus praecepturusque eis, ut a turpibus abstineant, ut iusticiam ac iudicium colant ...

これは、なぜ彼〔主〕がアブラハムにこのことを隠さないのか（注17）、その prosapodosis である〔正しくは προσαπόδοσις〕。その第一の理由は、精神面と同様身体面での約束ゆえのアブラハム自身の偉大さである。〔主は〕こう言っているかのようである。――「わたしはこのことをこのように偉大な男に隠すのではなく、知らせよう」。確かに、ラテン語で scio となっている箇所のヘブライ語は כי ידעתי 「わたしはそのことを彼に知らせる／明らかにする／開示するであろうから」である――カル話態の動詞 yada がここでは他動的に解されるという前提で。「知った（その結果知っている）こと」は「知らせること」と同じである。「わたしは、アブラハムにしようとするこのことを、秘密にすることなく、開示するであろう、等々」。・・・さて、意味は明らかである。なぜなら、もし yada を全面的に “noui”（「わたしは知った」）と説明することが気に入る場合でも、意味は同じであろうから。すなわち、「わたしはすべてのことをアブラハムに開示しよう。なぜなら、わたしは彼がこれほどに完全な男であるのを知ったので、その結果わたしは次のことを全く疑わないからである。すなわち、わたしが示したこのことを彼が聞いた後、彼は自分の息子たちに〔それを〕提示し、また、彼らが恥ずべきことから遠ざかるよう、正義と裁きを重んじるよう、彼らに命じるであろうということを。・・・」。

ツヴィングリのヘブライ語解釈は疑わしい（4Ec, 69 の高い評価にもかかわらず）。彼は ידע のカル話態をヒフィル（הוֹדִיעַ）の意味にとったように見える。ロイヒリンは他動詞を３種類に分類し、その第三類を「第三者の他動詞」（verbum transitivum in aliquod tertium）として説明したが、これはまさにヒフィル話態に相当する（1Df, 585ff.）。カルがそのままヒフィルの意味になることはない。ツヴィングリはロイヒリンの『ヘブライ語入門』（1506年）によって学んだはずなのに（4Zb, 40; 4Bm, 43; 4Gh, 186）、どうしてこういう誤りを犯

したのだろうか。以下に見るように、少なくとも創世記18章19節に関する限り、彼の解釈がチューリヒ聖書（ドイツ語、ラテン語）の翻訳者たちに受け継がれることはなかった。彼はまた、ヘブライ語の完了形を scio と訳しても novi と訳しても意味は変わらないことを力説しているが（novi の意味が「知った結果知っている」ということであれば、scio と区別する意味はないのかもしれないが）、これは結果的に、ウルガータ訳をそのまま認めることにつながる。ルターやティンダル（後述）が彼と同様に現在形に訳した理由も、そのあたりにあるのだろうか。

３．パグニヌスのラテン語訳旧新約聖書（1Ld）

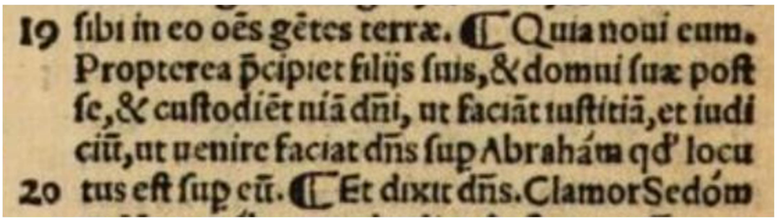
次に、イタリアのルッカ出身のドミニコ会士サンテス・パグニヌス（Santes Pagninus 1470―1536年．Sanctes, Xantes／Pagnino, Pagnini とも）が、25年の歳月をかけて1518年頃完成した旧約聖書のラテン語訳を概観する（旧約外典と新約の完成は1521年。初版の出版は1528年）（4Lb, 41, 43; 4Hf, 186）。これが作られたのは、ルターによるモーセ五書の最初のドイツ語訳（1523年）が刊行される５年も前のことである。

パグニヌスは、1486年にフィエーゾレのドミニコ修道会に入ってサヴォナローラ（Girolamo Savonarola　1452―98火刑）の下で学んだ。その後、フィレンツェに移って東方の言語（特にヘブライ語）を研究し、その能力のゆえに広く知られるようになった。この頃、ジョバンニ・デ・メディチ（Giovanni de' Medici　1475―1521）の知己を得たらしい。1513年頃、つまりジョバンニがレオ10世（在位1513―21）として教皇の位についた頃、パグニヌスは彼に招かれてローマに移り、自由学校の東方言語のクラスの指導を任された。レオ10世は、東方の言語の研究を奨励して人材をローマに集めただけでなく、パグニヌスの聖書翻訳も後援した。1521年にレオが死ぬと、パグニヌスはフランスのアヴィニョン、さらにはリヨン（1524年以後．ルター主義の流入に抵抗）へ移住し、そこで生涯を終えた（4Bk, 175-79）。彼は、聖書の翻訳のほか、ダヴィド・キムヒの『語根の書』の翻訳（*Thesaurus Linguae sanctae: ex R. Dauid Kimchi Sefer ha-Shorashim*. Paris: Robert Estienne, 1548）、アラム語の辞書、そしてヘブライ語の辞書（第３章§３で詳述）を著したことでも知られている。

彼の聖書は、（１）ヒエロニムス以後初めてヘブライ語とギリシア語の原典から訳したラテン語訳であり、（２）聖書の章節番号（注８）を導入した点で、特筆に値する。カトリックとプロテスタントの多くの聖書翻訳者が本書を利用し、その中にはルターやティンダルもいた（ルターのパグニヌス批判については第5章§1で述べる）。ユダヤ教徒もこれを評価した。彼は、一時期長官を務めた（4Bk, 177）ヴァティカン図書館の所蔵写本を自ら調べたうえで、旧約聖書の底本に1488年のソンチーノ版か1494年のブレシア版を用いた（4Lb, 41）。パグニヌスはまた、ユダヤ教のラビたち（キムヒ、ラシ、イブン・エズラら）の注解も参照した。本書における旧約文書の順序は、モーセ五書、ヨシュア記、士師記、ルツ記、サムエル記上下、列王記上下、歴代誌上下（すべて上下を別文書として扱っている）、第一エズラ書（エズラ記）、第二エズラ書（ネヘミヤ記）、エステル記、ヨブ記、詩編、

箴言、コヘレトの言葉、雅歌、イザヤ書、エレミヤ書、哀歌、エゼキエル書、ダニエル書、十二小預言書、トビト記、ユディト記、知恵の書、シラ書、バルク書、そして第一および第二マカベア書であり（正典と外典との間に空白の 3 頁が挟まれている）、巻末には “Liber interpretationvm nominvm hebraicorvm”（「ヘブライ語人名の解説書」） という題の長い文章が付加されている。パグニヌスの聖書は、その後何度も再版され、ときには改訳を施された。有名なのは、セルヴェトゥス、エティエンヌ、そしてモンタヌスである（後述）。

創世記18章19節の訳文は次のとおりである（ヘブライ語本文は印刷されていない）。


19 sibi in eo oẽs gẽtes terræ. ¶ Quia noui eum.
Propterea p̄cipiet filijs suis,& domui suæ post
se,& custodiẽt uiã dñi, ut faciãt iustitiã,et iudi
ciũ,ut uenire faciat dñs sup Abrahám qđ locu
20 tus est sup eũ. ¶ Et dixit dñs. Clamor Sedóm

Quia noui eum. Propterea praecipiet filijs suis, & domui suae post se, & custodient uiam domini, ut faciant iustitiam, et iudicium, ut uenire faciat dominus super Abrahám quod locutus est super eum.

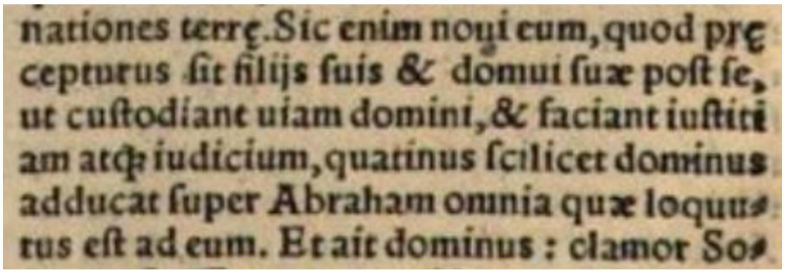
というのは、わたしは彼を知ったからだ。そのため、彼は彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に命じ、そして彼らは、正義を、また裁きを行うべく、主の道を守るであろう。主がアブラハムの上に、彼について話したことを来たらせるために。

この訳は、ヘブライ語 יְדַעְתִּיו の末尾の ו を訳出した点、ヘブライ語の完了形をラテン語の完了形に訳した点で、明らかにウルガータ訳にまさる（noui を scio の意味にとりうることは確かだが、パグニヌス自身がそれを望んだようには思われない）。この解釈は非常に重要であり（後述する彼の1529年の辞書も参照）、ティンダルの英語訳とカルヴァンの訳文（ラテン語版創世記注解）の参考になった可能性がある（前者は noui を scio の意味にとったように見える）。だが彼は、לְמַעַן אֲשֶׁר が目的節を導く接続語（to the end that）であるとは考えなかった。לְמַעַן を前置詞（「のゆえに／のために」）ととり אֲשֶׁר を直前で言われたことと見て、両者を結びつけたのだろうか。リシャール・シモンは、パグニヌスの訳文について、「昔の聖書解釈者たちをしばしば無視して、ラビたちの意見に執着した」、「曖昧かつ粗野で、そのうえ破格語法だらけだ」と批判している（3Ga, 314f.）。

４．ミュンスターの旧約聖書ラテン語訳とエラスムスの新約聖書ラテン語訳をセットにした聖書 (1Le)

チューリヒの宗教改革者たちは、聖書のドイツ語訳のほかにラテン語訳にも力を入れた（下記参照）。ただしここに取り上げるラテン語聖書（1539年）は、スイスの学者たちのものではなく、セバスティアン・ミュンスターによるヘブライ語からの翻訳、デシデリウス・

エラスムスによるギリシア語からの翻訳（初出1516年)、そして旧約聖書外典（コンプルートゥム多言語聖書のギリシア語本文に施されたラテン語行間訳を流用）を一つにしたものであり、ツヴィングリと関係の深いチューリヒの印刷業者クリストフ・フロシャウアー（Christoph Froschauer　c. 1490―1564）によって刊行された（4Lc, 284)。本書は、旧新約聖書の各書の解説を含むヨハン・ハインリヒ・ブリンガー（Johann Heinrich Bullinger　1504―75）の長い序文で始まり、過去の翻訳と旧約聖書正典についての概説と目次が続いている。目次に示された本書の配列は、モーセ五書、前の預言者、後の預言者（大預言書)、十二小預言書、諸書、旧約外典、新約聖書の順である。本書に訳注の類はいっさい付いていないが、ウルガータ訳からの決定的転換をしるしづけるものであった。本書に収録されたミュンスターのラテン語訳では、創世記18章19節の訳文は次のようになっている（節番号なし)。1534年の訳も並べて示す。なお、この本文は、すでに見た1546年再版の訳（第２章§８参照）と――1534年版と同じく quatenus を quatinus としている点を除き――全く同じである。


nationes terrę.Sic enim noui eum,quod prę
cepturus ſit filijs ſuis & domui ſuæ poſt ſe,
ut cuſtodiant uiam domini,& faciant iuſtiti
am atq; iudicium,quatinus ſcilicet dominus
adducat ſuper Abraham omnia quæ loquu-
tus eſt ad eum. Et ait dominus : clamor So-

Sic enim noui eum, quod praecepturus sit filijs suis & domui suae post se, ut custodiant uiam domini, & faciant iustitiam atque iudicium, quatinus scilicet dominus adducat super Abraham omnia quae loquutus est ad eum.

というのは、このようにわたしは彼〔アブラハム〕を知ったからだ。〔すなわち〕彼が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが主の道を守り、そして正義と裁きを行うように、命じるであろうことを。確かに主がアブラハムの上に、彼に向って話したすべてのことをもたらすために。（ミュンスター、1539年訳）

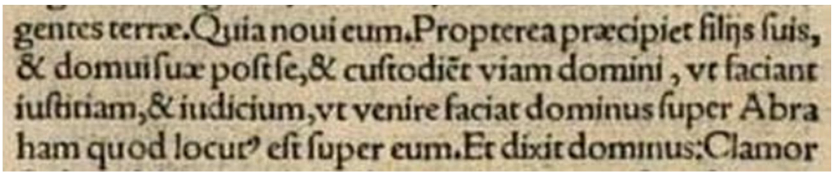
Hoc quoque scio quod praecepturus sit filijs suis & domui suae post se, ut custodiant uiam domini, & faciant iustitiam atque iudicium, quatinus scilicet dominus adducat super Abraham omnia quae loquutus est ad eum.

このこともまたわたしは知っている。〔すなわち〕彼〔アブラハム〕が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが主の道を守り、そして正義と裁きを行うように、命じるであろうことを。確かに主がアブラハムの上に、彼に向って話したすべてのことをもたらすために。（ミュンスター、1534年訳）

５．パグニヌスのラテン語訳のセルヴェトゥスによる再版（1Lf）

セルヴェトゥス（Michael Servetus／Michel Servet　1511—53火刑）の生涯と活動については、『宗教改革著作集』第10巻所有の出村彰氏の解説（3Gm-10, 292-308）を参照いただきたい。ここでは、パグニヌスのラテン語訳がセルヴェトゥスによってどのように扱われているかを見るに留める（ただし彼は改訳を出したわけではない［4Lb, 43］)。本書の大きな特徴は欄外に注釈を入れたことである。前書き（Michael Villanouanus という名による）の中で彼は “In qua re, sicut et in ipsa Pagnini nostri versione, non parum est nobis post omnia eius annotamenta desudatum”（「〔聖書に出てくる予型や比喩の覆いをとって見えるようにするという〕そのことにおいて、われらのパグニヌスの翻訳自体におけるように、彼のすべての注釈〔手稿〕に接して、われわれは足りぬところのないよう懸命な努力を行った」）と述べている。しかしこれらの注釈は、実際にはセルヴェトゥス自身のものである（4Bk, 182)。タイトル頁にあるように、本書は1542年にリヨンでポルタのフーゴ（Hugo à Porta／Hugues de La Porte　1500—72）によって印刷出版された。

本書の創世記18章19節は以下のとおり、パグニヌスのものと全く同じである。なお、この箇所に注釈はついていない。


gentes terræ. Quia noui eum. Propterea præcipiet filijs suis,
& domui suæ post se, & custodiēt viam domini, vt faciant
iustitiam, & iudicium, vt venire faciat dominus super Abra
ham quod locutꝰ est super eum. Et dixit dominus: Clamor

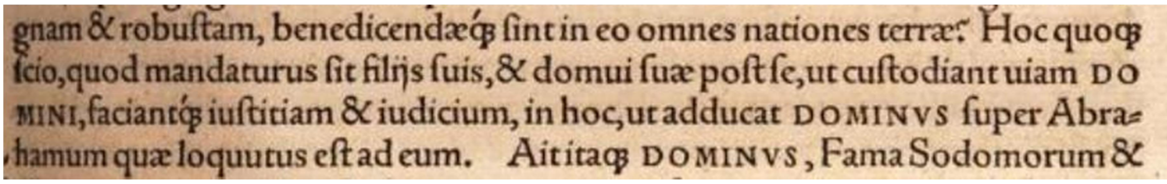
Quia noui eum. Propterea praecipiet filijs suis, & domui suae post se, & custodient viam domini, vt faciant iustitiam, & iudicium, vt venire faciat dominus super Abraham quod locutus est super eum.

６．ラテン語版チューリヒ聖書 (1Lg)

本書はスイスの宗教改革者たちの労作であり、そのため Versio Tigurina と呼ばれることがある（4Lb，47f.)。編集をコンラート・ペリカン（1532—38 年にウルガータ訳をヘブライ語に照らして改訂［4Lb，37, 58]）が担当し、レオ・ユート（4Ec, 48f.）が五書を含む旧約聖書の大部分をヘブライ語から新たに訳した（4Lb，41，47)。本書の特徴の一つは、豊富な注解（中世のラビたちに溯る）がついていることである。本書は 1543 年にチューリヒで出版されたが（1543 年版にも複数の異なる刷があるらしい)、これはドイツ語版チューリヒ聖書（1531 年にツヴィングリ編の完本が出版された。第５章§３参照）が出た 12 年後である。早くも翌 1544 年に再版され、1550 年にも再版された（4Lb，47)。タイトル頁には、パウロのローマ書 15 章 4 節のウルガータ訳が掲げられている（Quaecunque scripta sunt, ad nostram doctrinam scripta sunt, ut per patientiam & consolationem scripturarum spem habeamus.「〔聖書に〕書かれたことは、すべてわれわれの教えのために書かれたのであっ

て、それは聖書の〔与える〕忍耐と慰めとによって、われわれが望みをもつためです」)。旧約聖書の配列は独特であり、ヨブ記、詩編、箴言、コヘレトの言葉、雅歌が、エステル記の後ではなく、正典の最後（マラキ書の後、旧約外典の前）に置かれている。

　創世記18章19節の訳文は次のとおりである。


gnam & robuſtam, benedicendæq; ſint in eo omnes nationes terræ. Hoc quoq; ſcio, quod mandaturus ſit filijs ſuis, & domui ſuæ poſt ſe, ut cuſtodiant uiam DOMINI, faciantq; iuſtitiam & iudicium, in hoc, ut adducat DOMINVS ſuper Abrahamum quæ loquutus eſt ad eum. Ait itaq; DOMINVS, Fama Sodomorum &

Hoc quoque scio, quod mandaturus sit filijs suis, & domui suae post se, ut custodiant uiam DOMINI, faciantque iustitiam & iudicium, in hoc, ut adducat DOMINVS super Abrahamum quae loquutus est ad eum.

このこともまたわたしは知っている、〔すなわち〕彼が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが主の道を守り、そして正義と裁きを行うように命じるであろうことを。これにおいて、主がアブラハムの上に、彼に向って話したことをもたらすために。

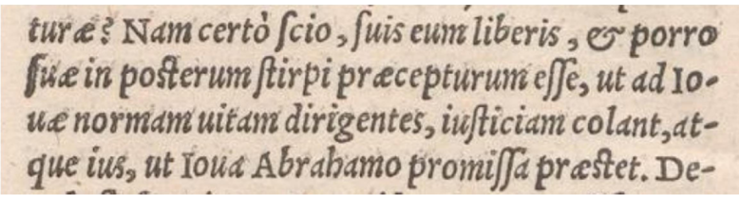
前述したように、レオ・ユートはツヴィングリの創世記注釈集録（1Lc）をまとめた人物だが、本節の訳文はツヴィングリの解釈を全く反映していない。注目すべきことに、この訳の出だしの部分はミュンスターの最初の訳（1534 年。Hoc quoque scio quod praecepturus sit filijs suis ...）とそっくりであり、そのためヘブライ語の完了形のとり方と יְדַעְתִּיו の末尾の ו の解釈の問題を引きずっている。また目的節を導く לְמַעַן אֲשֶׁר の意味も正確にとらえてはいない。レオ・ユートとチューリヒの学者たちはミュンスターの 1539 年改訳（Sic enim noui eum, quod praecepturus sit filijs suis ...）を知らなかったのだろうか。先に触れたように、後者は 19 節冒頭の解釈において、ドイツ語版チューリヒ聖書の訳文（Dann ich kenn jn der maß, das er wirt befelhen seinen kindern ...）とやや似ているのである。彼らはそれを知っていたのだが、ミュンスターの初訳の方が 1539 年改訳（およびドイツ語版チューリヒ聖書の訳文）にまさると考えたのだろうか。これは退歩とは言えぬまでも、前進でないことは確かであろう。

７．カステリョのラテン語訳聖書 (1Lh, 1Li)

　次に、フランスの人文学者セバスティアーヌス・カステリョ（Sebastianus Castellio／Sebastian Castellio／Sébastien Castellion／Sébastien Châteillon　1515－1563）による原典からのラテン語訳を見てみよう。カステリョの経歴と活動、特に聖書翻訳、カルヴァンらとの関係については、グッギスベルクの伝記をすぐれた日本語訳で読むことができるので（4Bp）そちらを参照されたい。カステリョは旧新約聖書全体のラテン語訳（1551年）とフランス語訳（1555年）を出したが、前者については、まずモーセ五書を先に出版した（1546年）。

創世記18章19節の訳文は五書版も全訳版も（iusticiam を iustitiam としている点以外は）同じなので、ここでは五書版を見ることにしたい。なおカステリョは、1551年の初版発表後多くの批判を受け、1554年と1556年の二度にわたって改訳を余儀なくされた（4Lb, 48）。

創世記18章19節の訳文は次のとおり。


turæ? Nam certò ſcio, ſuis eum liberis, & porro
ſuæ in poſterum ſtirpi præcepturum eſſe, ut ad Io-
uæ normam uitam dirigentes, iuſticiam colant, at-
que ius, ut Ioua Abrahamo promiſſa præſtet. De-

Nam certò scio, suis eum liberis, et porro suae in posterum stirpi praecepturum esse, ut ad Iouae normam uitam dirigentes, iusticiam colant, atque ius, ut Ioua Abrahamo promissa praestet.

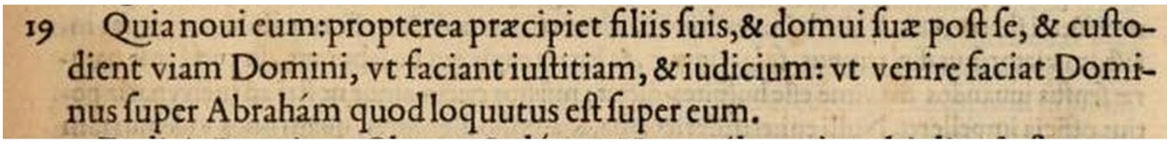
なぜなら、わたしは確かに知っているからだ。彼が彼の子供たちに、さらにまた彼の将来の子孫に、彼らがエホバの規範に生き方を合わせながら、正義を、また法を重んじるように、命じるであろうことを。エホバがアブラハムに対して約束を果たすために。

この訳はこれまで見てきたどの訳とも異なり、直訳調ではない。ラテン語としてすぐれているようにも思われる。しかし、正確さの点ではどれほどのものだろうか。文体の優雅さが不正確な解釈を覆い隠してはいないだろうか。何よりも冒頭の יְדַעְתִּיו לְמַעַן אֲשֶׁר を正しく訳したようには見えない。正確さの点で、これがミュンスターの改訳に――さらにはウルガータ訳にさえ――まさると言い切れるだろうか。

カステリョの翻訳は、同時代のフランスのカトリック教徒とカルヴァン主義者のどちらからも否定的に評価され続けた（4Bp, 328）。辛辣なリシャール・シモンが、他のラテン語訳を批判する一方で彼のラテン語訳とフランス語訳を評価したことは事実である。しかし、シモンの評価は決して全面的なものではなかった。彼は、カステリョのヘブライ語、ギリシア語、ラテン語の理解が「ジュネーヴの博士たち」にまさることを認めながらも、文章の優雅さを好むあまり「テクストの意味を弱めた」と批判しているのである（3Ga, 185, 324f. cf. 4Lb, 50）。

８．カルヴァンのラテン語版創世記注解 (1Lk)

次に、ジャン・カルヴァン（Jean Calvin　1509―1564）のラテン語版創世記注解に含まれる創世記18章19節の訳文を見ることにしよう。これは聖書翻訳ではないが、彼が用いた創世記の本文（各章の冒頭にまとめて掲載）とそれに基づく注解を知ることができるので、非常に重要である（注18）。執筆開始は1550年、完成は1554年8月である（4Bq, 223, 295）。


19 Quia noui eum:propterea præcipiet filiis suis,& domui suæ post se, & custo-
dient viam Domini, vt faciant iustitiam, & iudicium: vt venire faciat Domi-
nus super Abrahám quod loquutus est super eum.

Quia noui eum: propterea praecipiet filiis suis, & domui suae post se, & custodient viam Domini, vt faciant iustitiam, & iudicium: vt venire faciat Dominus super Abrahám quod loquutus est super eum.
というのは、わたしは彼を知ったからだ。そのため、彼は彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に命じ、そして彼らは、正義を、また裁きを行うべく、主の道を守るであろう。主がアブラハムの上に、彼について話したことを来たらせるために。

この訳文を、先に見たパグニヌスの訳と比較すると、ほとんど全く同じであることに気づく（1838年版［1Lk’］は「主」を「エホバ」に変えている）。

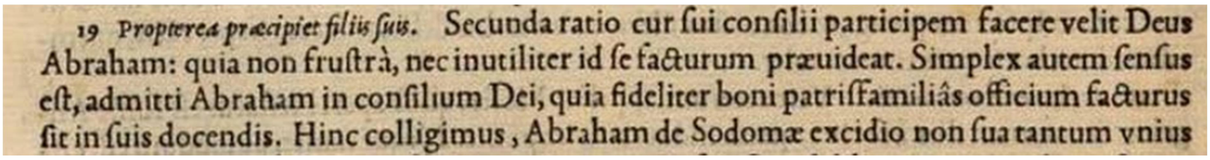
Quia noui eum. Propterea praecipiet filijs suis, & domui suae post se, & custodient uiam domini, ut faciant iustitiam, et iudicium, ut uenire faciat dominus super Abraham quod locutus est super eum. （パグニヌス訳、1528年）

ジルモンは、オリヴェタンのフランス語訳聖書の1551年改訂版（第６章§３参照）を検討して、当時カルヴァンはミュンスターのヘブライ語ラテン語対訳聖書1546年版（1Hk’）を利用した、と結論づけている（4Bq, 145）。しかし、このラテン語版創世記注解の創世記18章19節の訳に限っては、カルヴァンが用いたのはミュンスター訳（Sic enim noui eum, quod praecepturus sit filijs suis ...）ではなく、パグニヌスの訳であったと断定せざるを得ない（ただし、創世記の訳文全体について彼がパグニヌス訳を利用したわけではない）。確かに、カルヴァンがバーゼルにいた時期（1535—36年）は、ミュンスターのバーゼル在住の時期（1529—52年）と重なる（ボムガルトネールは前者が後者から直接学んだ可能性さえ指摘している。4Fe, 18-21）。彼がミュンスターのラテン語訳（1534年［1Hk］、39年［1Le］、46年［1Hk’］）を参照した可能性は確かにあるが（4Fg, 58, 78; 1Lk’, 7）、いずれにしても本節の訳文がミュンスターのものとかけ離れていることは確かである。なお、リシャール・シモンは、ヘブライ語を読むのにカルヴァンは非常に苦労したと書いている（3Ga, 345）

先に指摘したとおり、パグニヌスは旧約翻訳の底本に1488年のソンチーノ版か1494年のブレシア版を用いた。これらにラビたちの注解はついていなかった。カルヴァンはラビ聖書の第一版（1516—17年）か第二版（1524—25年）を親戚のオリヴェタンから譲り受けたと言われている（4Ff, 229）。翻訳にさいして彼はそれを見たのだろうか。その可能性は否定できないが、これらにはタルグムとラシの注解が印刷されており（前述）、創世記18章19節の注釈も容易に見ることができたはずなのに、少なくとも本節については、参考にした形跡はない。レインは（暫定的にだが）、ラビ聖書やラビたちの他の著作をカルヴァンは用

いなかったとする最近の研究に同調して、「カルヴァンのユダヤ教的引用はおそらくラビ聖書からとられたものではない」と結論づけている（4Ff, 229）。

この注解書には、もう一つ奇妙な点がある。カルヴァンは、18章冒頭にまず聖書本文のラテン語訳をまとめて掲げ、そのうえで注解部分では、各節の聖書本文の一部を見出しとして示してから、注解を展開している。18章19節の注解部分は次のように始まる。


19 *Propterea præcipiet filiis ſuis.* Secunda ratio cur ſui conſilii participem facere velit Deus Abraham: quia non fruſtrà, nec inutiliter id ſe facturum præuideat. Simplex autem ſenſus eſt, admitti Abraham in conſilium Dei, quia fideliter boni patriſfamiliâs officium facturus ſit in ſuis docendis. Hinc colligimus, Abraham de Sodomæ excidio non ſua tantum vnius

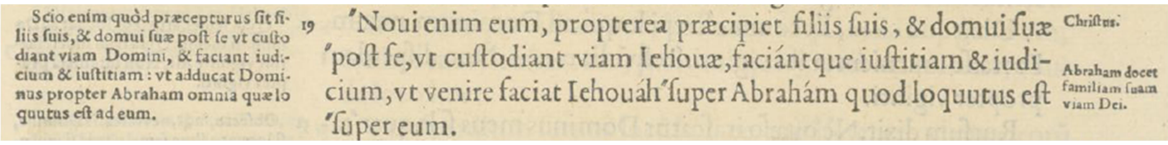
カルヴァンは最初に19節の本文の一部をイタリック体で示してから、注解を始めている。見逃せないのは、ここで彼が Quia novi eum を省いて Propterea praecipiet filiis suis を見出しに選んだことである。これは、最初に掲げた訳文の重要部分を無視したも同然である。カルヴァンが章の冒頭に掲載した訳（パグニヌス訳と同じ）は、「というのは、わたしは彼を知ったからだ。そのため、彼は彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に命じ、そして彼らは、正義を、また裁きを行うべく、主の道を守るであろう」というものであった。その意味するところは、主がアブラハムを知った事実がまず先にあり、そのことが、アブラハムが息子たちと子孫たちに主の道を守るように命じるという結果をもたらす、ということである。だがカルヴァンは、この訳を採用しておきながら、注解ではその最初の部分に全く言及していない。それどころか、重要な Propterea（そのため／それゆえに／その結果として）の含意さえ無視している。注解部分で彼は、「神がアブラハムを自らの熟慮に与る者にしようとする第二の理由」（Secunda ratio cur sui consilii participem facere velit Deus Abrabam）と関連して（第一の理由は17節の注解で指摘）、「だが〔この章句の〕単純な意味は、アブラハムは彼の家の者たちに教えることにおいて、良い家長の責任を忠実に果たすであろうから、彼は神の熟慮に関与させられる、ということである」（Simplex autem sensus est, admitti Abraham in consilium Dei, quia fideliter boni patrisfamiliâs officium facturus sit in suis docendis）と述べている。これでは Quia novi eum: propterea の意味と正反対ではないか。後述するフランス語版注解書の訳文（第 6 章§5）とエティエンヌの注釈（次節）も参照。

このように、カルヴァンの注解は神学的ではあっても、決して釈義的ではない。本節のヘブライ語の意味を彼は最後まで理解できなかったように見える（その点ではこの時代の他の学者たちも同じである）。この注解書では、パグニヌスの訳を掲げておきながら、それに即して釈義することをしなかった。それだけではない。後年改訂するフランス語版注解書（1564年）では、パグニヌスとは異なる自分の訳文を掲げておきながら、注解部分でまたしても奇妙なことを行うのである。

９．エティエンヌのラテン語訳聖書（**1557年**）（1Ll）

フランスのロベール・エティエンヌ（Robert Estienne／Robertus Stephanus．1503―59）は、出版業者として多くの重要な書籍（ラテン語辞典、ヘブライ語聖書、ギリシア語新約聖書、教会教父たちの著作、メランヒトン、エラスムス、カルヴァン、ベーズら宗教改革者たちの著作）を世に出したことで知られるが、人文学者としてもすぐれていた。彼はまずヒエロニムスのウルガータ訳の原文復元に努めた（1528、32、40、45、46年）（4Lb, 34）。ここに取り上げるのは、その延長線上にある1557年のラテン語訳聖書である（ジュネーヴで出版）。新約聖書はベーズの翻訳を利用しているが、旧約についてはエティエンヌ自らパグニヌスの翻訳を改訂し、豊富な注釈を添えた（4Lb, 43)。これについてエティエンヌは前書きの中で、「ヘブライ語学者たちの最も該博な注解書に由来する諸解釈を」（varias expositiones ex eruditissimis Hebraeorum doctorum commentariis）採用したが、とりわけヴァタブリュ（François Vatable／Franciscus Vatablus　15世紀末―1547）のものが「これらの注釈の中でも主要な位置を占める」（in his etiam Annotationibus primas tenet）と述べている。しかし、それらの注釈は実際には彼自身のものらしい（4Lb, 43, 64n82)。本書（第一巻）における各書の順序は変則的で、モーセ五書、ヨシュア記、士師記、ルツ記、サムエル記上下、列王記上下、歴代誌上下、エズラ記、ネヘミヤ記、第三エズラ（新共同訳旧約聖書続編「エズラ記［ギリシア語］」と同じ)、第四エズラ（同「エズラ記［ラテン語］」と同じ。≠旧約外典「第四エズラ書」)、トビト記、ユディト記、エステル記（付加を含む)、ヨブ記、詩編、箴言、コヘレトの言葉、雅歌、知恵の書、そしてシラ書である。

本書における創世記18章19節の訳文は次のとおりである。左に小さな文字でウルガータ訳を、右にエティエンヌによるパグニヌス訳の改訂版を並べている。比較のため、パグニヌスの訳を再度掲げる。


Scio enim quòd præcepturus sit filiis suis, & domui suæ post se vt custodiant viam Domini, & faciant iudicium & iustitiam : vt adducat Dominus propter Abraham omnia quæ loquutus est ad eum.

19 Noui enim eum, propterea præcipiet filiis suis, & domui suæ post se, vt custodiant viam Iehouæ, faciántque iustitiam & iudicium, vt venire faciat Iehouáh super Abrahám quod loquutus est super eum.

Christus.

Abraham docet familiam suam viam Dei.

Noui enim eum, propterea praecipiet filiis suis, & domui suae post se, vt custodiant viam Iehouae, faciántque iustitiam & iudicium, vt venire faciat Iehouáh super Abrahám quod loquutus est super eum.

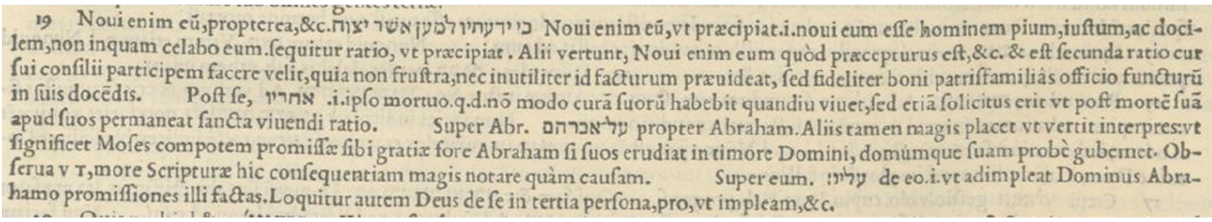
というのは、わたしは彼を知ったからだ。そのため、彼は彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが、エホバの道を守り、そして正義と裁きを行うように、命じるであろう。エホバがアブラハムの上に、彼について話したことを来たらせるために。（エティエンヌ訳）

Quia noui eum. Propterea praecipiet filijs suis, & domui suae post se, & custodient uiam domini, ut faciant iustitiam, et iudicium, ut uenire faciat dominus super Abrahám quod locutus est super

eum.（パグニヌス訳）

エティエンヌの訳は、神名は別として、ヘブライ語 יְדַעְתִּיו の末尾の ו を訳出しヘブライ語の完了形をラテン語の完了形に訳したパグニヌスのすぐれた訳を踏襲しながら、それを改善したものになっている。

本節につけられた注釈は次のとおり。本節の冒頭部分について、エティエンヌはヘブライ語原文を掲げてから、次のように解説する。


19 Noui enim eũ,propterea,&c.כי ידעתיו למען אשר יצוה Noui enim eũ,vt præcipiat.i.noui eum esse hominem pium,iustum,ac docilem,non inquam celabo eum.sequitur ratio, vt præcipiat . Alii vertunt, Noui enim eum quòd præcepturus est,&c. & est secunda ratio cur sui consilii participem facere velit,quia non frustra,nec inutiliter id facturum præuideat, sed fideliter boni patrisfamiliâs officio functurũ in suis docēdis. Post se, אחריו .i.ipso mortuo.q.d.nõ modo curã suorũ habebit quandiu viuet,sed etiã solicitus erit vt post mortẽ suã apud suos permaneat sancta viuendi ratio. Super Abr. על־אברהם propter Abraham. Aliis tamen magis placet vt vertit interpres:vt significet Moses compotem promissæ sibi gratiæ fore Abraham si suos erudiat in timore Domini, domúmque suam probè gubernet. Obserua v ד,more Scripturæ hic consequentiam magis notare quàm causam. Super eum. עליו: de eo.i.vt adimpleat Dominus Abrahamo promissiones illi factas.Loquitur autem Deus de se in tertia persona,pro,vt impleam,&c.

... Noui enim eum, vt praecipiat. i. noui eum esse hominem pium, iustum, ac docilem, non inquam celabo eum. sequitur ratio, vt praecipiat.

・・・「というのは、わたしは彼を知ったからだ、彼が命じるために」。つまり、わたしは彼が敬虔な、正しい、そして物わかりのよい人間であることを知った。わたしは、「彼に隠そう」とは言わない。「彼が命じるために」の理由はここから帰結する。

エティエンヌは、Propterea（そのため）の含意をこのように言い換えている。目的を結果の裏返しと考えれば、確かに筋が通っている。本文自体を Noui enim eum, vt praecipiat と訳したわけではないが、結果的にこれは、この時代ではおそらく他に見られない独自の解釈である。だが יָדַע を認識的な意味でのみとらえた点では、彼もまた時代の子であった（「第一部の結び」参照）。ラシはこの動詞の含意を考慮して、「人を愛する者は、彼を近づかせる者であって、彼の傍らにおり、また彼を知る者、さらに彼を認める者である」と説明した。言うまでもなくこれは、主とアブラハムの関係にこそ当てはまる（第2章§6参照）。つまり、「主がアブラハムを知った」ことは、彼の敬虔や正しさの認識に限定されないのである。残念ながらエティエンヌは、このことをラビ聖書から学ばなかったようである。

続いて彼は、別の訳文を紹介し、それをカルヴァンの創世記注解（1Lk）における解釈（前節参照）と結びつける。エティエンヌがカルヴァンの解釈をいかに重要視していたかが分かるが、パグニヌスを換骨奪胎した自説を本文に掲げた点にむしろ注目すべきであろう。カルヴァンからの引用部分をイタリックと下線で示す。

Alii vertunt, Noui enim eum quòd praecepturus est, &c. & est *secunda ratio cur sui consilii participem facere velit*, *quia non frustra, nec inutiliter id facturum praeuideat*, sed *fideliter boni patrisfamiliâs officio* functurum *in suis docendis*.

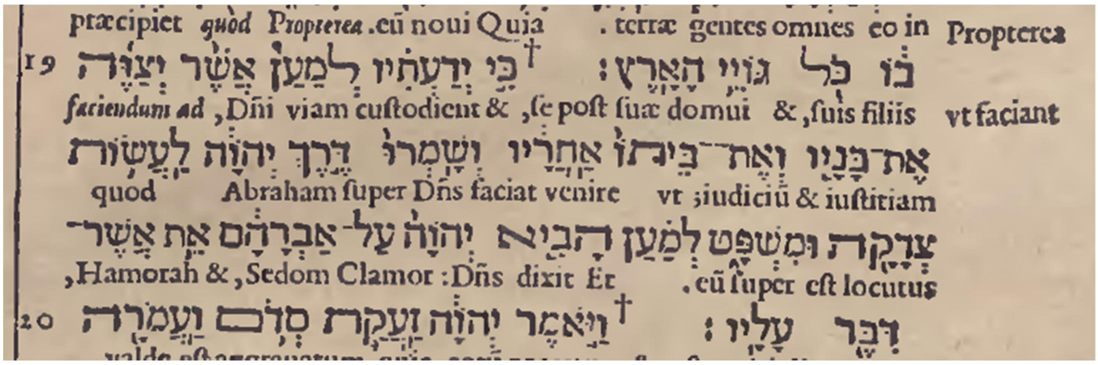
次のように変える人たちもいる。「というのは、わたしは彼を、彼が・・・命じるであろ

うことを知ったからだ」。そしてこれが、「〔神がアブラハムを〕自らの熟慮に与る者にしようとする第二の理由であり、それというのは、〔彼は〕それを無駄にではなく、無益にでもなく行うであろうと、そうではなく、彼の家の者たちに教えることにおいて、良い家長の責任を忠実に全うするであろうと〔神は〕予見しているからである。

細かい話だが、Noui enim eum *quod* praecepturus est という訳は、エティエンヌの訳ともパグニヌス訳（＝カルヴァンのラテン語版創世記注解の訳文）とも異なる。強いて言えば、ミュンスターの1539／46年の訳（Sic enim noui eum, quod praecepturus sit filijs suis & ...）と似ている（注19）。ここで彼が propterea を quod に変えたのは、カルヴァンの注解の説明を活かそうとしてのことであろう（カルヴァンでは Noui enim は「彼を選んだ」を意味しないのだから、この quod は「～であるから」の意味にはとれない）。こう言い換えれば、先に見たカルヴァンの注解の不備は確かに乗り越えられる。アブラハムの忠実な行動に対する神の予見ないし予知が、神が彼を自らの熟慮に与る者にした（つまり彼を選んだ）理由になるからである。

10. アントワープ多言語聖書第七巻の一部――パグニヌスの訳をアリアス・モンタヌスが修正した行間訳（1Hl’）

前述したように、アントワープ多言語聖書の第七巻（*Hebraicorum Bibliorum. Veteris Testamenti Latina interpretatio, opera olim Xantis Pagnini Lucensis* ... Antuerpiae, c. 1571）には、ラテン語行間訳のついたヘブライ語旧約聖書が含まれている（表紙図版、表題、および 4Hm を参照）。このラテン語訳はパグニヌスの訳をアリアス・モンタヌスが修正したものである（4Lb, 44）。創世記18章19節は次のようになっている。


præcipiet *quòd* *Propterea* .cũ noui Quia . terræ gentes omnes eo in Propterea
19 כי ידעתיו למען אשר יצוה בו כל גויי הארץ׃
faciendum ad ,Dñi viam custodient & ,se post suæ domui & ,suis filiis vt faciant
את בניו ואת ביתו אחריו ושמרו דרך יהוה לעשות
quod Abraham super Dñs faciat venire vt ;iudiciũ & iustitiam
צדקה ומשפט למען הביא יהוה על אברהם את אשר
,Hamorah & ,Sedom Clamor :Dñs dixit Et .cũ super est locutus
20 ויאמר יהוה זעקת סדם ועמרה דבר עליו׃

ヘブライ語に合わせてラテン語も右から左に並べてある。書き直すと次のようになる。モンタヌスが修正を加えた語句が右側に示され、対応する語句は斜体になっている。

Quia noui eum. *Propterea quòd* praecipiet filiis suis, & domui suae post se, & custodient viam

Domini, *ad faciendum* iustitiam & iudicium; vt venire faciat Dominus super Abraham quod locutus est super eum.

モンタヌスの行間訳は、ヘブライ語とラテン語の単語レベルでの対応関係を示す、パグニヌス以上に逐語的な訳である。לַעֲשׂוֹת を ad faciendum と訳し、לְמַעַן אֲשֶׁר を propterea quod と訳したことにより、直訳調が強まっている。モンタヌスの訳文は次のように訳せるであろう。

というのは、わたしは彼を知ったからだ。彼は彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に命じ、そして彼らは、正義と裁きを行うために、主の道を守るであろうから。主がアブラハムの上に、彼について話したことを来たらせるために。

propterea quod は理由を表わすので、לְמַעַן אֲשֶׁר を正しく訳したことにはならない。適切な修正とは言えぬであろう。パグニヌスの元の訳の方がよいのではないだろうか（ただし、「彼を知った」が選びを含意するとすれば、一応意味は通る）。パグニヌス訳を改訳したエティエンヌの1557年のラテン語訳聖書（前節）と比較。

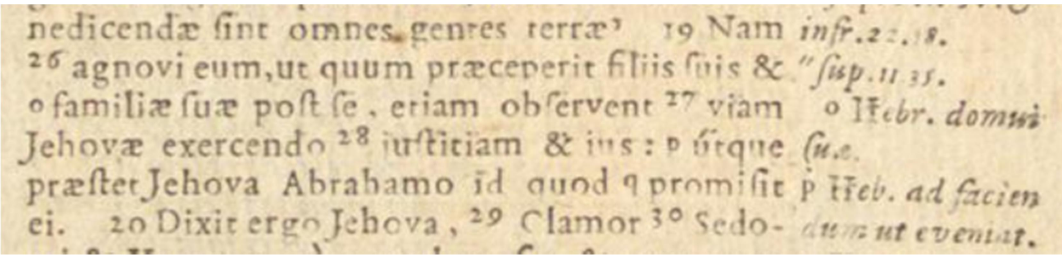
11．トレメリウスのラテン語訳（1575年）(1Lm)

次に取り上げるのは、イタリア出身のヘブライ語学者インマヌエル・トレメリウス（Immanuel Tremellius／Giovanni Emmanuele Tremellio　1510—80）によるラテン語訳である（4Ec, 50ff.）。トレメリウスはユダヤ人の子として生まれたが、1540年頃カトリックに改宗し、翌年サン・フェルディアーノのアウグスティヌス会修道院でヘブライ語を教え始めると、そこの修道院長ピエトロ・マルティル（Pietro Martire Vermigli　1499—1562）の強い影響を受けて、カトリックを離れる決断をした。1542年にはイタリアを脱出してマルティルらと共にストラスブールへ向かい（到着は1543年初頭）、そこで教師の職に就いてから、ヨーロッパ各地の教育機関でヘブライ語を教えた。彼の経歴（度重なる迫害と移住を経験）には、ケンブリッジ大学欽定講座担任教授職（1549—53年）、ハイデルベルク大学教授職（1561—77年）、セダン・アカデミー（ユグノー派神学校）教授職（1577—1580）が含まれる（4Bs, 138f.）。彼が旧約聖書の翻訳を開始したのは、ハイデルベルク時代の1571年と推測されているが（4Lb, 51）、1573年か、あるいケンブリッジ時代の可能性もある（4Br, 146）。

トレメリウスによる旧約聖書ラテン語訳は、後に改革派の指導的神学者となったフランキスクス・ユーニウス（Franciscus Junius　1545—1602）の協力を得て完成され、改革派教会の標準的なラテン語訳旧約聖書として広く用いられた（4Lb, 51, 66n143）。ユーニウス（4Ec, 51 によればトレメリウスの義理の息子）は1573年にハイデルベルクにやってきて、78年までそこに留まり、ノイシュタット、ハイデルベルク、ライデンでヘブライ語の教授

職を務めた（4Br, 146）。彼もまたすぐれたヘブライ語学者であった。初版は、1575年から79年にかけてフランクフルト・アム・マインの名高い印刷業者アンドレアス・ウェケルス（Andreas Wechelus／André Wechel／Andreas Wechel　d. 1581）によって出版された（4Br, 147）。５巻から成り、全巻の構成は、第一巻「モーセ五書」、第二巻「歴史書」（ヨシュア記～エステル記）、第三巻「詩的文書」（ヨブ記～雅歌）、第四巻「預言書」（イザヤ書～マラキ書）、そして第五巻「旧約聖書外典」である（これ以前にトレメリウスは、十二小預言書のタルグム［ＴＪ］のラテン語訳と、ラテン語訳のついたシリア語新約聖書も出した）（4Br, 121, 122, 125, 147）。表題に “Accesserunt libri qui Vulgo dicuntur Apocryphi, Latinè redditi, et notis quibusdam aucti à Francisco Junio”（「一般に「外典」と呼ばれる文書――ラテン語に訳され、フランキスクス・ユーニウスにより一定の注釈で拡充された――を付加した」）とあるので、外典の翻訳はユーニウスによるとされるが、それ以外はトレメリウスが中心になって訳したのであろう（4Br, 147）。彼らの翻訳の方針および特色、作品に対するさまざまな批判と評価を、エスクールトが詳しく紹介している（4Lb, 52ff.）。残念ながら本書の初版を見ることはできなかったので、ここでは1590年の版(1Lm)を用いる。表題に “Secunda cura Francisci Junii” とあるように、これはトレメリウスの死後、ユーニウスが改訂を施した「第二版」である。

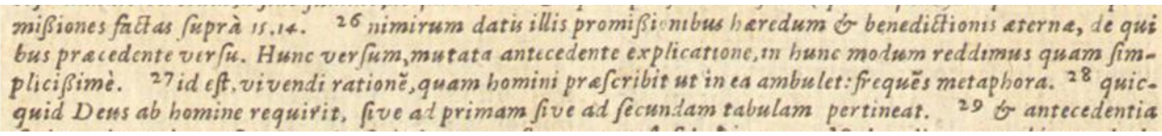
　トレメリウス訳の創世記18章19節は次のようになっている（日本語訳では右欄の訳注を括弧に入れて示す）。


nedicendæ ſint omnes gentes terræ 19 Nam infr.22.18.
26 agnovi eum,ut quum præceperit filiis ſuis & ſup.11.35.
o familiæ ſuæ poſt ſe, etiam obſervent 27 viam o Hebr. domui
Jehovæ exercendo 28 iuſtitiam & ius: p útque ſuæ.
præſtet Jehova Abrahamo id quod q promiſit p Heb. ad facien
ei. 20 Dixit ergo Jehova, 29 Clamor 30 Sedo- dum ut eveniat.

Nam agnovi eum, ut quum praeceperit filiis suis et familiae suae post se, etiam observent viam Jehovae exercendo iustitiam et ius: útque praestet Jehova Ahrahamo id quod promisit ei.

なぜなら、わたしは彼を認めたからだ。彼が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家族に（o ［へ］「家に」domui）命じるときに、彼らも、正義と法を実行することによって、エホバの道を守るために。また、エホバがアブラハムのために、彼に約束したことを果たすために（p ［へ］「それが起こるようにするために」ad faciendum ut eveniat）。

19節に対する注釈（26～28で示された箇所）は次のとおり。



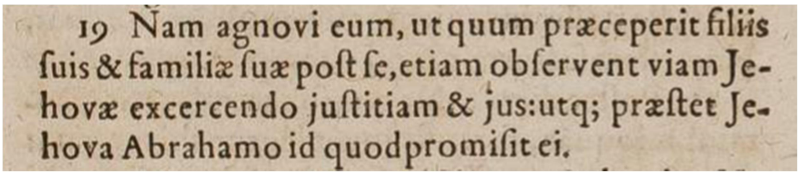
26 nimirum datis illis promissionibus haeredum et benedictionis aeternae, de quibus praecedente versu. Hunc versum, mutata antecedente explicatione, in hunc modum reddimus quam simplicissime. 27 id est, vivendi rationem, quam homini praescribit ut in ea ambulet: frequens metaphora. 28 quicquid Deus ab homine requirit, sive ad primam sive ad secundam tabulam pertineat.

26 は agnovi eum ...（「わたしは彼を認めた・・・」）についての注釈だが、「認めた」ことの意義には触れず、前節を踏まえてその内容 “datis illis promissionibus haeredum et benedictionis aeternae”（「子孫と永遠の祝福の約束が彼らに与えられた」）を説明している。これに続く部分 “Hunc versum, mutata antecedente explicatione, in hunc modum reddimus quam simplicissime”（「本節は先行部分から別様に解しうるが、われわれはこれを、このようにできるだけ単純に訳す」）は、的を射た解説とは思われない。トレメリウスの訳は、ヘブライ語原文の יְדַעְתִּיו のとり方においてパグニヌス訳と同様にすぐれている。だが、לְמַעַן אֲשֶׁר が目的節を導く一まとまりの接続語であることは理解していない。これらを切り離して אֲשֶׁר を「ときに」（when, cum, ὅτε）の意味にとったのだろうか。

12. ピスカートルの創世記注解（1601年）(1Ln)

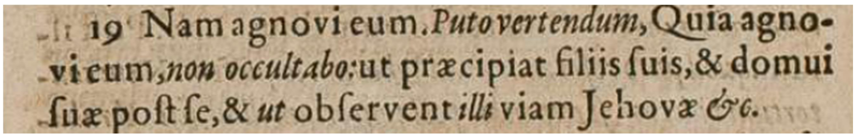
最後に、ドイツの改革派神学者ヨハネス・ピスカートル（Johannes Piscator／Johann Fischer 1546—1625）の注解書を見ておきたい。彼は、ストラスブールで生まれ、ノイシュタット・アン・デア・ハールトで約２年間教えた後、オラニエ公ウィレム一世（Willem I　1533—84）が設立したヘルボルンの学園（Academia Nassauensis）に来て、神学教授の職についた（4Ld, 291）。この学園でピスカートルは論理学、ヘブライ語、神学等を担当し、学生のためにヘブライ語文法の入門書を書いた（4Bt, 11f.）。やがて彼は多産の著述家として名声を博し、多くの学生がこの学園に集まった。

ピスカートルは聖書のドイツ語訳で知られるが（第５章§５参照）、旧新約聖書の注解書も数多く残している。五書の注解ではトレメリウス／ユーニウスのラテン語訳聖書を用いたが、かなりの改訂を施し、多くの注釈を付け加えた（4Lb, 52; 4Ld, 291）。ここに取り上げるのは、彼が聖書のドイツ語訳を出す直前に著したラテン語による創世記注解書である。その創世記18章19節の訳文は次のようになっている。


19 Nam agnovi eum, ut quum præceperit filiis
ſuis & familiæ ſuæ poſt ſe, etiam obſervent viam Je-
hovæ excercendo juſtitiam & jus:utq; præſtet Je-
hova Abrahamo id quodpromiſit ei.

Nam agnovi eum, ut quum praeceperit filiis suis & familiae suae post se, etiam observent viam Jehovae excercendo justitiam & jus: utque praestet Jehova Abrahamo id quod promisit ei.

これは前節で見たトレメリウス訳と同じである。しかし、彼の訳文を用いながらも、「注釈」（Scholia in Cap. XVIII）では彼独自の解釈を示している（本文と注釈の間にはさまれた概説と、章の末尾に置かれた「18章からの観察事項」Observatione ex Cap. XVVV に、翻訳についての説明はない）。


19 Nam agnovi eum.*Puto vertendum*, Quia agno-
vi eum, *non occultabo:* ut præcipiat filiis ſuis,& domui
ſuæ poſt ſe,& *ut* obſervent *illi* viam Jehovæ &c.

Nam agnovi eum. *Puto vertendum*, Quia agnovi eum, *non occultabo*: ut praecipiat filiis suis, & domui suae post se, & *ut* observent *illi* viam Jehovae et sic.

「なぜなら、わたしは彼を認めたからだ」。私の考えでは、「わたしは彼を認めたので、わたしは隠すまい。彼が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に命じ、そして彼らがエホバの道を守るために、等々」と変える方がよい。

これは、パグニヌスおよびカルヴァンの訳（Quia noui eum.）に近い。novi ではなく agnovi にしたのは、この点についてはトレメリウスの訳を尊重したからかもしれない（なお、ピスカートルはトレメリウスのagnovi という訳語を「認めている」という意味にとった可能性がある。この点については第5章§5を参照）。

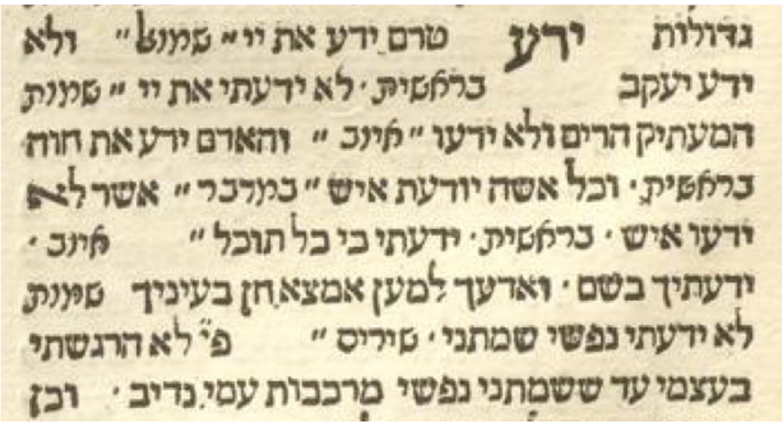
第４章　宗教改革期のヘブライ語辞書

旧約聖書を日常語に訳した宗教改革期の翻訳者たちは、現代人のように豊富な参考書をもってはいなかった。先人の訳業は別として、彼らは当時出版された数少ないヘブライ語の文法書や辞書を頼りにするしかなかった。15～16世紀に出版されたヘブライ語の辞書がいったいどういうものであったか、その一端を見ておこう（4Ho, 49—61）。この時代のキリスト教徒のすぐれたヘブライ語学者としては、エリアス・レヴィータ（Elias Levita／Eliyahu Bahur　1469—1549. ドイツ出身のユダヤ教のラビ）(3Ge, 45f.)、ヨハネス・ロイヒリン（Johannes Reuchlin　1455—1522）、コンラート・ペリカン（Konrad Pellican／Pellicanus　1478－1556.　1504年にヘブライ語小文法書を出版）(4Zb, 528)、セバスティアン・ミュンスター（Sebastian Münster　1488－1552）、ヨハン・フォルスター（Johann Forster　1496—1558）、パウル・ファーギウス（Paul Fagius　1504—49.　ドイツのヘブライ語学者）、マルコ・マリーニ（Marco Marini　1541—94.　イタリアのヘブライ語学者．1593年に大部のヘブライ語辞書を刊行）らがいた。彼らの著作をすべて取り上げる余裕はないので、特に名の知られた人物にしぼって見ていくことにしたい。参照する辞書項目は יָדַע（ヤーダァ）と מַעַן（マアン）ないし לְמַעַן（レマアン）の２つである。מַעַן は常に לְ（レ）と共に用いられ、前置詞として単独で使用されることも多いが、ここで注目したいのは接続語として用いられる לְמַעַן אֲשֶׁר（אֲשֶׁר を伴わないこともある）である。（ヘブライ語動詞 יָדַע の根字は完了態三人称男性単数形でもあり、これが辞書の見出し語にもなる。ラテン語で書かれた辞書に、不定法で語根の意味を説明するもの［～すること］と、三人称男性単数形の訳語を掲げるもの［彼は～した］があるのはこのためである。）

１．ダヴィド・キムヒの『語根の書』(1Dd)

キリスト教徒のヘブライ語学者たちの辞書へ進む前に、彼らすべてのヘブライ語研究の礎となったダヴィド・キムヒ（3Gd, 268ff.）の『語根の書』を見ておく必要がある。キムヒ一家はスペインから迫害を逃れてフランスに移住したユダヤ人ヘブライ語学者の家柄で、中でもラビ・ダヴィド・キムヒ（David Kimḥi　רבי דויד בן יוסף קמחי　c. 1160—1235）は最も有名で、ラダク（רד"ק）と通称された。ここに取り上げるのは、彼の『ミクロール』(ספר מכלול「完備した書」）の第二部をなす『語根の書』(ספר השרשים）で、内容的には聖書ヘブライ語の辞書である（注20)。初版は1480年以前（イタリア）だが、ここで参照するのは1491年の版である。1490年にもナポリの別の印刷業者が別の版（表紙図版参照）を出しているが、ロイヒリン（Johannes Reuchlin　1455—1522）が使用した（4Hf, 258n18）1491年のソンチーノ版を見ることにする。

語根 ידע の項目は前項目との改行なしに次のように始まる。母音記号はついておらず、語義の説明もない。聖書の用例が箇所（ラシ書体、書名のみ）と共に掲げられ、必要に応じて「解釈」(פֵּירוּשׁ＝פי״)が挿入されている（以下、聖書引用はＢＨＳの本文を使用)。


גדולות ירע טרם ידע את יי״ שמואל״ ולא
ידע יעקב ברא׳ לא ידעתי את יי״ שמות
המעתיק הרים ולא ידעו״ איוב״ והאדם ידע את חוה
ברא׳ וכל אשה יודעת איש״ במדבר״ אשר לא
ידעו איש ברא׳ ידעתי כי כל תוכל״ איוב
ידעתיך בשם ואדעך למען אמצא חן בעיניך שמות
לא ידעתי נפשי שמתני שיר״ פי׳ לא הרגשתי
בעצמי עד ששמתני נפשי מרכבות עמי נדיב וכן

טֶרֶם יָדַע אֶת יְיָ（サム上3：7「[サムエルは］まだ主を知らなかった」)、 וְלֹא־יָדַע יַעֲקֹב（創31：32「ヤコブは知らなかった」)、לֹא יָדַעְתִּי אֶת יְיָ（出5：2「わたしは主を知らない」)、הַמַּעְתִּיק הָרִים וְלֹא יָדָעוּ（ヨブ9：5「山々を移す方［に対して]、だが山々は知らない」)、וְהָאָדָם יָדַע אֶת חַוָּה（創4：1「そして、アダム［人？］はエバを知った」)。・・・

これに語根から派生した名詞——דֵּעָה, דֵּעַ（本来は不定詞), דַּעַת, מַדָּע——の用例が続き、次いでニファル、ヒトパエル、ヒフィル、ホファル、ピエルの用例、さらに מוֹדָע, מוֹדַעַת, יִדְּעֹנִי 等の用例が示される。ידע の項目は二段組で1頁以上にわたっている。

本書は標準的な辞書として何度も版を重ね、長く使用され続けた。時代が下ると、聖書本文に母音記号をつけるなど読みやすくした版が出されたが、この1491年版を使いこなすには相当の語学力と聖書への親しみが要求されたであろう。

一方 מַעַן の項目は次のようになっている。


מען למען אשר יביאו בני ישראל״ ויקרא״ למען
אנסנו שמות״ למעני ולמען דוד עבדי ישעי׳
לא למענכם אני עושה״ יחזקאל״ ענינם בעבור ופי׳ כי
עמך הסליחה למען תורא״ תלים״ לפי שידעו בני אדם
כי בידך כח העונש וידעו כי עמך הסליחה הנה אם
חטאו ישובו אליך ויראו ממך שלא יוסיפו לחטוא כדי
שלא תענישם ואם ישובו תסלח וכבר כתבתי פירוש
הפסוק בשרש ירא פי׳ אחר והלמד בלמען כמו בית
בעבור ולא יתכן לומר אותם מבלי הלמד ובבלי הבי׳
ויתכן לומר כי שרש למען ענה פי׳ כמו ענין שהוא
הסבה והעלה״ מער במעיה אשר בשדה

לְמַעַן אֲשֶׁר יָבִיאוּ בְּנֵי יִשְׂרָאֵל（レビ17：5「イスラエルの子らが持って来るために」)。לְמַעַן אֲנַסֶּנּוּ（出

16 : 4「わたしが彼［＝民］を試みるために」)。לְמַעֲנִי וּלְמַעַן דָּוִד עַבְדִּי（イザ37 : 35「わたし自身のため、またわが僕ダビデのために」)。לֹא לְמַעַנְכֶם אֲנִי עֹשֶׂה（エゼ36 : 22「わたしはあなたがたのために行うのではない」)。・・・

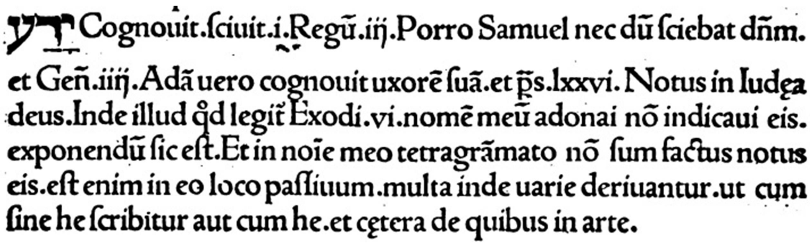
興味ぶかいのは、用例として真っ先に לְמַעַן אֲשֶׁר という複合形によるレビ記 17 章 5 節が挙げられていることである。キムヒはこれが最も分かりやすいと考えたのだろうか。ウルガータ訳（新共同訳も同様）はその冒頭を “ideo offerre debent sacerdoti filii Israhel hostias suas”（「それゆえ、イスラエルの子らは彼らのいけにえを祭司のもとに持ってこなければならない」）と訳している。ヒエロニムスは本節の לְמַעַן אֲשֶׁר を ideo （それゆえ）の意味に解したのだろうか。それとも、文脈上そう訳す方が分かりやすいと考えて意訳したのだろうか（目的を逆から見れば結果になる）。確信はもてないが、たぶん後者であろう。彼はレビ記 17 章 5 節の七十人訳本文 ὅπως ἀναφέρωσιν οἱ υἱοὶ Ισραηλ τὰς θυσίας αὐτῶν（「イスラエルの子らが彼らのいけにえを持ってくるために」）も見たうえで、あえてこのように訳したと推測される。というのもウルガータ訳は、לְמַעַן אֲשֶׁר で始まる申命記 20 章 18 節（לְמַעַן אֲשֶׁר לֹא־יְלַמְּדוּ אֶתְכֶם לַעֲשׂוֹת כְּכֹל תּוֹעֲבֹתָם）を “ne forte doceant vos facere cunctas abominationes”（「彼らがあなたがたに、すべての憎むべきことを行うよう教えることのないために」）と訳し、同 27 章 3 節（לְמַעַן אֲשֶׁר תָּבֹא אֶל־הָאָרֶץ אֲשֶׁר־יְהוָה אֱלֹהֶיךָ נֹתֵן לְךָ）を “ut introeas terram quam Dominus Deus tuus dabit tibi”（「あなたの神、主があなたに与えるであろう地に、あなたが入るために」）と、ヨシュア記 3 章 4 節（לְמַעַן אֲשֶׁר־תֵּדְעוּ אֶת־הַדֶּרֶךְ אֲשֶׁר תֵּלְכוּ־בָהּ）を “ut procul videre possitis et nosse per quam viam ingrediamini”（「どの道をあなたがたが進むべきかを、あなたがたが遠くから見て、知ることができるように」）と、そしてサムエル記下 13 章 5 節（לְמַעַן אֲשֶׁר אֶרְאֶה וְאָכַלְתִּי מִיָּדָהּ）を “ut det mihi cibum et faciat pulmentum ut comedam de manu eius”（「彼女が私に食べ物を与え、そして私が彼女の手から食べるように、彼女が副菜を作るために」）と、すべて目的の意味に解しているからである。

だがそうだとすれば、ヒエロニムスが創世記 18 章 19 節の לְמַעַן אֲשֶׁר を quod と訳したのはどういうわけだろうか。マソラとは異なるヘブライ語本文を見たのだろうか。それとも、同じ本文によったのだが、יְדַעְתִּיו を「彼を知った」と訳すと「神の全知」と調和しなくなることに気づいて、タルグムの訳者と同様「知っている」(scio）と訳した結果、לְמַעַן אֲשֶׁר 以下を「〜ために」と続けることが困難になった、ということだろうか。

２．ヨハネス・ロイヒリンのヘブライ語文法書兼辞書 (1Df)

ドイツの人文学者・ヘブライ語学者ロイヒリン（Johannes Reuchlin　1455—1522）については、日本語で読める伝記があるので、そちらも参照されたい（4Bh)。彼は1486年にカルマン（Calman）という名のユダヤ人からヘブライ語の手ほどきを受け（4Bh, 27)、その後1492年に、神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ３世（皇帝在位1452—93年）の侍医ヤコブ・ベン・イェヒエル（Jakob ben Jehiel Loans　1506年死去）の知己を得て、さらに深く学んだ (4Bh, 27; 4Gb, 26)。そして1506年に『ヘブライ語入門』(*Rudimenta linguae hebraicae*) を出版した (4Gb, 34)。これについて彼自身は自力で書いたことを強調したが (4Bf, 85, 94n32)、キムヒの『語根の書』等を参考にしたことは間違いない (4Bh, 31)。本書は３つの書から成り、

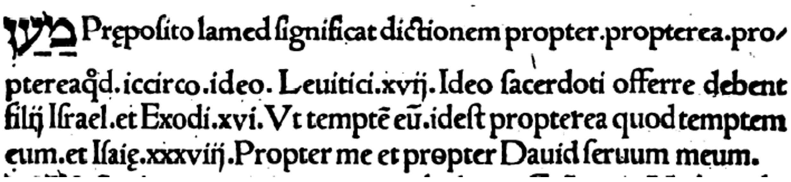
ヘブライ語入門書兼辞書として広く用いられた。第一の書（Liber primus）の最初の部分は、ヘブライ語の文字や発音等の基本的事項の説明に当てられ、長い辞書が後続する（ל まで）。辞書は第二の書の終わりまで続く。第三の書ではより高度な文法的事項が扱われる。キリスト教徒のヘブライ語学者によるヘブライ語文法書は以前から出版されていたが、ロイヒリンの本は内容が充実しているうえに、一冊で済むように構成されていた。ルター、メランヒトン、ツヴィングリ、そしてブツァーも、本書を入手してヘブライ語を学んだ（4Gh, 186; 4Bg, 283-85; 4Bf, 89）。יָדַע は次のように説明されている（210頁）。キムヒの辞書と比較すると、比べものにならないほど貧弱である。


יָדַע Cognouit.ſciuit.i.Regũ.iij.Porro Samuel nec dũ ſciebat dñm.
et Geñ.iiij.Adã uero cognouit uxorẽ ſuã.et p̃s.lxxvi.Notus in Iudęa
deus.Inde illud q̃d legit̃ Exodi.vi.nomẽ meũ adonai nõ indicaui eis.
exponendũ ſic eſt.Et in noĩe meo tetragrãmato nõ ſum factus notus
eis.eſt enim in eo loco paſſiuum.multa inde uarie deriuantur.ut cum
ſine he ſcribitur aut cum he.et cętera de quibus in arte.

cognouit（彼は知った／認識した）、sciuit（彼は知っていた／理解していた）という語義説明に続いて、יָדַע の用例が挙げられる（訳語の能動相完了形三人称単数は、ヘブライ語 יָדַע［カル完了形三人称男性単数］にほぼ対応する）。

サム上3 : 7（וּשְׁמוּאֵל טֶרֶם יָדַע אֶת־יְהוָה）Porro Samuel necdum sciebat dominum（「だがサムエルは、まだ主を知らなかった」）。創4 : 1（וְהָאָדָם יָדַע אֶת־חַוָּה אִשְׁתּוֹ）Adam uero cognouit uxorem suam（「アダムは確かに自分の妻を知った」）。詩76(75) : 2（נוֹדָע בִּיהוּדָה אֱלֹהִים）Notus in Iudaea deus（「ユダヤのうちで神は知られている」cf. LXX: Γνωστὸς ἐν τῇ Ἰουδαίᾳ ὁ θεός）。Inde illud quod legit（それゆえ、あれ［神の名？］はそれ［ユダヤ］が唱えたもの）。出6 : 3（וּשְׁמִי יְהוָה לֹא נוֹדַעְתִּי לָהֶם）nomen meum adonai non indicaui eis（「『主』というわたしの名を彼らに知らせなかった」）。（以下、これについての説明が続く。）

次に、מַעַן の項目は次のようになっている（291頁）。

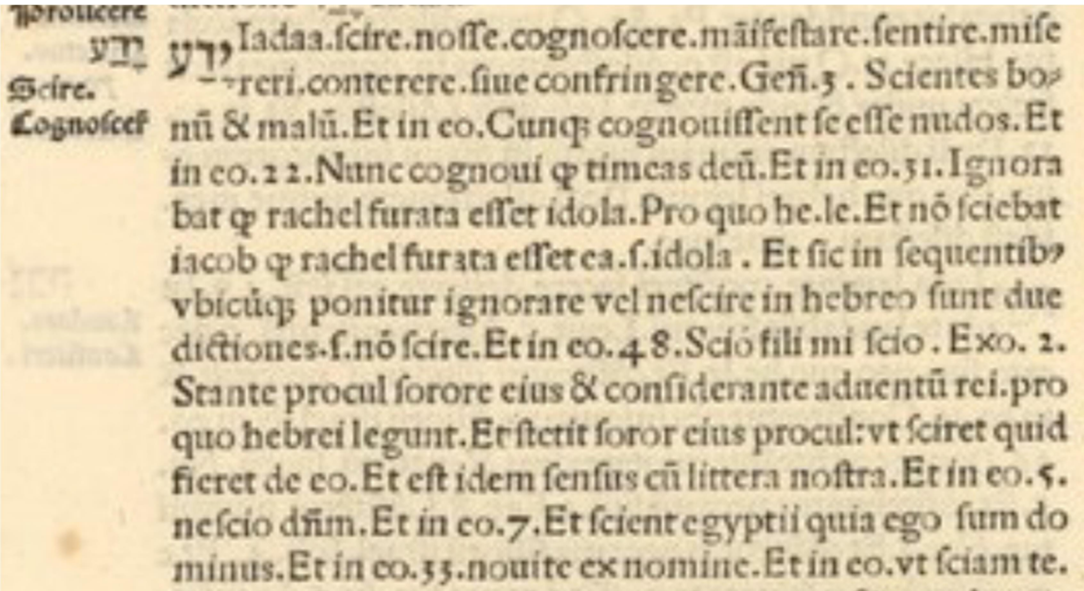

מַעַן Prępoſito lamed ſignificat dictionem propter.propterea.pro-
pterea q̃d.iccirco.ideo.Leuitici.xvij.Ideo ſacerdoti offerre debent
filij Iſrael.et Exodi.xvi.Vt temptẽ eũ.ideſt propterea quod temptem
eum.et Iſaię.xxxviij.Propter me et propter Dauid ſeruum meum.

ロイヒリンは、ラメド（ל）が前に置かれること、これが言い表わすのは propter（〜のために／の理由で）、propterea（そのため／その結果として）、propterea quod（〜であるから）、iccirco（それゆえ／そのために）、ideo（それゆえ／そのために）であることを説明し、次に聖書の用例を挙げている。すなわち、

レビ17：5（לְמַעַן אֲשֶׁר יָבִיאוּ בְּנֵי יִשְׂרָאֵל）Ideo sacerdoti offerre debent filij Israel（「それゆえ、祭司のもとにイスラエルの子らは彼らのいけにえを持ってこなければならない」）。出16：4（לְמַעַן אֲנַסֶּנּוּ）Vt temptem eum. idest propterea quod temptem eum（「わたしが彼［＝民］を試みるために」。つまり、彼を試みる理由があるのだから）。イザ37：35（לְמַעֲנִי וּלְמַעַן דָּוִד עַבְדִּי）Propter me et propter Dauid seruum meum（「わたし自身のため、またわが僕ダビデのために」）。これらの用例はキムヒの辞書にあるものばかりである。注目すべきことに、レビ記17章5節をロイヒリンはウルガータと同様に訳している。彼が見たヘブライ語はマソラ本文であるから、出16：4と同様、ut＋接続法による直訳を掲げたうえで、id est ... とウルガータ訳を続けていた方が使用者には有難かったであろう（次節も参照）。そうであれば聖書翻訳者たちは、創世記18章19節の יְדַעְתִּיו לְמַעַן אֲשֶׁר についても、より適切に訳すヒントを得られていたかもしれない。

３．アルフォンソ・デ・サモラのヘブライ語アラム語辞書（1Hh'）

これは、先に紹介したコンプルートゥム多言語聖書（1520年）の第六巻に含まれているもので、スペインのヘブライ語学者アルフォンソ・デ・サモラ（Alfonso／Alonso de Zamora　1474—1531［3Bd によれば c. 1474-1574］. サマランカ大学の初代ヘブライ語教授で、1526年にヘブライ語文法の入門書、1532年にはタルグムの解説書を出版）が執筆した（3Ge, 44, 46, 50f.）。彼はユダヤ教徒としてラビの教育を受けたが、のちにカトリックに改宗した人物である。יָדַע の項目は次のように始まり（左欄）、右欄を越えて次頁の左欄の下方まで続いている。ここに示したのはその冒頭であり、全体のほんの一部である。

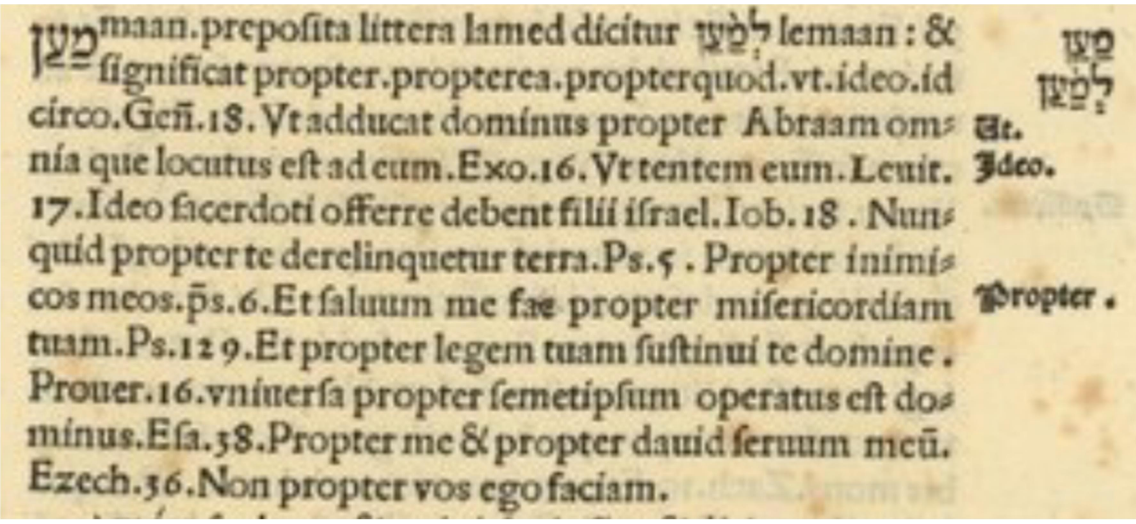

Proiicere
יָדַע
Scire.
Cognoscer

ידע Iadaa.scire.nosse.cognoscere.mãifestare.sentire.miserere.conterere.siue confringere.Geñ.3. Scientes bonũ & malũ.Et in eo.Cunq; cognouissent se esse nudos.Et in eo.22.Nunc cognoui q timeas deũ.Et in eo.31.Ignorabat q rachel furata esset idola.Pro quo he.le.Et nõ sciebat iacob q rachel furata esset ea.s.idola. Et sic in sequentib9 vbicũq; ponitur ignorare vel nescire in hebreo sunt due dictiones.s.nõ scire.Et in eo.48.Sció fili mi scio. Exo. 2. Stante procul sorore eius & considerante aduentũ rei.pro quo hebrei legunt.Et stetit soror eius procul:vt sciret quid fieret de eo.Et est idem sensus cũ littera nostra.Et in eo.5. nescio dñm.Et in eo.7.Et scient egyptii quia ego sum dominus.Et in eo.33.nouite ex nomine.Et in eo.vt sciam te.

本書は欄外に見出し語をラテン語で示しているので、使いやすかったであろう。記述は非常に詳しく、二段組で１頁以上に及ぶ。訳語の候補を多く掲げ、語根から派生した名詞等も詳しく取り上げ、用例も実に豊富である。scire（知っていること／理解していること）、nosse（知るようになったこと／認識したこと）、cognoscere（知ること／認識すること）、manifestare（明らかにすること／明示すること）、sentire

（知覚すること／気づくこと）、misereri（同情すること／あわれむこと）、conterere（<contero すりつぶすこと／なぶること）ないし confringere（打ち砕くこと／亡ぼすこと）。最後の２つは、創世記19章5節（וְנֵדְעָה אֹתָם）を念頭に置いた訳語であろう。用例としては、最初に創世記が取り上げられ、この動詞の出てくる同書のさまざまな箇所が参照される。創3章（22節 לָדַעַת טוֹב וָרָע）Scientes bonum et malum（「〔彼らは〕善と悪を知って」）。同章（7節 וַיֵּדְעוּ כִּי עֵירֻמִּם הֵם）cunque cognouissent se esse nudos（「そして、彼らが自分たちは裸だと知ったとき」）。同書22章（12節 עַתָּה יָדַעְתִּי כִּי־יְרֵא אֱלֹהִים אַתָּה）Nunc cognoui quod timeas deum（「今わたしは、あなたが神を畏れることを知った）。同書31章（32節 וְלֹא־יָדַע יַעֲקֹב כִּי רָחֵל גְּנָבָתַם）Ignorabat quod rachel furata esset idola（「彼はラケルが偶像を盗んでいたことを知らなかった」）。Pro quo he. le.[= haec legitur?]（別の読み方）．Et non sciebat iacob quod rachel furata esset ea[dem] s[ua] idola（「そしてヤコブは、ラケルが彼の偶像を盗んでいたことを知らなかった」。Et sic in sequentibus vbicumque ponitur ignorare vel nescire in hebreo sunt due dictiones. s. non scrire. サモラはここで、ヘブライ語では「知らないこと」は一語（ignorare, nescire）ではなく、二語（non scrire）で言い表わすことに注意を促している。残念ながら、創世記18章19節への言及はない。

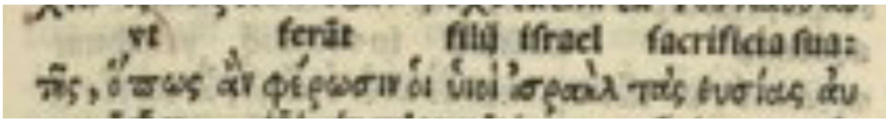
一方、מַעַן の説明は短く、次のようになっている。


מַעַן maan.preposita littera lamed dicitur לְמַעַן lemaan : & significat propter.propterea.propterquod.vt.ideo.idcirco.Gen̄.18. Vt adducat dominus propter Abraam omnia que locutus est ad eum.Exo.16.Vt tentem eum.Leuit.17.Ideo sacerdoti offerre debent filii israel.Iob.18. Nunquid propter te derelinquetur terra.Ps.5. Propter inimicos meos.p̄s.6.Et saluum me fac propter misericordiam tuam.Ps.129.Et propter legem tuam sustinui te domine. Prouer.16.vniuersa propter semetipsum operatus est dominus.Esa.38.Propter me & propter dauid seruum meū. Ezech.36.Non propter vos ego faciam.

מַעַן
לְמַעַן
Vt.
Ideo.
Propter.

ラメドの文字（ל）が前に置かれることをまず説明してから、その意味ないし訳語として、propter（～のために／の理由で）、propterea（そのため／その結果として）、propterquod（そのために）、vt（～ように／～するために／～なので／その結果として）、ideo（それゆえ／そのために）、idcirco（それゆえ／そのために）を挙げている。用例の第一に創世記18章19節の後半部分を掲げ、そのラテン語訳を示している（Vt adducat dominus propter Abraam omnia que locutus est ad eum.）。これは、ウルガータ訳およびコンプルートゥム多言語聖書の第一巻に含まれる訳と同じである。しかし、本節冒頭の（より難しい）לְמַעַן אֲשֶׁר については沈黙している。一方、それと同じ語句で始まるレビ17:5（לְמַעַן אֲשֶׁר יָבִיאוּ בְּנֵי יִשְׂרָאֵל）は、Ideo sacerdoti offerre debent filii israel と、ウルガータおよびロイヒリンの辞書と同じに訳している。これについては一つ奇妙な点がある。コンプルートゥム多言語聖書の七十人訳は本節を ὅπως ἂν

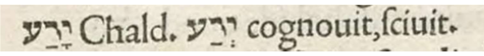
φέρωσιν οἱ υἱοὶ Ἰσραὴλ τὰς θυσίας αὐτῶν（「イスラエルの子らが彼らのいけにえを持ってくるために」）とヘブライ語を正確に訳し、それに施されたラテン語行間訳（下図参照）も vt ferant filii israel sacrificia sua と、ギリシア語を正確に訳している。それなのに、この辞書の著者はこれを棄ててウルガータ訳を採用した。こちらの方が正確だと考えたのだろうか。それとも、第一巻は担当外なので詳しく見なかったのだろうか。


vt ferãt filij israel sacrificia sua:
τῆς, ὅπως ἂν φέρωσιν οἱ υἱοὶ ἰσραὴλ τὰς θυσίας αὐ

４．ミュンスターのヘブライ語アラム語辞書 (1Dg, 1Dh)

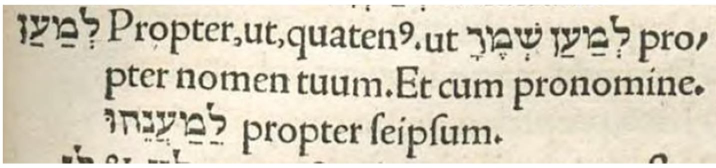
セバスティアン・ミュンスターはラテン語によるヘブライ語の文法書と、ヘブライ語アラム語の辞書を、それぞれ複数刊行した（ラテン語訳聖書の出版よりも前）。ここでは、彼の最初のヘブライ語アラム語辞典（1523年）と、同第三版（1535年増補改訂版）を見ることにしたい（これらの評価については 4Ho, 57 を参照）。

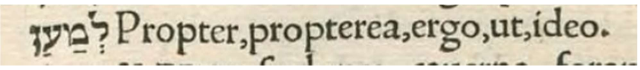
1523年の辞書（1Dg） “Dictionarivm Hebraicvm, nunc primum æditum & typis excusum”（「この度初めて作成・印刷されたヘブライ語辞典」）にはヘブライ語の表題（ערוך השורשות 「語根を順序正しく配列した」）がついている。内容は簡潔で、יָדַע の説明はただ１行で済まされている（167頁）。


יָדַע Chald. יְדַע cognouit,ſciuit.

この訳語はロイヒリンの辞書と同じである（前記参照）。

一方、מַעַן（見出し語は לְמַעַן）についてはやや詳しく説明している（222、245頁）。


לְמַעַן Propter,ut,quaten9.ut לְמַעַן שְׁמֶךָ pro pter nomen tuum.Et cum pronomine.
לְמַעֲנֵהוּ propter ſeipſum.


לְמַעַן Propter,propterea,ergo,ut,ideo.

propter（～のために／の理由で）のほか、ut（～ように／～するために／～なので／その結果として）、quatenus（～の限り／～であるから．～ように／～するために）、propterea（そのため／その結果として）、ergo（従って／それゆえ）、ideo（それゆえ／そのために）という訳語を挙げている。ut と訳せる用例として、詩25(24)：11 לְמַעַן־שִׁמְךָ が propter nomen tuum（「あなたの名のために」）という訳（ウルガータと同じ）と共に掲げられている。また、מַעַן が代名詞と共に用いられる用例として（מַעֲנֶה は מַעַן と

同根の名詞、あるいは מַעֲנֶה の短縮形が מַעַן)、箴16：4 לַמַּעֲנֵהוּ を propter seipsum（御自身のために／それ自身のために）という訳と共に示している（ウルガータ訳は propter semet ipsum）。

1535年の第三版（1Dh. これ以後も版を重ねた）は、“ex Rabinis, praesertim ex Radicibus Dauid Kimhi”（「ラビたちに従って、とりわけダヴィド・キムヒの語根によって」）という記述から分かるように、キムヒの『語根の書』（סֵפֶר הַשָּׁרָשִׁים）に基づきながら、語根を派生形と共に（עִם נִגְזָרִים）手際よく説明したものであり、少ないながら用例も載せている。

ידע Cognouit, ſciuit. Inde uerbũ hiphil הודיע notũ fecit, oſtendit, fecit ſcire: Pſal. 98. Hinc nomen דֵּעָה Et in conſtruct. דַּעַת ſcientia, notitia. Inuenitur tamẽ ſic ſæpius in ſtatu abſoluto. Idem מַדָּע 2. Par. 1. & Chaldaice מַנְדַּע Dan. 5. Plur. דֵּעוֹת 1 Regum 2. מודע

cognouit（彼は知った／認識した）、sciuit（彼は知っていた／理解していた）。そこで、ヒフィル形は הוֹדִיעַ となる。notum fecit（彼は知らせた）、ostendit（彼は示した／明らかにした）、fecit scire（彼は知らしめた）。詩98(97) : 2〔הוֹדִיעַ יְהוָה יְשׁוּעָתוֹ notum fecit Dominus salutare suum 「主は御自身の救いを知らせた」〕。ここから、名詞 דֵּעָה および連語形による דַּעַת scientia, notitia（知識／知ること／知っていること／知るにいたること）〔が派生する〕。・・・

訳語の候補は初版と同じである。この説明は、（ルターやカルヴァンに）創世記18章19節翻訳の直接のヒントを与えてくれなかったであろう。

מַעַן については、小項目の扱いで次のように説明している。

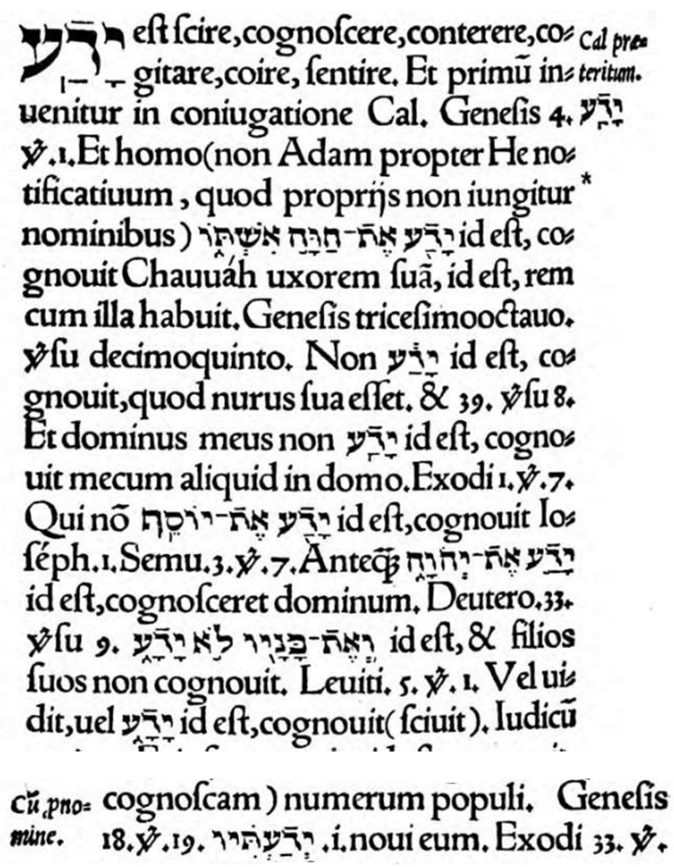
alioquin. לְמַעַן propter, ob, pro, quatenus: & recipit pronomina affixa: ut לְמַעֲנִי propter me. 4 Reg. 19.

訳語としては、propter（～のために／の理由で）と quatenus（～の限り／であるから．～ように／～するために）に、ob（～のために／～の目的で）と pro（～のために／～のように）が追加されている。だが、初版の訳語 ut（～ように／～ために）が消えているのはどういうわけだろうか。

５．パグニヌスのヘブライ語辞書（1Di）

タイトル頁にあるように、本書の書名はヘブライ語 אוֹצַר לְשׁוֹן הַקֹּדֶשׁ とラテン語 Thesavrvs lingvae sanctae の両方で記されている（どちらも「神聖な言語の宝庫」の意）。1529年に出たこの辞書は、当時

としては群を抜く内容であった（1523年には、ラビ文献のヘブライ語・アラム語辞典も出している）（注21）。ティンダルも本書を利用したらしい（第７章§１～２）。יָדַע の項目は下図のように始まる（793頁以下）。意味と訳語の候補として scire（知っていること／理解していること）、cognoscere（知ること／認識すること）、conterere（すりつぶすこと／なぶること）、cogitare（考えること／思いめぐらすこと）、coire（一緒になること／性関係をもつこと）、sentire（知覚すること／気づくこと）が挙げられ（アルフォンソ・デ・サモラの辞書との共通点が多い）、聖書にこの語が最初にカル話態で現れる創世記4章1節を、ヘブライ語を引用しながら説明している。יָדַע אֶת־חַוָּה אִשְׁתּוֹ [הָאָדָם] Et homo cognouit Chauuah uxorem suam, id est, rem cum illa habuit.（「そして人は彼の妻エバを知った。つまり、彼女と性交した」）。אָדָם についた定冠詞は特定の名詞と結びついていないことを示しているので、アダムではなく「人」を意味するという説明だが、この点は現在でも解釈が分かれている。説明は、יָדַע、יָדַעְתָּ、יָדַעְתִּי、יָדְעוּ ... と、活用形ごとにヘブライ語の用例を挙げる形で進む。非常に詳しく、（二段組で）793頁から807頁まで続いている。必要に応じてラビたちの解釈も紹介している。創世記18章19節については、יְדַעְתִּיו だけを取り上げて noui eum（「わたしは彼を知った」）と訳している（794頁）。これは、宗教改革期の他の辞書にはない、適切かつ重要な記述である。

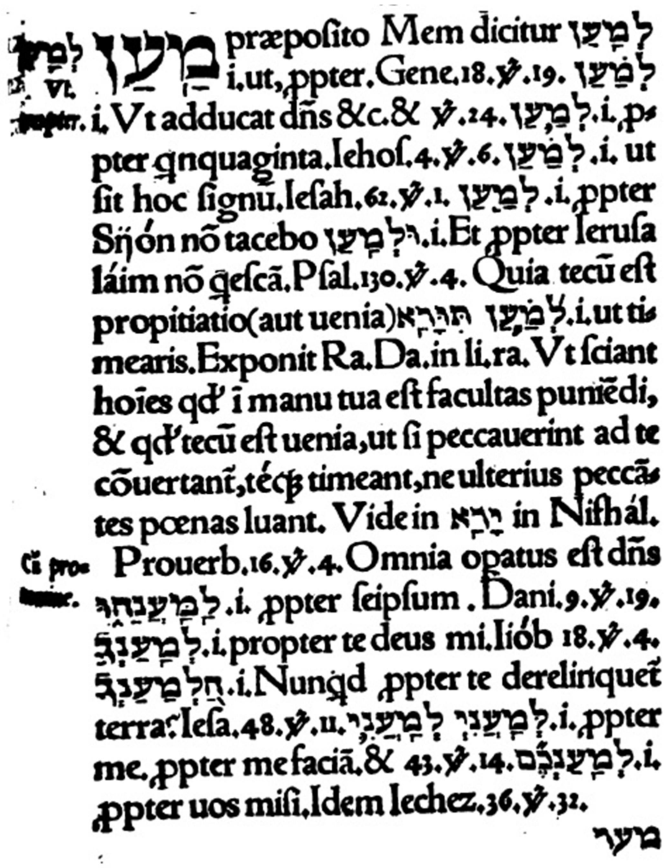

ידע est scire, cognoscere, conterere, co- gitare, coire, sentire. Et primũ in- uenitur in coniugatione Cal. Genesis 4. ידע v.1. Et homo (non Adam propter He no- tificatiuum, quod proprijs non iungitur * nominibus) ידע את־חוה אשתו id est, co- gnouit Chauuáh uxorem suã, id est, rem cum illa habuit. Genesis tricesimooctauo. vsu decimoquinto. Non ידע id est, co- gnouit, quod nurus sua esset. & 39. vsu 8. Et dominus meus non ידע id est, cogno- uit mecum aliquid in domo. Exodi 1. v.7. Qui nõ ידע את־יוסף id est, cognouit Io- séph. 1. Semu. 3. v.7. Anteq̃ ידע את־יהוה id est, cognosceret dominum. Deutero. 33. vsu 9. ואת־בניו לא ידע id est, & filios suos non cognouit. Leuiti. 5. v.1. Vel ui- dit, uel ידע id est, cognouit (sciuit). Iudicũ

Cal preteritum.

cognoscam) numerum populi. Genesis 18. v.19. ידעתיו .i. noui eum. Exodi 33. v.

Cũ pno- mine.

一方、מַעַן についての説明は次のとおりである（1256頁）。


לְמַעַן Vt. propter. מַעַן præpoſito Mem dicitur לְמַעַן
לְמַעַן i.ut, ꝓpter. Gene.18.℣.19.
i. Vt adducat dñs &c.& ℣.24. לְמַעַן.i.ꝓ
pter qnquaginta. Iehoſ.4.℣.6. לְמַעַן.i. ut
ſit hoc ſignū. Ieſah.62.℣.1. לְמַעַן.i.ꝓpter
Sijón nō tacebo וּלְמַעַן.i.Et ꝓpter Ieruſa
láim nō qeſcā. Pſal.130.℣.4. Quia tecū eſt
propitiatio(aut uenia) לְמַעַן תִּוָּרֵא.i.ut ti-
mearis. Exponit Ra.Da.in li.ra. Vt ſciant
hoīes qđ ī manu tua eſt facultas puniēdi,
& qđ tecū eſt uenia,ut ſi peccauerint ad te
cōuertanī,tēcꝙ timeant,ne ulterius peccā-
tes pœnas luant. Vide in יָרֵא in Niſhál.
Cū pro- Prouerb.16.℣.4. Omnia opatus eſt dñs
nomine. לַמַּעֲנֵהוּ.i. ꝓpter ſeipſum. Dani.9.℣.19.
לְמַעַנְךָ.i.propter te deus mi. Iiób 18.℣.4.
הַלְמַעַנְךָ.i.Nunqd ꝓpter te derelinquet
terra? Ieſa.48.℣.11. לְמַעֲנִי לְמַעֲנִי.i.ꝓpter
me,ꝓpter me faciā.& 43.℣.14. לְמַעַנְכֶם.i.
ꝓpter uos miſi. Idem Iechez.36.℣.32.
מַעַר

לְמַעַן の訳語として ut（～ように／～するために／～なので／その結果として）と propter（～のために／の理由で）を挙げている。アルフォンソ・デ・サモラの辞書と同じく、用例としてまず創世記18章19節の後半部を訳（Vt adducat dominus ... ウルガータと同じ）と共に示している。残念ながら、לְמַעַן אֲשֶׁר を含む箇所（たとえば、レビ17：5）は取り上げていない。彼のラテン語訳（1Ld）も参照。

なお、前述したように、アントワープ多言語聖書の第六巻（*Thesavri Hebraicæ lingvæ, olim a Sante Pagnino Lvcensi conscripti, epitome. cui accessit Grammatices libellvs ex optimis qvibvsqve grammaticis collectvs.* Antverpiæ: Excudebat Christophorus Plantinus Prototypographus Regius, M. D. LXXII）には、パグニヌスのヘブライ語辞書のアブリッジ版が収録されている。非常に簡略化されているが、一応示しておく（pp. 37f., 60）。

ידע Scire, Cognoſcere, ſentire: *Gen.38,15. Item* Coire, *vel* rē habere: *4,1.* [Cōterere, *vt Iſa.53,3. et Eze.19,7. licet quidā priorē ſignificationem retineant.*] *Alacer trifariā inuenitur* ידע *et* דעה דעה*.* In Niphal: נודע D *Deut.*

Deut. 21, 1. & Exod.6, 2. & 3. vbi ב *ſubintelligitur in* ושמי*.* [Cōteri: *Pſal. 74,5. & ſecundum quoſdam Prouer.10, 9.*] ידע & הוריע *in Piel & Hiphil:* Cognoſcere fecit. מידעי Not⁹ meus: *Pſalm.55,14.* [Conterere : *vt Iudic. 8,16.* וידע.] יודעתי *1.Samu.21,2.* Scire feci: *ponitur pro* הודעתי, *vel erit ex coniugat. Poel inſtar* שופטתי. *Eſt & futur. Hiphil* יודע Cognoſcet: *Pſal.138,7.*

מען *Vnde* למען Vt, propter: *Geneſ 18, 19. Recipit affixa, vt Prou.16,4.* למענהו Propter ſeipſum. למענך Propter te: *Dan.9,19. & ſic de cæteris.*

6．ヨハン・フォルスターのヘブライ語辞書（1Dj）

ヨハン・フォルスター（Johann Forster／Förster．Ioannes Forsterus とも．c. 1495—1558）はアウクスブルク出身のヘブライ語学者で、強固なルター主義者として知られた人物である。インゴルシュタットの大学でロイヒリンについて学び、後にテュービンゲン大学とヴィッテンベルク大学でヘブライ語の教授を務めた（4Ho, 55）。1557年に出版されたこの辞書（64年に再版）は、題名にもあるように、「ラビたちやわれわれの国の教師たち（教会教父？）の注解」に縛られない新しい辞書であることをうたっている（4Ho, 55; 4Hl, 97; 4Ec, 59f. cf. 4Gh, 182; 3Ge, 46f.）。方法論的な批判はあるが、説明は詳しく、用例に即して語義を概念的に掘り下げている。יָדַע の項目は次のように始まり、４頁にわたって続く（316—19頁）。ここに示すのはその最初の部分（中略）である。

ידע Primo,& principaliter eſt mẽtis & intellectus.Sciuit,nouit, cognouit,diſcendo apprehendit.Congruit aũt ſignificatione cũ uerbis יָעַץ & יָעַד ea enim quæ ſcimus,etiã conſtituimus & cõſulimus alijs.Gen.31.Iacob non ſciuit,ꝙ Rachel ea furata eſſet.1.Sam.3.Antequã cognouit ipſum Iehoua.Leu.5.Teſtis ipſe fuerit,aut uiderit,aut cognouerit.Gen.30.Tu noſti ſeruitutẽ meã.cap.20.Scito ꝙ moriẽdo morieris.1.Reg.10.Scito & time.Prouer.3.In omnibus uijs tuis cognoſce ipſum.Et in Imperatiuo præpoſitũ uerbo ראה ſignificat aduertere,tẽtare.1.Sam.24.Cognoſce, uide.& cap.25.Cognoſce & uide.2.Reg.5.Tantum cognoſcite obſecro,& uidete, quãquam etiam inuerſum legatur,& plus tum ſignificet,quam uerbũ ראה 1.Sam.23.Et uidete,& cognoſcite.Sequuntur nunc exempla reliquorum modorũ,& temporum.Gen.15.In quo cognoſcam ꝙ poſſeſſurus ſum illam.Iob 23.Sciam dicta.Ieſaiæ 7.Quia anteꝙ̃ ſciat puer reprobare malum.Ezech.19.Ipſe cognoſcebat uiduas eius,quæ.ſ.ſine præſidio,& prædæ obnoxiæ erant.1.Sam.20. Sciendo ſciuit pa-

Secundo,ſumitur aliquando non ſpeculatiue,ut eſt mẽtis,ſed realiter & ſenſualiter,pro ſentire tactu,experiri.Geneſ.19.Et non cognouit cum concumberet illa,& cũ ſurgeret,id eſt,non ſenſit.cap.22.Nunc cognoui,ꝙ timeas Iehoua,id eſt,

第一に（Primo）、知性・思考（mens）や理解（intellectus）にかかわる意味が主であり、sciuit（彼は知っていた／理解していた）、nouit（彼は知るようになった／認識した）、cognouit（彼は知った／認識した）、discendo apprehendit（彼は学ぶことによって把握した）を意味する。さらに、意味的に יָעַץ（忠告／助言する）および יָעַד（指定／選定する）と結びつき、たとえば、われわれが知っていることを、再び承認し、他人を助けることを言う。創31（v. 32）Iacob non sciuit, quod Rahel ea furata esset（「ラケルがそれらを盗んでいたことを、ヤコブは知らなかった」）．サム上3（v. 7）Antequam cognouit ipsum Iehoua.（それ以前に、エホバは彼〔サムエル〕を知った。これは “porro Samuhel necdum sciebat Dominum”「だがサムエルは、まだ主を知らなかった」の注釈であろう）。・・・第二に（Secundo）、時には思弁的に知性・思考の事柄としてではなく、実際的また感覚的に、触れて気づくこと・体験することとして（realiter et sensualiter, pro sentire tactu, experiri）受けとられる、としている。説明は非常に詳しく、316頁から319頁まで続いている。動詞の各活用形（יֹודֵעַ, יֹודְעֵי, נֹודַע 等）の用例も詳しい。最後の部分で、語根 ידע から派生した一連の名詞（דֵּעַ, דֵּעָה 等々）の用例を聖書の箇所を示しながら説明している。しかし、創世記18章19節についての説明はない。

לְמַעַן については、מַעַן ではなくその語根 עָנָה（虐げられる）の下位項目（フォルスターはそうとる）として、次のように説明している。

מען Preposita litera lamed לְמַעַן require in עָנָה.

לְמַעַן Vt,propter,propterea quòd,quia,eò quòd. Psal.51. Tibi soli, tibi peccatū meum, & malum coram te feci ut iustus sis in uerbo tuo.Psal.130.Quia apud te est propiciatio,ut timearis.Iosue 4.Vt sit hoc signum.Genesis 18.Vt adducat Iehoua super Abraham omne quod loquutus est.Et mox iterum: Propter quinquaginta. Iesa. 61.Propter Zion non tacebo,& propter Ierusalem non quiescam.Et quando uerbo infinitiui præponitur,tum ualet perinde ut lamed litera gerundiua. Ezech.39. Sepelient eos domus Israel ad repurgandum terram.Ioelis 3.Et filios Iehuda,& filios Ierusalem uendidistis filijs Græcorum ad elongandum eos de terminis suis. In statu affixorum manet inuariatum.Prouerbio.16.Omnia operatur Iehoua propter seipsum.Iesaiæ 43.Propter uos misi in Babylonem.Daniel.9.Propter te deus mi.Iesa.48.Propter me faciam, propter me faciam.

vt（～ように／～するために／～なので／その結果として）、propter（～のために／の理由で）、propterea quod（～であるから）、quia（というのは／～であるから）、eo quod（～ので／～であるから）。創世記18章19節の後半部をラテン語訳と共に用例に挙げた点はアルフォンソ・デ・サモラやパグニヌスと同じだが、訳はやや異なる（“Vt adducat Iehoua super Abraham omne quod loquutus est”）。他の用例（詩51：6、130：4、ヨシュ4：6、イザ61[sic]：1、エゼ39：12、ヨエ3(4)：6、箴16：4、イザ43：14、ダニ9：19、イザ48：11）はどれも לְמַעַן を単独で使用したものであり、לְמַעַן אֲשֶׁר の用例はない。この辞書は非常に詳しいが、創世記18章19節の翻訳や見直しには直接役立たなかったであろう。

７．ヨハン・ブクストルフのヘブライ語アラム語辞書 (1Dk, 1Dk’)

最後に、時代はやや下るが、ヨハン・ブクストルフ（Johann／Johannes Buxtorf　1564-1629）の辞書を見ておくことにしたい。ブクストルフ家は多くのセム語学者を出したキリスト教ユダヤ人の家系として知られる。このブクストルフは、同性同名の彼の息子および甥と区別して、大ブクストルフとよばれる。彼は1585年にヘルボルンの学園に来て３年間学んだ。1585年の講義は、詩編等をヘブライ語で講じ、組織神学をカルヴァンの『キリスト教綱要』に基づいて教えるものであった（4Bt, 10）。彼が神学を学んだのは、カスパル・オレヴィアーヌス（Caspar Olevianus／Olevian　1536—87. ハイデルベルク信仰問答の作者の一人）とピスカートル（第３章§12参照）からであった。ブクストルフは1618—19年にマソラ本文を正確に校訂したラビ聖書の新版をバーゼルで刊行したことでも知られているが（*Biblia sacra Hebraica & Chaldaica cum Masora, quae critica Hebraeorum sacra est, magna & parva: ac selectissimis Hebraeorum interpretum commentariis, Rabbi Salomonis Jarchi, R. Abrahami Aben Esrae, R. Davidis Kimchi, R. Levi Gerson, R. Saadie Gaon, R. Jeschajae.* Basileae: Ludovici König, 1619-20）、ここに取り上げるのは彼のヘブライ語アラム語辞書（1607年）（1Dk）である（注22）。יָדַע の項目は６頁に及ぶ（340～45頁）。カル話態から始めて他の話態に進み、さらに同語根の名詞等も網羅しながら詳しく説明している（アラム語 יְדַע も同項目）。

ידע In Kal Scivit, Rescivit, Novit, Agnovit, Cognovit, Recognovit, Pernovit: Expertus est, Animadvertit, Percepit. Propriè mentis est & intellectus, quandoq; etiã sensus, & tum est Experiri, ut quando de concubitu dicitur: Prat. יָדַע אֶת־חַוָּה אִשְׁתּוֹ Cognovit Evam uxorem suam, Gen.4.1, nempe concubitu maritali, quòd sic decorè & honestè effertur: יָדַעְתִּי אֶת־יִצְרוֹ Novi figmentũ ejus, Deut.31. v.21,

語義として、Scivit（彼は知っていた／理解していた）、Rescivit（彼は知った／発見した／確かめた）、Novit（彼は知るようになった／認識した）、Agnovit（彼は認識した／気づいた／認めた）、Cognovit（彼は知った／認識した）、Recognovit（彼は再認した／思い出した）、Pernovit（彼は十分に知っていた／精通していた）つまり Expertus est（体験済である）、Animadvertit（彼は心を向けた／注意した／調べた）、Percepit（彼は把握した／気づいた）を挙げたうえで、「元来、知性・思考（mens）や理解（intellectus）の事柄だが、ときにはまた感覚と関連し、さらにまた、性交について言うときのように、体験することを意味する」と説明している（フォルスターの辞書と比較）。用例はたいへん豊富で、ヘブライ語（アラム語）を章節番号と共に引用し、ラテン語訳を添え、必要に応じて説明を加えている。創世記18章19節は取り上げていない。

לְמַעַן の項目は次のとおり（480～81頁）。

מען Unde לְמַעַן Propter: Verbo Infinitivo & Futuro jungitur & tum resolvitur in finalem Conjunctionem Ut: לְמַעַן הָבִיא Propter adducere, Ut adducat, Gen.18.19: לְמַעַן תִּוָּרֵא Ut timearis, reverenter colaris, Psal.130.4: לְמַעַן לָמוּג לֵב Propter diffluere cor, Ut diffluat animus, Ezech.21.15, Pleonasmus: nam aliâs simplici Infinitivo præmittitur & idem valet quod ל Infin. præfixum: לְמַעַן אֲשֶׁר יְצַוֶּה Propterea quod præcepturus est, Gen.18.19: Aff. לְמַעַנְךָ Propter te, לְמַעֲנִי Propter me &c. Sunt qui ad עָנָה pertinere putant: notat enim Responsionem

どこでも לְמַעַן の形で用いること、Propter（～のために／の理由で）の意味であること、不定詞や未来形と結合されること、そのさい目的節では ut（～ように／～するために／～なので／その結果として）

と訳せばよいことを説明している。用例としては、創世記18章19節を繰り返し取り上げているのが印象的である。לְמַעַן הָבִיא Propter adducere（「もたらすことのために」、Ut adducat「彼がもたらすために」）。לְמַעַן אֲשֶׁר יְצַוֶּה Propterea quod praecepturus est（「彼は命じるであろうから」）。後者の לְמַעַן אֲשֶׁר をブクストルフは目的ではなく、理由の意味にとっている。この解釈は、パグニヌスの訳をアリアス・モンタヌスが修正した訳文とほぼ同じである（第3章§10参照）。（エゼ21：15は21：20の誤り）。

第５章　日常語訳における創世記 18 章 19 節――（１）ドイツ語訳

次に、宗教改革期ないし近世に翻訳・出版されたドイツ語訳、フランス語訳、英語訳において創世記18章19節がどのように訳されているかを検討する。本章では、ルターのドイツ語訳、改革派のチューリヒ聖書、カトリックによるドイツ語訳、そしてピスカートルのドイツ語訳を順に見ていく。（ルター以前のドイツ語訳聖書については 4Ga, 342-4, 351ff.; 4Gm, 189-91を参照）。

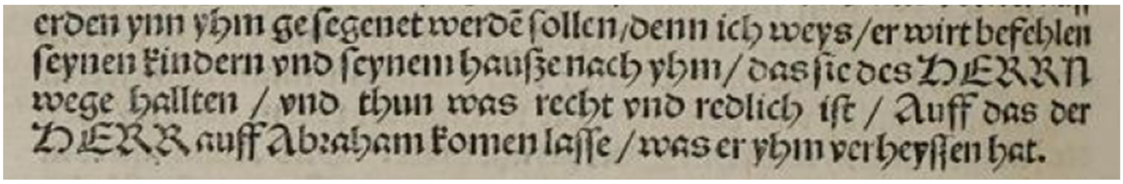
１．ルターのドイツ語訳

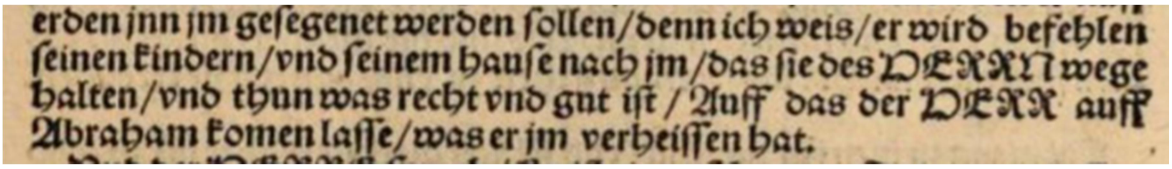
マルティン・ルター（Martin Luther　1483―1546）の生涯と思想については、日本語で読める著書が多数出ているので省略する。彼の聖書翻訳は一挙に成し遂げられたわけではない。1522年9月にギリシア語原典から史上初めて訳したとされる「九月聖書」（新約聖書ドイツ語訳）（4Gl, 11章）を出した後（注23）、1523年にはモーセ五書（Das Allte Testament deutsch. M. Luther）、1524年にヨシュア記からエステル記までの歴史書（Das Ander teyl des alten testaments）、同じく1524年にヨブ記、詩編、箴言、コヘレトの言葉、および雅歌（Das Dritte teyl des allten Testaments）を出版したが（この時点でパグニヌスとミュンスターのラテン語訳はまだ未完）、預言書全部の翻訳が出たのは1532年のことである（Die Propheten alle Deutsch. D. Mart. Luth.）（4Gl, 12-13章; 4Gm, 191-93）。だがルターのヘブライ語研究は、聖書翻訳のはるか前に溯る。すなわち、1509年頃エアフルトでロイヒリンの『ヘブライ語入門』（*Rudimenta linguae hebraicae*）を独力で学び始め（4Gl, 102; 4Bg, 283f.; 4Ga, 138）、1513年頃には同じくロイヒリンの『七つの悔改めの詩編解釈』（*Joannis Reuchlin in septem psalmos poenitentiales Hebraicos interpretatio de uerbo ad uerbum, & super eisdem commentarioli sui, ad discendum linguam hebraicam ex rudimentis*. Tubingae: Apud Thomam Anshelmum, 1512）を手に入れて読んだ（注24）。さらに、その後の２回の詩編講義（1513―15年、1519―21年）を通じて、ヘブライ語聖書の読解力を高めていった。この間1516年には、「七つの悔改めの詩編」の講解にとりかかり、その成果を翌1517年に出版したが（*Die Sieben puszpsalm mit deutscher auszlegung nach dem schrifftlichen synne tzu Christi vnd gottis gnaden, neben seyns selben. ware erkentniß. grundlich gerichtet.* Wittenberg Rhau-Grunenberg, Johann 1517. 1525年に改訂）、講解にさいしては、ヒエロニムスの注釈と共にロイヒリンの本も参考にした（3Gm-3「七つの悔改めの詩編」解題）。

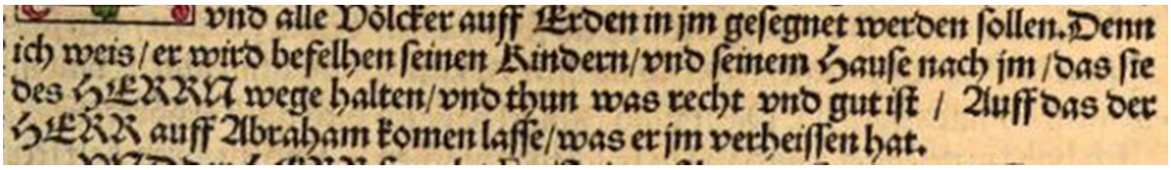
ルターが彼以前のどの人物の聖書解釈を重視し、何を具体的に参照したかは、『詩編講義』の内容からある程度知られる。幸いにも、ルターの詩編講義の一部は日本語で読むことができる（注25）。これを見ると、ルターが最も頻繁に言及したのはヒエロニムスとアウグスティヌスであり、これにロイヒリン、リラのニコラス、ブルゴスのパウルスが続く。竹原創一氏は、ルターの詩編解釈においてよく参照される解釈者として、さらにマッティアス・デーリング（第３章§1参照）、ヤコブス・ファベル・シュタプレンシス（Jacobus Faber Stapulensis／Jacques Lefèvre d'Étaples．第６章§1参照）、ルドルフ・フォン・ザクセン（Ludolf von Sachsen　c. 1300―c. 1377.『キリストの生涯』で知られるドイツの神秘思想家）らの名を挙げている（注26）。われわれの主要関心事は、創世記18章19節をルターがどのように訳したかを見ることにあるが、こうした背景を知っておくことも無駄ではあるまい。

ルターの聖書翻訳は新約聖書に始まり、モーセ五書へ進み、聖書全体を網羅し、そして死の前年の改

訂版をもって終了した。そこでわれわれは、1523年の五書ドイツ語訳、1534年の聖書全体のドイツ語訳、そして1545年の生前最後の改訂版における創世記18章19節の訳文を並べて観察することにする。以下、古いものから順に並べて示す（2Ga，2Gb，2Gc）。


erden ynn yhm geſegenet werdē ſollen/denn ich weys/er wirt befehlen
ſeynen kindern vnd ſeynem hauſzenach yhm/das ſie des HERRN
wege hallten / vnd thun was recht vnd redlich iſt / Auff das der
HERR auff Abraham komen laſſe/was er yhm verheyſſen hat.


erden jnn jm geſegenet werden ſollen/denn ich weis/er wird befehlen
ſeinen kindern/vnd ſeinem hauſe nach jm/das ſie des HERRN wege
halten/vnd thun was recht vnd gut iſt / Auff das der HERR auff
Abraham komen laſſe/was er jm verheiſſen hat.


vnd alle Völcker auff Erden in jm geſegnet werden ſollen. Denn
ich weis/er wird befelhen ſeinen Kindern/vnd ſeinem Hauſe nach jm/das ſie
des HERRN wege halten/vnd thun was recht vnd gut iſt / Auff das der
HERR auff Abraham komen laſſe/was er jm verheiſſen hat.

一見して分かるように、1534年の訳文は1545年の訳とほとんど同じだが（ただし後者では18節と19節を明確に分け、普通名詞も大文字で始め、befehlen の綴りも異なる。句読点と大文字の使い方については 4Gm, 179 を参照）、1523年の訳文はこれらとやや異なる。ここから、本節に関する限り、1523年の訳文を１１年後に改訳しそれを最後まで維持した、と見てよさそうである。とはいえ、“redlich” を “gut” に改めただけであり、綴り字と文の区切りの違いもごく小さなものでしかない。ヘブライ語原文のとり方という点では、1523年の訳文と1534年／1545年訳との間に違いはない。1523年の訳文とその訳は次のとおりである。

> denn ich weys, er wirt befehlen seynen kindern vnd seynem hausze nach yhm, das sie des HERRN wege hallten, vnd thun was recht vnd redlich ist, Auff das der HERR auff Abraham komen lasse, was er yhm verheyssen hat.
> というのは、わたしは知っているからだ。彼は彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが主の道（pl.）を守り、そして正しく誠実なことを行うように、命じるであろう。主がアブラハムの上に、彼に約束したことを来たらせるために。

この訳文は、先に紹介したヘブライ語本文（ブレシア版．第２章§２）に照らすと、明らかに不正確である。冒頭の יְדַעְתִּיו לְמַעַן אֲשֶׁר を正しく訳していない点では、ウルガータ訳（scio enim quod praecepturus sit ...）と共通する。ヘブライ語ではなく七十人訳およびタルグムと一致する複数形の wege を訳語に選んだのは、「道」を神の具体的な戒めとしてとらえたためであろう。その後（1539－41年）ルターらは、ラビ聖書の第一版と第二版を参照して旧約聖書のドイツ語訳を改訂したらしいが（4He, 15）、

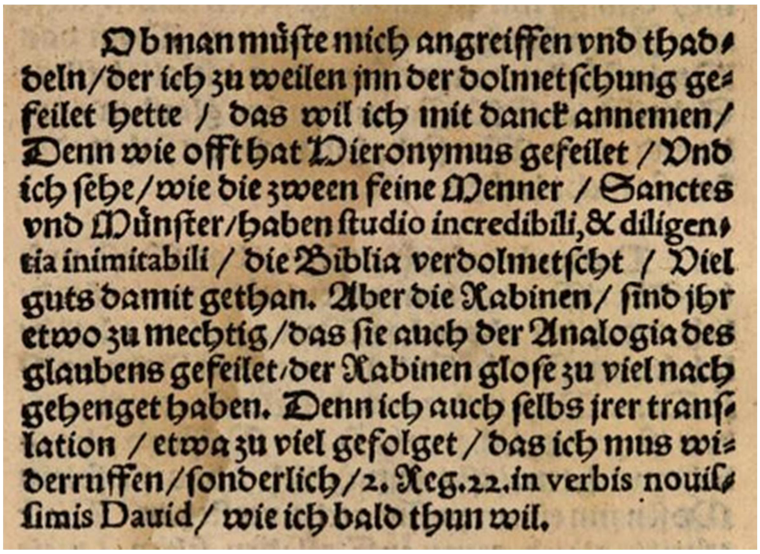
創世記18章19節の訳文に関する限り、ラビ聖書の恩恵を受けたようには見えない。

ルターがモーセ五書の翻訳にとりかかったのは、新約聖書の印刷が終わる直前であった（4Gl, 191）。そこで、1522—23年の時点でルターが五書の翻訳に、どういう参考書を利用できたかを確認しよう。まず、七十人訳としては1518年にヴェニスで印刷されたものを持っていたらしい（4Gl, 191f.; 4Gf, 43)。だが、七十人訳創世記18章19節の本文はヘブライ語本文と異なっている（第１章参照)。1498年出版の注解付ウルガータ訳聖書（1Lb）も、本節の翻訳を助けたとは思えない。彼がリラのニコラスを評価して彼の注解を頻繁に参照したことは周知の事実だが、先に見たように、ニコラスは本節についてはラシの注解を引用しておらず、他の注解者たちも יְדַעְתִּיו לְמַעַן אֲשֶׁר をどう訳すべきかについて何も言っていないからである（第３章§１)。

1522年頃にはコンプルートゥム多言語聖書が刊行されたが、この時期にルターが入手できたかどうかは不明である。この聖書は1520年代初頭のドイツではまだあまり知られていなかったかもしれない（4Gf, 43n14）（注27)。しかしもしこれを見ていたとすれば、ルターが間接的な影響を受けた可能性は否定できぬであろう。というのは、先に見たように（第２章§４)、この聖書に収録されたタルグムは יְדַעְתִּינֵיה（わたしは彼を知った）という読みを採用しているのに、そのラテン語訳は、これをウルガータに近づけて訳しているからである。つまり、この聖書の創世記18章19節を含む頁は、ウルガータ訳、七十人訳、そのラテン語訳、タルグムのラテン語訳のすべてが、ヘブライ語本文を正しく反映してはいないのである。

パグニヌスのラテン語訳聖書が出たのは 1528 年、ヘブライ語辞書の出版は翌 1529 年であるから、ルターの五書翻訳には間に合わなかった。しかし 1534 年の改訳以前にパグニヌスによる創世記 18 章 19 節の訳文 “Quia noui eum. Propterea praecipiet filijs suis, & domui suae post se ...”（「というのは、わたしは彼を知ったからだ。そのため、彼は彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に命じ・・・」第３章§３）を参照することはできたはずである。一方、ミュンスターのヘブライ語ラテン語対訳聖書が出たのは 1534—35 年だが（第２章§７〜8)、先に見たように、その段階で創世記 18 章 19 節は “Hoc quoque scio quod praecepturus sit filijs suis & domui suae post se ...”（「このこともまたわたしは知っている。〔すなわち〕彼が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に・・・」）と訳されていた。1539 年のラテン語聖書ではこれが “Sic enim noui eum, quod praecepturus sit filijs suis ...”（「というのは、このようにわたしは彼を知ったからだ。〔すなわち〕彼が彼の息子たちに・・・」）と改訳されたが、これはルターの 1534 年の改訳よりも後であり、しかもその出版はチューリヒであった。しかし、ルターと彼の協力者たちは 1545 年以前に、パグニヌスの訳とミュンスターの二つの訳を見ることができたはずなのに（どちらも יְדַעְתִּיו の末尾の ו を訳出していた)、1545 年の改訂版に、彼らの訳を反映させることはなかった。これはどういうわけだろうか。

ルターはパグニヌスとミュンスターの聖書翻訳について、次のように述べている（2Gf）（注 28）。



Ob man müste mich angreiffen vnd thaddeln, der ich zu weilen jnn der dolmetschung gefeilet hette, das wil ich mit danck annemen. Denn wie offt hat Hieronymus gefeilet. Vnd ich sehe, wie die zween feine Menner, Sanctes vnd Münster, haben *studio incredibili, & diligentia inimitabili*, die *Biblia* verdolmetscht, Viel guts damit gethan. Aber die Rabinen, sind ihr etwo zu mechtig, das sie auch der Analogia des glaubens gefeilet, der Rabinen glose zu viel nach gehenget haben. Denn ich auch selbs jrer translation, etwa zu viel gefolget, das ich mus widerruffen, sonderlich, 2 Reg. 22, in *verbis nouissimis David*, wie ich bald thun wil.

ときおり翻訳にしくじったとして、私は攻撃され非難されねばならないのか――そのことを私は感謝をもって受け入れよう。なぜなら、ヒエロニムス〔でさえ〕何としばしばしくじったことか。私はまた、二人の立派な人物、サンクテスとミュンスターが、信じがたい熱心さとまねのできぬ細心さをもって聖書を翻訳し、そうして多くの善を行った様子を見ている。しかし、もしかするとラビたちが彼らをあまりに強く支配しているため、彼らは信仰の類比にもしくじって、ラビたちの注釈からすっかり離れられなくなった。私自身もおそらく彼らの翻訳に従いすぎたので、――間もなくそうするつもりだが――とりわけ「ダビデの最後の言葉」におけるサムエル記下22章〔23章であろう〕を取り消さなければならない。

「信仰の類比」は、ルターがこの文章の少し前の箇所でパウロのローマ書12章6節（κατὰ τὴν ἀναλογίαν τῆς πίστεως）を “die Prophetia sol analoga, ehnlich sein dem glauben”（「預言は信仰に類似・適合しているべきだ」）と引用したことを受けている。（Prophetia と analoga はラテン語の借用であろう。ehnlich＝ähnlich? ワイマール版は ehnlich に ＝entsprechend という注記をつけている）。「信仰の類比にしくじった」とは、ラビたちの旧約解釈に強く引かれた結果、旧約本文の意味はキリスト教信仰に相応するという真理を見失ってしまった、という意味か。「間もなくそうするつもりだが」は、この後 “Von den letzten Worten Dauids” という題の文書（WA54 に所収）を出すことを指す。

このようにルターは、これら二人のすぐれたヘブライ語学者の働きを高く評価しながらも、彼らの翻訳と解釈がラビたちの注釈に支配されているとして批判した。創世記18章19節における יְדַעְתִּיו の語末

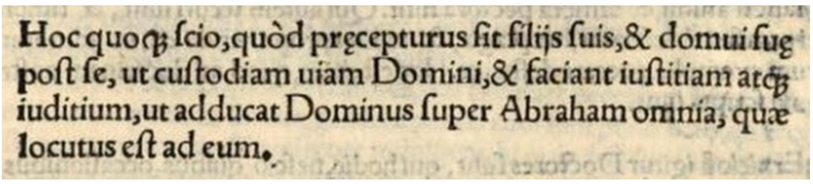
の ו をルターがパグニヌスのように訳さなかったのも、そうした事情によるのだろうか。それとも、単にウルガータの訳文の方が原文の真意に近いと考えたためだろうか。それとも、「彼を」を訳しても本文の意味に本質的な違いは生じないと考えたのだろうか（後述のティンダル訳［第７章§２］と「第一部の結び」を参照）。

ところでルターは、旧約聖書の翻訳を単独で行ったのではなく、マテーウス・アウロガルス（Matthäus Aurogallus　c. 1490―1543．ヴィッテンベルク大学ヘブライ語教授）およびメランヒトンの協力を得て進めた（4Gl, 191f.）。さらに、ヨハネス・マテジウス（Johannes Mathesius　1504―1565．ルターの弟子、ルター派牧師）は、1539年から41年にかけての聖書翻訳の批評に、これら二人に加えて、ルターの協力者・同労者であるヨハン・ブーゲンハーゲン（Johann Bugenhagen　1485―1558）、ユストゥス・ヨーナス（Justus Jonas　1493―1555）、カスパル・クルーツィガー（Caspar Cruciger　1504―48）、ゲオルク・レーラー（Georg Rörer　1492―1557．ルターの講義・説教・語録の筆記者）も加わった、と記している（4Gl, 238ff.）。ユダヤ人ラビの意見を求めることもあった（4Ga, 347）。この委員会の活動はたいへん有益であったに違いないが（1531年と39～41年の記録が残っているという）、創世記18章19節の訳文の検討は行ったのだろうか。

最後に、ルター自身による「旧約聖書序文」（1523年）（2Gd）や彼の翻訳の姿勢を物語る「翻訳についての書簡」(2Ge) からも何らかの情報を得たいところだが、これらに創世記18章19節への言及はない。

２．ルターの創世記講義

ルターは1535年から1545年にかけて、数回の中断をはさみながら創世記の講義を行った（4Gl, 280ff.）。その講義は数名の学生によって速記され、1544年以降４巻に分けて出版された（創18章を含む第二巻の出版は1550年）。ラテン語で書かれているが、便宜上ここで扱うことにする。ルター自身の手稿に基づかない点を斟酌するとしても（4Gg, 187f.）、聖書の翻訳を完了した彼が創世記18章19節についてどういうことを言っているか、たいへん気になるところである。創世記19章の講義の時期は1538年の早春と推測される（WA42, vii-viii; 4Gj, 21n37）。本書の創世記18章19節の訳文は次のとおりである（1Lj）。


Hoc quoq; ſcio, quòd prçcepturus ſit filijs ſuis, & domui ſuę poſt ſe, ut cuſtodiam uiam Domini, & faciant iuſtitiam atq; iuditium, ut adducat Dominus ſuper Abraham omnia, quæ locutus eſt ad eum.

Hoc quoque scio, quòd praecepturus sit filijs suis, & domui suae post se, ut custodiam[sic] uiam Domini, & faciant iustitiam atque iuditium, ut adducat Dominus super Abraham omnia, quae locutus est ad eum.

このこともまたわたしは知っている。〔すなわち〕彼が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが主の道を守り、そして正義と裁きを行うように、命じるであろうことを。主がアブラハムの上に、彼に向って話したすべてのことをもたらすために。

この訳文はたいへん興味ぶかい。というのも、これはミュンスターの最初の訳（1534年．1539年の改訳

はまだ出ていなかった）の後半部分をウルガータ訳で修正したものにほかならないからである。

Hoc quoque scio quod praecepturus sit filijs suis & domui suae post se, ut custodiant uiam domini, & faciant iustitiam atque iudicium, quatinus scilicet dominus adducat super Abraham omnia quae loquutus est ad eum.（ミュンスター1534年）

scio enim quod praecepturus sit filiis suis, et domui suae post se, ut custodiant viam Domini, et faciant iustitiam et iudicium: ut adducat Dominus propter Abraham omnia quae locutus est ad eum.（ウルガータ訳）

ルターは、ミュンスターの訳を評価していたので、ラテン語による講義の中でそれを使ったのだが、その後半部についてはウルガータ訳が適当と考えた、ということだろうか（17―18節の訳文はミュンスター訳と同じ。20節はミュンスター訳と似ているが違いもある。21節はミュンスター訳とほとんど同じ）。この訳は、יְדַעְתִּיו の末尾の ו を訳出しているが、意味的にはルター訳およびウルガータ訳とあまり変わらない。しかし、彼自身のドイツ語訳があり、それは1545年訳でも変わっていないのだから、自分でラテン語に訳し直せばよいのに（その場合、冒頭はウルガータに似てくる）、なぜそうしなかったのだろうか。聴講者や編集者の手が加わっているとも考えにくい。疑問が残る。

本節の解釈は、アブラハムに対する５つの町の大火災の啓示（conflagratio quinque civitatum revelatur Abrahae）に注目して始まる。主がアブラハムを「知ったこと」（選び）は全く視野に入っていない。訳文がこうである以上これは当然であろう。講義は旧新約聖書の多くの箇所を参照しながら長々と展開される。この箇所に対するルターの講義のねらいについては、マクスフィールドの解説を参照（4Gj, 21ff.）。

３．チューリヒ聖書（1525年、31年）

ルターが聖書をドイツ語に訳すと、ツヴィングリ（Huldrych／Huldreich／Ulrig Zwingli　1484―1531）をリーダーとするチューリヒの宗教改革者たちは、当初はルター訳聖書をそのまま用いた。1523年から24年にかけてルターが訳した旧約聖書の３つの部分（前述）（印刷はヴィッテンベルクのメルキオール・ロッター［Melchior Lotther　1470―1549］）は発売後大きな人気を博し、何度も版を重ねただけでなく、バーゼルで（印刷はハンス・ルフト［Hans Lufft　1495―1584］とトマス・ヴォルフ［Thomas Wolff　c. 1485―1535］）、さらにチューリヒでも出版された。このバーゼル版がチューリヒの宗教改革者たちの旧約聖書翻訳の土台として利用された（4Zd, 85）。だが彼らは、預言書と旧約外典の翻訳についてはルター（1532年）に先行し、どちらも1529年に出版した（4Zd, 88. 4Za, 75）。これらの翻訳に関わったのは、レオ・ユート（Leo Jud　1482―1542）、コンラート・ペリカン（Konrad Pellican／Pellicanus　1478－1556）、テオドール・ビブリアンダー（Theodor Bibliander　1504［09］―64. スイスのヘブライ語学者. カルヴァンの予定説を批判）らであった（4Zb, 63f.）。

ここに取り上げるのは、ツヴィングリとレオ・ユートが中心になって編集（一部翻訳）したものをクリストフ・フロシャウアー（Christoph Froschauer　c. 1490―1564）がチューリヒで印刷出版したドイツ語訳旧約聖書（1525年。2Gg）（4Zd, 88）と、同じくフロシャウアーが出版した旧新約全体と旧約外典を含むチューリヒ聖書の完本（1531年。2Gh）である（4Za, 89; 4Zd, 88f.）。これらは出版者の名にちなんでしばしば “Die Froschauer-Bibel” と呼ばれる。普通チューリヒ聖書と言えば後者を指すが、先の版と

見比べると重要な事実が明らかになる。1525年の旧約聖書は、モーセ五書、第二部（ヨシュア記からエステル記までの歴史書）、第三部（ヨブ記、詩編、箴言、コヘレトの言葉、雅歌）から成り、第三部の冒頭にはルターの序文が置かれている。1531年版はその後、旧約はレオ・ユートらによって1539―40年に改訂され（1540年と42年に新版）、新約聖書は1547年に改訂された（3Ge, 106）。

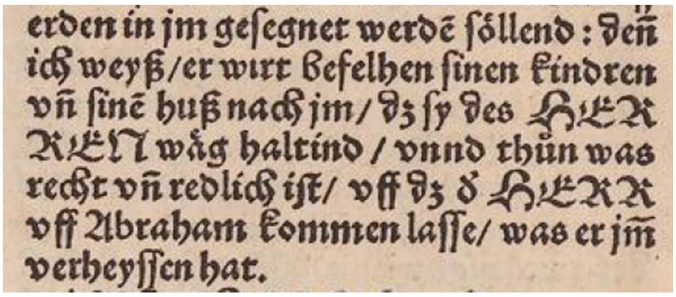
旧約聖書の翻訳にツヴィングリが具体的にどのように寄与したかはあまり明らかになっていない。イザヤ書、エレミヤ書、および哀歌の翻訳には直接関わったらしいが（4Bm, 223）、五書についてはどうだったのだろうか。いずれにせよ、この翻訳が、1525年6月にツヴィングリが開始した Prophezei（預言）と称される公開の聖書研究活動に由来することは間違いない（4Bm, 221ff.; 4Hf, 420f.; 4Bo, 62ff.; 4Zc, 199）。これは金曜日と日曜日をのぞく毎朝開催され、その中でツヴィングリは旧約聖書のヘブライ語本文をラテン語に訳し、かつ説教した。こうした活動の中からチューリヒ聖書が、チューリヒの学者たちの共同作業として生み出された。

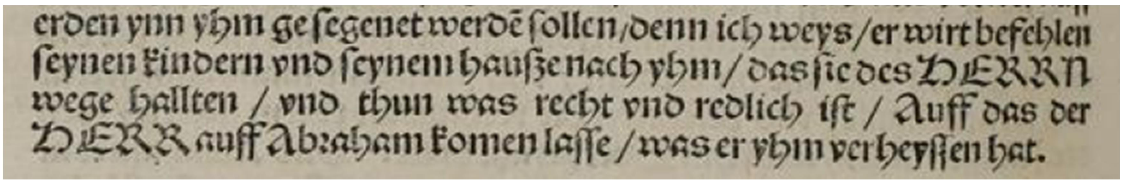
ツヴィングリとチューリヒの学者たちがヘブライ語聖書のどの版を使用したかについては、最新の研究がある（聖書自体は失われてしまった）。ミッシュは、８つの候補を挙げたうえで、ツヴィングリによるエレミヤ書のラテン語訳を手がかりに考察を進めた（4Ze. cf. 4Hg, 68n22）。８つの候補とは、（１）1488年のソンチーノ版（Ginsburg No.6）、（２）1492年頃のナポリ版（Ginsburg No.9）、（３）1494年のブレシア版（ルターも使用）（Ginsburg No.13）、（４）1511－17年のペーザロ版（Ginsburg No.18）、（５）1516－17年のヴェネチア版（第一ラビ聖書、二つ折判）（Ginsburg No.20）、（６）1516－17年のヴェネチア版（第一ラビ聖書の四つ折判）（Ginsburg No.21）、（７）1521年のヴェネチア版（第一ラビ聖書四つ折判の第二版）（Ginsburg No.22）、そして（８）1524―25年のヴェネチア版（第二ラビ聖書）（Ginsburg No.23）である。1514–1517年出版のコンプルートゥム多言語聖書（Ginsburg No.19）を使用した可能性（4Zb, 528）は、1526年のツヴィングリのペトルス・ギュノラエウス（Petrus Gynoraeus　1560死去）宛の手紙の内容（多言語聖書は見たことがないという記述がある）に照らして、排除される。ツヴィングリは Prophezei で取り上げたイザヤ書とエレミヤ書に強い関心を示し、それらを自らラテン語に訳した（イザヤ書は1529年、エレミヤ書は1531年。後者の正式名 *Complanationis Ieremiae prophetae, foetura prima, cum Apologia quur quidque sic uersum sit, per Huldrychum Zuinglium.* Tigvri, ex aedibus Christophori Froschover, Anno M. D. XXXI）。ところが、エレミヤ36章26節に現れる人名アブデエール（עַבְדְּאֵל）をツヴィングリは Achdiel と訳した（1529年のドイツ語訳も同じ．VULでは Abdehel）。これに対応するヘブライ語の名前（עַכְדְּאֵל）は、（５）1516－17年のヴェネチア版（第一ラビ聖書、二つ折判）と（７）1521年のヴェネチア版（第一ラビ聖書四つ折判の第二版）にしか出てこない。

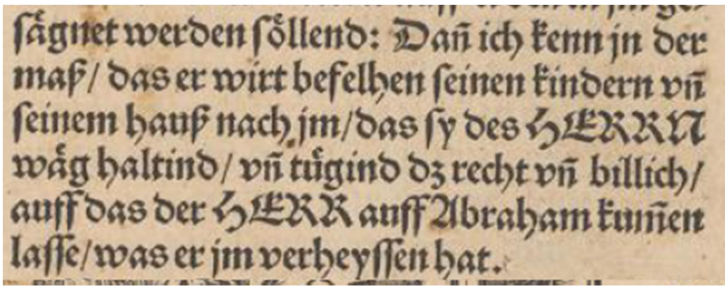
ここからミッシュは、ツヴィングリが用いたのはこれらのどちらかであると考え、さらに1522年3月25日付のレナーヌス（Beatus Rhenanus　1485―1547）宛の手紙とブリンガーの『宗教改革史』（1564年）の記述から、彼のヘブライ語聖書入手の時期を1522年と推測する。こうして、ツヴィングリがイザヤ書とエレミヤ書の翻訳に用いた版は、これら２つに絞られるわけだが、ミッシュは別の関連（ツヴィングリの蔵書の保管状況、1580年頃作成された死傷者名簿の記述等）も考慮して、ツヴィングリが所有していたのは1521年のヴェネチア版（四つ折判の第二版）であった、と結論づける。彼はこの問題をさらに続稿（4Zf）で取り上げているが、長くなるので修正点だけを確認しておく。――ツヴィングリは1521

年のヴェネチア版（四つ折判の第二版）を入手したのだが、その本はユダヤ人のラビが持っていたものであり、そのラビが中世の写本に従った異読（עבדיאל）を頁の端に書き入れ、それをツヴィングリが本文に印刷された עכדאל と見比べて、Achdeel ではなく、両者の合成形とでも言うべき Achdiel という名前にした（つまり本文の文字に従いつつ、母音記号の付け方は欄外手書きを利用した）。この推測が妥当か否か、私自身は結論を下せないが、彼が用いた聖書が第一ラビ聖書の四つ折判の第二版（1521年）であったとすると、彼と彼の周囲にいた学者たちがそこに収録されたラシの注解をどのように読んだかが気になる。創世記18章19節の本文自体は、第一ラビ聖書の前も後も基本的に同じなので、版の違いが訳の違いに結びつくことはない。

1525年のドイツ語訳旧約聖書（2Gg）と1531年のチューリヒ聖書完本（2Gh）において、創世記18章19節はそれぞれ次のように訳されている。比較のため、1523年のルター訳を併せて示す（1525年訳、ルター訳、1531年訳の順）。


erden in jm geſegnet werdē ſöllend: deñ
ich weyß/er wirt befelhen ſinen kindren
vñ ſinē huß nach jm/ dz ſy des HER
REN wåg haltind/ vnnd thůn was
recht vñ redlich iſt/ vff dz ð HERR
vff Abraham kommen laſſe/ was er jm̄
verheyſſen hat.

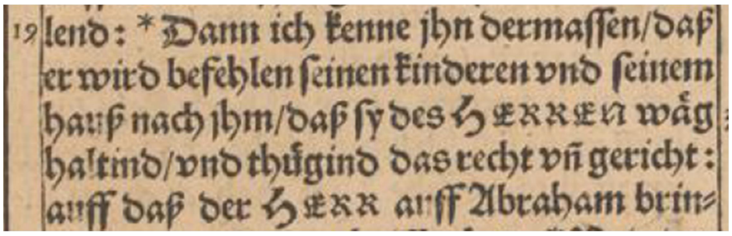

erden ynn yhm geſegenet werdē ſollen/denn ich weys/er wirt befehlen
ſeynen kindern vnd ſeynem hauſze nach yhm/ das ſie des HERRN
wege hallten / vnd thun was recht vnd redlich iſt / Auff das der
HERR auff Abraham komen laſſe / was er yhm verheyſſen hat.

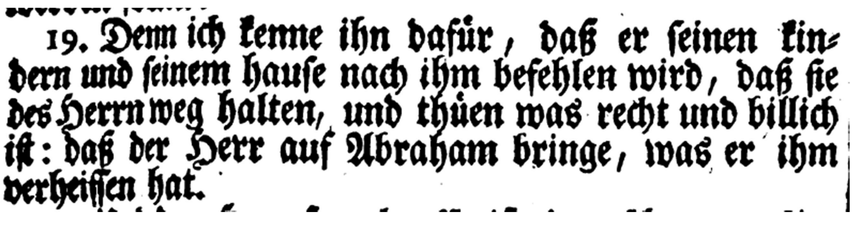

ſågnet werden ſöllend: Dañ ich kenn jn der
maß/ das er wirt befelhen ſeinen kindern vñ
ſeinem hauß nach jm/das ſy des HERRN
wåg haltind/ vñ tůgind dz recht vñ billich/
auff das der HERR auff Abraham kum̄en
laſſe/was er jm verheyſſen hat.

一見して分かるように、1525年の訳は1523年のルター訳をほぼそのまま用いている（「道」はヘブライ語に従って単数形）。綴り字はスイスのドイツ語に合わせて変えられているが、ヘブライ語本文のとり方はルター訳と全く同じである。これにたいし1531年訳は、ヘブライ語をルターとは異なる独自の仕方で解している。スイスの学者たちは、1531年に至る数年間にルター訳を検討して、より適切な訳に達したのであろう。そのさい、1528年に出版されたパグニヌスのラテン語訳聖書（1Ld）も見たかもしれない。翻訳の中心人物はレオ・ユートであろうか。1531年版の訳文は次のとおりである。

Dann ich kenn jn der maß, das er wirt befelhen seinen kindern vnd seinem hauß nach jm, das sy des HERRN wäg haltind, vnd tügind dz recht vnd billich, auff das der HERR auff Abraham kummen lasse, was er jm verheyssen hat.（注29）
というのは、わたしは彼をこれほどに知っているからだ。〔すなわち〕彼は彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが主の道を守り、そして正義と公正を行うように、命じるであろう。主がアブラハムの上に、彼に約束したことを来たらせるために。

この訳はツヴィングリの創世記解釈（1Lc．第3章§2）を反映していない。יְדַעְתִּיו の末尾の ו を訳出した点はパグニヌスのラテン語訳（1528年．1Ld）およびティンダルの英語訳（1530年．2Ea）と共通し、この点は特に注目に値する。ただし、לְמַעַן אֲשֶׁר のとり方はそのどちらとも異なる。ミュンスターの1534年の訳（1Hk．Hoc quoque scio quod praecepturus sit filijs suis & domui suae post se, ut custodiant uiam domini ... このこともまたわたしは知っている。〔すなわち〕彼が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが主の道を守り・・・）ともやや似ているが、それよりも彼の1539年の改訳（1Le．Sic enim noui eum, quod praecepturus sit filijs suis & domui suae post se, ut custodiant uiam domini, & ... というのは、このようにわたしは彼を知ったからだ。〔すなわち〕彼が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが主の道を守り、そして・・・）の方に近い。チューリヒ聖書のその後の改訳を詳しくたどることは到底できないが、1638年版と1772年の大改訂版（3Ge, 343）においてこの訳文がどう変わっているかを見ておこう（注30）。


19 lend: *Dann ich kenne jhn dermassen/daß
er wird befehlen seinen kinderen vnd seinem
hauß nach jhm/daß sy des HERREN wåg
haltind/vnd thůgind das recht vñ gericht:
auff daß der HERR auff Abraham brin=

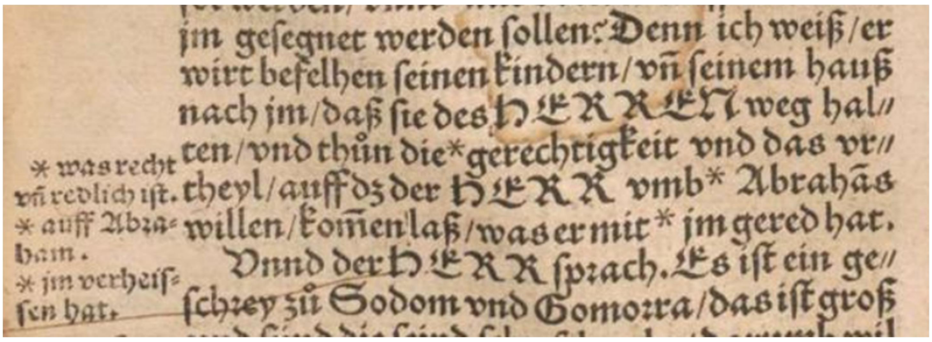

19. Denn ich kenne ihn dafür, daß er seinen kin=
dern und seinem hause nach ihm befehlen wird, daß sie
des Herrn weg halten, und thůen was recht und billich
ist: daß der Herr auf Abraham bringe, was er ihm
verheissen hat.

1638 年では 1531 年版の訳文がほぼそのまま保持されている（もちろん 1570 年版とも共通する）。1772 年版ではドイツ語自体が標準ドイツ語に近くなっているが、それ以上に印象的なのは、לְמַעַן אֲשֶׁר が dafür dass と目的の意味に正しく解されていることである（יְדַעְתִּיו はまだ現在形に訳している）。ヘブライ語構文の解釈の点では、1772 年版は、ピスカートルのドイツ語訳（第 3 章§12）に近い。

４．ディーテンベルガーのドイツ語訳（2Gi）

次に、16世紀のカトリック陣営によるドイツ語訳の代表例として、ヨハン・ディーテンベルガー（Johann Dietenberger　c. 1475―1537）の訳（初版1534年）を見ておくことにしたい（4Ga, 350f., 364f.; 3Ge, 107ff.）。カトリック訳としてはこの他にエムザー（Hieronymus Emser　1478―1527）による新約聖書（1527年）とエック（Johann Maier von Eck　1486―1543）による旧新約聖書（1537年）があるが、省略する。これら３人の訳は概ねウルガータを底本としていた。エムザーとエックはルターの敵対者として知られている。特に後者は、1517年にルターが「９５か条の提題」を掲げると、翌18年に “Obeliski”（書籍中の疑わしい言葉に注意を促すマークを指す）と題されたトラクトを出してルターとの論戦の口火を切り、1519年のライプツィヒ討論ではルターと、教皇と教会の権威について討論したことで有名である（3Gi, 59ff.）。ディーテンベルガーは、ルターとの対決姿勢を堅持しながらも、旧約の翻訳についてはルター訳を大幅に採り入れた。両者の比較からルターによる本節の訳の性格も見えてくる

ディーテンベルガーによる創世記18章19節の訳文は次のとおりである。星印の箇所の欄外別訳を括弧に入れて示す。


jm gesegnet werden sollen: Denn ich weiß/er
wirt befelhen seinen kindern/vñ seinem hauß
nach jm/daß sie des HERREN weg hal//
ten/vnd thůn die*gerechtigkeit vnd das vr//
theyl/auff dz der HERR vmb* Abrahãs
willen/komen laß/was er mit * jm gered hat.
Vnnd der HERR sprach. Es ist ein ge//
schrey zů Sodom vnd Gomorra/das ist groß

* was recht vñ redlich ist.
* auff Abra-haim.
* jm verheis-sen hat.

Denn ich weiß, er wirt befelhen seinen kindern, vnd seinem hauß nach jm, daß sie des HERREN weg halten, vnd thun die gerechtigkeit vnd das vrtheyl (was recht vnd redlich ist), auff dz der HERR vmb Abrahams willen (auff Abraham), kommen laß, was er mit jm gered hatt (jm verheissen hat).

というのは、わたしは知っているからだ。彼は彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが主の道を守り、そして正義を、また裁きを（正しく誠実なことを）、行うように、命じるであろう。主がアブラハムのために（アブラハムの上に）、彼と話した（彼に約束した）ことを来たらせるために。

一方、ルターの1523年の訳とウルガータ訳は以下のようになっている。

denn ich weys, er wirt befehlen seynen kindern vnd seynem hausze nach yhm, das sie des HERRN wege hallten, vnd thun <u>was recht vnd redlich ist</u>, Auff das der HERR <u>auff Abraham</u> komen lasse, was er <u>yhm verheyssen hat</u>.（ルター訳1523年）

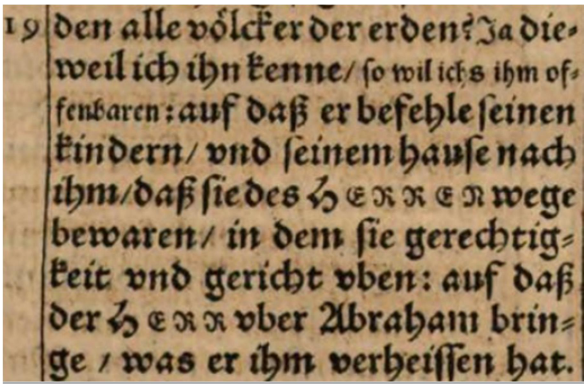
scio enim quod praecepturus sit filiis suis, et domui suae post se, ut custodiant viam Domini, et faciant <u>iustitiam et iudicium</u>: ut adducat Dominus <u>propter Abraham</u> omnia quae <u>locutus est ad eum</u>.（ウルガータ訳）

比較すると、欄外別訳はルターの訳であることが分かる。“redlich” を “gut” としていないので、（時期

的に当然だが）1534年の初版の段階でディーテンベルガーが参照したルター訳は、1534年の改訳ではなく1523年の訳である。ディーテンベルガーの訳がルター訳よりも直訳的なのは、ウルガータ訳をそのまま用いたからであろう。しかし、訳文の構造は非常によく似ている。これは裏返せば、ルター訳自体がウルガータに近い、ということである。繰り返しになるが、本節に関する限り、ルター訳はヘブライ語本文の意味を正しく伝えてはいない。

５．ピスカートルのドイツ語訳（2Gj）

最後に、先にそのラテン語注解書を検討したヨハネス・ピスカートルによる1602年のドイツ語訳聖書を見ておくことにしよう。創世記18章19節の訳文は次のとおりである。


19 den alle völcker der erden? Ja die-
weil ich ihn kenne/ so wil ichs ihm of-
fenbaren: auf daß er befehle seinen
kindern/ vnd seinem hause nach
ihm/ daß sie des HERREN wege
bewaren/ in dem sie gerechtig-
keit vnd gericht vben: auf daß
der HERR vber Abraham brin-
ge/ was er ihm verheissen hat.

Ja dieweil ich ihn kenne (so wil ichs ihm offenbaren): auf daß er befehle seinen kindern, vnd seinem hause nach ihm, daß sie des HERREN wege bewaren, in dem sie gerechtigkeit vnd gericht vben: auf daß der HERR vber Abraham bringe, was er ihm verheissen hat.

そうだ、わたしは彼を知っているからだ（だから、わたしは彼にそれを明らかにしよう）。彼が彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが正義と裁きを行うことによって、主の道（pl.）を堅持するように命じるために。主がアブラハムの上に、彼に約束したことをもたらすために、

ピスカートルは直前の18節を疑問文に解している。本節の訳文はそれを受けてのものである。注目すべきは、יְדַעְתִּיו の末尾の ו を正確に訳出しただけでなく、目的節を導く לְמַעַן אֲשֶׁר も正しく解していることである。この点で、ピスカートル訳は宗教改革期のどの訳よりもすぐれている（これは1611年の欽定英訳よりも先だが、後ほど見るように、後者は לְמַעַן אֲשֶׁר を正しく訳していない）。だが、先にトレメリウスの訳（“Nam agnovi eum”）に即して注解書を書いたにもかかわらず（第３章§12）、יְדַעְתִּיו というヘブライ語の完了形については、ウルガータ訳やルター訳と同様現在形に訳している。これは、トレメリウスの解釈を棄てたということではなく、agnovi というトレメリウスの訳語を最初から「認めた結果認めている」という意味にとっていた（ヘブライ語 יְדַעְתִּיו も現在のこととして理解していた）ことの現れかもしれない。יְדַעְתִּיו と לְמַעַן אֲשֶׁר の両方を正しく訳す聖書が出るようになったのは、もっと後になってからである（ドイツ語訳が最も早い）。著者が確認できた限りでは次のとおり。――ドイツ語訳ではプロイセンの旧約学者ミヒャエリス（Johann David Michaelis　1717―91）の1775年の創

世記ドイツ語訳（*Johann David Michaelis deutsche Uebersetzung des Alten Testaments, mit Anmerkungen für Ungelehrte. Der zwite Theil welcher da erste Buch Mose enthält.* Göttingen, in der Vandenhoekischen Handlung, 1775）（注31)。フランス語訳ではルイ・スゴン（Louis Segond　1810―85．スイスの神学者）による1874年の聖書（*La Sainte Bible. Ancien Testament. Traduction nouvelle d'après le texte Hébreu par Louis Segond*. Genéve: A. Cherbuliez et Cie.; Paris: Librairie Sandoz & Fischbacher, 1874）（注32)。そして英語訳では1885年の改訂訳聖書（*The Holy Bible containing the Old and New Testaments translated out of the original tongues: being the version set forth A.D. 1611 compared with the most ancient authorities and revised. Printed for the Universities of Oxford and Cambridge.* Oxford: University Press, 1885）（注33)。ルター訳によるドイツ語訳は1912年の版でもまだ“Denn ich weiß, er wird befehlen seinen Kindern und seinem Hause nach ihm, daß sie des HERRN Wege halten und tun, was recht und gut ist, auf daß der HERR... ”のままであり（1545年訳とほとんど同じ)、1964年になってようやく、“Denn dazu habe ich ihn auserkoren, daß er seinen Kindern befehle und seinem Hause nach ihm, daß sie des HERRN Wege halten und tun, was recht und gut ist , auf dass der HERR ...”（「というのは、このためにわたしは彼を選んだからだ。〔すなわち〕彼が彼の子供たちと彼の後の彼の家に、彼らが主の道を守り、そして正しく善いことを行うように命じるために。主が・・・」）と改訳された（＝2017年訳)。

第６章　日常語訳における創世記 18 章 19 節――（２）フランス語訳

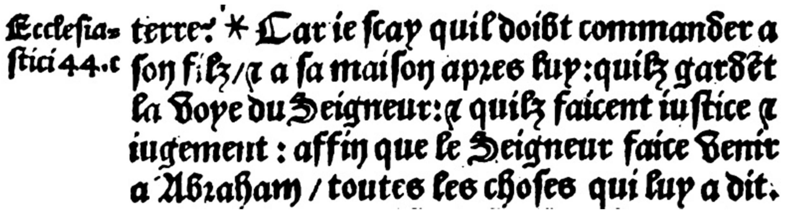
１５世紀以前のフランス語訳聖書については説明を省略し、宗教改革期のフランス語訳に話をしぼることにする。

１．ルフェーブル・デタープルによるウルガータからのフランス語訳（2Fa）

近代における聖書のフランス語訳は、カトリックの神学者・人文主義者として知られるルフェーブル・デタープル（Jacques Lefèvre d'Étaples／Jacobus Faber Stapulensis　c. 1450―1536）から始まった（彼以前の翻訳については、3Br「聖書の翻訳：フランス語」を参照。直前の状況については 4Fa, Chap. 3 と 4Fb, Chap. 7-8 に詳しい説明がある）。ルフェーブルの翻訳については、ウルガータに依拠したのみならずジャン・ド・レリー（Jean de Rély　c. 1430―99. フランスの神学者でアンジェの司教）が1487年に改訂した「歴史物語的聖書」（[La bible historiée]. [Paris: Antoine Vérard, c. 1498]）の完全版も用いた、という指摘があることをつけ加えておきたい（3Ge, 117. cf. 4Fa, 80）。

ルフェーブルによるフランス語訳は、まず1523年にパリの有力な印刷業者シモン・ド・コリーヌ（Simon de Colines　c. 1480―1546）が、匿名の人物の訳した福音書を出版したことから始まる。翻訳者は、ルフェーブル（ラテン語による福音書注解書を1522年に出版）であったと考えられている。続いて新約聖書の他の文書の訳本も、同年のうちに順次刊行された（4Fa, 68f.; 3Ge, 116）。一方旧約聖書のフランス語訳は、1528年にアントワープで印刷され、1530年には旧新約を一冊にまとめたものが出版された（4Fa, 76; 4Fb, Chap. 9）。この聖書はすぐに重要な改訂を施され（1534年と1541年）、新たな版として出し直された。しかし、それに付けられた注釈がカトリック当局によって問題視された結果、1546年にローマで禁書に指定された（4Fa, 79n1: 3Ge, 116; 3Br「聖書の翻訳：フランス語」）。ルフェーブルは、ヘブライ語聖書、ギリシア語訳、アラム語訳を参照したらしいが（4Fa, 76）、ウルガータ訳聖書に基づいていたことは表題からも明らかである（"translatee selon la pure et entiere traduction de sainct Hierome"）。彼はウルガータ訳の誤りを直す以上のことはしなかったと言われるが（4Fa, 80）、実際のところどうであったのか。

1530年版ルフェーブル訳の創世記18章19節を以下に示す。


Ecclesiastici 44.c
terre: * Car ie scay quil doibt commander a
son filz, et a sa maison apres luy: quilz gardent
la voye du Seigneur: et quilz faicent iustice et
iugement: affin que le Seigneur faice venir
a Abraham / toutes les choses qui luy a dit.

Car ie scay quil doibt commander a son filz, et a sa maison apres luy: quilz gardent la voye du Seigneur: et quilz faicent iustice et iugement: affin que le Seigneur faice venir a Abraham, toutes les choses qui luy a dit.
（注 34）

というのは、わたしは知っているからだ。彼が彼の息子（たち）に、また彼の後の彼の家に、彼らが主の道を守ること、そして正義と裁きを行うことを、命じるに違いない、と。主がアブラハムに、彼

に言ったすべてのことを来たらせるために。

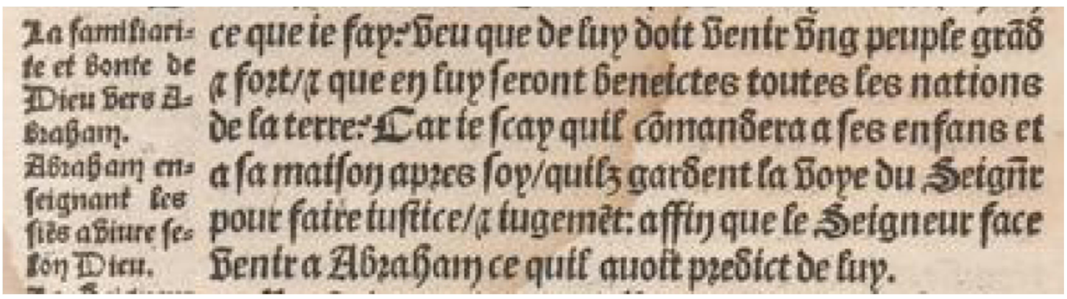
この訳は、ウルガータ訳の quod praeceptурus sit を quil doibt commander と意味を強めた点を除けば、下敷きにしたウルガータ訳をほぼそのままフランス語に移したものになっている（シラ44：3を参照するようにとの欄外注は18節に対するもの)。

２．オリヴェタンによるヘブライ語原典からのフランス語訳（2Fb）

次に現れたフランス語訳聖書は、スイスの宗教改革者でカルヴァンの親戚のピエール・ロベール・オリヴェタン（Pierre Robert Olivétan／Petrus Robertus Olivetanus　c. 1506―38．彼の本名は実は不明らしい［4Fc, 217f.］）によるもので、オリヴェタン聖書（La Bible d’Olivétan）と呼ばれている。これは、ヴァルド派の指導者たちが改革派の神学者（ファレル［Guillaume Farel　1489―1565］とソニエ［Antoine Saunier］）を招いて開いた教会会議（シャンフォラン、1532年）における決議が発端となったもので（オリヴェタンも出席したらしい)、1535年にヌーシャテルで、リヨンの印刷業者ヴァングル（Pierre de Vingle／Wingle　c. 1495―1536）により、25歳のカルヴァンのラテン語の序文（皇帝や王たちに宛てた手紙）を添えて（4Fc, 226）刊行された（4Fa, 84ff.; 4Fb, Chap. 10; 3Ge, 117)。史上初の原典からの仏語訳聖書として、スイスにも及ぶフランス語圏の宗教改革者たちによって広く使用され、後のジュネーヴ聖書（1588年）の土台になった（4Fd, 148)。

オリヴェタンによるフランス語の序文には、“P. Robert Oliuetanus lhumble et petit Translateur a Leglise de Jesus Christ. Salut”（「イエス・キリストの教会の取るに足らぬ小さな翻訳者Ｐ・ロベルト・オリヴェタヌス．挨拶」）というへりくだった表題がついている。この中で彼は、「この宝典をヘブライ語とギリシア語の戸棚と大箱の外に取り出して広げる責任と使命」（“charge et commission de tirer et desployer iceluy thresor hors des armaires et coffres Ebraicques et Grecz”）をイエスから与えられた、と書いている（4Fc, 234ff. に詳しい内容紹介がある）。これを見ると、彼が原典から訳したことは間違いなさそうだが、話はそう単純ではない。リシャール・シモンは、オリヴェタン聖書がヘブライ語とギリシア語から訳されたことを認める一方で、「ジュネーヴの人たちはロベール・オリヴェタンがヘブライ語に通じていたと確言するが、彼にヘブライ語ができたのか疑う理由がある」と述べている（3Ga, 342f.)。シモンによると、オリヴェタンはユダヤ人著作者たちの知識にも乏しかった。

創世記18章19節のオリヴェタン訳は次のとおりである。


La familiari- te et bonte de Dieu vers A- braham. Abraham en- seignant les filz a viure se- lon Dieu.

ce que ie fay? Veu que de luy doit venir vng peuple grãd & fort/& que en luy seront beneictes toutes les nations de la terre? Car ie scay quil cõmandera a ses enfans et a sa maison apres soy/quilz gardent la voye du Seign̄r pour faire iustice/& iugemẽt: affin que le Seigneur face venir a Abraham ce quil auoit predict de luy.

Car ie scay quil commandera a ses enfans et a sa maison apres soy, quilz gardent la voye du Seigneur pour faire

iustice, et iugement: affin que le Seigneur face venir a Abraham ce quil auoit predict de luy.
というのは、わたしは知っているからだ。彼が彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが正義を、また裁きを行うため、主の道を守るように、命じるであろうことを。主がアブラハムに、彼についてすでに預言していたことを来たらせるために。（avoit＝avait は avoir の半過去形三人称単数。cf. Roget, *Introduction*, 124）。

この訳の最初の部分は、ルフェーブル訳およびウルガータ訳とほぼ一致している。最後の部分（ce quil auoit predict de luy）は大胆な意訳と言ってよい。冒頭部分（Car ie scay quil commandera）は、ルフェーブル訳よりはむしろウルガータ訳（scio enim quod praecepturus sit）に近い。もちろんこれでは、ヘブライ語の יְדַעְתִּיו לְמַעַן אֲשֶׁר を正しく訳したことにはならない。1535年当時、יְדַעְתִּיו の末尾の ו（人称代名詞語尾三人称単数男性形）をきちんと訳出した翻訳聖書はパグニヌスのもの（1528年）とティンダルのもの（1530年）しかなかった。ミュンスターでさえ、ラビ聖書の本文に付けた最初のラテン語訳（1Hk. 1534年）ではこの点があいまいであった。この事実を考慮すると、オリヴェタンがヘブライ語を読めたとしても、こういう訳になったのは無理からぬところであろう。ところで、先に指摘したように、1554年に刊行されたカルヴァンのラテン語版創世記注解（1Lk）に用いられた本文はパグニヌスのものとほぼ同じであるから、カルヴァンがパグニヌス訳を利用したと見るべきであろう。この点と関連して、カルヴァンのフランス語版創世記注解書（1554年、64年）や、彼の死後の1588年に出版されたジュネーヴ聖書（フランス語）の創世記18章19節がどうなっているか、気になるところだが（後述）、その前にオリヴェタン聖書の1553年改訂版を見ておく必要がある。

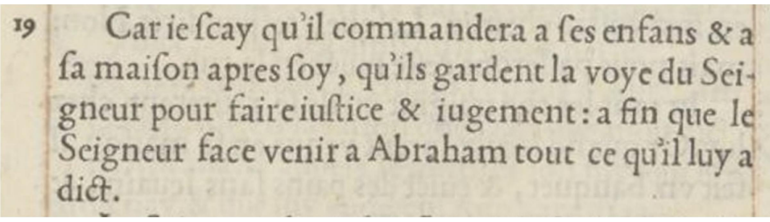
３．オリヴェタン聖書の **1553** 年改訂版（2Fb’）

オリヴェタン聖書は、カルヴァンをはじめとするジュネーヴの学者たちによって出版後何度も（部分的なものも含め）改訂された（たとえば、1536、38、39、40、43、51、53、60、65、67、68、70、80年）（4Fd, 158; 3Ge, 119）。1540年の改訂版は La Bible à l’Épée という綽名をもつ（表紙に剣が描かれている）。1553年の改訂版で節番号が導入された。これらの改訂作業の最終的な結実が1588年のジュネーヴ聖書（フランス語）である。次に、1553年の改訂版を見ることにしよう。

本書は、オリヴェタン聖書の新約の部分をカルヴァンとベーズ（Théodore de Bèze　1519—1605）（3Gm-10 参照）が改訂したものをエティエンヌ（Robert Estienne／Robertus Stephanus　1503—59）がジュネーヴで出版したもので、英語版ジュネーヴ聖書（第７章§７）の翻訳者たちもこれを用いた（2Ef’, 10）。旧約部分にカルヴァンがどの程度関与したかは不明だが、シモンはオリヴェタンによるヘブライ語固有名の訳（フランス語への字訳）をカルヴァンがウルガータ訳に近い形に変えた、と論じている（3Ga, 345）。その種の改変自体は容易に確認できる。一例を挙げると、創世記14章1、4、5、9、17節に現れる人名ケドルラオメル（כְּדָרְלָעֹמֶר）を、オリヴェタンは Cedor-laomer と記していたのに、この改訂版では Chodor-lahomor に変わっている。これはウルガータ訳（およびルフェーブル訳）の Chodorlahomor に近づけた結果であろう。だが、こう変えた人物は本当にカルヴァンだろうか。カルヴァンのラテン語版創世記注解書（1554年）（1Lk）では、この名前が1、4、5節では Chedor-lahómer、9、17節では Cedorlaómer

となっている（ちなみに、パグニヌスの訳文［1Ld］ではすべて Chedorlahómer)。また、§５で見る彼の創世記注解のフランス語訳（1554年）（2Fd）と、カルヴァン自身によるその1564年改訂版（2Fd’）でも、オリヴェタン訳と同じ Cedor-laomer である。従って、Chodor-lahomor をカルヴァンによる改変として説明するのは無理であろう。

本書における創世記18章19節の訳は次のとおりである。


19 Car ie ſcay qu’il commandera a ſes enfans & a
ſa maiſon apres ſoy, qu’ils gardent la voye du Sei-
gneur pour faire iuſtice & iugement: a fin que le
Seigneur face venir a Abraham tout ce qu’il luy a
dict.

Car ie scay qu’il commandera a ses enfans & a sa maison apres soy, qu’ils gardent la voye du Seigneur pour faire iustice & iugement: a fin que le Seigneur face venir a Abraham tout ce qu’il luy a dict.

というのは、わたしは知っているからだ。彼が彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが正義と裁きを行うため、主の道を守るように、命じるであろうことを。主がアブラハムに、彼に言ったすべてのことを来たらせるために。

出だしの部分がルフェーブル訳およびウルガータ訳と一致している点は、1535年の版と同じである。この改訳と初訳との最大の違いは、末尾（“tout ce qu’il luy a dict”）にある。それ以外は、単語の綴りやアポストロフを含むフランス語表記の違いにすぎない。意訳（“ce quil auoit predict de luy”）を改めて、ヘブライ語を忠実に訳そうと努めたのであろう。だがそのさい、ウルガータ訳（“omnia quae locutus est ad eum”）とルフェーブル訳（“toutes les choses qui luy a dit”）も参考にしたであろう。ヘブライ語を文字どおりに訳すと、こうはならない。

なお、オリヴェタン聖書の改訂版の中、1560年の版（Geneva: Zacharie Durant)、67年の版（Geneva: François Estienne)、および70年版（Geneva: Sebastien Honorati）も見ることができたが、創世記18章19節の冒頭は、1560年の版では Car ie sçay qu’il commandera à ses enfans ... 67年と70年版では、どちらも Car ie say qu’il commandera à ses enfans ... 最後の部分はどれも tout ce qu’il luy a dit となっている。これらは、1553年改訂版の本文と実質的に同じである。

４．カステリョによる **1555** 年のフランス語訳（2Fc）

第３章§７で見たように、セバスティアン・カステリョは1546年にモーセ五書を（1Lh)、1551年には聖書全体を（1Li）ラテン語に訳したが、その後1555年に出したフランス語訳の創世記18章19節の訳文は、次のようになっている。節番号はついていない。ラテン語訳も並べて示す。

cions du mōde: Car ie ſai bien qu'il cō
mādera a ſes enfans, e a ceux de ſa mai-
ſon apres ſoi, qu'ils ayēt a garder le che
min du Seigneur, en faiſant droit e rai
ſon, afin que le Seigñr tiēne a Abrahā
ce qu'il lui a promis. Puis dit: Il ſe fait

Car ie sai bien qu'il commandera a ses enfans, e a ceux de sa maison apres soi, qu'ils ayent a garder le chemin du Seigneur, en faisant droit e raison, afin que le Seigneur tienne a Abraham ce qu'il lui a promis.

なぜなら、わたしはよく知っているからだ。彼が彼の子供たちに、また彼の後の彼の家の子供たちに、彼らが法と正義を行いながら、主の道を守らなければならない、と命じるであろうことを、主がアブラハムに対して、彼に約束したことを守るために。

Nam certo scio, suis eum liberis, et porro suae in posterum stirpi praecepturum esse, ut ad Iouae normam uitam dirigentes, iusticiam colant, atque ius, ut Ioua Abrahamo promissa praestet. （ラテン語訳）

なぜなら、わたしは確かに知っているからだ。彼が彼の子供たちに、さらにまた彼の将来の子孫に、彼らがエホバの規範に生き方を合わせながら、正義を、また法を重んじるように、命じるであろうことを。エホバがアブラハムに対して、約束を果たすために。

カステリョのフランス語訳とラテン語訳はやや異なっている。ラテン語訳ほどヘブライ語原文から離れていない（意訳的でない）という印象を受ける。「彼の後の彼の家の子供たち」という訳は、タルグムを参考にしたものかもしれない。ヘブライ語の יְדַעְתִּיו לְמַעַן אֲשֶׁר を正しく訳出していない点は、彼自身のラテン語訳およびオリヴェタン訳と共通する。

５．カルヴァンのフランス語版創世記注解（2Fd, 2Fd'）

フランス語訳聖書と関連して、次にカルヴァンの創世記注解のフランス語訳（1554年初版と64年改訂版）を見ておきたい。これらは、オリヴェタン聖書が1553年に改訂された後、1588年にフランス語版ジュネーヴ聖書が現れるまでの時期に現れた。1554年版における創世記18章19節の訳文（章の冒頭にまとめて掲載）は次のとおりである（18節の注解部分に見出しとして一部引用された本文もこれと同じ）。これがパグニヌスの訳文と異なる点にも注目。

19 Car ie ſay qu'il commandera à ſes enfans & à ſa maiſon apres ſoy,
qu'ils gardent la voye du Seigneur, pour faire iuſtice & iugement:
afin que le Seigneur face venir à Abraham tout ce qu'il luy a dit.

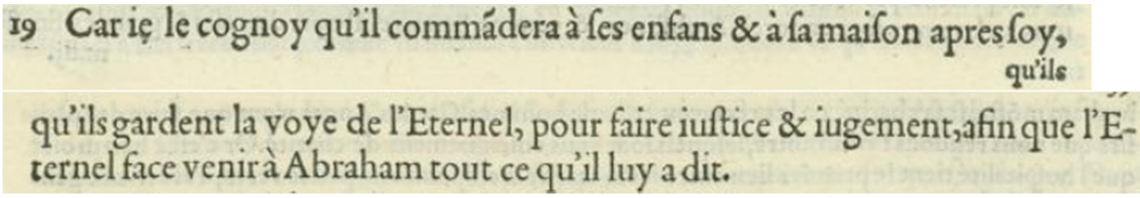
Car ie say qu'il commandera à ses enfans & à sa maison apres soy, qu'ils gardent la voye du Seigneur, pour faire iustice & iugement: afin que le Seigneur face venir à Abraham tout ce qu'il luy a dit.

というのは、わたしは知っているからだ。彼が彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが正義

と裁きを行うため、主の道を守るように、命じるであろうことを。主がアブラハムに、彼に言ったすべてのことを来たらせるために。

この訳文は、綴りのわずかな違いを除けば、先に見たオリヴェタン聖書の1553年改訂版と全く同じである。カルヴァンは、その本文を用いながら1554年にラテン語の創世記注解書を自らフランス語に訳したのだろうか。そうではない。ジルモンによると、カルヴァンは秘書が訳した彼の創世記注解のフランス語訳を1564年に改訂した（出エジプト記から申命記まではカルヴァン自身の翻訳）（4Bq, 120, 147, 305）。従って、初版に掲げられた創世記本文のフランス語訳は、この秘書によるオリヴェタン聖書1553年改訂版の流用であろう。繰り返しになるが、同年に刊行されたラテン語版注解書（1Lk）では、本節はパグニヌスの訳文とほとんど全く同じ “Quia novi eum: propterea praecipiet filiis suis ...”（「というのは、わたしは彼を知ったからだ。そのため、彼は彼の息子たちに・・・命じるであろう」）であり、これは明らかにフランス語訳とは異なるのである。

次に1564年版（カルヴァンの死の年に刊行）を見ると、またしても奇妙なことに気づく。18章の冒頭にまとめて掲げられた19節のフランス語訳が、後の注解部分に見出しとして用いられたフランス語訳と異なるのである。18章冒頭に掲げられた19節の訳は次のようになっている（138—39頁）。


19 Car ię le cognoy qu'il commãdera à ſes enfans & à ſa maiſon apres ſoy, qu'ils
qu'ils gardent la voye de l'Eternel, pour faire iuſtice & iugement,afin que l'E-
ternel face venir à Abraham tout ce qu'il luy a dit.

Car ie le cognoy qu’il commándera à ses enfans & à sa maison apres soy, qu’ils gardent la voye de l’Eternel, pour faire iustice & iugement, afin que l’Eternel face venir à Abraham tout ce qu’il luy a dit.

というのは、わたしは彼を、彼が彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが正義と裁きを行うため、永遠者の道を守るように、命じるであろうことを、知っているからだ。永遠者がアブラハムに、彼に言ったすべてのことを来たらせるために。

この訳と1554年版との違いは、ヘブライ語 יְדַעְתִּיו の末尾の ו を考慮して冒頭部分を ie le cognoy と訳したことと、le Seigneur（主）を l’Eternel（永遠者）に変えたことの２つである。ここで既存のフランス語訳の savoir ではなく connaître を用いたのは、「彼を」という直接目的補語を訳出する必要があったからであろう。connaître の「親しみのニュアンス」は特に強くはないと思われる。（この構文は、que 以下を属詞として説明できるだろうか。それとも、le を「余乗目的語」［注40］と見なすべきだろうか）。

第一点。この点でカルヴァンの訳はパグニヌス訳（ラテン語の注解書で使用）と共通する。しかし、לְמַעַן אֲשֶׁר を propterea ではなく quod の意味にとる点では、むしろミュンスターの1539／1546年の改訳（“Sic enim noui eum, quod praecepturus sit filijs suis & domui suae post se” 「というのは、このようにわたしは彼を知ったからだ。〔すなわち〕彼が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に・・・命じるであ

ろうことを」）（1Hk'）に近いかもしれない。（創世記18章19節に関する限り）カルヴァンがミュンスターの1546年のラテン語訳聖書を利用したのは、1551年当時（4Bq, 145）ではなく、その後（1560年代？）であった可能性を考えるべきであろう。しかし、カルヴァンは יְדַעְתִּיו を ie le cognoy（connais の古形）と現在形に訳しており、その点ではパグニヌス訳ともミュンスター訳とも異なる。カルヴァンのこの訳は、実はのちほど見るティンダル訳（1530年）および英語版ジュネーヴ聖書（1560年）に近いのである。英国から亡命していたジュネーヴ聖書の翻訳者たちがカルヴァンの影響下にあったことはよく知られている（後述）。だが、カルヴァンもまた、ティンダル訳を受け継いで先ごろ新たな訳を出した彼らから刺激を受けたのではないだろうか。本節に関する限り、カルヴァンの訳文がミュンスター訳以上に英語版ジュネーヴ聖書に近いことは確かである。

第二点。l'Eternel という訳語はもちろん意訳である。この訳語はすでにオリヴェタン聖書（2Fb）のタイトル頁に現れ、1553年改訂版（2Fb'）と60年版の表紙でも保たれている。1535年版のタイトル頁にはイザヤ書1章2節が次のように記されている（図版参照）。

Escoutez cieulx, et toy terre preste laureille: car Leternel parle.（天よ聞け、地よ耳を傾けよ。永遠者が話すからだ. שִׁמְעוּ שָׁמַיִם וְהַאֲזִינִי אֶרֶץ כִּי יְהוָה דִּבֵּר）

もちろん、オリヴェタン聖書のイザヤ書本文もこれと同じである。同42：8 の前半は Ie suis Leternel, tel est mon nom（אֲנִי יְהוָה הוּא שְׁמִי）と訳され（5節では Dieu Leternel）、同44：6 は Ainsi dit Leternel, le roy Disrael, son redempteur, le Seigneur des armees batailles（כֹּה־אָמַר יְהוָה מֶלֶךְ־יִשְׂרָאֵל וְגֹאֲלוֹ יְהוָה צְבָאוֹת）、出3：15 は Leternel, le Dieu de voz peres（יְהוָה אֱלֹהֵי אֲבֹתֵיכֶם）（16、18節も同様）、同5：2 の後半は Ie ne cognoy point Leternel（לֹא יָדַעְתִּי אֶת־יְהוָה）、同15：3 は Le Seigneur est vng droict homme de guerre, son nom est Leternel（יְהוָה אִישׁ מִלְחָמָה יְהוָה שְׁמוֹ）となっている。さらに詩8：1 は O Leternel nostre Seigneur（יְהוָה אֲדֹנֵינוּ）、同104：35 後半は Mon ame beneis le Seigneur. Louez Leternel（בָּרֲכִי נַפְשִׁי אֶת־יְהוָה הַלְלוּ־יָהּ）と訳されている。しかし、オリヴェタンはこの訳語を一貫して用いたわけではない。後年の版よりも、かなり少ないように見える（比較的目立つのは詩編の用例）（cf. 4Fa, 171）。そうでない例をたとえば創世記で探すと、容易に見つかる。2：4 le Seigneur Dieu（יְהוָה אֱלֹהִים）（ただし欄外にヘブライ語と共に Leternel という別訳を示している）、4：1 de par Dieu（אֶת־יְהוָה）（1553年版と60年版では de par l'Eternel）、11：5 le Seigneur（יְהוָה）、49：18 Seigneur（יְהוָה）等々。イザヤ書でも Leternel が多いわけではない。たとえば、1：9 le Seigneur des armees（יְהוָה צְבָאוֹת）、1：10 la paroll du Seigneur（דְבַר־יְהוָה）、2：5 la lumiere du Seigneur（אוֹר יְהוָה）、11：2 lesperit du Seigneur（רוּחַ יְהוָה）、26：11-17 Seigneur（יְהוָה）。以上は、創4：1 を除き、1553年版と1560年版（これらに創2：4の注記はない）でも同じである。

このようにオリヴェタンは Leternel（l'Eternel）を決して多用しなかったのだが、カルヴァンが1564年に改訂した創世記注解書のフランス語（2Fd'）では、l'Eternel（l'Éternel）をほぼ一貫して用いている。このことは、たとえば２章（4、5、7、8、9、15、16、18、19、21、22節）と４章（1、3、6、9、13、15、16、26節）を見ればすぐに分かる。２章のヘブライ語 יְהוָה אֱלֹהִים をカルヴァンはすべて l'Eternel

Dieu と訳し、4 章の יְהוָה は l'Eternel と訳している（4 : 4 だけは le Seigneur）。彼がこうしたのには、当然強い神学的理由があったのだろうが、ここでその点に踏み込む余裕はない。なお、この訳語は1588年のジュネーヴ聖書（次項）、さらに300年以上も後のルイ・スゴン訳（1874年）（注32参照）でも同様に用いられている。

次に、創世記18章19節の注解の冒頭部分を、1554年版と1564年版で比較すると、次のようになる。

Car ie ſay qu'il commandera à ſes enfans.) La ſeconde raiſon, pour laquelle Dieu veut faire Abraham participant de ſon conſeil, eſt, qu'il preuoit qu'il ne le fera point inutilemét ny en vain. Or le ſimple ſens eſt, qu'Abraham eſt admis au conſeil de Dieu, d'autant qu'il doit faire l'office d'vn bon pere de famille, à enſeigner les ſiens. De cecy nous recueillons qu'Abraham n'a point eſté certi- 19

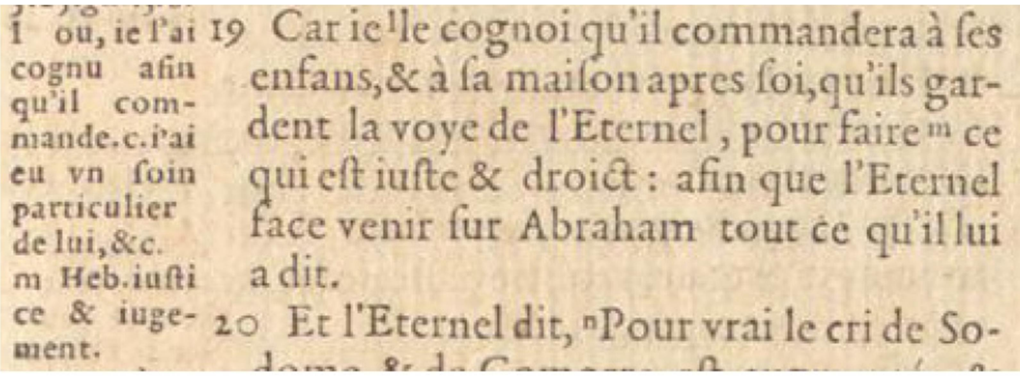
19 *Car ie ſay qu'il commandera à ſes enfans.* La ſeconde raiſon pour laquelle Dieu veuſt faire Abraham participant de ſon conſeil eſt, qu'il preuoit qu'il ne le fera point inutilement ni en vain. Or le ſimple ſens eſt qu'Abraham eſt admis au cõſeil de Dieu, d'autãt qu'il doit faire l'office d'vn bõ pere de famille, à enſeigner les ſiens. De ceci nous recueillons qu'Abraham n'a point eſte certifié de la

見てのとおり、説明文自体は、綴りの細かな変更以外変わっていない。この点に問題はない。だが奇妙なことに、19 節注解の見出しに用いられたフランス語訳は、1554 年版も 1564 年版も同じである（オリヴェタン聖書の 1553 年改訂版と実質的に同じ）。1564 年版でカルヴァンは、18 章冒頭にこれとは異なる訳（Car ie le cognoy qu'il commándera à ses enfans ...）を掲げていながら、なぜ注解部分で以前の訳を用いたのだろうか。今日の注解書ではとても考えられないやり方だ。以下のように推測できないだろうか。——יְדַעְתִּיו の末尾の ו を人称代名詞語尾三人称単数男性形として訳出するのがヘブライ語の翻訳としては正しいことを、カルヴァンはすでにパグニヌスから学んでいたのだが、さらにこの時点で英語版ジュネーヴ聖書（1560 年．第 7 章§ 7 参照）のように訳せることを知った。そこで 18 章の冒頭ではそれに近い自分のフランス語訳を掲げた。だが、彼の考えでは（たぶん英語版ジュネーヴ聖書の翻訳者たちにとっても）、それは文字面にすぎず、本文の意味を変えるものではなかった。言い換えると彼は、「わたしは彼を、彼が彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に・・・命じるであろうことを、知っているからだ」における「彼を」を言わば冗語と見なし、「彼を知っている」に積極的な意味を認めなかった。実際、その冗語を省けば 1554 年版の訳（およびウルガータ訳）に近くなる。そのため、後者を注解部分の見出しに用いることに抵抗はなかった。いや、むしろその方が好都合であった。「神がアブラハムを自らの決定に与る者にしようとする」（Dieu veust faire Abraham participant de son conseil）ことは、神によるアブラハムの選びと関係するから、その選びが "Ie le cognoy" に含意されていると考えてよいはずなのに、カルヴァンはこれにそうした含意を認めなかったのであろう。"cognoy" という現在形に訳したこともそのことと無関係ではない。たぶん彼は、パグニヌス訳の完了形 "noui" を「私は（知った結果として）知っている」という意味に、つまり "scio" と同じ意味にとったのであろう。ティンダルらも同じかもしれない。だが次に見るように、フランス語版ジュネーヴ聖書（次節）の翻訳者たちは、この問題に気づいたと思われる。

６．ジュネーヴ聖書（フランス語）(2Fe)

一般にジュネーヴ聖書と呼ばれる聖書は、オリヴェタン聖書を土台とするプロテスタントによるフランス語訳聖書の決定的改訂版であり、カルヴァンの後継者となったベーズ（カルヴァンが1559年に設立したジュネーヴ学院の初代学長）とコルネイユ・ベルトラム（Bonaventure Corneille Bertram　1531―94. ジュネーヴ学院のヘブライ語教授）（4Ec, 78）を柱とするジュネーヴの牧師会の聖書翻訳改訂活動をうけて、1588年に出版された（3Ge, 119）。シモンはベルトラムの言語能力と、彼がオリヴェタンとカルヴァンの訳文を正しく訂正したことを高く評価しながらも、ラビたちの解釈をわけもなく採り入れたとして批判している（3Ga, 347）。本書のタイトル頁にイザヤ書の一節は記されていない（遅くとも1567年の版から見当たらない）。見直しにさいしては、カルヴァンらと敵対していたカステリョの訳を含む以前の翻訳も参考にされた。そして、1693年に至るまで、本書は、ごく小さな訂正を施されるだけで、改革派の世界で広く使用され続け、フランス国内でも再版された（リヨン、カーン、パリ、ラ・ロシェル、セダン、シャラントン、ニオール）（4Fa, 171; 3Ge, 119f.）

本書における創世記18章19節の本文と傍注は次のとおりである。


l ou, ie l'ai cognu afin qu'il commande. c. i'ai eu vn soin particulier de lui, &c.
m Heb. iustice & iugement.

19 Car ie l le cognoi qu'il commandera à ses enfans, & à sa maison apres soi, qu'ils gardent la voye de l'Eternel, pour faire m ce qui est iuste & droict: afin que l'Eternel face venir sur Abraham tout ce qu'il lui a dit.
20 Et l'Eternel dit, n Pour vrai le cri de So-

Car ie le cognoi qu'il commandera à ses enfans, & à sa maison apres soi, qu'ils gardent la voye de l'Eternel, pour faire ce qui est iuste & droict: afin que l'Eternel face venir sur Abraham tout ce qu'il lui a dit.

というのは、わたしは彼を、彼が彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが正しく真っすぐなことを行うため、永遠者の道を守るように、命じるであろうことを、知っているからだ。主がアブラハムのために、彼に言ったすべてのことを来たらせるために。

先に述べたように（§３）、オリヴェタン聖書の1567年と70年の改訂版では、創世記18章19節の最初の部分はどちらも Car ie say qu'il commandera à ses enfans、最後の部分は tout ce qu'il luy a dit となっていた。従って、この訳は、特に最初の部分を見直して改訂した新訳である。見直しにさいしては、前述したカルヴァンのフランス語版創世記注解書の1564年改訂版を参考にしたであろう。

Car ie le cognoy qu'il commándera à ses enfans & à sa maison apres soy, qu'ils gardent la voye de l'Eternel, pour faire iustice & iugement, afin que l'Eternel face venir à Abraham tout ce qu'il luy a dit.　（カルヴァン、1564年）

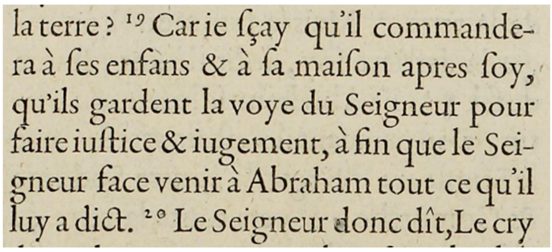
カルヴァン訳との違いは、pour faire iustice & iugement を pour faire ce qui est iuste & droict に、また venir à Abraham を venir sur Abraham に、変えたことである。それ以外は綴りの小さな違いに過ぎない。後者（à を sur に変更）はヘブライ語の前置詞のとり方の違いだが（他の翻訳聖書にも見られる）、前者は、直訳調ではない表現をよしとした結果であろう（欄外注 m にヘブライ語直訳＝カルヴァン訳を示している）。従って、ヘブライ語本文の意味のとり方の点では、カルヴァン訳とほとんど同じである。
　だが、注 1 に、非常に興味ぶかいことが書かれている。

ou, ie l'ai cognu afin qu'il commande. c. i'ai eu vn soin particulier de lui, &c.
あるいは、「わたしは彼が命じるために、彼を知った」。つまり、彼を特別に配慮した・・・。

この別訳では、ヘブライ語の יְדַעְתִּיו（完了形）が、カルヴァン訳のように現在形ではなく、複合過去に訳されている。そして「知った」の意味内容が「特別な配慮」として解されている。これははるか昔にラシが注解で述べていたことなのだが（第2章§6参照）、このことをキリスト教徒のヘブライ語学者たちは、この時期になるまでほとんど認識していなかったように見える。たとえ別訳であっても、これが翻訳聖書に記されたことは画期的である。ほとんど突然変異的なこの訳文はベルトラムによると思われる。これについては、「第一部の結び」で詳しく見ることにしたい。ヘブライ語をこれと同様に解するミヒャエリス訳のドイツ語訳が出たのは、実に1775年のことである（注31）。ジュネーヴ聖書を受け継いだ学者たちの反応は鈍く、この別訳は1687年になっても従来の本文と置き換えられなかった（*La Bible, qui est toute la Sainte Escriture du Vieil et du Nouveau Testament: autrement, l'ancienne et la nouvelle alliance, le tout reveu & conferé sur les textes hebreux & grecs: avec les Pseaumes de David.* A Londres: Imprimée par R. Everingham, & se vend chez R. Benteley, 1687）。それどころか、ジュネーヴ聖書のマルタン（David Martin　1639—1721）による改訳（1707年）とオステルヴァルド（Jean-Frédéric Ostervald　1663—1747）の改訳（1744年）では（注35）、この洞察が全く無視され、前者では Car je le connois, & *je sai* qu'il commandera à ses enfants ... 後者では Car je le connais et je sais qu'il commandera à ses enfants ... という訳文になっている。これらの聖書に、18章19節についての注釈は含まれない。

７．カトリックによるフランス語訳

　最後に、カトリック陣営によるフランス語訳聖書にごく簡単にふれておくことにする。彼らは改革派による聖書翻訳と並行して、ルフェーブル訳に改変を加えたルーヴァン聖書（Bible de Louvain. 1550年）やルネ・ブノワ（René Benoist　1521-1608）の1566年の訳を用いた「ルーヴァンの神学者たちの聖書」（Bible des théologiens de Louvain. 1578年）を出版した（注36）。それらに立ち入る余裕はないので、ここでは1587年の訳を見るに留めたい（2Ff）。創世記18章19節の訳文は次のとおりである。


la terre ? 19 Car ie ſçay qu'il commande-
ra à ſes enfans & à ſa maiſon apres ſoy,
qu'ils gardent la voye du Seigneur pour
faire iuſtice & iugement, à fin que le Sei-
gneur face venir à Abraham tout ce qu'il
luy a dict. 20 Le Seigneur donc dît, Le cry

Car ie sçay qu'il commandera à ses enfans & à sa maison apres soy, qu'ils gardent la voye du Seigneur pour faire iustice & iugement, à fin que le Seigneur face venir à Abraham tout ce qu'il luy a dict.

というのは、わたしは知っているからだ。彼が彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが正義と裁きを行うため、主の道を守るように、命じるであろうことを。主がアブラハムに、彼に言ったすべてのことを来たらせるために。

この訳文の前半部は先ほど見たオリヴェタン聖書の1553年改訂版と全く同じである。当時のフランスのカトリック教会が改革派の仕事に注目し、躊躇なく模倣したことが、ここから分かる（3Ge, 447f. ; 3Br「聖書の翻訳：フランス語」）。

第７章　日常語訳における創世記 18 章 19 節――（３）英語訳

聖書の英語訳とその宗教的・政治的背景、およびウィクリフ派による英語訳（1384 年頃）など 15 世紀以前の英語訳については、日本語で読める解説書が複数刊行されている（4El, 4Em, 3Bs 等）。本書では、ヘブライ語原典から訳された創世記 18 章 19 節のティンダル以後の翻訳と直接関係する事項にしぼって見ていくことにしたい。

１．ティンダルのモーセ五書英語訳（2Ea）

ウィリアム・ティンダル（William Tyndale　c. 1494―1536）の生涯と背景については、詳しい伝記（4Ej）があるので説明を省略する。彼は、1526年にドイツのヴォルムスで英語訳新約聖書の印刷版を発行した後、旧約聖書のモーセ五書とヨナ書を生前に翻訳出版した（1530年）。ヨシュア記から歴代誌までの歴史書についても翻訳を済ませていたらしいが、それらの出版を見ることなく、「異端者」として処刑された。

ティンダルはヴィッテンベルク（のアウロガルスの下？）で初めてヘブライ語を学んだらしい（4Ec, 117; 4Ej, 499f.; 4Eg, 308）。驚くことに、その後の数年間で旧約聖書を訳せるまでに上達した。彼が具体的にどのヘブライ語聖書を用いたかは分かっていない。複数の可能性が考えられる（1488年のソンチーノ版、1494年のブレシア版、1517年の第一ラビ聖書、1524年の第二ラビ聖書、1522年出版のコンプルートゥム多言語聖書。その他ギンスブルクの一覧表［4Ha］を参照）（2Ea', lxxi.; 4Ed, 22; 4Eg, 308）。

だが、創世記18章19節に関する限り、ヘブライ語本文自体はどの版も同じなので、われわれはむしろ、ティンダルが聖書翻訳の助けにしたであろう参考文献（既存の訳、注解、辞書・文法書）に注目すべきである。既存の訳としては何と言っても、ルターによる五書のドイツ語訳が手近にあり（1523年．2Ga）（注37）、パグニヌスによるヘブライ語聖書原典からのラテン語訳も利用できた（1528年．1Ld）。ルフェーブル・デタープルのフランス語訳も知っていた可能性がある（1530年．2Fa）（4Ej, 497; 4Gk, 226）。このほかツヴィングリの創世記注解書（1Lc. 第３章§２参照）も見たかもしれない（4Ej, 496; 4Gk, 226）。辞書類としては、ダヴィド・キムヒの『語根の書』（初出1469～73年．1Dd）、ロイヒリンの『ヘブライ語入門』（1506年．1Df）、コンプルートゥム多言語聖書第六巻に含まれるヘブライ語の辞書（1520年以後．1Hh'）、およびミュンスターの最初のヘブライ語辞書（1523年．1Dg）等が利用できたであろう（2Ea', lxx-lxxi; 4Ed, 22; 4Eg, 308）。これらの中、最も助けになったのは、ヘブライ語の教科書として使用したであろうロイヒリンの『ヘブライ語入門』を別にすれば、ルターのドイツ語訳とパグニヌスのラテン語訳であったと推測される。ルフェーブルの訳はウルガータに基づいていたので、原典からの翻訳を目指すティンダルにとっては、単なる刺激にすぎなかったであろう。ツヴィングリの注解書を見ることができたとすれば、もちろん役立ったであろうが、以下に見るように、18章19節に関する限り、彼は明らかにツヴィングリとは別様に解釈した。コンプルートゥム多言語聖書をどこかの図書館で見ることができたとすれば、第一巻の本文欄外に示されたヘブライ語の語根と、第六巻に収録された充実した辞書は、原典の読解にかなり役立ったであろう。だが、これらも含め、当時の主要な辞書や文法書に創世記18章19節の翻訳に直接役立つ記述は見当たらない（前述）。唯一の例外はラビ聖書に含まれるラシの注解（タ

ルグムを批判）だが、ラシとの関係については18章19節のティンダル訳を見てから考察することにしたい。

ロイド・ジョーンズは、ティンダルの翻訳と、パグニヌスの辞書（1529年．1Di）およびラテン語訳聖書（1Ld）との関係に注意を促した（4Ec, 118ff.)。一例だけ見ることにしよう（ロイド・ジョーンズは創41：43、49：26も取り上げている)。創世記6章3節の訳について、ティンダルはウルガータ訳やルター訳ではなく、パグニヌスの辞書（ラテン語訳聖書ではない）に示されたラビたちの解釈の１つを採用した。本節の לֹא־יָדוֹן の解釈については伝統的に２つの解釈があるが（七十人訳、ウルガータ訳、シリア語訳、ＴＯ、イブン・エズラは「留まらない」。シュンマコス訳、ＴＰＪ、ルター訳は「裁かない」)、パグニヌスはこの辞書の中で、「争わない」という解釈（ラビ・ユダ、ヨセフ・キムヒ）を紹介した（דון の項目．397頁）（注38)。本節の解釈は難問なので、ここではウルガータ訳、ルター訳、パグニヌス訳、ティンダル訳を比較するに留める。

וַיֹּאמֶר יְהוָה לֹא־יָדוֹן רוּחִי בָאָדָם לְעֹלָם（ＢＨＳ）

Dixitque Deus, Non permanebit spiritus meus in homine in aeternum.（ＶＵＬ）

Da sprach der HERRE, Meyn geyst wirt nicht ymerdar richter seyn vnter den menschen.（ルター1523年．1534年版で改訳）

non litigabit／contendet／certabit spiritus meus cum homine.（パグニヌスの辞書）

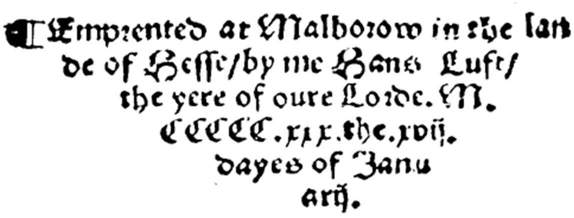
And the LORd sayd: My spirite shall not allwaye stryve withe man.（ティンダル）

すぐに分かるように、ティンダルの訳文（「わたしの霊は、いつまでも人と争うことにはならぬであろう」）(注39）は、ウルガータ訳（「わたしの霊が人のうちにいつまでも留まることはないであろう」）ともルター訳（「わたしの霊は、いつまでも人間たちの間で裁き主ではないであろう」）とも異なり、パグニヌスの辞書に紹介された一部のラビたちの解釈にきわめて近い。彼はどのようにしてこの訳に到達したのだろう。自分で思いついたとは考えにくい。難解なヘブライ語本文を前にしてパグニヌスの辞書をひもとき、その中に適切と思われる解釈（訳）を見つけて、それを取り上げたのであろう。ティンダルがパグニヌスのヘブライ語辞書とラテン語訳を利用したことは確実と言ってよい（たとえば、創41：43 וַיִּקְרְאוּ לְפָנָיו אַבְרֵךְ のティンダル訳 “And they cryed before him Abrech” は、ウルガータ訳ともルター訳とも七十人訳とも異なり、パグニヌスのラテン語訳聖書の訳文 “Et clamabant ante eum Abréch” と正確に一致する)。これは彼の語学力欠如を示すものではない。ウルガータ訳やルター訳に（さらにはパグニヌスの訳にも）疑問をもった結果、パグニヌスの辞書を参照し、そこに紹介されたラビたちの解釈の中から最適と思われるものを選んで、それを彼の英語訳に用いたと見るべきであろう。

２．ティンダルのモーセ五書の創世記 18 章 19 節（2Ea）

ティンダルによるモーセ五書英語訳をもう少し詳しく見ることにしよう。本書に全体の表紙はなく、各書ごとにタイトル頁と序文が個別に設けられている。創世記のタイトル頁の表題は “The fyrst boke of Moses called Genesis” である。ここには何の書誌的記述もないが（表紙図版参照)、これに続く “W. T. To

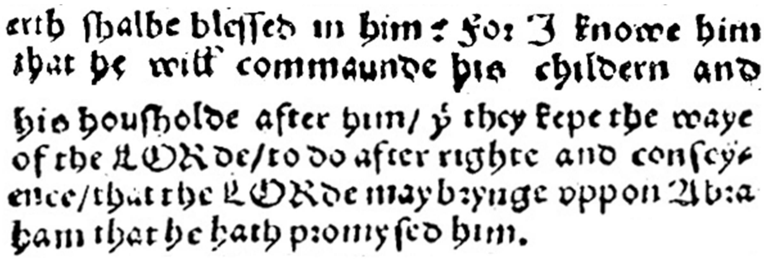
the Reader” で始まる前書き（全体の序文を兼ねる）から、翻訳者がティンダルであることが知られる。創世記と出エジプト記の間には “A table expoundinge certeyne wordes” と題された文章がはさまれ、これは次の「奥付」で終わっている。


Emprented at Malborow in the lan
de of Hesse/by me Hans Luft/
the yere of oure Lorde. M.
CCCCC.xxx.the.xvij.
dayes of Janu
arij.

Emprented at Malborow in the lande of Hesse, by me Hans Luft, the yere of oure Lorde. M. CCCCC. xxx. the. xvij. dayes of Januarij.

Malborow はマールブルク、Hesse はここではアントワープを指す。印刷業者の名が Hans Luft となっているが、実際にはアントワープのホーホストラーテン（Johannes Hoochstraten）が印刷を行った（4Ej , 265, 473; 3Ge, 143）。日付は「1530年1月17日」である。

さて、ティンダルによる創世記18章19節の英語訳は次のようになっている（頁をまたぐ）。


erth shalbe blessed in him: For I knowe him
that he will commaunde his childern and
his housholde after him/ y^{t} they kepe the waye
of the LORde/to do after righte and conscy-
ence/that the LORde may brynge vppon Abra
ham that he hath promysed him.

For I knowe him that he will commaunde his childern and his housholde after him, y^{t} they kepe the waye of the LORde, to do after righte and conscyence, that the LORde may brynge vppon Abraham that he hath promysed him.

というのは、わたしは彼を、彼が彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが正義と良心に従って行動するため、主の道を守るように、命じるであろうことを、知っているからだ。主がアブラハムの上に、彼に約束したことをもたらすために。（y^{t} は that の略号）（注40）

これをルター訳およびパグニヌスの訳と比べると、ティンダル訳の性格が見えてくる。

denn ich weys, er wirt befehlen seynen kindern vnd seynem hausze nach yhm, das sie des HERRN wege hallten, vnd thun was recht vnd redlich ist, Auff das der HERR auff Abraham kommen lasse, was er yhm verheyssen hat.

というのは、わたしは知っているからだ。彼は彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが主の

道を守り、そして正しく誠実なことを行うように、命じるであろう。主がアブラハムの上に、彼に約束したことを来たらせるために。（ルター訳1523年．2Ga）

Quia noui eum. Propterea praecipiet filijs suis, & domui suae post se, & custodient uiam domini, ut faciant iustitiam, et iudicium, ut uenire faciat dominus super Abraham quod locutus est super eum.
というのは、わたしは彼を知ったからだ。そのため、彼は彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に命じ、そして彼らは、正義を、また裁きを行うべく、主の道を守るであろう。主がアブラハムの上に、彼について言ったことを来たらせるために。（パグニヌス訳1528年．1Ld）

ティンダルの訳はパグニヌス訳と同様、ヘブライ語 יְדַעְתִּיו の末尾の ו を訳出しており、その点ではルター訳にまさると言ってよい。彼は語末の 1 文字にこだわり、考えをめぐらした結果、パグニヌスの解釈を受け入れたのであろう。パグニヌスのヘブライ語辞書（1529年．יָדַע の項目）（1Di）も、本節について同じ訳を載せている。だがティンダルは、noui（完了形）を「知った結果として知っている」、つまり scio と同じ意味にとって、“knowe” と訳したのであろう。一方、לְמַעַן אֲשֶׁר のとり方については迷いがあったように見える。パグニヌスの辞書は助けにならなかった（前述）。彼はこれをパグニヌスのように「そのため」ととることを疑問視したが、そうかと言ってその正確な意味は分からなかった。そこで、ウルガータ訳（quod）に従ってこれを that と訳した。ルター訳はこれを訳出していないが、構文のとり方はウルガータと同じであり、ヘブライ語の完了形を現在形に訳す点でもルターとティンダルは共通する（「第一部の結び」参照）。ティンダルの訳文は意味的にはルター訳と同じと言ってよいかもしれない。しかし、ルター自身が誰よりも自覚していたように、聖書の翻訳は決して完結する作業ではない。語末の ו を訳出しないことは、聖書本文の釈義を妨げこそすれ、前進させるものでは決してない。

創世記18章19節のティンダル訳を見るかぎり、もし彼がラビ聖書を用いたとすれば、そこに含まれるラシの注解（タルグムの解釈を批判）からほとんど何も学ばなかったことになる。ヘブライ語の読解力が足りなかったのだろうか。もちろん、だからと言って彼がラシの注解を知らなかったとは断定できないが（4Ej, 496）、ラビ的解釈についてのティンダルの知識はラビ聖書から直接得たものではなく、パグニヌスの辞書を見て学んだもののように思われる。

さて、先にも述べたように、ティンダルによる創世記18章19節の訳文は、1564年のカルヴァン訳（2Fd’）とよく似ている。

Car ie le cognoy qu’il commándera à ses enfans & à sa maison apres soy, qu’ils gardent la voye de l’Eternel, pour faire iustice & iugement, afin que l’Eternel face venir à Abraham tout ce qu’il luy a dit.
というのは、わたしは彼を、彼が彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが正義と裁きを行うため、永遠者の道を守るように、命じるであろうことを、知っているからだ。永遠者がアブラハムに、彼に言ったすべてのことを来たらせるために。（カルヴァン、1564年訳）

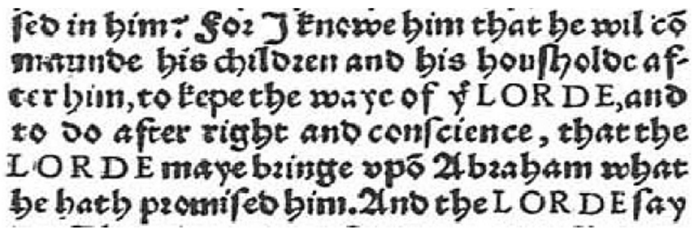
もちろん、ティンダル訳の方が先であるから、繰り返しになるが、ティンダルの訳が英語版ジュネーヴ聖書（1560年．本章§７）に受け継がれ、それがカルヴァンとジュネーヴの学者に受容された可能性が考えられるであろう。しかし、ティンダル訳から英語版ジュネーヴ聖書に至る３０年間は聖書翻訳の空白期ではなかった。その期間に現れた複数の英語訳の訳文をたどると、もう一つ興味ぶかい事実が明らかになる。以下の論述は主としてその観点からのものである。

３．カヴァデイル聖書（2Eb, 2Eb'）

マイルズ・カヴァデイル（Miles Coverdale　1488—1568）がまとめたこの聖書は、英語で印刷出版された最初の旧新約聖書であり、最初は1535年に大陸（ケルン）で印刷されたものが英国に持ち込まれた（注41）。カヴァデイルは、ケンブリッジでアウグスティヌス会の修道士となったが、ルターの思想を受け入れて自ら聖職を辞した。1528年から34年にかけて大陸に逃れ、1529年にはティンダルのモーセ五書の翻訳助手を務めたらしい（4Em, 179; 4El, 71; 3Ge, 148; 4Ec, 123f.）。

タイトル頁（大陸版）に “faithfully and truly translated out of Douche and Latyn in to Englishe” とあるように（Douche は「ドイツ語」の意）、本書はヘブライ語とギリシア語の原典から直接訳されたものではない。彼はヘブライ語が全くできず、ギリシア語の知識も乏しかった（4Ec, 123）。ヘンリー８世への献辞（“Unto the most victorious Prynce and oure most gracyous soueraigne Lord, kynge Henry the eyght” で始まる）の終わりの方で、彼は “[I] haue with a cleare conscience purely & faythfully translated this out of fyue sundry interpreters” と述べている。この「５つの訳本」は、ウルガータ訳、パグニヌスのラテン語訳（1528年）、ルターのドイツ語訳、チューリヒ聖書1531年版および1534年版、そしてティンダル訳を指すのであろう（3Ge, 148; 4Ea, 291; 4El, 75f.）。特にモーセ五書、ヨナ書、新約聖書については、ティンダルの訳を下敷きにした。

創世記18章19節の訳文は次のとおりである（2Eb'）。


sed in him? For I knewe him that he wil cō
maunde his children and his housholde af-
ter him, to kepe the waye of ẏ LORDE, and
to do after right and conscience, that the
LORDE maye bringe vpō Abraham what
he hath promised him. And the LORDE say

For I knowe him that he wil commaunde his childern and his housholde after him, to kepe the waye of y^{e} LORDE, and to do after right and conscience, that the LORDE maye bringe vpon Abraham what he hath promised him.

というのは、わたしは彼を、彼が彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に、主の道を守り、そして正義と良心に従って行動するように、命じるであろうことを、知っているからだ。主がアブラハムの上に、彼に約束したことをもたらすために。（y^{e} は the の略号）

冒頭部分はティンダルの訳文と同じである。“to kepe the waye of y^{e} LORDE, and to kepe the waye of the

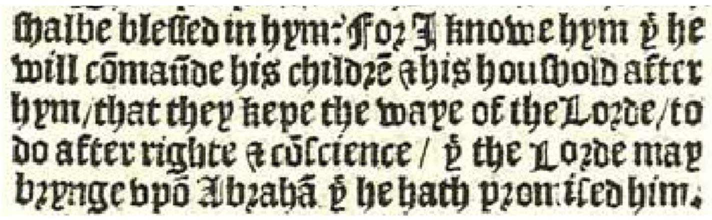
LORDE” は、ヘブライ語を考慮せずに英語の文体を改善した結果であろう。２つの不定詞句を並べているが、ヘブライ語の構文を尊重すればティンダル訳のようにすべきである。

なお、1531年版のチューリヒ聖書（ドイツ語）の訳（1534年版も同じ）（注42）は、本節の英語訳には反映されていない。

４．マシュー訳聖書（2Ec）

1537年に出版された本書は、タイトル頁に “translated into Englysh by Thomas Matthew” とあるように、トマス・マシューが訳したことになっているが、これはティンダルの友人ジョン・ロジャーズ（John Rogers　c. 1500―55）の筆名である（4Ec, 124f.; 3Ge, 150; 4El; 4Em）。彼はバーミンガム近郊アストンの出身だが、1534年にアントワープに渡って、そこの毛織物輸出商組合のチャプレンになった。そのときティンダルと知り合い、感化を受けてプロテスタントに転向し、ティンダルの助手を務めた。ティンダルがアントワープで逮捕される直前、ロジャーズは彼の未完の手稿（ヨシュア記～歴代誌下）を託され、それをこの聖書に用いた（4Em, 182f.）。タイトル頁の最下段には “Set forth with the Kinges most gracyous lycence”（「国王の有難くも情け深い認可を得て公刊された」）という一文が印刷され、本書が国王の認可を受けた〔最初の〕英語訳聖書であることをうたっている。彼は、モーセ五書と新約聖書についてはティンダルの訳（五書は1530年訳）、ヨシュア記から歴代誌下まではティンダルの手稿、旧約聖書の他の書（エズラ記～マラキ書）と旧約外典についてはカヴァデイルの訳を用いて（「マナセ祈り」だけはオリヴェタンのフランス語訳に基づく彼自身の訳）、本書をまとめ上げた（4Ec, 124f; 3Ge, 150; 4El, 77f.; 4Em, 183）。なおロジャーズは、後に英国に帰国して聖職についたが、メアリー女王時代にプロテスタント迫害の標的となり、1555年に殉教の死を遂げた。

マシュー訳聖書の創世記18章19節の訳文は次のとおりである。


shalbe blessed in hym: For I knowe hym ỷ he
will cōmaũde his childrẽ & his houshold after
hym/that they kepe the waye of the Lorde/to
do after righte & cōscience / ỷ the Lorde may
brynge vpō Abrahã ỷ he hath promised him.

For I knowe hym y^{t} he will commaunde his children & his houshold after hym, that they kepe the waye of the Lorde, to do after righte & conscience, y^{t} the Lorde may brynge vpon Abraham y^{t} he hath promised him.

これは、綴りのごくわずかな相違を別にすれば、ティンダル訳と全く同じである。

５．タヴァナー聖書（2Ed）

本書は、大法官トマス・クロムウェル（Thomas Cromwell　c. 1485―1540）の支持者リチャード・タヴァナー（Richard Taverner　1505―75）が、マシュー訳聖書を単独で改訂したものである。彼はギリシア語には堪能であったが、ヘブライ語はできなかった。そのため、旧約聖書の手直しはウルガータ訳に

照らしてなされた（3Ge, 154; 4Em, 184）。1539年に出版され、ヘンリー８世に献呈された。創世記18章19節の訳文は次のとおりであり、綴りの違いを除けば、マシュー訳およびティンダル訳と全く同じである。

in hym? For I knowe hym that he wyll com=
maunde his chyldren and his housholde after
hym, that they kepe the waye of the Lorde/ to
do after ryght and conscyence / that the Lorde
may brynge vpon Abraham that he hath pro=
mysed hym.

For I knowe hym that he wyll commaunde his chyldren and his housholde after hym, that they kepe the waye of the Lorde, to do after ryghte and conscyence, that the Lorde may brynge vpon Abraham that he hath promysed him.

６．大聖書（2Ee, 2Ee''）

本書は、カヴァデイルがクロムウェルからプロテスタント色の濃いマシュー訳聖書を改訂するように命じられて1539年に作成したもので、大判（11インチ×16.5インチ）のため『大聖書』（the Great Bible）と呼ばれている（3Ge, 151ff.; 4Ec, 125f.; 4El, 79f.; 4Em, 185．表紙図版参照）。パリで印刷された原稿がロンドンへ運ばれ、そこで完成された（4Em, 185）。ここで参照するのは、改訂を施された1540年4月の第二版であり（2Ee''）（4El, 80）、タイトル名自体が初版と変わっている（注43）。"This is the Byble apoynted to the vse of the churches." という一文は、本書が英国国教会の公認聖書として各教会に常備されるべきものであることを示している。また、表題から分かるように、これにはカンタベリー大主教クランマー（Thomas Cranmer　1489—1556焚刑）の長い序文（"A prologue or preface made by the moost reuerende father in God, Thomas Archbyshop of Canturbury, Metropolytan Prymate of Englande"）がついている。そのため、これ以後の版は『クランマー聖書』と呼ばれることも多い。（印刷業者の名に因んだ "Whitchurch's Bible" という言い方もされる）。

大聖書の創世記18章19節の訳文は次のとおりである。

be blessed in him: I knowe this also, that he
will commaunde his chyldren and hys hou=
shold after him, that they kepe the waye of y^{e}
Lorde, and do after ryghte and conscyence,
that the Lorde maye bringe vpon Abraham
all that he hath spoken vnto him.

I knowe this also, that he will commaunde his chyldren and hys houshold after him, that they kepe the waye of y^{e} Lorde, and do after ryghte and conscyence, that the Lorde maye bringe vpon Abraham all that he hath spoken vnto him.

このこともまたわたしは知っている。〔すなわち〕彼が彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に、彼

らが主の道を守り、そして正義と良心に従って行動するように、命じるであろうことを。主がアブラハムの上に、彼に向って話したすべてのことをもたらすために。

よく知られていることだが、本書の旧約部分の改訂にさいしてカヴァデイルは、マシュー訳を基本としながら、ミュンスターのヘブライ語ラテン語対訳聖書（1534—35）（1Hk）を参照した（3Ge, 152; 4Ec, 126; 4Ea, 292; 4El, 80; 4Em, 186）。創世記18章19節の訳文はそのことを如実に示している（他にコンプルートゥム多言語聖書も用いたらしい）。以下、大聖書、ミュンスター訳（1534年）、ティンダル訳を並べて示す（日本語訳のみ）。

このこともまたわたしは知っている。〔すなわち〕彼が彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが主の道を守り、そして正義と良心に従って行動するように、命じるであろうことを。主がアブラハムの上に、彼に向って話したすべてのことをもたらすために。（大聖書1540年）

このこともまたわたしは知っている。〔すなわち〕彼が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが主の道を守り、そして正義と裁きを行うように、命じるであろうことを。確かに主がアブラハムの上に、彼に向って話したすべてのことをもたらすために。（ミュンスター訳1534年）

というのは、わたしは彼を、彼が彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが正義と良心に従って行動するため、主の道を守るように、命じるであろうことを、知っているからだ。主がアブラハムの上に、彼に約束したことをもたらすために。（ティンダル訳）

三者の比較から、カヴァデイルの訳はミュンスター訳を下敷きに、一部ティンダル訳を採り入れたものであることが分かる。彼自身の訳（カヴァデイル聖書）は棄てられている。だが、ミュンスター自身この訳に満足していたわけではない。先に見たように、大聖書と同じ年に出たラテン語訳聖書（1Le）ではこれを改めたのである（“Sic enim noui eum, quod praecepturus sit filijs suis ...” 「というのは、このようにわたしは彼を知ったからだ。〔すなわち〕彼が彼の息子たちに・・・命じるであろうことを」）。יְדַעְתִּיו の末尾の一文字（ו 「彼を」）の解釈において、ミュンスターの1534年の訳は（それゆえ、大聖書の訳は）明らかにティンダル訳に劣っている。

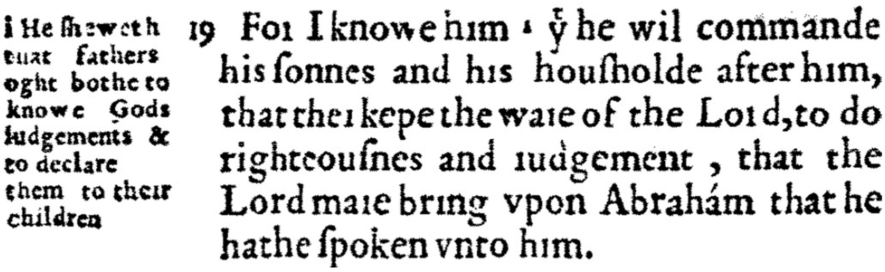
７．ジュネーヴ聖書（英語）（2Ef）

この聖書は、メアリー女王（1553年に即位）の迫害を逃れて大陸に渡り、最終的にジュネーヴに定着した英国の聖書学者たちの労作である。その背景と経緯は、ロイド・ベリーが詳しく解説している（2Ef’ “Introduction to the Facsimile Edition”. 4Ec, 127-132 もたいへん参考になる）。全体の指揮をウィリアム・ホイッティンガム（William Whittingham　c. 1524—79）がとり、新約聖書の翻訳と編集はホイッティンガムが、旧約部分はアンソニー・ギルビー（Anthony Gilby　c. 1510—1585）が担当したと考えられている。ギルビーは、英国人学者の中では最もヘブライ語に堪能で、ミカ書（1551年）とマラキ書（1553年）

の英語による注解書も書いていた（注44）。この二人に協力したのは、カヴァデイル（Miles Coverdale）、グッドマン（Christopher Goodman　c. 1520—1603）、サンプソン（Thomas Sampson　c. 1517—89）、コウル（William Cole　c. 1530—1600）、キース（William Kethe　1594年死去）らであった（すべての人物が終始一貫して関与したわけではない。協力者たちについて詳しくは 4Ec, 128 を参照）。翻訳作業は1556年に開始され、1559年にほぼ完成し、1560年にジュネーヴでローランド・ホール（Rowland Hall）によって印刷された（表紙図版参照）。この聖書は、特に一般大衆の間に人気を博して何度も版を重ね、主教訳聖書（1568年）と欽定訳（1611年）が現れた後も広く使用され続けた（4El, 96: 4Em, 190）。章節の番号が全体につけられているが、これはオリヴェタン聖書の1553年改訂版（2Fb’）にならったものであろう。

本書の翻訳者たちは大聖書の1550年版（注45）を土台に作業したが（3Ge, 157: 4Em, 189）、オリヴェタン聖書の1553年改訂版、エティエンヌ編訳の1557年ラテン語聖書（1Ll）、ミュンスターの1534—35年ヘブライ語ラテン語対訳聖書（1Hk）、ラテン語版チューリヒ聖書1544年版（創18：19の訳文は1543年版［1Lg］と同じ）も参照したらしい（2Ef’ “Introduction,” 10f.）。ラビたちの注解を知るために第一ラビ聖書（1Hi）を使用したかもしれない（4Ec, 131）。カステリョの1551年ラテン語訳聖書（1Li）を見たとも言われている（3Ge, 157; 4Em, 189）。

この聖書の創世記18章19節の訳文は次のとおりである（大聖書とティンダル訳を並べて示す）。



For I knowe him y^{t} he wil commande his sonnes and his housholde after him, that thei kepe the waie of the Lord, to do righteousnes and iudgement, that the Lord maie bring vpon Abrahám that he hathe spoken vnto him.

というのは、わたしは彼を、彼が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが正義と裁きを行うため、主の道を守るように、命じるであろうことを、知っているからだ。主がアブラハムの上に、彼に向って話したことをもたらすために。

I knowe this also, that he will commaunde his chyldren and hys houshold after him, that they kepe the waye of y^{e} Lorde, and do after ryghte and conscyence, that the Lorde maye bringe vpon Abraham all that he hath spoken vnto him.（大聖書1540年。二重下線部がジュネーヴ聖書と一致）

For I knowe him that he will commaunde his childern and his housholde after him, y^{t} they kepe the waye of the LORde, to do after righte and conscyence, that the LORde may brynge vppon Abraham that he hath promyfed

him.（ティンダル訳。下線部がジュネーヴ聖書と一致）

この訳は、基本的にティンダル訳（およびマシュー訳）と同じであり、大聖書は部分的にしか用いられていない。ギルビーはヘブライ語原文を見て、ティンダル訳をこのように直したのであろう（下線の無い部分）。確かにこの方が原文に忠実である。

ヘブライ語本文冒頭 כִּי יְדַעְתִּיו לְמַעַן אֲשֶׁר の訳し方について見ると、彼らが参照し得た思われる同時代の他の諸訳は大きく４つの型に分けることができる。（１）ウルガータ訳、ルター訳、ルフェーブル訳、オリヴェタン聖書（1535年、53年）、カステリョ訳（ラテン語1551年、フランス語1555年）。——יְדַעְתִּיו の末尾の ו を省いて現在形に訳し、לְמַעַן אֲשֶׁר をウルガータと同様にとる。（２）ミュンスター1534年訳、ラテン語版チューリヒ聖書、大聖書1539年。——語末の ו を人称代名詞語尾三人称単数男性形とはとらずに現在形に訳し、לְמַעַן אֲשֶׁר についてはウルガータと同様にとる。（３）パグニヌスの1528年ラテン語訳、エティエンヌの1557年ラテン語訳聖書。——語末の ו を三人称単数男性形の人称代名詞語尾ととって完了形に訳し、לְמַעַן אֲשֶׁר は結果を表わすものと見る。（４）ティンダル訳、カヴァデイル聖書、マシュー訳、タヴァナー聖書、カルヴァン1564年訳。——末尾の ו を三人称単数男性形の人称代名詞語尾ととって現在形に訳し、לְמַעַן אֲשֶׁר をウルガータ訳と同様にとる（注46）。ジュネーヴ聖書の翻訳者たちは、これらを知りながら、ティンダルの訳がヘブライ語の意味を最も忠実に伝えていると判断し、それをさらに改善したのであろう。

ところで、ジュネーヴに滞在したギルビーらはカルヴァンの知遇を得ていた。ジュネーヴ聖書（特に注の部分）がカルヴァン主義の影響を留めていることはよく知られているが、ロイド・ジョーンズはさらに、彼らがカルヴァンから聖書本文の言語学的問題と翻訳について助言を受けたと推測する（4Ec, 131）。この点に異を唱えるつもりはないが、創世記18章19節の翻訳に関する限り、彼らはカルヴァンから何の影響も受けなかったと見るべきであろう（それどころか、先に指摘したように、むしろカルヴァンの方が彼らの訳を受け入れたと推測される）。カルヴァンは1554年のラテン語版創世記注解書（1Lk）の中で、パグニヌスの訳を不合理な仕方で用いていた。もしもジュネーヴ聖書の翻訳者たちがカルヴァンの注解書を見たならば、パグニヌスの訳も知ることになったであろう（最初から1528年のパグニヌス訳を参照したという見方もある。3Ge, 157）。しかし、彼らは結局、パグニヌス訳もそれを改善したエティエンヌ訳も退けて、ティンダルの訳に従ったのである。

８．主教訳聖書（2Eg）

ジュネーヴ聖書が成功を収めると、英国国教会指定の大聖書の質の低さが明らかになった（4Ea, 96; 4El, 97; 4Em, 191）。そのためカンタベリー大主教パーカー（Matthew Parker　1504—75）は、仲間の主教たちを中心に翻訳委員会を設け、各メンバーに担当箇所を割り当てて大聖書の改訂作業を行わせた。そのさいパーカーは、翻訳上のいくつかの指示を与えた（4Ec, 133f.; 3Ge, 159f.; 4Em, 193）。その中に、次の項目がある（4Eb, 297）。

Firste to followe the Commune Englishe Translacion. vsed in the Churches and not to receed from yt but wher

yt varieth manifestlye from the Hebrue or Greke originall.
第一に、諸教会で用いられている共通の英語訳に従い、それがヘブライ語またはギリシア語の原文と明らかに異なる場合以外は、それから離れないこと。

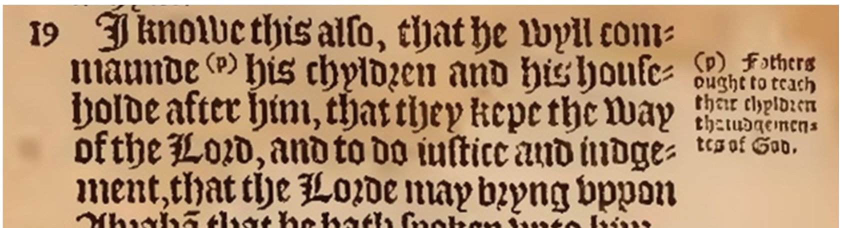
Item to vse such sections and devisions in the Textes as Pagnine in his Translacion vseth, for the veritie of the Hebrue to followe the said Pagnine and Munster specially, And generally others learned in the tonges.
さらに、パグニヌスが彼の翻訳聖書において用いたのと同様の、聖書本文の章節区分（注8）を使用し、ヘブライ語の正確さについては、とりわけ前記パグニヌスおよびミュンスターに従うこと。また一般に、それらの言語に通じた他の人々に〔従うこと〕。

Item to make no bitter notis vppon any text, or yet to set downe any determinacion in places of controversie.
さらに、どの本文にも辛辣な注記をつけたり、論争のある箇所について決定を下したりしないこと。

「諸教会で用いられている共通の英語訳」は大聖書（クランマー聖書）を指す。チームの中にはエクセターの主教アリー（William Alley　1510―70）のようにヘブライ語に堪能な人物もいたが（4Ec, 133f.)、彼らの多くは、ヘブライ語原文に照らして訳文をチェックする語学力を欠いていたらしい。「パグニヌスとミュンスターに従う」ようにという指示はそのためであろう。「辛辣な注記」の禁止は、ティンダル訳やジュネーヴ聖書を念頭に置いてのことである。

翻訳は順調に進み、1568年にジャッジ（Richard Jugge　c. 1514―77）の工房で印刷され、エリザベス女王に献呈された（表紙に女王の肖像を印刷）(3Ge, 160; 4Em, 191)。全体にジュネーヴ聖書のすぐれた点を採り入れながら大聖書を改訳した、折衷的なものとなっている。1572年に大改訂が行われ（3Ge, 161)、その後も多くの版を重ねた。

主教訳聖書の創世記18章19節は、次のとおりである。比較のため、大聖書とジュネーヴ聖書の訳文も掲げる。


19 I knowe this also, that he wyll com-
maunde (p) his chyldren and his house-
holde after him, that they kepe the way
of the Lord, and to do iustice and iudge-
ment, that the Lorde may bryng vppon
Abrahã that he hath spoken vnto him.

(p) Fathers ought to teach their chyldren the iudgementes of God.

I knowe this also, that he wyll commaunde his chyldren and his householde after him, that they kepe the way of the Lord, and to do iustice and iudgement, that the Lorde may bryng vppon Abraham that he hath spoken vnto him.
このこともまたわたしは知っている。〔すなわち〕彼が彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが主の道を守ることを、また正義と裁きを行うことを、命じるであろうと。主がアブラハムの上に、

彼に向って話したことをもたらすために。

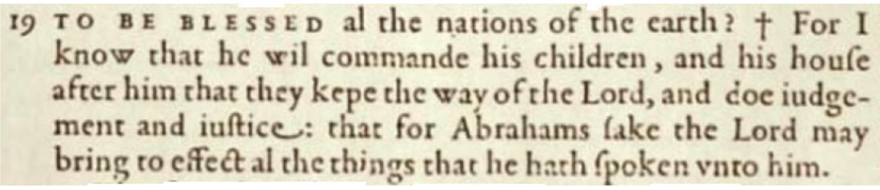
I knowe this also, that he will commaunde his chyldren and hys houshold after him, that they kepe the waye of y^{e} Lorde, and do after ryghte and conscyence, that the Lorde maye bringe vpon Abraham all that he hath spoken vnto him.（大聖書）

For I knowe him y^{t} he wil commande his sonnes and his housholde after him, that thei kepe the waie of the Lord, <u>to do righteousnes and iudgement</u>, that the Lord maie bring vpon Abrahám that he hathe spoken vunto him.（ジュネーヴ聖書）

この訳は、全体として大聖書とほぼ同じである。「正義と裁きを行うことを」は、ジュネーヴ聖書を参考にしたものであろう。大聖書の訳文はミュンスター訳とティンダル訳の組み合わせであったが、主教訳は、ミュンスター訳とジュネーヴ聖書の折衷になっている。

９．ドゥエイ聖書（2Eh）

この旧約聖書（２巻本）は、エリザベス女王の時代に大陸に逃れたカトリック教徒たちの対抗宗教改革の所産であり、1609—10年に北フランスのドゥエ（Douai．この頃はまだハプスブルク家の領地）で、ケラム（Laurence Kellam）によって印刷された。翻訳は、オックスフォード大学セント・ジョンズ・コレッジ出身のマーティン（Gregory Martin　c. 1542—82）が、ヘブライ語原典からではなくウルガータ訳聖書（たぶんVUL^{SC}であろう）から訳したものを、枢機卿アレン（William Allen　1532—94）とカトリック司祭ブリストウ（Richard Bristow　1538—81）が閲読・修正した（3Ge, 161ff.; 4Em, 194）。1582年にフランスのランス（Rheims）で出版された新約聖書と共に、ドゥエイ・リームズ聖書（Douay-Rheims Bible）と呼ばれる（英訳聖書の固有名なので英語読みでよい）（cf. 4El, 98f.）。
本書の創世記18章19節の訳は次のとおりである。比較のためウルガータ訳を並べて示す。


19 TO BE BLESSED al the nations of the earth? † For I know that he wil commande his children, and his houſe after him that they kepe the way of the Lord, and doe iudge-ment and iuſtice: that for Abrahams ſake the Lord may bring to effect al the things that he hath ſpoken vnto him.

For I know that he wil commande his children, and his house after him that they kepe the way of the Lord, and doe iudgment and iustice: that for Abrahams sake the Lord may bring to effect al the things that he hath spoken vnto him.
というのは、 わたしは知っているからだ。彼が彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが主の道を守り、そして裁きと正義を行うように、命じるであろうことを。アブラハムのために主が、彼に向って話したすべてのことを実現するために。

Scio enim quod praecepturus sit filiis suis, & domui suae post se, vt custodiant viam Domini, & faciant

judicium & justitiam: vt adducat Dominus propter Abraham omnia quae locutus est ad eum.（VUL^{SC}［1La’］）

この訳は、ウルガータ訳をほぼそのまま英語に移したものになっている。違いは「息子たち」を「子供たち」に変えたことくらいである。

10. 欽定訳聖書（2Ei）

本書のタイトル頁には、“by his Maiesties speciall Commandement”（「陛下の特命により」）および“Appointed to be read in Churches”（「諸教会で読むべく指定された」）という言葉が記されている。Authorized という文字はないが、伝統的に欽定訳聖書（The Authorized Version of the Holy Bible）と呼びならわされ、ジェイムズ王聖書（King James Bible／King James Version）と呼ばれることも多い（4El, 115f.）。本書は、ジェイムズ一世（在位1603—25。後に王権神授説を唱えて議会と対立）が1604年に招集したハンプトンコート会議で、オックスフォード大学コーパス・クリスティ・コレッジ校長のレイノルズ（John Rainolds／Raynolds　1549—1607）が提案し、王の支持を得て計画・作成されたものである（4En の解説が詳しい）。会議の後直ちに54人の翻訳者が選ばれ、６つの班に分かれて改訂作業を進めた（4En, 7f.; 4El, 108ff.; 4Em, 199）。４年ほどで草稿が完成し、その後の検討を経て1611年にロンドンでロバート・バーカー（Robert Barker　1645死去）によって印刷・出版された。モーセ五書およびヨシュア記から列王記下までを担当したのは、ウェストミンスター寺院の首席司祭（後にチチェスター主教）アンドルーズ（Lancelot Andrewes　1555—1626）、セント・ポール大聖堂首席司祭（後にコヴェントリー主教）オーバーオール（John Overall　1561—1619）、スペイン出身でウスターとウェストミンスターの主教座聖堂名誉参事会員のサラヴィア（Adrian Saravia／Hadrian à Saravia　1531—1612）、ケンブリッジ大学クライスツ・コレッジのフェロー、クラーク（Richard Clarke　1634年死去）ら、１０名から成る第一班（ウェストミンスター拠点）であった（4Eb, 49ff.　“to the first Book of Chronicles, exclusive” は誤記であろう）。この中では特にアンドルーズとクラークが、ヘブライ語学者としてよく知られていた（4Ec, 147ff., 210; 3Ge, 165）。

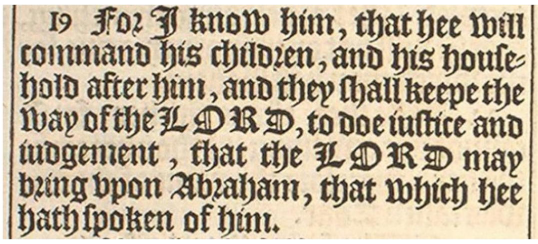
聖書翻訳のために、15項目から成る原則の遵守が言い渡された。その中に次の規定がある（4Eb, 53ff.; 4En, 8ff.）。

1. THE ordinary Bible read in the Church, commonly called the *Bishops Bible*, to be followed, and as little altered as the Truth of the original will permit.
1. 一般に「主教訳聖書」と呼ばれている、教会で朗読される正規の聖書に従い、改変は原文の正確な意味が許す最小限の範囲で行うこと。
8. Every particular Man of each Company, to take the same Chapter, or Chapters, and having translated or amended them severally by himself, where he thinketh good, all to meet together, confer what they have done, and agree for their Parts what shall stand.
8. 各班のメンバーはそれぞれ同じ章を担当し、各人が個別に、良いと考える範囲で翻訳や修正を行ってから、全員が集まって得られた結果を共に検討し、最終的な訳文を合議・決定すること。

14. These translations to be used when they agree better with the Text than the Bishops Bible: *Tindoll's. Matthews. Coverdale's. Whitchurch's. Geneva.*

14. 以下の翻訳が主教訳聖書よりも原文とよりよく合致する場合は、それらを用いること。ティンダル訳、マシュー訳、カヴァデイル訳、大聖書、ジュネーヴ聖書。

これらを念頭に置いて、欽定訳聖書の創世記18章19節の訳文がどうなっているかを見ることにしよう。比較のため、主教訳とジュネーヴ聖書も示す。



19 For I know him, that hee will
command his children, and his house-
hold after him, and they shall keepe the
way of the LORD, to doe iustice and
iudgement, that the LORD may
bring vpon Abraham, that which hee
hath spoken of him.

For I know him, that hee will command his children, and his household after him, and they shall keepe the way of the LORD, to doe iustice and iudgment, that the LORD may bring vpon Abraham, that which hee hath spoken of him.

というのは、わたしは彼を、彼が彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に命じるであろうことを知っているからだ。そして彼らは、正義と裁きを行うため、主の道を守ることになるだろう。主がアブラハムの上に、彼について話したことをもたらすために。（欽定訳）

I knowe this also, that he wyll commaunde his chyldren and his householde after him, that they kepe the way of the Lord, and to do iustice and iudgement, that the Lorde may bryng vppon Abraha[m] that he hath spoken vnto him.（主教訳）

For I knowe him y^t he wil commande his sonnes and his housholde after him, that thei kepe the waie of the Lord, to do righteousnes and iudgement, that the Lord maie bring vpon Abrahám that he hathe spoken vunto him.（ジュネーヴ聖書）

本節の冒頭部分については、土台にした主教訳の解釈は棄てられ、ジュネーヴ聖書（ティンダル訳）が採用されている。ただし、訳文の構造はティンダル以後のどの版とも異なる（וְשָׁמְרוּ דֶּרֶךְ יְהוָה の前に区切りを置く）。「正義と裁きを行う」は主教訳を引き継いでいる。しかしこの聖書は、ティンダル以後のすべての英語訳と同じく、יְדַעְתִּיו を現在形に訳し、目的節を導く לְמַעַן אֲשֶׁר も正しくとらえていない。欽定訳は権威ある聖書としてしっかり定着し、他の英語訳が出た後も使用され続けて今日に至る。20世紀後半には、「英語を用いる人々にとって唯一の権威ある聖書は欽定訳聖書である」と主張するセクト的な立場（King James Onlyism）さえ現れたほどである（4Eh “Introduction”）。

11．欽定訳聖書の「He版」と「She版」

最後に、創世記18章19節の翻訳とは無関係だが、欽定訳聖書の版間の相違について一言しておきたい。1612年から17年までの間に、多くの欽定訳聖書の版が出版され（3Bc の1611年以後の項目を参照）、不注意な誤りと意図的な変更が積み重なった。1614年までの欽定訳の版ないし刷には、ルツ記3章15節の末尾が “and he〔ボアズ〕went into the citie” となっているものと “and she〔ルツ〕went into the citie” となっているものの二種類がある（4El, 119f.）。一般に、前者は “The [Great] He Bible”（「He版」）、後者は “The [Great] She Bible”（「She版」）と呼ばれる（ただし、この呼び名は誤解を招きやすい）。今日の有力な研究によれば、「He版」が1611年に最初に出版され、同年に「She版」の印刷が開始されて部分的に発売されたが、全体が完成したのは1613年であった（注47）。２つの版の間には数百の相違があり、その大半は誤植だが、中には本文の意味を左右する重要な違いもある。とりわけ、ルツ記3章15節の訳文の相違は最もよく知られている。

さて、ルツ記3章15節のマソラ本文は וַיָּבֹא הָעִיר であり（ＢＨＳ）、ブレシア版ヘブライ語聖書、コンプルートゥム多言語聖書、第二ラビ聖書、ミュンスターの対訳聖書、アントワープ多言語聖書のヘブライ語本文も同じである（注48）。従って、これを英語に素直に訳せば前者になるはずなのに、なぜこの違いが生じたのだろうか。欽定訳に至る訳文をたどると、いくつかの要因が働いていたことが明らかになる。以下、本節の各種訳文を年代順に示す。m は「行った」の主語を三人称単数男性形に、f は女性形にとっていることを示す。

m／f 七十人訳　καὶ εἰσῆλθεν εἰς τὴν πόλιν.
f ウルガータ訳　quae portans ingressa est civitatem.
f パグニヌス訳 1528 年（1Ld）　& ingressa est ciuitatem.
f ルフェーブル訳 1530 年（2Fa）　Icelle lesporta & entra en la cite
m チューリヒ聖書 1531 年（2Gh）　vnd er kam in die statt.
m ルター訳 1534 年（2Gb）Vnd er kam jnn die stad.（1545 年訳．Vnd er kam in die Stad.）
m ミュンスター訳第二巻 1535 年（1Hk）＝1546 年訳　et imponens ei ingressus est ciuitatem.
f オリヴェタン聖書 1535 年（2Fb）　puis elle entra en la cite,
f カヴァデイル聖書 1535 年（2Eb’）　& she wente in to the cite,
f マシュー訳 1537 年（2Ec．ティンダルの手稿に基づく）　And she gatt her into the citie:
f タヴァナー聖書 1539 年（2Ed）　And she gat her in to the cityе,
f 大聖書（クランマー聖書）1540 年（2Ee”）　And she gatt her into the cytie:
m ラテン語版チューリヒ聖書 1543 年（1Lg）　ingressus est ciuitatem.
f オリヴェタン聖書 1553 年（2Fb’）　puis elle entra en la ville.
f エティエンヌ訳 1557 年（1Ll）　& ingressa est vrbem.
m ジュネーヴ聖書 1560 年（2Ef）　he measured ... and laied them on her, & went into the citie.
f 主教訳聖書 1568 年（2Eg）　And she gat her into the citie.
m／f モンタヌスの行間訳 1572 年（1Hl’）　& introiit ciuitatem.（注 49）

m 仏語版ジュネーヴ聖書 1588 年（2Fe）　puis il r’entra en la ville. 別訳 & elle r’entra ...
f ジュネーヴ聖書 1599 年改訂版（注 50）hee measured ... and layed them on her, and she went into the citie.
mf 欽定訳1611年（2Ei）　and he／she went into the citie.

これを見て気づくのは次の事実である。（１）ウルガータ訳、パグニヌス訳、エティエンヌ訳（パグニヌス訳の一部改訳）は主語を女性形とした。（２）ドイツの翻訳者たち（ルター、チューリヒの学者たち、ミュンスター）はこの文の主語を三人称単数男性形にとった（ドイツ語訳、ラテン語訳）。（３）英語訳では、ジュネーヴ聖書1560年を例外として、主語を女性ととる解釈がティンダル以降定着した。（４）フランス語訳では、ルフェーブル訳とオリヴェタン聖書は女性形に解していたが（1570年版まで確認）、ジュネーヴ聖書（1588年）では男性形ととる新訳を本文に採用した。

英語訳聖書を詳しくたどると、まずカヴァデイルは、ウルガータ訳、パグニヌス訳、ルター訳、チューリヒ聖書1531年版、同1534年版を見比べて本節の英語訳をこしらえた（ティンダル訳は知らなかった）。彼はドイツ語訳は考慮せず、ウルガータ訳とパグニヌス訳に従ったように見受けられる（この点は創18：19と同じ）。ヒエロニムスの用いた写本が本節を ותבא העיר としていた可能性は考えられるが、マソラ本文を底本としたはずのパグニヌス（1488年のソンチーノ版か1494年のブレシア版、および第一ラビ聖書を使用）がなぜこう訳したのか、理解に苦しむ（彼の辞書の בּוֹא の項目にも説明はない）。単純にヒエロニムスの訳を尊重した結果だろうか。文脈から判断したのだろうか。パグニヌスの訳文を改訂したモンタヌスはこれを同上のように改めた（その結果、七十人訳と同じく性別が曖昧になった）が、エティエンヌはパグニヌス訳を保持した。

重要なのは、パグニヌスがこう訳した理由がどこにあったにせよ、彼のラテン語訳は英語訳の翻訳者たちにとって大きな権威であった、という事実である。マシュー（ロジャーズ）はティンダルの手稿を用いたので、“And she gatt her into the citie” はティンダルの訳に違いない。そのティンダルは、先に確認したように、パグニヌスのラテン語訳を活用した。主語を女性と見る点で、ティンダルはパグニヌス（およびウルガータ訳）と一致する。タヴァナー訳はマシュー訳を引き継いだ。大聖書をまとめたカヴァデイルは、マシュー訳を基本としながらミュンスターの対訳聖書を参照したが、本節については、ミュンスター訳ではなくマシュー訳（ティンダル訳）に従った。こうして、本節の主語を女性ととる英語訳の流れが形成された。ジュネーヴ聖書はこの流れには乗らず、“he measured ... and laied them on her, & went into the citie” と訳した。went の主語は明示されていないが、he ととるのが自然であろう。主教訳の翻訳者たちは、本節を大聖書（＝マシュー訳）と同じに訳した。前述のように、「ヘブライ語の正確さについては、とりわけパグニヌスおよびミュンスターに従う」という指示が出されていたので、本節について彼らが迷ったとすれば（迷わなかったかもしれないが）、パグニヌスとミュンスターの訳を参照したであろう。その場合、二人の解釈は異なるが、パグニヌスの解釈は大聖書と一致するので、大聖書の訳を覆す必要はなかった。その後、1599 年にジュネーヴ聖書の改訂版が出版されたが（これ以前にも複数の版が出されたが未確認）、これは初版の訳文を補って “and she went into the city” とした。その結果、主語を女性ととる英語訳の流れ（ほとんど「伝統」）が強固に確立された（ちなみに、現代の「新ウルガータ訳」［*Nova vulgata Bibliorum Sacrorum*, 1979］も “quae portans ingressa est civitatem” という訳文を

保っている）。

　欽定訳の「He版」と「She版」の問題は、こうした背景に照らして考察する必要がある。欽定訳の翻訳にさいしては、（１）「主教訳聖書と呼ばれている正規の聖書に従うこと」、（14）「ティンダル訳、マシュー訳、カヴァデイル訳、大聖書、ジュネーヴ聖書が主教訳よりも原文とよりよく合致する場合は、それらを用いること」、という２つの指示が出ていたことを思い起こそう。これらの翻訳（ジュネーヴ聖書は1599年改訂版が利用できたであろう）はすべて女性を主語に立てている。文脈的にも、町へ戻ったのはルツ、と解することは可能である。そのうえ、この解釈は英語訳のみならずウルガータ訳やパグニヌス訳とも一致する、権威あるものである。こうなると、欽定訳もいきおい “and she went into the citie” と訳してよさそうなものだが、初版の翻訳者たち（アンドルーズとクラークであろう）は――ジュネーヴ聖書1599年版を含む既存の英語訳には惑わされず――“and he went into the citie” と訳した。言うまでもなく、こちらがヘブライ語本文の正しい訳である（ＲＶ1885年訳も “and he went into the city.”）。欽定訳の翻訳者たちが見たであろうヘブライ語本文はマソラ本文のみであったことに注意しよう。それゆえ、もし彼らがヘブライ語聖書から訳したのだとすれば、“and she went into the citie” は誤訳である（注51）。しかし――おそらく伝統の権威に屈して――この訳はすぐに変えられてしまった（単なる印刷上のミスとしては片づけられない）。そして今日の NKJV（1982年）に至る（He版の訳注をつけているが）。現代の旧約学者の中に、本文批評の観点から異読の方をオリジナルと見る者がいることは確かだが、そのことと欽定訳の「She版」がこれを “and she went into the citie” と訳したこととは全くの別問題である（注52）。なお、「She版」は「He版」の誤りを直したものだというひどい謬見が今なお見られるが、もちろんこれには何の根拠もない（注53）。

第一部の結び

2017 年はルターが宗教改革の端緒を開いてから 500 年目に当たる。これを期に、「マルティン・ルターの翻訳による」ドイツ語聖書の改訂版が 2016 年 10 月に刊行された

Denn dazu habe ich ihn auserkoren, dass er seinen Kindern befehle und seinem Hause nach ihm, dass sie des HERRN Wege halten und tun, was recht und gut ist, auf dass der HERR auf Abraham kommen lasse, was er ihm verheißen hat.（創 18：19．*Die Bibel nach Martin Luthers Übersetzung*, revidiert 2017）（＝1964 年改訂版）。
というのは、このためにわたしは彼〔アブラハム〕を選んだからだ。〔すなわち〕彼が彼の子供たちに、また彼の後の彼の家に、彼らが主の道（pl.）を守り、そして正しく良いことを行うように、命じるために。主がアブラハムの上に、彼に約束したことを来たらせるために。

創世記 18 章 19 節をこのように解する流れは、19 世紀末までには各国語の翻訳に広く波及するに至った（注 31〜33）。ルター訳に基づくドイツ語聖書も、ようやく 1964 年にその仲間入りを果たしたわけである（新ウルガータ訳も “Nam elegi eum, ut praecipiat filiis suis et domui suae post se, ut custodiant viam Domini ...” と訳している［3Be 参照］）。だが、終わりよければすべてよし、とはいかない。宗教改革者たちの信仰義認の教理が、本節に反映したアブラハムの選びをあまり考慮せずに形成されたとすれば、正しい訳が定着したからと言って、それだけでかつての遅れを取り戻すことはできないからである。大げさに聞こえるかもしれないが、われわれは 500 年前に立ち戻って、信仰義認、あるいはむしろ「信による義」の教えを根本から考え直す必要があるのではないだろうか。
ルターは晩年に至るまでドイツ語訳聖書の改訂に努めたが、創世記 18 章 19 節については、彼自身も彼の「サンヘドリン」（4Gl, 241; 4Hl, 57f.）も、自分たちの翻訳（解釈）の確かさを最後まで疑わなかったように見える。ルターによる創世記 18 章 19 節と 1 章 4 節の訳文を、ウルガータ訳およびマソラ本文と並べて比較すると、次のようになる（1545 年版。1523 年版と 1534 年の版はやや異なるが、ここでは省略）。

Vnd Gott sahe, das das Liecht gut war.
et vidit Deus lucem quod esset bona.
וַיַּרְא אֱלֹהִים אֶת־הָאוֹר כִּי־טוֹב（創 1：4）

Denn ich weis, er wird befelhen seinen Kindern ...
scio enim quod praecepturus sit filiis suis ...
כִּי יְדַעְתִּיו לְמַעַן אֲשֶׁר יְצַוֶּה אֶת־בָּנָיו ...（創 18：19）

注目したいのは、ドイツ語とラテン語の文構造の類似である。創世記 18 章 19 節のドイツ語訳では er

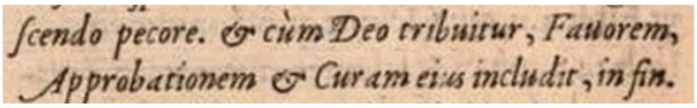
wird befelhen の前に das（daß）がないが、構文上はあるのと変わらない（weis は er wird 以下を暗黙の目的節にしている）。ルター訳はヘブライ語をウルガータ訳と同様にとる一方で quod に相当する語を省略した。だが創世記 1 章 4 節については、quod に相当する das（daß）を明示する一方で、ウルガータ訳（18：19 はともかく 1：4 は正確に訳している）では保たれていたヘブライ語の構造を無視して訳した（ティンダル訳と比較。注 40 も参照）。確かに Vnd Gott sahe das Liecht das es gut war とすると、ドイツ語としてぎこちないのかもしれないが、出来上がったドイツ語の訳文は、創世記 1 章 4 節と 18 章 19 節が同じ構造になっており、ヘブライ語原文も同じ構造であるかのように見えてしまう。しかも彼らは、そのことに何の問題も感じなかったように見える。パグニヌス（1528 年）もティンダル（1530 年）もミュンスター（1539 年）も、18 章 19 節の יְדַעְתִּיו の語末の ו を人称代名詞語尾三人称単数男性形ととる解釈を公にしていたのに、ルターたちはその点を考慮せず、改訳のそぶりさえ見せなかったのである。

カルヴァンも創世記 18 章 19 節の正しい理解に達しなかったが、ルターらとは異なり、本節の訳を改善しようと最後まで努めたことは確かである。彼は、ラテン語版創世記注解の執筆時（1554 年）には、おそらくパグニヌスの訳文を借用したが（Quia novi eum: propterea praecipiet filiis suis ...）、その意味を掘り下げることはしなかった（第 3 章§８）。その後、フランス語版注解書（1564 年）では、Car ie le cognoy qu'il commándera à ses enfans ... という訳に変えたが、すでに指摘したとおり（第 6 章§５）、これは英語版ジュネーヴ聖書の訳文（ティンダル訳）をまねたものと思われる。だが、この訳が最初の訳にまさっているとは言えない。ともあれ、カルヴァンは最後まで創世記 18 章 19 節のヘブライ語本文を正確に理解できなかったのである。

しかし、これらの宗教改革者を責めることはできない。彼らが利用することのできた辞書の中に、יָדַע の訳語の候補として eligere（選ぶ／選び出す）を挙げているものは一つもなかった。この動詞がこういう意味をもつこと（アモ3：2。רַק אֶתְכֶם יָדַעְתִּי מִכֹּל מִשְׁפְּחוֹת הָאֲדָמָה「君たちだけをわたしは、地の全部族の中から知った（＝選んだ）」）を広く認識させたのは、ドイツのセム語学者ヴィルヘルム・ゲゼニウス（1786―1842）の、ラテン語による1833年の旧約聖書ヘブライ語アラム語辞典（3Be）が最初ではないかと思われる（注54）。ゲゼニウスは、この動詞がしばしば animum advertit ad aliquid（何かに心を向ける）、providit（前もって配慮する）、curavit（気を配る）という意志的な意味で用いられることを説明した独立項目（405頁右）で、創世記18章19節 יְדַעְתִּיו לְמַעַן אֲשֶׁר יְצַוֶּה をヘブライ語で引用して、"*eum* (Abrahamum) *curavi*, elegi, eius respectum habui, *ut iubeat* cet. Cf. Ps. 1,6"（「彼［アブラハム］に気を配った［選んだ、彼を顧慮した］、彼が・・・命じるために」）と訳している。ゲゼニウスによれば、詩編1編6節の「知っている」も、単に認識しているということではなく「主は義人の道に心を向けている」という意味である。

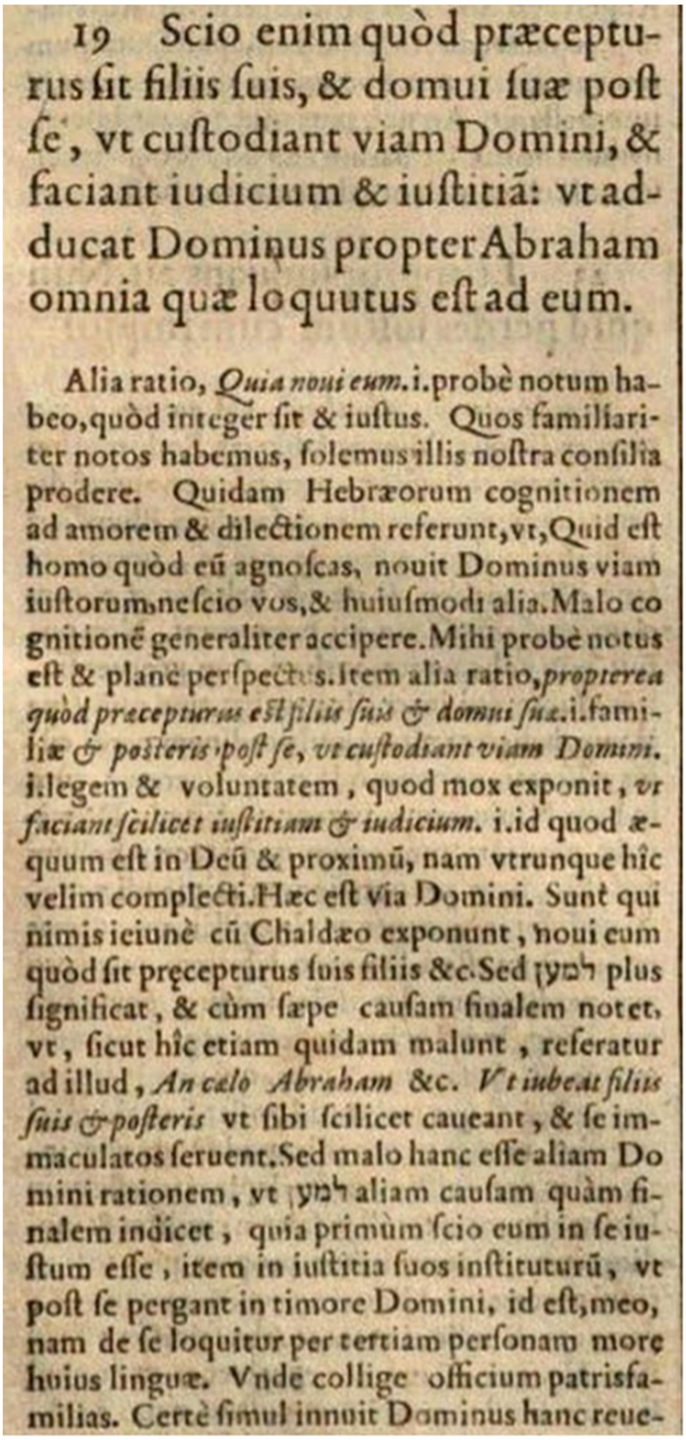
ブクストルフの辞書の第二版（1615 年）には curare（気を配る）、curam agere（配慮する）という訳語が加わっていたが、 לְמַעַן אֲשֶׁר の解釈も含めると、創世記 18 章 19 節に対する彼の解釈はまだ満足のいくものではなかった（第 4 章§4 と注 22 参照）。ところがブクストルフ以前に、フランス語版ジュネーヴ聖書の編集を手がけたベルトラム（Bonaventure Corneille Bertram　1531―94）が、すでに同様の認識に達していた。ベルトラムは 1577 年にパグニヌスの辞書の改訂版（2 巻本）を出版し（注 55）、

そこにパリ時代の恩師メルシエ（Jean Mercier c.1510—70）の注釈を豊富に採り入れた（4Ec, 78)。創世記 18 章 19 節冒頭 יְדַעְתִּיו の訳文はパグニヌスと同じ（noui eum）だが（906 頁)、 יָדַע の語義説明に次の記述が追加されている（905 頁)。


ſcendo pecore. & cùm Deo tribuitur, Fauorem, Approbationem & Curam eius includit, in fin.

et cum Deo tribuitur, Fauorem, Approbationem et Curam eius includit, in fin.
そして神に帰されるときには、つまるところ、神の好意、是認、および配慮を含意する。

一方 מַעַן については（1431頁）、説明こそ拡充されているが לְמַעַן אֲשֶׁר を含む用例を取り上げてはおらず、創世記18章19節後半の לְמַעַן を vt adducat dominus ... と説明する点もパグニヌスの辞書と変わっていない。ここからすると、ベルトラムがゲゼニウスのような理解に達していたとはとても言えないが、ジュネーヴ聖書創世記18章19節の欄外別訳（“ie l’ai cognu afin qu’il commande. c. i’ai eu vn soin particulier de lui, &c.”「わたしは彼が命じるために、彼を知った」。つまり、わたしは彼を特別に配慮した・・・）は、パグニヌスの noui eum という訳を、以上の情報と結びつけて再考した結果であると思われる。そのさいベルトラムが参考にしたのは、メルシエの創世記注解書であろう。メルシエはコレージュ・ド・フランスのヘブライ語教授で、カルヴァンによるジュネーヴ学院への誘いを断った人物の一人である（4Ec, 77)。彼の創世記注解書は、彼の没後の1598年にベーズの手で出版された（注56)。その創世記18章19節の箇所で、メルシエはウルガータ訳（VUL^{SC}と同じ）を用いながらも、ヘブライ語原文を自由に解釈して、次のように論じている（341頁)。



19 Scio enim quòd præceptu-
rus ſit filiis ſuis, & domui ſuæ poſt
ſe, vt cuſtodiant viam Domini, &
faciant iudicium & iuſtitiã: vt ad-
ducat Dominus propter Abraham
omnia quæ loquutus eſt ad eum.

Alia ratio, *Quia noui eum*. i. probè notum ha-
beo, quòd integer ſit & iuſtus. Quos familiari-
ter notos habemus, ſolemus illis noſtra conſilia
prodere. Quidam Hebræorum cognitionem
ad amorem & dilectionem referunt, vt, Quid eſt
homo quòd eũ agnoſcas, nouit Dominus viam
iuſtorum, neſcio vos, & huiuſmodi alia. Malo co
gnitionẽ generaliter accipere. Mihi probè notus
eſt & planè perſpectus. Item alia ratio, *propterea*
quòd precepturus eſt filiis ſuis & domui ſuæ. i. fami-
liæ *& poſteris poſt ſe, vt cuſtodiant viam Domini*.
i. legem & voluntatem, quod mox exponit, *vt*
faciant ſcilicet iuſtitiam & iudicium. i. id quod æ-
quum eſt in Deũ & proximũ, nam vtrunque hîc
velim complecti. Hæc eſt via Domini. Sunt qui
nimis ieiunè cũ Chaldæo exponunt, noui eum
quòd ſit prçcepturus ſuis filiis &c. Sed למען plus
ſignificat, & cùm ſæpe cauſam finalem notet,
vt, ſicut hîc etiam quidam malunt, referatur
ad illud, *An cælo Abraham* &c. *Vt iubeat filiis*
ſuis & poſteris vt ſibi ſcilicet caueant, & ſe im-
maculatos ſeruent. Sed malo hanc eſſe aliam Do
mini rationem, vt למען aliam cauſam quàm fi-
nalem indicet, quia primùm ſcio eum in ſe iu-
ſtum eſſe, item in iuſtitia ſuos inſtituturũ, vt
poſt ſe pergant in timore Domini, id eſt, meo,
nam de ſe loquitur per tertiam perſonam morę
huius linguæ. Vnde collige officium patrisfa-
milias. Certè ſimul innuit Dominus hanc reue-

Alia ratio, *Quia noui eum*. i. probè notum habeo, quòd integer sit & iustus.（別の理由――「というのは、わたしは彼を〔知った結果として〕知っているからだ」。すなわち、わたしは彼が完全で正しいということをよく知っているからだ）。メルシエは18節の注解で、「アブラハムが大きな強い国民になる」ことの「主の理由」（Domini rationes）に論及していた。そして、彼の考えによれば、その第二の理由が本節に示されている（カルヴァンの創世記注解書［1554年．1Lk］との内容上の類似に注目）。興味ぶかいのは、彼自身は支持していないが、「知る」のヘブライ的理解を紹介していることである。

> Quidam Hebraeorum cognitionem ad amorem & dilectionem referunt, vt, Quid est homo quòd eum agnoscas, nouit Dominus viam iustorum, nescio vos, & huiusmodi alia. Malo cognitionem generaliter accipere. Mihi probè notus est, & plane perspectus.
> ヘブライ人のある人たちは、知るようになること（cognitio）を愛や愛情と関係づける。たとえば、「人とは何ものでしょうか。あなたがこれをお知りになるとは」〔詩144 : 4 מָה־אָדָם וַתֵּדָעֵהוּ〕、「主は義人たちの道を知っておられる」〔詩1 : 6 יוֹדֵעַ יְהוָה דֶּרֶךְ צַדִּיקִים〕、「私はあなたがたを知らない」〔申33 : 9．ウルガータ訳はヘブライ語本文と異なる．Cf. ルカ13 : 27〕およびこの種の他の章句。むしろ、「知ること」を一般的に理解すること。「わたしは彼をよく知り、確認している」。

ベルトラムは、ここに紹介された יָדַע のヘブライ的意味に興味をもち、それを彼の辞書に盛り込んだのであろう。メルシエは、もう一つの「主の理由」を指摘している。―― *Propterea quòd praecepturus est filiis suis et domui suae ... et posteris post se, ut custodiant viam Domini*. この訳文は、モンタヌスの改訳（“Quia noui eum. Propterea quòd praecipiet filiis suis, & domui suae post se”「というのは、わたしは彼を知ったからだ。彼は彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に命じるであろうから」）に近い。ここで注目したいのは、メルシエが לְמַעַן אֲשֶׁר を ut ではなく Propterea quòd と訳したことである。確かに彼は、“noui eum quod sit praecepturus suis filiis ... ” というタルグム流の解釈を退け、לְמַעַן はよりしばしば ut を意味することを認め、“An calo Abraham &c. Vt iubeat filiis suis et posteris”（「たぶんわたしはアブラハムらを呼び集める。彼が彼の息子たちと子孫に命じるために」）という意味にとる者たちがいることを承知している。しかし、「主の理由」という観点から、結局この種の翻訳を退けて、לְמַעַן אֲשֶׁר を Propterea quòd と訳したのである。

そうであるなら、ジュネーヴ聖書別訳の “afin qu’il commande” はメルシエに直接由来したのではなく、メルシエの注解書をよく学んだベルトラムが無視できぬ解釈として取り上げた、と見るべきであろう。だが彼は、1564 年のカルヴァンのフランス語訳を退けてこれを本文に採用するほどの自信をもてなかったため、欄外に載せたのであろう。そして実際、ジュネーヴ聖書を受け継いだ学者たちの反応は鈍く、この訳文を真剣に取り上げる者はその後長い間現れなかったのである。

パグニヌスが彼のラテン語訳聖書（1528年）とヘブライ語辞書（1529年）において、יְדַעְתִּיו を “noui eum”（「わたしは彼を知った」）と訳したことは確かに大きな意味をもつ。だが、それでも何かが足りなかった。彼の翻訳をエティエンヌが改訂したさいに添えた注釈が、それを物語っている（前記メルシエの注解も参照）。彼は次のように書いている。

> Noui enim eum, vt praecipiat. i. noui eum esse hominem pium, iustum, ac docilem, non inquam celabo eum. sequitur ratio, vt praecipiat.
> 「というのは、わたしは彼を知ったからだ、彼が命じるために」。つまり、わたしは彼が敬虔な、正しい、そして物わかりのよい人間であることを知った。わたしは、「彼に隠そう」とは言わない。「彼が命じるために」の理由はここから生じる。

エティエンヌは、כִּי יְדַעְתִּיו לְמַעַן אֲשֶׁר יְצַוֶּה の意味をこのように説明した。これはパグニヌス訳 Quia noui eum. Propterea praecipiet ... の解説、あるいはそれに基づく解釈と見てよいが、彼はここに、パグニヌスとは異なる彼独自の訳（Noui enim eum, vt praecipiat）を示した（訳文自体は注 46 の（6）に近い）。それによれば、主はアブラハムが「敬虔な、正しい、そして物わかりのよい人間」であることを知った。そしてそれは、アブラハムが子孫たちに「命じる」ためであった。

だが文脈に照らすと、この説明は不十分である。19 節冒頭の כִּי（enim. というのは／すなわち／確かに）は 17—18 節の主の言明全体（その性格はここでは問わない）「わたしはアブラハムに、わたしのしようとする事を隠そうか。アブラハムは必ず大きな強い国民になり、そして地のすべての国民が、彼によって祝福されるだろう」（הַמְכַסֶּה אֲנִי מֵאַבְרָהָם אֲשֶׁר אֲנִי עֹשֶׂה׃ וְאַבְרָהָם הָיוֹ יִהְיֶה לְגוֹי גָּדוֹל וְעָצוּם וְנִבְרְכוּ בוֹ כֹּל גּוֹיֵי הָאָרֶץ׃）の理由がここに示されること、あるいはその説明がここに与えられることを合図している（口語訳と新共同訳はこれを省略したことにより、前後の関係を分かりにくくしてしまった）。そうであれば、アブラハムが「敬虔な、正しい、そして物わかりのよい人間である」ことを主が知ったことは、隠さない理由の説明にはなっていても、アブラハムが「必ず大きな強い国民になり、そして地のすべての国民が、彼によって祝福される」ことの理由としては弱すぎる。彼が事実そういう人間であり、主がそのことを認識していても、それだけで、アブラハムが「大きな強い国民になり、地のすべての国民が、彼によって祝福される」ことにはならないからである。言い換えると、この יְדַעְתִּיו は、神の認識や予知ともちろん無関係ではないが、意味の中核はそこにはないのである。これは、神がアブラハムを選び、特別に配慮し、その配慮が彼の子孫にまで及ぶことを言っているのであり、そうとらないと、17—19 節の本文の論旨が理解できないのである。エティエンヌもメルシエも、彼の同時代人と同様、יָדַע を認識的な意味でのみとらえてしまった。フランス語版ジュネーヴ聖書（1588 年）の別訳（“ie l’ai cognu afin qu’il commande. c. i’ai eu vn soin particulier de lui, &c.” יְדַעְתִּיו を複合過去に訳し、「知った」の意味内容を「特別な配慮」として解する）が長い間受け入れられなかったのも、これを認識的な意味にとるのがこの時代の通説だったからであろう。この別訳を別にすれば、創世記 18 章 19 節を適切に訳しているものは、概観した日常語訳の中には見当たらない。

ところで、マソラ本文の כִּי יְדַעְתִּיו לְמַעַן אֲשֶׁר が実は二次的な本文形態である可能性を、われわれは考えなくてよいのだろうか。クムランで発見された聖書写本（8Q1 等）に本節は含まれないし、クムラン宗団による聖書パラフレーズ（「外典創世記」等）や創世記注解（4Q252 等）にも本節への言及はない。だが、たとえ死海文書の中にマソラ本文と一致する創世記 18 章 19 節の写本が発見されたとしても、それで問題が片付くわけではない。死海文書以前のサマリア五書の本文は ידעתי となっているし、七十人訳聖書の翻訳者たちが用いた本文もサマリア五書と似ていたと推測されるからである。しかし、古いからといって直ちに ידעתי がオリジナルに近いということにはならない。この分野の専門家ではない私にできることはごく限られているが、それでもある程度の考察を行うことはできる（注 57）。

ＭＴに לְמַעַן אֲשֶׁר という言い回しが現れるのは、創世記 18 章 19 節を別にすると、わずか１１箇所である（創 18：19、レビ 17：5、民 17：5、申 20：18、27：3、ヨシ 3：4、サム下 13：5、エレ 42：6［LXX 49：6］、エゼ 20：26、31：14、36：30、46：18）。七十人訳はそのほとんどを ὅπως（～ために

／〜ように．レビ 17：5、民 17：5、サム下 13：5、エゼ 20：26、31：14、36：30、46：18）または ἵνα（〜ために．申 20：18、ヨシ 3：4、エレ 49：6）と訳している。もちろんこれが לְמַעַן אֲשֶׁר の普通の訳である。一方、申命記 27 章 3 節のＭＴとＬＸＸは次のようになっている。

וְכָתַבְתָּ עֲלֵיהֶן אֶת־כָּל־דִּבְרֵי הַתּוֹרָה הַזֹּאת בְּעָבְרֶךָ לְמַעַן אֲשֶׁר תָּבֹא אֶל־הָאָרֶץ אֲשֶׁר־יְהוָה אֱלֹהֶיךָ נֹתֵן לְךָ אֶרֶץ זָבַת חָלָב וּדְבַשׁ כַּאֲשֶׁר דִּבֶּר יְהוָה אֱלֹהֵי־אֲבֹתֶיךָ לָךְ׃

And thou shalt write upon them all the words of this law, when thou art passed over, that thou mayest go in unto the land which the LORD thy God giveth thee, a land that floweth with milk and honey; as the LORD God of thy fathers hath promised thee.（ＫＪＶ）

Write on them all the words of this law when you have crossed over to enter the land the LORD your God is giving you, a land flowing with milk and honey, just as the LORD, the God of your ancestors, promised you.（ＮＩＶ）

καὶ γράψεις ἐπὶ τῶν λίθων πάντας τοὺς λόγους τοῦ νόμου τούτου, ὡς ἂν διαβῆτε τὸν Ιορδάνην, ἡνίκα ἐὰν εἰσέλθητε εἰς τὴν γῆν, ἣν κύριος ὁ θεὸς τῶν πατέρων σου δίδωσίν σοι, γῆν ῥέουσαν γάλα καὶ μέλι, ὃν τρόπον εἶπεν κύριος ὁ θεὸς τῶν πατέρων σού σοι·（ＬＸＸ）

And you shall write on the stones all the words of this law when you cross over the Jordan, when you enter the land that the Lord, the God of your fathers, is giving you, a land flowing with milk and honey, as the Lord, the God of your fathers, said to you.（ＮＥＴＳ）

ヘブライ語本文は、בְּעָבְרֶךָ の後で区切るか、לְמַעַן אֲשֶׁר 以下をそれに続けるかによって、二通りに訳すことができる（前者は、ＫＪＶ. 他にＶＵＬ、ルター訳、新改訳、鈴木佳秀訳［岩波版］等。後者はＮＩＶ、ＲＳＶ、ＮＲＳＶ、ＦＪＢ 等）。しかし、直前の 27 章 2 節に בַּיּוֹם אֲשֶׁר תַּעַבְרוּ אֶת־הַיַּרְדֵּן אֶל־הָאָרֶץ אֲשֶׁר־יְהוָה אֱלֹהֶיךָ נֹתֵן לָךְ（「あなたの神ヤハウェがあなたに与える地へと、あなたがたがヨルダン川を渡る日に」ᾗ ἂν ἡμέρᾳ διαβῆτε τὸν Ιορδάνην εἰς τὴν γῆν, ἣν κύριος ὁ θεός σου δίδωσίν σοι）とあるので、どちらに訳しても「ヨルダン川の向こう側の地＝主の与える地」と理解されるはずであり、七十人訳の翻訳者もそう考えたと思われる。この訳では לְמַעַן אֲשֶׁר に ἡνίκα ἐὰν という訳語が当てられているが、底本としたヘブライ語原文が違っていたようには見えない。というのも、サマリア五書の本文の対応部分 בעברך למען אשר תבא はマソラ本文と全く同じであるから（1Hc, Fünfter Teil）、七十人訳だけが別のヘブライ語本文を使用したとは考えにくいからである。3 節の訳文は 2 節（ヘブライ語法も含めきわめて逐語的）ほど原文に忠実でないように見えるが、たぶん彼らはこうした観点から、ὡς ἂν διαβῆτε τὸν Ιορδάνην と ἡνίκα ἐὰν εἰσέλθητε εἰς τὴν γῆν, ἣν κύριος ὁ θεὸς ... δίδωσίν σοι を同格関係に置く訳文にしたのであろう。より逐語的な（その意味で原文により忠実な）訳も可能だったはずだが、前後の文脈からむしろこの「意訳」を選んだのであろう（口語訳、新共同訳と比較）。

創世記 18 章 19 節についても、何らかの「意訳」をまず疑うべきである。彼らの使用した本文はサマリア五書と同様の כי ידעתי למען אשר יצוה את בניו というものであった蓋然性が高い（第 1 章参照）。

これを機械的に訳すと、「というのは、わたしは知った。彼が彼の息子たちに命じるために（ように)」となる。「知った」の目的語が記されていないので、本当のところ何を言っているのかよく分からないが、それでも「彼が彼の息子たちに命じる」が למען אשר で導かれる目的節の中身であること、さらに、「彼が彼の息子たちに命じる」ことが、目的として意図されていることは明らかである。そこで、כי ידעתי למען אשר יצוה את בניו という本文を、分かりやすいギリシア語に訳すとすれば、ᾔδειν γὰρ ὅτι συντάξει τοῖς υἱοῖς αὐτοῦ と意訳するのが最善だということになる。結果的にこの訳は למען אשר を כִּי のように扱っているが、これは本文ではなく翻訳の問題である。なお、七十人訳は完了態の ידעתי に過去の意味を認めて ᾔδειν と訳したが、古ラテン語訳はこれを改悪して現在形に訳し（Scio)、ヒエロニムスのウルガータ訳もそれを踏襲した。そして、ルターもティンダルもこの解釈を受け継いだ。こうして、「知る」をもっぱら認識的意味にとる解釈伝統（すでにＴＯにその一端が見られる）が強固に定着した。結局、七十人訳の使用したヘブライ語本文は ידעתיו の末尾の一文字を欠いていたのであり、そのため翻訳者はこのように意訳せざるを得なかった、と見るのがこの訳文の由来の最善の説明であろう。

それでもなお、末尾の ו のない本文が本来のもの（オリジナル）でありマソラ本文は後からこれを付加した、という見方ができるかもしれない。しかし、本節のマソラ本文に毀損はない。従ってむしろ逆に、ＳＰ－ＬＸＸ系統のヘブライ語原本文が伝達の過程で末尾の ו を何かの理由で落とした、というような可能性を考えるべきであろう（あるいは、これを含むものと含まないものが相互に独立に伝えられた)。マソラ以前のラビ文献『ベレーシート・ラッバー』(『エルサレム・タルムード』と同時期の 4 世紀半ばから 5 世紀にまとめられた［3Gl, 201, 189］。3Bd, “BERESHIT RABBAH”の項目も参照）に現れる創世記 18 章 19 節の本文は、現在伝えられる形では、マソラ本文と同じ כי ידעתיו למען אשר יצוה である。また、第 1 章で見たように『タルグム・オンケロス』(その原型［Palestinian Proto-Onqelos］を 135 年以前と見る学者もいる［1Ac, 31］）の一部の写本も、ヘブライ語の ידעתיו をそのままアラム語に訳している。これらの文書の編集に後代の手がどのように加わっているか、私には見当もつかないが、タルムード期以前、さらには初期ユダヤ教時代の本文を伝えている可能性を排除することはできない。どちらにしても ידעתיו の末尾の一文字の有無は神学を分ける重要な意味をもっている。これがないと、創世記 18 章 19 節は神の予知や全知というありきたりの認識的意味に解するしかないが、そのマソラ本文はそれ以上の、神学的にこのうえなく重要なことを言っているからである。その意味で、神学的価値が高いのは（少なくとも本節に関する限り）言うまでもなくマソラ本文の方であり、(伝承の古さやキリスト教的伝統を理由に）それを退けてＳＰ－ＬＸＸ－ＶＵＬ系統の本文を選び取ることは、すでにそれだけで重大な神学的判断を下しているのである。

何はともあれ、現時点では綿密に校訂されたマソラ本文がわれわれの有するヘブライ語聖書原典であり、創世記 18 章 19 節については、宗教改革者たちの用いた本文もわれわれのものと同じである。本節が信仰義認論との関連で重要な意味をもつことに彼らは（時代的限界もあって）気づかなかったが、幸いにも、彼らはマソラ本文を退けたわけではなかった。

最後に、「彼を知った」の主要な意味が「彼を選んだ」ということであるなら、次には、神がアブラハムを――さらにはユダヤ民族を――選んだ理由は何か、また、個々人の選びをどう考えるべきか、が問題になる。そしてこの問いは、初期ユダヤ教以来現在に至るまで、繰り返し問われてきた。本書の第

二部では、初期ユダヤ教の諸文書（知恵の書、ヨベル書、マカベア書一、ソロモンの詩編、アブラハムの遺訓、アブラハムの黙示録、聖書古代誌、第四エズラ書等）、死海文書（ダマスコ文書、外典創世記等）、フィロンとヨセフスの著作、ラビ文献（ミシュナ、タルムード、ベレーシート・ラッバー、タルグム等）、そして何よりも新約聖書において、この問題がどう考えられているかを、検討することにしよう。

注

１　著者のいう「信」（ピスティス）は、神の終末論的な救いの仕組み（エコノミー）を指示する固有名である。「ローマ書におけるピスティスとノモス（２）E」『人文・自然研究』１０号（2016 年）、30—73 頁。“The Holistic Pistis and Abraham’s Faith (Galatians 3),” *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences* 57 (2016) 1-12.
２　死海文書に含まれるヘブライ語聖書写本の中にはマソラ本文とは異なるものもあるが、現在のところ創世記 18 章 19 節を含む写本は見つかっていない（1Hd）。また、オリゲネスの『ヘクサプラ』（Hexapla 六欄聖書）にはヘブライ語本文と並んで、七十人訳とは別系統のギリシア語訳（アクィラ訳、シュンマコス訳、テオドティオン訳）が記されていたが、現在までに復元されたヘクサプラ断片に本節は欠けている（1He）。これらのギリシア語訳およびヘクサプラと関連する諸問題については、4Hn の第 5 章と土岐健治『七十人訳聖書入門』（教文館、2015 年）を参照。
３　創 18：19 の צְדָקָה（「義」）について『ベレーシート・ラッバー』XLIX.4 は、「会葬者への食事提供」（הוֹבְרָיָא）を意味するというラビ・ユダン（רַבִּי יוּדָן ソンチーノ訳では「ラビ・アハ」）の解釈と、「病人を見舞うこと」（בִּקּוּר חוֹלִים）という他のラビたちの解釈を載せている（1Da）。また、『バビロニア・タルムード』「ケトゥボート」8b は、これを「慈しみの行為」（חסדים）の意味にとり、主と父祖アブラハムとの契約（בריתו של אברהם אבינו 割礼を指す）とも関連づけている（1Db. これらのラビ文献については 3Gl の第 3 章§７および６を参照）。こうした「義」の概念は、法や権利と結びついた「正義」とは明らかに異なる。問題は、ギリシア語訳、ラテン語訳、フランス語訳、ドイツ語訳、英語訳におけるヘブライ語の訳語を日本語にどう訳すかである。ヘブライ語の背景に照らしてすべて「義」と訳せば済むかもしれないが、訳語というものはその言語における語源的意味を多かれ少なかれ反映しているはずだから、このやり方は安易であろう。ギリシア語の δικαιοσύνη は δίκη（慣習や裁きの遵守、刑罰的正義）に由来し、ラテン語の justitia は——従って、フランス語と英語の justice も—— jus（法、権利）に由来する。これらは「義」よりもむしろ「正義」と訳すのが適当であろう。英語には、justice のほかに古ゲルマン語に由来する righteousness があるが、別の訳語を当てるのは難しいので、これも「正義」と訳す。ドイツ語の場合、Gerechtigkeit／Recht（本書では「正義」と訳す）と対立する Justiz は英語とは異なり「司法・裁判」を意味する。なお、英語の justice と righteousness の違いについては、E・P・サンダース（土岐健治・太田修司訳）『パウロ』（教文館、2002 年）第 6 章を参照。
４　標準的なギリシア語文法によれば、ᾔδειν は οἶδα の過去完了形で、意味は未完了過去。これを強いて「知っている」と訳す（1Gc, 1Gd）べき理由はない。七十人訳の本文に従えば、18 節「アブラハムは必ず大きな、数の多い国民になり、地のすべての国民が彼によって祝福されるだろう」（Αβρααμ δὲ γινόμενος ἔσται εἰς ἔθνος μέγα καὶ πολύ, καὶ ἐνευλογηθήσονται ἐν αὐτῷ πάντα τὰ ἔθνη τῆς γῆς）という主の決定ないし計画の理由説明として、それに先立つ主の知（つまり予知）の事実が 19 節で言明される。その予知は、アブ

ラハムが子孫たちに命じて、正義と公正を行うために主の道を守らせることを含み、かつ、主がアブラハムに話したすべてのことを彼の上にもたらすという目的と関連していた。不定法 ποιεῖν（ヘブライ語 לַעֲשׂוֹת も同様）は目的の意味にとっておく（他の翻訳も同じ）。なお、NETS＝A. Pietersma and B. G. Wright, ed. *A New English Translation of the Septuagint and the Other Greek Translations Traditionally Included Under that Title* (New York: Oxford University Press, 2007) の訳文は、“For I knew that he will instruct his sons and his household after him, and they will keep the ways of the Lord ...” となっている（2009 年第二刷の電子版による）。

5　例として、創世記 12 章 3 節を比較する。下表の上段はヘブライ語マソラ本文を語順どおり（右から左）に並べ、ヘブライ語の各単語の日本語直訳を中段に、下段にはヘブライ語に対応するギリシア語訳を示す。

הָאֲדָמָה׃	מִשְׁפְּחֹת	כֹּל	בְךָ	וְנִבְרְכוּ	אָאֹר	וּמְקַלֶּלְךָ	מְבָרְכֶיךָ	וַאֲבָרְכָה
地の	諸部族は	すべての	あなたによって	そして、祝福されるだろう	わたしは呪うだろう	そして、あなたを呪う者を	あなたを祝福する者たちを	そして、わたしは祝福するだろう
τῆς γῆς.	αἱ φυλαὶ	πᾶ-σαι	ἐν σοὶ	καὶ ἐνευλογη-θήσονται	κατα-ράσο-μαι·	καὶ τοὺς καταρω-μένους σε	τοὺς εὐλογοῦν-τάς σε,	καὶ εὐλογήσω

見てすぐに分かるように、ギリシア語訳では、ヘブライ語の語順がキアスムスも含め保たれている。唯一異なるのは、「あなたを呪う者」がヘブライ語では単数形なのにギリシア語では複数形になっている点だが、これは、原文を集合的意味にとって前後のバランスをとったものではなく、וּמְקַלְלֶיךָ となっている本文（SP と同じ）をそのまま訳した結果であろう。ちなみに、古ラテン語訳（Et benedicam benedicentes te, et maledicam maledicentes te, & benedicentur in te omnes tribus terrae.）とウルガータ訳 （benedicam benedicentibus tibi et maledicam maledicentibus tibi atque in te benedicentur universae cognationes terrae.）ではキアスムスが崩れている（「あなたを呪う者」はどちらも LXX と同じく複数形）。

6　タルグムについては、3Gl の第 3 章§8 を参照。なお、ＢＨＳの欄外注記にはないが、「タルグム・ネオフィティⅠ」の本文もこれらと基本的に同じである（詳細は省く）。

7　本書の主要目的は、ヘブライ語聖書の印刷本を底本とする宗教改革期の翻訳聖書において創世記18章19節がどのように訳されているかを確認することにある。そのため――また著者の専門外でもあるため――ヘブライ語聖書の印刷本の編集に用いられた（１０世紀以後数百にのぼる）写本の検討はすべて省く。写本については、4Hn の第 2 章を参照。

8　現在使用されている旧約聖書本文の章区分は、イタリア出身のカンタベリー大司教ランフランクス（Lanfrancus／Lanfranc　c. 1005―89）の創案に基づいて１３世紀のカンタベリー大司教ラングトン（Stephen Langton　c. 1150―1228）が確立したウルガータ訳聖書の区分に溯る。1440 年頃ラビ・イサク・ナータンは、この章区分を用いてヘブライ語聖書のコンコーダンスを作成し、そのさいマソラ本文の節番号を一緒に示した。ヘブライ語聖書

の印刷本に章区分が記されたのは、1517—18 年の第一ラビ聖書（1Hi）が最初である。だが、ナータンの節番号は利用されず、1547—48 年の第三ラビ聖書（ダニエル・ボンベルク刊）になってはじめて、５節ごとにヘブライ文字で番号を示すことが行われた。より細かな区分表記は、1568—73 年のアントワープ多言語聖書（1Hl）の本文（の端）に各節の番号（アラビア数字による）を示したものが最初とされるが（4Ha, 26)、ユダヤ人も用いるヘブライ語聖書に節番号がふられたのは、ロイスデン（Johannes Leusden　1624—99）とアティアス（Joseph Athias　1634／5—1700）による 1661 年の聖書（*Biblia Hebraica correcta et collata cum antiquissimnis et accuratissimis exemplaribus manuscriptis et hactenus impressis (cum praefat. Johannis Leusden).* Amsteldami, Typis et sumptibus Josephi Athias. Anno M.DC.LXI）からである。これは、パグニヌスが 1528 年のラテン語訳聖書（1Ld）の本文に付した節番号が、その後ウルガータ訳聖書に採り入れられ、さらにそれが多言語聖書とヘブライ語聖書に採用されたものである。なお、日常語訳聖書において聖書全体に章節区分が最初に導入されたのは、確認できた限りでは、ドイツ語訳では 1564 年のルター訳聖書（*Biblia, das ist die gantze Heilige Schrifft, deudsch. D. Marth. Luther*. Wittenberg: M. Johann Krafft）（Biblioteka Elbląska の書誌情報と電子ファイルに基づく。同年の Hans Lufft 版は未確認）フランス語訳ではオリヴェタン聖書 1553 年改訂版（2Fb'）、そして英語訳聖書では 1560 年のジュネーヴ聖書（2Ef）である。G. F. Moore, "The Vulgate Chapters and Numbered Verses in the Hebrew Bible," *JBL* 12-1 (1893) 73-78; Emanuel Tov, *Textual Criticism of the Hebrew Bible.* 3rd Edition (Minneapolis: Fortress, 2012) 48ff.; 3Bd, Verse-Division の項; 3Br「聖書の章節区分」の項。

9　「メギロート」については、石田友雄・木田献一・左近淑他著『総説旧約聖書』（日本基督教団出版局、1984 年）の第 6 章を参照。

10　林要一「ルネサンス期イタリアの傭兵隊長—その実像」(『地中海研究所紀要』３号［2005 年］39—60 頁）は、１５世紀におけるドゥカート貨の価値の目安として 6 万円という数字を挙げている。コンプルートゥム多言語聖書の出版は１6 世紀だが、この数字は参考になるであろう。

11　エステル記への付加（＝新共同訳旧約続編Ａ章〜Ｆ章）とダニエル書への付加（＝新共同訳旧約続編に収録された３つのダニエル書補遺）については、3Gl 第 2 章を参照。

12　Natalio F. Marcos, "Greek Sources of the Complutensian Polyglot." *Digital.CSIC*, 2011, pp. 1-14．4Hn, 115 も参照。

13　セダーリーム（セーデル［סֶדֶר 順序、順番］の複数形）については、4Hn, 43 参照。

14　これらのマソラ注釈については、4Hn，52ff. 参照。

15　Shalom M. Paul et al. ed., *Emanuel: Studies in the Hebrew Bible, Septuagint, and the Dead Sea Scrolls in Honor of Emanuel Tov, With Index Volume* (Supplements to Vetus Testamentum. Leiden: Brill, 2003) 273ff.

16　ハーゲン（4Ge, 16）は、ルターは 1508 年の版を使用したと見る。バーゼル版（フローベンとペトリによる）の１つであったことは間違いない（4Gi, 74f.)。

17　後代の版（*Huldrici Zuinglii opera: Completa editio prima curantibus Melchiore Schulero et Io. Schulthessio. Volumen quintum, Latinorum scriptorum pars quinta: exegetica Veteris*

Testamenti maximam partem. Zürich : F. Schulthess, 1835）に従って、Abrahae を Abrahamum に訂正。なお、prosapodosis は古代ローマのクインティリアヌスに溯る修辞学用語で、２つ以上の陳述が続く場合に、各陳述の理由をそれぞれの後に、あるいは全体の後に、示す技法を指す。

18　1863 年から 1900 年にかけてバウム（Johann Wilhelm Baum　1809―78）らによって編集されたカルヴァン全集（Ioannis Calvini opera quae supersunt omnia）全 59 巻では、第 23 巻（Corpus Reformatorum 51）に創世記注解書の全体が収められている。また、同第 56 巻（CR 84）には、カルヴァンのフランス語版旧約聖書注解の聖書本文部分（モーセ五書、ヨシュア、詩編等。創世記は 1564 年版）が、La Bible Française de Calvin という名称で集録されている。後者は、カルヴァンのフランス語訳聖書と言ってよいであろう（第 6 章§5 参照）。

19　ヨハン・ハインリヒ・フォン・ゼーレン（Johann Henrich von Seelen　1687―1762）は *Meditationes exegeticae, quibus varia utriusque testamenti* (Lübeck, 1730) の中で創 18：19 を、Noui eum, quod praecepturus sit filiis suis et domui suae post se, ut custodiant viam IEHOVAE と訳している（S. 78)。この訳文は、ミュンスターの 1539 年のラテン語訳（第３章§４）とエティエンヌの解釈（同§９）を参照した結果かもしれない。

20　パグニヌスは本書の第一部に基づく（翻訳を主体とする）ヘブライ語の文法書を 1526 年に出した。*Habes hoc in libro candide Lector Hebraicas Institutiones. in quibus quicquid est grammatices Hebraicae facultatis edocetur ad amussim, de literis, punctis, accentibus, nomine, et nominum speciebus* ... Lugduni: per Antonium Du Ry, 1526. ロイヒリンの便利な文法書兼辞書（1Df）が出たのはこれ以前である。

21　*Enchiridion expositionis vocabvlorvm Haruch, Tharghum, Midrascim, Berescith, Scemoth, Vaicra, Midbar Rabba, et multorum aliorum librorum*. Romae, 1523.

22　ブクストルフは 1607 年に本書を刊行し、8年後の 1615 年に第二版（1Dk'）を *Johannis Buxtorfi Lexicon Hebraicum et Chaldaicum, complectens omnes voces, tam primas quàm derivatas, quae in Sacris Bibliis, Hebraeâ et ex parte Chaldaeâ linguâ scriptis, extant* という書名で出した。初版と第二版とでは、説明と用例の両方に若干の違いがある。第二版の יָדַע の項目には、Curare（気を配る）、Curam agere（配慮する）の意味にもなるという説明が加えられ、聖書の箇所も示されている（詩 1 : 6、箴 27 : 23）（296 頁）。これは重要な指摘だが、創 18 : 19 לְמַעַן אֲשֶׁר יְצַוֶּה については、“Propterea quod praecepturus est” という解釈を変えていない（422 頁）。なお、第四版（Basilae: König, 1631）以後では、同名の息子が補遺と訂正を担当した（4Ho, 58）。

23　本書の性格については、土岐健治・湯川郁子「『九月聖書』の訳出過程について ガラテヤ書を用いて」『一橋大学研究年報 人文科学研究』29（1991 年）、143-172 頁、および idem, “On the Process of the Translation into the *Septemberbibel*: Galatians as a Test Case,” *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences* 44 (2003) 11-22 を参照。

24　表題から分かるように（“ad discendum linguam hebraicam ex rudimentis”）、本書は『ヘブライ語入門』に基づくヘブライ語習得のために書かれたもので、ヘブライ語原文に字義

的ラテン語を施し、文法的解説もつけている（4Bh, 32）。

25　竹原創一訳『第二回詩編講義』［ルター著作集第 2 集第 3 巻］リトン、2009 年。

26　竹原創一『ルターと詩編―詩編第四編の解釈を中心に』（知泉書館、2011 年）、23 頁。

27　ミュンスターはコンプルートゥム多言語聖書を利用することができたらしいが（4Gh, 187）、ルターや周辺の人物がこれを用いた確証は調べた範囲では得らなかった。そもそもこの聖書は、わずか 600 部しか印刷されなかったうえに、船の難破によって相当数が失われたため、価格が高騰し、ますます入手しにくくなった（4Gh, 198n33）。アントワープ多言語聖書刊行の背景には、こうした事情もあった。

28　Schem Hamphoras（שֵׁם הַמְּפֹרָשׁ　原意「はっきりと言われる名前」）は、神の神聖な、口にしてはならない名（יהוה）を指すラビたちの用語（『バビロニア・タルムード』「ソタ」38a、「サンヘドリン」60a 等参照）。Judenschriften と呼ばれるルターの反ユダヤ的著作（特に 1538～43 年）については、注意ぶかい研究を要すると思われる。

29　後の版（*Biblia, Das ist Alle Bücher Alts vnnd Neüws Testaments, den vrsprünglichen spraachen nach, auffs treüwlichest verteütschet*. Zürych: Froschower, 1570）では、いくつかの単語が次のように書き換えられている。なおチューリヒ聖書は、年代によって題名が異なる（4Zc, 205）。

haltind（1525 年版も同じ）→ halten

tügind（1525 年版　thün）→ thüyen

billich（1525 年版　[was] redlich ist）→ gericht

kummen lasse（1525 年版　kommen lasse）→ bringe

30　*Biblia: Das ist, Alle bücher des alten und neüwen Testaments: den ursprünglichen Spraachen nach auff das treüwlichist verteütschet, und jetz von neüwem wider ubersehen*. Getruckt zuo Zurich, M. DC. XXXVIII. および *Die Bibel. Das ist: Alle Bücher der ganzen Heiligen Schrift des Alten und Neuen Testaments.* Zürich. bey David Gessner Gebrüdere, und bey Orell, Gessner, Füsslin und Compagnie. MDCCLXXII.

31　創世記 18 章 19 節のミヒャエリス訳（1775 年）は次のとおり（40―41 頁）。

> Denn ich habe ihn zum Freunde erwählt, damit er seinen Kindern und künftigem Geschlechte befehle, den Weg des Jehova zu gehen, und Recht und Gerechtigkeit zu üben, unter der Belohnung, daß Jehova Abraham erfüllet, was er ihm verheißen hat.
>
> というのは、わたしは彼を友に選んだからだ。彼が彼の子供たちに、また将来の世代に、エホバの道を歩み、そして法と正義を行うよう、命じるために――エホバがアブラハムに約束したことを彼に果たすという報酬のもとで。

19 世紀のドイツ語訳と注解書でヘブライ語本文をこれと同様に解したものとしては、トゥーフ（Friedlich Tuch　1806―67）の創世記注解書（*Kommentar über die Genesis*. Halle, 1838）、クノーベル（August Wilhelm Knobel　1807―63）の注解書（*Die Genesis. Erklärt von August Knobel*. Leipzig: Weidmann'sche Buchhandlung, 1852）、そして新正統派のラビ・ヒルシュ（Samson Raphael Hirsch　1808―88）の注解付ヘブライ語ドイツ語対訳聖書（*Der Pentateuch,*

übersetzed und erläutert von Samson Raphael Hirsch. Erster Theil: Die Genesis. Frankfurt am Main: Kauffmann, 1867）がある。ヒルシュの訳文は次のとおり（303—4 頁）。

> Denn ich habe ja nur deßhalb mein besonderes Augenmerk auf ihn gerichtet, damit er seine Kinder und sein Haus nach sich verpflichte, daß sie den Weg Gottes hüten, Pflicht, Milde und Recht zu üben, damit Gott über Abraham bringe, was er über ihn ausgesprochen.
> というのは、わたしは、そう、このためだけに、彼に特に目を向けたからだ。〔すなわち〕彼が彼の子供たちに、また彼自身の後の彼の家に、彼らが義務、寛容、そして正義を行うべく、神の道を守護することを、義務づけるために。神がアブラハムの上に、彼について述べたことをもたらすために。

ミヒャエリス流の解釈（フランス語版ジュネーヴ聖書の別訳［第6章§6］参照）はすぐに受け入れられたわけではない。18～19 世紀の他の 5 つのドイツ語訳は、どれも לְמַעַן אֲשֶׁר の正しい訳に達していない。① ユダヤ人哲学者メンデルスゾーン（Moses Mendelssohn 1729—86）のモーセ五書ドイツ語訳（*Die fünf Bücher Mose, zum Gebrauch der jüdischdeutschen Nation nach der Uebersetzung des Herrn Moses Mendelssohn. Erstes Buch.* Berlin: Nicolai, 1780）、② ラビの家系からキリスト教に改宗した神学者アウグスティ（Johann Christian Wilhelm Augusti 1771—1841）と聖書学者デ・ヴェッテ（Wilhelm Martin Leberecht de Wette 1780—1849）によるモーセ五書等の翻訳（*Die Schriften des Alten Testaments. Neu übersetzt von J. C. W. Augusti und W. M. L. de Wette. Erster Band, Die fünf Bücher Moses und Joshua*. Heidelberg: Mohr und Zimmer, 1809.）③ ユダヤ教学者ツンツ（Leopold Zunz 1794—1886）の翻訳（*Die vier und zwanzig Bücher der Heiligen Schrift. Nach dem masoretischen Texte*. Berlin: Veit & Comp., 1848 [初版 1837 年]）、④ ラビ・フィリップソン（Ludwig Phillipson 1811—89）のヘブライ語ドイツ語対訳聖書（*Die Israelitische Bibel. Enthaltend: Den heiligen Urtext, die deutsche Uebertragung, die allgemeine, ausführliche Erläuterung mit mehr als 500 englischen Holzschnitten. Herausgegeben von Dr. Ludwig Philippson. Erster Theil: Die fünf Bücher Moscheh.* Leipzig: Baumgärtner, 1858［初版 1853 年？］）。⑤ エルバーフェルダー聖書（*Die Heilige Schrift. Erster Theil genannt Altes Testament. Aus dem Urtext übersetzt*. Elberfeld: in Commission bei W. Langewiesche, vormals W. Hassel's Buchhandlung, 1871）。

> Denn ich habe ihn zum Freunde erwählt, und weiß, daß er seinen Kindern und seinem Hause nach ihm gebieten wird: den Weg des Ewigen zu beobachten, Tugend und Gerechtigkeit zu üben, damit der Ewige ... （Mendelssohn）
>
> Denn ich weiß, daß er seinen Söhnen und seinem Hause nach ihm gebieten wird, daß sie den Weg Jehovas halten und Gerechtigkeit und Recht thun, damit Jehova ...（Augusti & de Wette）
>
> Denn ich hab' ihn ersehen, daß er es hinterlasse seinen Söhnen und seinem Hause nach ihm, daß sie wahren den Weg des Ewigen, zu thun Gebühr und Recht – damit der Ewige ...（Zunz）
>
> denn ich liebe ihn, weil er befelhen wird seinen Söhnen und seinem Hause nach ihm, daß sie halten den Weg des Ewigen, zu thun Gerechtigkeit und Recht, auf daß kommen lasse der

Ewige...（Phillipson）

Denn ich kenne ihn, daß er seinen Kindern befehlen wird und seinem Hause nach ihm, und sie werden den Weg Jehova's halten Gerechtigkeit und Recht zu tun, auf daß Jehova ...（Elberfelder 1871）　（Elberfelder 1905 では次のように改訳. . Denn ich habe ihn erkannt, auf daß er seinen Kindern und seinem Hause nach ihm befehle, daß sie den Weg Jehovas bewahren, Gerechtigkeit und Recht zu üben, damit Jehova auf Abraham kommen lasse, was er über ihn geredet hat. ）

32　ルイ・スゴン訳（1874 年）の創世記 18 章 19 節（1910 年訳も同じ）は次のとおり。

Car je l'ai choisi, afin qu'il ordonne à ses fils et à sa maison après lui de garder la voie de l'Éternel, en pratiquant la droiture et la justice, et qu'ainsi l'Éternel accomplisse en faveur d'Abraham les promesses qu'il lui a faites ...

というのは、わたしは彼を選んだからだ。彼が彼の息子たちに、また彼の後の彼の家に、公正を、また正義を実践しながら、永遠者の道を守ることを命じるために。そして、そのようにして永遠者が、アブラハムのために、彼に与えた諸々の約束を果たすために。

彼の翻訳は、マルタン訳やオステルヴァルド訳（第 6 章§ 6 ）の改訂版にすぎないとの評価を受けているが（3Ge, 351; 3Go, 527）、少なくとも本節は——ジュネーヴ聖書の欄外別訳（第 6 章§ 6 ）、ゲゼニウスの辞書（3Be）、英国のブラウンの注解書（注 29）等を見た可能性はあるとしても——すぐれた新訳である。ストラスブール大学教授ロイス（Eduard Reuss　1804—91）の訳（*La Bible/ Ancien Testament. 3,1, L'Histoire Sainte et la loi [Pentateuque et Josué]*. T. 1.）が出たのは 1879 年（Paris: Librairie Sandoz et Fischbacher）であり、訳文は次のとおり（訳注なし）。こちらがスゴン訳を参考にした蓋然性が高い。

C'est que je l'ai choisi pour qu'il recommande à ses fils et à sa maison après lui de garder la voie de l'Éternel en pratiquant la justice et le droit, afin que l'Éternel accomplisse pour Abraham ce qu'il lui a promis.

なお、フランスのヘブライ語学者カエン（Samuel Cahen　1796—1862）の *La Bible, traduction nouvelle, avec l'Hébreu en regard, ... Pentateuque. Tome premier. La Genèse*（Paris: Chez l'Auteur, 1831）では、本節の訳文は次のとおりであり、まだ לְמַעַן אֲשֶׁר の正しい訳に達していない。

Car je l'ai apprécié, et je sais qu'il ordonnera à ses enfans et à sa maison, après lui, d'observer la voie de Dieu, de pratiquer ta vertu et ta justice, afin que l'Eternel fasse venir en accomplissement sur Abrahame ce qu'il lui a prédit.

33　改訂訳聖書（Revised Version，1885 年）の創世記 18 章 19 節の訳文は次のとおり。

For I have known him, to the end that he may command his children and his household after him,

that they may keep the way of the LORD, to do justice and judgment; to the end that the LORD may bring upon Abraham that which he hath spoken of him.

これより前、当時イーリーの主教であったブラウン（Edward Harold Browne　1811―91）は注解書（*Genesis; or, the First Book of Moses. with a Commentary*. New York: Scribner, Armstrong & Co., 1873）の中で、欽定訳（第 7 章§10）の創世記 18 章 19 節の訳文が七十人訳、ウルガータ、タルグムによっていることを指摘し、ゲゼニウスの聖書ヘブライ語アラム語語彙辞典（1835 年．注 54 参照）、およびトゥーフやクノーベルの注解書（注 31 参照）に基づいて、本節を文字通りに訳すと "I have known him, to the end that, in order that, he should command his children, &c." のようになることを説明している。ブラウンは欽定訳聖書改訂委員会の旧約班の長を務めた人物である（3Ge，371; 4El, 130）。なお、1818 年にはスヴェーデンボーリ（Emanuel Swedenborg　1688―1772）の傾倒者ベラミー（John Bellamy　1755―1842）がヘブライ語本文に基づく新しい英語訳を出した（*The Holy Bible, newly translated from the original Hebrew: with notes critical and explanatory*. London: Longman, Hurst, Rees, Orme, and Brown, 1818）が、正確とは言い難い。その訳文は次のとおり（cf. 4Hb, 312）。

Surely I have acknowledged him, for this end, because he will command his children, and his house after him; and they shall keep the way of JEHOVAH; to do justice, and judgment: for this end, JEHOVAH will bring upon Abraham; even what he hath spoken, concerning him.

この訳文は לְמַעַן אֲשֶׁר を正しく訳していないうえに、奇妙な文法的解釈に支配されている。さらに付け加えると、アメリカの辞書編集者ウェブスター（Noah Webster　1758―1843）による欽定訳の改訂版（*The Holy Bible, Containing the Old and New Testaments, in the Common Version. With Amendments of the Language*. New Haven: Durrie & Peck, 1833）では、創世記 18 章 19 節は欽定訳から全く改善されていない。

34　doibt はラテン語 debet に由来（＝doit）。faice は faire の接続法現在三人称単数形（＝fasse）。Cf. Hilary Wise, *The Vocabulary of Modern French: Origins, Structure and Function*, (Routledge, 2003) 54. François Frédéric Roget, *An Introduction to Old French*, (Williams & Norgate, 1887) 146. 二瓶恵「フランス語の綴り字改革――現代フランス語の基礎を築いた 17 世紀から 19 世紀にかけての綴り字改革」『茨城キリスト大学紀要』44 号人文科学（2010 年）、33―57 頁も参照。

35　*La Sainte Bible, qui contient le Vieux et le Nouveau Testament, expliquez par des notes de théologie & de critique sur la version ordinaire des églises réformées, revûe sur les originaux, & retouchée dans le langage: avec des préfaces particulières sur chacun des livres de l'Écriture Sainte, & deux préfaces générales sur l'Ancien & sur le Nouveau Testament*. *Par David Martin*. Amsterdam, H. Desbordes, P. Mortier, P. Brunel, 1707. および *La Sainte Bible qui contient le Vieux et le Nouveau Testament: Revuë & corrigée sur le Texte hébreu & grec par les pasteurs & les professeurs de l'Eglise de Genève: Avec les arguments et les reflexions sur le chapitres de l'Ecriture Sainte & des Notes*. *par Jean-Frédéric Ostervald*. A Neufchatel: De l'Imprimerie

d’Abraham Boyve et Compagnie, 1744..

36 *La Saincte Bible, nouuellement translatée de Latin en Francois, selon l’edition Latine, dernierement imprimée à Louuain: reueuë, corrigée, & approuuée par gens sçauants, à ce deputez*. A Louuain: Par Bartholomy de Graue, Antoine Marie Bergagne, & Iehan de Vvaen, 1550. および *La Saincte Bible, contenant le Vieil & Nouveau Testament: en latin selon l’edition vulgaire, & en françois de la traduction des docteurs catholiques de l’Université de Louvain. Avec les figures & argumens sur chacun livre & chapitre, declarans sommairement tout ce qui y est contenu.* A Paris. Chez Rolin Thierry, Nicolas Du Fossé & Pierre Chevalier, 1608（初出 1578 年）

37　かつてトリンテラッドは「ルターの旧約聖書ドイツ語訳にティンダルが依存したことは証明できるが、ルター訳からの独立と相違の方がより大きな意義をもつ」と論じた（4Ee, 33）。一方ホワイティングは、「ルター自身による 1523 年のドイツ語訳がティンダルの『最大の助け』であったことを否定する学者はほとんどいないだろう」とまで言っている（4Gk, 226）。ティンダルがルター訳に依存した箇所を詳しく調べたハモンドの研究もあるが（4Ef）、この問題に立ち入る余裕はない。

38　ロイド・ジョーンズの説明には不正確なところがある。彼は “Pagninus ... in his version gives ‘non disceptabit [strive] spiritus meus cum homine’” と説明しているが（p. 119）、この訳はパグニヌスのラテン語訳聖書（1528 年）にも辞書（1529 年）にも見当たらない。ラテン語訳聖書（1Ld）においてパグニヌスは “Et dixit dominus. Non erit ut in uagina spiritus meus in homine in saeculum”（「そして主は言った。わたしの霊が鞘の中にあるようにいつまでも人のうちにあることはないであろう」）と訳している（ラビたちの解釈の 1 つと同じ）。一方、辞書の דון の項目では、創 6:3 の用例を取り上げて、まず “Non iudicabit（裁かない）spiritus meum cum homine” と訳してからラビたちの諸解釈を紹介し、さらにヒエロニムスの訳 “non permanebit spiritus meus in homine in aeternum” を取り上げて批判している。ロイド・ジョーンズが用いたパグニヌス訳は、パグニヌスの死後に出た版であり、“non disceptabit spiritus meum cum homine”（「わたしの霊は人間と争わないだろう」）は彼自身の訳ではない。ロイド・ジョーンズは、エティエンヌによるパグニヌス訳の改訂版（1Ll. 1557 年）か、それを踏襲した *Bibliorvm codex sacer et avthenticvs, Testamenti vtriusq[ue]; Veteris & Noui, ex Hebræa & Græca ueritate, quàm proximè ad literam quidem fieri potuit, fidelissimè translatus in linguam Latinam. De universa huius operis ratione, disseretur in subiecta Præfatione*（Tigvri: excvdebat Christophorvs Froschovervs Ivnior, 1564）か、あるいは *Bibliorum codex sacer et authenticus, Testamenti utriusque Veteris et Noui, ex Hebræa & Græca veritate, ...*（Francofvrti: In officina Andreæ Cambiery, 1614）を見たのであろう（最後のものは大英図書館にある）。これらの聖書はパグニヌスのラテン語訳を用いながらも、創 6 : 3 の訳文は、カルヴァンの注解書（1554 年．1Lk）に合わせて “non disceptabit spiritus meus cum homine in saeculum” と改変されている。だがこれは、オリヴェタン訳（1535 年．2Fb）“Mon esperit ne debattra iamais auec lhomme”（「わたしの霊は決して人間と争わないだろう」（1553 年改訂訳 “Mon esprit ne debatra point a tousiours auec l’homme”）をラテン語に訳したものにきわめて近い。オリヴェタン聖書の旧約部分の改訂にカルヴァンが関与したとしても、この訳を彼の創見と見なす必要はあるまい。なお、“My spirite shall not allwaye *stryve* withe man” というティンダルの訳（1530 年）は、ジュネーヴ聖書（1560 年）に至るすべての英語訳（カヴァデイル、マシ

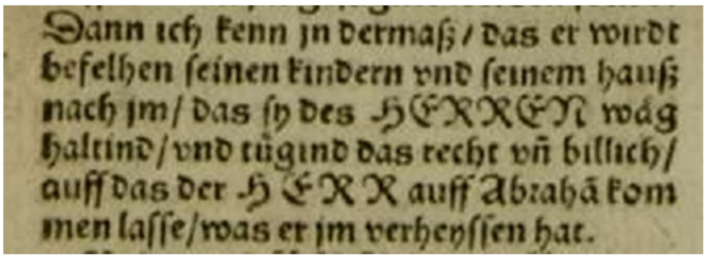
ュー、タヴァナー、大聖書）に受け継がれている（欽定訳も同じ）。

39　英語の will と shall のニュアンスの違いについては、波多野満雄「未来表現について」『白山英米文学』36 号（2011）、21-37 頁を参照。

40　“For I knowe him that he will commaunde his childern and his housholde after him” の最初の him は、英文法としては、従属節の主語が強調のため主節の動詞の目的語の位置に移った「余乗目的語」として説明されている（橋本功「聖書英語とヘブライ語法受容について」、信州大学人文学部編『人文科学論集』22 号［1987 年］61—81 頁。同「Tyndale’s Pentateuch における原典の語順の受容について——Genesis を主資料とした調査」『人文科学論集』38 号［2004 年］1－9 頁）。一方、これを「二個の類似した構文が混淆し、新しい構文が生じる Blending」（反文法的 Construction の一種）として説明する学者もいる（宇津木長「欽定英訳聖書の英語について（下）」『鹿児島経大論集』20(3)［1979 年］171—202 頁）。ティンダル訳では、創 18 : 19 と創 1 : 4 “And God sawe the lyghte that it was good”（וַיַּרְא אֱלֹהִים אֶת־הָאוֹר כִּי־טוֹב）は同じ構造に見えてしまう。ヘブライ語文法では、「光を」は第一目的語、that 節は第二目的語（節）として説明される（「見る」、「聞く」、「知る」等の動詞）。第二目的語は分詞や形容詞でもよい（3Bi, §117 h）。たとえば、民 11 : 10 וַיִּשְׁמַע מֹשֶׁה אֶת־הָעָם בֹּכֶה（「そしてモーセは、民が泣くのを聞いた」）。これらに余乗目的語や Blending という考え方は当てはまりそうにない。なお、創 1 : 4 の七十人訳 καὶ εἶδεν ὁ θεὸς τὸ φῶς ὅτι καλόν における τὸ φῶς はギリシア語文法では prolepsis として説明される（cf. H. W. Smyth, *A Greek Grammar for Schools and Colleges* [New York, 1916], §1333）。ヘブライ語の翻訳であることを考慮するなら、この ὅτι を「〜からである」と訳す［1Gd］のは誤りである。（NETS［注 4 ］もティンダルと同じに訳している）。

41　カヴァデイル聖書の 1535 年版には「大陸版」と「イギリス版」の 2 つがある（4El, 72f.; 4Em, 180）。書名の綴り字や引用章句がやや異なるほか、表題の一部が「大陸版」で “faithfully and truly translated out of Douche and Latyn in to Englishe” となっているのが、「イギリス版」では “faythfully translated in to Englyshe” と短くなっている。本書で参照する本文は「イギリス版」（2Eb’）のものである。

42　“the Zurich Bible in the 1534 edition”（3Ge, 148）は、*Bibel Teütsch: Der ursprünglichen Hebreischen und Griechischen warheit nach, auffs treüwlichest verdometschet. Was über die nächst außgegangnen edition weyters hinzu kommen sye, wirt in nachuolgender Vorred gnugsam begriffenn* (Zürich: Froschouer, 1534) を指すと思われる。創世記 18 章 19 節の訳文は次のとおりであり、der maß を dermaß、wirt を wirdt、dz を das としている点以外は、1531 版と変わらない（MDZ/Digitale Bibliothek 所蔵）。


Dann ich kenn jn dermaß / das er wirdt
befelhen seinen kindern vnd seinem hauß
nach jm / das sy des HERREN wäg
haltind / vnd tügind das recht vñ billich /
auff das der HERR auff Abrahã kom
men lasse / was er jm verheyssen hat.

43　大聖書の 1539 年版と 1540 年版の旧約聖書の訳文には、特に諸書と預言書の部分に目

立った違いがあると言われているが（4Ea, 192）、創世記 18 章 19 節の訳文は綴り字が多少違っているだけで（chyldren を children, ryghte を righte, bringe を brynge などとしている）、訳自体の変更はない。

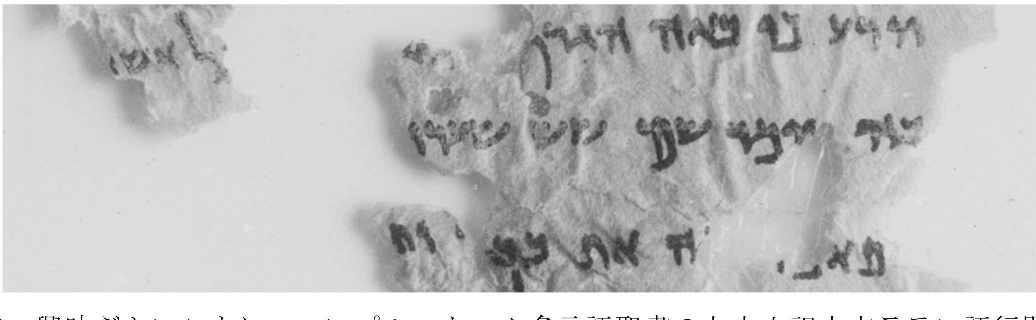
44　*A Commentarye vpon the prophet Mycha. Wrytten by Antony Gilby. Anno Domi. M.D.Li.* [London]: John Day, 1551. および *A Commentarye vpon the prophet Malaky. M.D.LIII*. [London]: John Day, 1553.

45　*The Bible in Englishe: that is to saye. the content of al the holy scripture, both of the olde, and nevve Testament, accordinge to the translacion that is appointed to be rede in the Churches.* Prynted by Edvvard vvhytchurche. Cum priuilegio ad imprimendum solum. M. D. L. 未見。

46　異なる言語間の対応関係は厳密なものではない。なお、後の時代まで見渡すと、さらに２つのタイプを識別可能である。（５）ピスカートルのドイツ語訳 1602 年。――語末の ו を三人称単数男性形の人称代名詞語尾ととって現在形に訳し、לְמַעַן אֲשֶׁר は目的を表わすものと見る。（６）フランス語版ジュネーヴ聖書 1588 年別訳。――語末の ו を三人称単数男性形の人称代名詞語尾ととって複合過去（完了形に対応）に訳し、לְמַעַן אֲשֶׁר は目的を表わすものと見る。今日では（６）の解釈が広く受け入れられている。

47　Simon Wong, "Which King James Bible Are We Referring To?", *Bible Translator* 62/1, 1-11. より詳しくは、David Norton, *A Textual History of the King James Bible*. Cambridge University Press, 2005 を参照。ルツ 3 : 15 以外の重要な相違については同書付表 2、さらに詳しくは、4En 付表 2 を参照。

48　月本昭男訳「ルツ記」（旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 IV 諸書』岩波書店、2005 年）のルツ 3 : 15 訳注 12 には、「多くの写本（含死海写本）やペシッタなどは『彼女は町に入っていった』」とあるが、死海写本の 2QRuth[b]（2Q17）のこの部分は欠損している。The Leon Levy Dead Sea Scrolls Digital Library のウェブページに掲載された 2Q17—2QRuth[b] の写真（B-284857 Plate644）を参照（下図）。ウルリッヒ（1Hd）はマソラ本文と同じに（ויבא העיר）読む。



49　興味ぶかいことに、コンプルートゥム多言語聖書の七十人訳本文ラテン語行間訳もアントワープ多言語聖書第二巻の行間訳も、καὶ εἰσῆλθεν εἰς τὴν πόλιν のラテン語訳をウルガータと同様、et ingressa est in ciuitatem と訳している。主語を男女どちらにもとれるのに、ヘブライ語本文に照らすことなく、ウルガータ訳に合わせて訳したのである。

50　*The Bible, that is, The Holy Scriptures conteined in the Olde and Newe Testament, translated according to the Ebrew and Greeke, and conferred with the best translations in diuers languages.*

With most profitable Annotations vpon all the hard places, and other things of great importance. Imprinted at London, by the Deputies of Christopher Barker, Printer to the Queenes most excellent Maiestie., 1599. （プリンストン神学校所蔵）

51　ＢＨＳの欄外注記には、וַתָּבֹא という異読が記されている（中世の多くの写本、シリア語訳、ウルガータ訳）。この異読は、欽定訳の翻訳者たちが用いることのできた第二ラビ聖書には示されていない（小マソラで הָבִי の א の欠落の問題を指摘しているだけ）。欽定訳の翻訳者たちは וַיָּבֹא הָעִיר という本文しか知らなかったのである（彼らの同時代人も同じ）。シリア語訳も見たという指摘があるが（4Eh, 254, 285）、旧約聖書のシリア語訳が印刷本に収録されたのはパリ多言語聖書（1628 年以後）からであり、アントワープ多言語聖書（1569—72 年）にはまだついていなかった。従って、1611 年以後の数年間に欽定訳を見直した者たちがルツ 3：15 を（ウルガータ訳はともかく）シリア語訳を見て直した、などということはあり得ない。「ヘブライ語原典の上でも動揺がある」という説明（4En, 15; 4El, 119）は一種の後講釈であり、「He 版」と「She 版」の違いの問題に光を投げかけるものではない。

52　本文批評の観点から、ブロッツマンはＭＴの読みをオリジナルと見る。Ellis R. Brotzman and Eric J. Tully, *Old Testament Textual Criticism: A Practical Introduction.* 2nd Edition (Baker Academic, 2016) 171.

53　グリーンスレイド “... the reading ‘he went’ in Ruth iii.15, afterwards corrected to ‘she’”（3Ge, 166）、田川建三「初版の印刷の間違いで、第二版でこれを訂正した」（3Go, 566）、水野隆一「“she went into the citie” とすべきところを “he went into the citie” と誤って印刷してしまったことから、“He Bible” と呼ばれることがあります」（「<特別図書資料解説>『欽定訳聖書』初版初刷完本」『時計台』80号［2010年］、15-17頁）。現物を見ず憶測で判断するから、こういう偽情報を流すことになる。ポラードは “ Their relation is not that of equality as between man and woman, but the second [the She-Bible] is derived from the first, as a child from its parents, an entirely new and distinct edition, reprinted from the original” と解説しているが（2Ei’, 36）、もちろんこれは「She版」で「He版」の誤りを直した、という意味ではない。

54　これより後の *Gvilielmi Gesenii, Thesavrvs philologicvs criticvs lingvae Hebraeae et Chaldaeae Veteris Testamenti*. Tomvs Secvndvs. Editio altera secvndvm radices digesta priore Germanica longe avctior et emendatior（Lipsiae, 1840）の説明（571 頁）も同じ。なお、これらに先立ってゲゼニウスが出した *Hebräisch-deutsches Handwörterbuch über die Schriften des Alten Testaments: mit Einschluss der geographischen Nahmen und der chaldäischen Wörter beym Daniel und Esra*（Leipzig: F. C. W. Vogel, 1810-1812）では、創世記 18 章 19 節の יָדַע の用例は、kennen の項目に分類されている（説明はない）。また、Georg B. Winer 編 *Lexicon manuale hebraicum et chaldaicum in Veteris Testamenti libros ordine etymologico descriptum*（Leipzig: Apud Fridericum Fleischer, 1828）には curavit という訳語候補はあるが、創世記 18 章 19 節への言及はない。

55　אוֹצַר לְשׁוֹן הַקֹּדֶשׁ *hoc est, Thesavrvs lingvae Sanctae. sive, Lexicon Hebraicum, ordine et copia cæteris antehac editis anteferendum, authore Sancte Pagnino Lucensi, ordinis*

Prædicatorum, Sacrae Theologiæ professore: nunc demum cum doctißimis quibusque Hebræorum scriptis quam accuratißimè collatum, et ex ijsdem auctum ac recognitum, Opera Ioannis Merceri, quonda[m] in Hebraicis apud Parisios professoris Regij, & alioru[m] doctoru[m] virorum. Lvgdvni, apud Bartholomævm Vincentivm. M. D. LXXVII. （マドリッド・コンプルテンセ大学所蔵）。

56 *Ioannis Merceri regii qvondam Jn Academia Parisiensi literarum Hebraicarum Professoris Eruditißimi, Diligentißimi, & in primis veræ Religionis cultoris, In Genesin primvm Mosis librum, sic a Graecis Appellatum, Commentarius nvnc primvm in lvcem editvs, Addita Theodori Bezæ præfatione*. Ex Typographia Matthæi Berjon. M. D. XCVIII. （トリノ大学所蔵）

57 この検討は「微視的」なものにすぎない。七十人訳聖書をどうとらえるべきか、という大きな基本的問題については、特に土岐健治『七十人訳聖書入門』(注２)、村岡崇光「七十人訳聖書」（長尾雅人他編『岩波講座東洋思想 第一巻』ユダヤ思想１［岩波書店、1988年］に所収)、およびM.ヘンゲル（土岐健治・湯川郁子訳)『キリスト教聖書としての七十人訳』（教文館、2005 年）がよい手引きになる。

文献一覧

1．五書ヘブライ語本文，ギリシア語訳・アラム語訳・ラテン語訳，古代中世ユダヤ教文書

《ヘブライ語聖書、ヘブライ語をメインとする多言語聖書、ヘブライ語ラテン語対訳聖書》 H

(1Ha) BHS＝תורה נביאים וכתובים *Biblia Hebraica Stuttgartensia*. Ed. K. Elliger and W. Rudolph. Nachdr. d. 5. Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2001 (1st ed., 1997). 今日標準的に使用されているヘブライ語聖書.

(1Hb) BHK＝תורה נביאים וכתובים *Biblia Hebraica. Edidit Rud. Kittel. Editio altera emendatior stereotypica iterum recognita.* Stuttgart: Privileg. Württ. Bibelanstalt, 1912. キッテル編ヘブライ語聖書第二版.

(1Hc) SP＝*Der hebräische Pentateuch der Samaritaner.* Teil 1. hrsgb. A. F. von Gall. Giessen : Alfred Topelmann, 1914. サマリア五書（方形ヘブライ文字での再構成）.

(1Hd) *The Biblical Qumran Scrolls: Transcriptions and Textual Variants*. Ed. Eugene Ulrich. VTSup, 134. Leiden: Brill, 2010. 死海写本の旧約聖書本文.

(1He) *Origenis Hexaplorum quae supersunt; sive Veterum interpretum Graecorum in totum Vetus Testamentum fragmenta. Tomus I.* Ed. Frederick Field. Oxford : Clarendon Press, 1875. オリゲネスの「ヘクサプラ」.

(1Hf) *[Biblia Hebraica]*. Ed. Joshua Solomon Soncino. Soncino: Abraham ben Hayyim, 1488. (Ginsburg No. 6) 最初のヘブライ語聖書完本（Ginsburg No.6 未見）.

(1Hg) *[Biblia Hebraica: Torah, vel Pentateuchus. Prophetae. Hagiographi]*. Ed. Gershom ben Mosheh Soncino. Brixiae (Brescia): Gershom Soncinas, 1494. (Ginsburg No. 13) ルターが使用したのと同じヘブライ語聖書. （カスティーリャ・ラ・マンチャ・デジタル図書館所蔵）

(1Hh) *Haec tibi pentadecastetragonon respicit illud,Hospitium petri & pauli ter quinq[ue] dierum. Namq[ue] instrume[n]tum vetus hebdoas innuit: octo, Lex noua signatur, ter quinq[ue] receptat vtrunq[ue]*. [Tomus I] *Uetus testamentu[m] multiplici lingua nu[n]c primo impressum. Et imprimis Pentateuchus Hebraico, Greco atque Chaldaico idiomate. Adiu[n]cta uniquiq[ue] sua latina interpretatione*. Ed. Francisco Jiménez de Cisneros; Diego López de Zúñiga. Complutum [Alcalá de Henares]: Industria Arnaldi Guillelmii de Brocario in Academia Complutensi, 1520 (1514). (Ginsburg No. 19) コンプルートゥム多言語聖書の第一巻. （スペイン国立図書館所蔵）

(1Hh') *Haec tibi pentadecastetragonon respicit illud, Hospitium petri & pauli ter quinq[ue] dierum. Namq[ue] instrumetu[m] vetus hebdoas innuit. octo, Lex noua signatur, ter quinq[ue] receptat vtrunq[ue]*. [Tomus VI] *Vocabularium hebraecum atq[ue] chaldaicu[m] totius veteris testamenti cu[m] alijs tractatibus pro ut infra in prefatione continetur in academia complutensi nouiter impressum.* 同上、第六巻（アルフォンソ・デ・サモラのヘブライ語アラム語辞典を含む）. （スペイン国立図書館所蔵）

(1Hi) *[Miḳra'ot gedolot]*. ed. Felix Pratensis. Venice: Daniel Bomberg, 1517. (Ginsburg No. 20) 第一ラビ聖書（未見）.

(1Hj) *［The Second Rabbinic Bible (Mikra'ot Gedolot)* (מקראות גדולות)*］*. Vol. 1. Ed. Yaakov ben Ḥayyim, Venice: Daniel Bomberg, 1524. (Ginsburg No. 23)　第二ラビ聖書、４巻本の第一巻.　（バイエルン州立図書館所蔵）

שׂער יהוה החדש: זהו שיעור מה שהדפסנו בחיבור זה. ראשונה החומש עם תרגום ופי' רש"י ון' עזרא: והנביאים ראשונים עם פי' רש"י וקמחי ורלב"ג: והנביאים האחרונים ישעיה עם פי' רש"י ואבן עזרא. ירמיה ויחזקאל עם פי' רש"י וקמחי תרי עשר עם פי' רש"י ואבן עזרא: והכתובים תלים עם פי' רש"י ואבן עזרא. משלי עם פי' אבן עזרא ורלב"ג. איוב עם פי' אבן עזרא ורלב"ג. דניאל עם פירוש אבן עזרא ורבינו סעדיה גאון. עזרא עם פי' אבן עזרא ורש"י. דברי הימים עם פי' מיוחס לרש"י. חמש מגילות עם פירוש רש"י ואבן עזרא. והמקראות מתורגמים ומוטעמים ונמסרים על פי דרכי הסופרים קדמונינו אנשי כנסת הגדולה והסופרי[ם] הבאים אחריהם אשר על משעולם ומסלולם דרכנו בציון אותיות תלויות וקטנות וגדולות ועקומות ונקוד שרבה על הכתב וכתב שרבה על הנקוד. וסתומו[ת] ופתוחות ונכתב ולא נקרא ונקרא ולא נכתב ואותיו[ת] מנוזרו[ת] כל אלו מוגים עם רב העיון כפי כח האפשר ונדפסו במצות דניאל יצ"ו בן קרניאל בומבירגי ז"ל, פה ויניצייא הבירה בסייעתא דשמיא:

(1Hj') Ginsburg, Christian D. *Jacob Ben Chajim Ibn Adonijah's Introduction to the Rabbinic Bible, Hebrew and English; with Explanatoby Notes*. 2nd ed. London: Longmans, Green, Reader and Dyer, 1867. 第二ラビ聖書、ヤコブ・ベン・ハイームの序文.　（ハーバード大学所蔵）

(1Hk) מִקְדַּשׁ יְיָ: עֶשְׂרִים וְאַרְבַּע סִפְרֵי הַמִּכְתָּב הַקָּדוֹשׁ: עִם עֲתִיקָתוֹ בִּלְשׁוֹן רוֹמִיִּים וְעִם פֵּירוּשׁ קָצָר עַל פְּסוּקִים חֲמוֹרִים וְקָשִׁים: נדפס פה בעיר באזל על ידי ז״ מ״ בסייעתא דשמיא:

En tibi Lector Hebraica Biblia, latina planeqve noua Sebast. Mvnsteri tralatione, post omneis omnium hactenus ubiuis gentium æditiones euulgata, & quoad fieri potuit, hebraicæ ueritati conformata: adiectis insuper è Rabinorum com[m]entarijs annotationibus haud pœnitendis, pulchre & uoces ambiguas, & obscuriora quæq[ue] elucidantibus. Basileae: [Ex officina Bebeliana, Impendiis Michaelis Isingrinij et Henrici Petri], 1534.　ミュンスターによる訳注付ヘブライ語ラテン語対訳聖書第一巻（五書～列王記）.（バイエルン州立図書館所蔵）

(1Hk') קֹדֶשׁ יְיָ: עֶשְׂרִים וְאַרְבַּע סִפְרֵי הַמִּכְתָּב הַקָּדוֹשׁ עִם עֲתִיקָתוֹ בִּלְשׁוֹן רוֹמִיִּים וְעִם פֵּירוּשׁ קָצָר עַל פְּסוּקִים חֲמוֹרִים וְקָשִׁים: נדפס פה בעיר באזל על ידי ז״ מ״ בסייעתא דשמיא:

En tibi Lector Hebraica Biblia, latina planeq[ue] noua Sebast. Mvnsteri tralatione, post omneis omnium hactenus ubiuis gentium æditiones euulgata, & quoad fieri potuit, hebraicæ ueritati conformata: adiectis insuper è Rabinorum commentarijs annotationibus haud pœnitendis, pulchrè & uoces ambiguas, & obscuriora quæq[ue] elucidantibus. Accesserunt in hac secunda aeditione multae nouae annotationes, praesertim in Pentateucho, atq[ue] in multis locis textus clarior redditus est ... Basileae: [Ex officina Michaelis Isengrinii & Henrici Petri], 1546.　ミュンスターのヘブライ語ラテン語対訳聖書第二版.（リヨン市立図書館所蔵［Bibliothèque jésuite des Fontaines 寄贈］）

(1Hl) *Biblia Sacra, Hebraice, Chaldaice, Graece & Latine. Philippi II. Reg. Cathol. Pietate, et Stvdio ad Sacrosanctæ Ecclesiæ Vsvm*. Ed. Benito Arias Montano. Christoph. Plantinvs excvd. Antuerpiae, 1569. アントワープ多言語聖書の最初の４巻（旧約聖書）の第一巻（モーセ五書）.　（スペイン国立図書館所蔵）

(1Hl’) *Hebraicorvm Bibliorvm. Veteris Testamenti Latina interpretatio, opera olim Xantis Pagnini Lucensis: nunc verò Benedicti Ariæ Montani Hispale[n]sis, Francisci Raphelengii Alnetani, Guidonis, & Nicolai Fabriciorum Boderianorum fratrum collato studio, ad Hebraicam dictionem diligentissimè expensa: Censorvm Lovaniensivm ivdicio examinata, et academiæ svffragio comprobata: Ad Regij Sacri operis commoditatem & apparatum.* Christophorus Plantinus Regius Prototypographus Antuerpiae excudebat. [c. 1571]. アントワープ多言語聖書第七巻の一部．パグニヌスの訳をアリアス・モンタヌスが改訂した行間訳を含む．（スペイン国立図書館所蔵）

《七十人訳》G

(1Ga) LXX＝*Septuaginta, Editio altera.* Ed. A. Rahlfs and R. Hanhart. Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2006.

(1Gb) *Genesis* (Septuaginta: Vetus Testamentum Graecum, auctoritate Academiae Scientiarum Gottingensis editum, Vol. 1). Ed. John William Wevers. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1974.

(1Gc) Brenton, Lancelot C. L. *The Septuagint with Apocrypha: Greek and English* (Companion texts for Old Testament Studies). Mich.: Grand Rapids, Zondervan, 1980 (Origionally published by Samuel Bagster & Sons, Ltd., London 1851).

(1Gd)秦剛平訳『創世記』（七十人訳ギリシア語聖書１）．河出書房新社、2002 年．（底本は 1Gb）

《タルグム》A

(1Aa) *Targum Onkelos to Genesis: A Critical Analysis together with an English Ttranslation of the Text (Based on A. Sperber’s Edition).* Trans. by M. Aberbach and B. Grossfeld. New York: Ktav Pub. House, 1982.

(1Ab) *Targum Onkelos.* Hrsg. und erläut v. Abraham Berliner. Teil 1. Text, nach Edttio Sabioneta 1557. Berlin: Gorzelanczyk, 1884.

(1Ac) *The Targum Onqelos to Genesis.* Translated, with a critical introduction, apparatus, and notes by Bernard Grossfeld (The Aramaic Bible 6). Edinburgh: T. & T. Clark, 1988.

(1Ad) *Targum Pseudo-Jonathan, Genesis.* Translated, with introduction and notes by Michael Maher (The Aramaic Bible 1B). Edinburgh: T. & T. Clark, 1992.

(1Ae) *Targum Neofiti 1, Genesis.* Translated, with apparatus and notes by Martin McNamara (The Aramaic Bible 1A). Edinburgh: T. & T. Clark, 1992.

タルグムのアラム語テクストには、*The Hebrew Union College CAL (Comprehensive Aramaic Lexicon) Project* のウェブ版を使用．

《ラテン語訳》L

(1La) VUL＝*Biblia sacra: iuxta vulgatam versionem, adiuvantibus Bonifatio Fischer, Iohanne Gribomont, H.F.D. Sparks, W. Thiele, recensuit et brevi apparatu instruxit Robertus Weber.* Deutsche Bibelgesellschaft, 1983. 現在使用されているウルガータ訳の一般的な版．

(1La') VUL^{SC}＝*Biblia sacra. Vulgatae editionis Sixti V. & Clementis VIII. Pont. Max. autoritate recognita. Editio nova, notis chronologicis et historicis illustrata. Vna cvm sacra chronologia, atqve geographia.* Parisiis, Excudebat Antonius Vitré, Regis & Cleri Gallicani Typographus. M. DC. LXII.　シクスト・クレメンティーナ版ウルガータ訳聖書（初版、1592 年）．（リヨン市立図書館所蔵）（ウルガータ訳の歴史については 4Hn, 141-47 と 3Br「ウルガタ訳聖書」を参照）

(1La") *Bibliorum Sacrorum latinae versiones antiguae, seu, Vetus italica, et caeterae quaecunque in Codicibus mss. & antiquorum libris reperiri potuerunt: Quae cum Vulgata Latina, & cum Textu Graeco comparantur.* Tomus Primus. Remis: Apud Reginaldum Florentain, 1743.　ウルガータ訳と古ラテン語訳の本文を比較対照．（古ラテン語訳については 4Hn, 135-41 を参照）

(1Lb) *[Biblia Latina cum glossa ordinaria Walafridi Strabonis aliorumque, et interlineari Anselmi Laudunensis, et cum postillis ac moralitatibus Nicolai de Lyra et expositionibus Guillelmi Britonis in omnes prologos S. Hieronymi et additionibus Pauli Burgensis replicisque Matthiae Doering] Prima pars biblie, cum glosa ordinaria & expositione lyre litterali et morali, necnon additionibus ac replicis: Continens Genesim, Exodum, Leuiticum, Numeri, Deuteronomium.* [Basel:] Johann Froben & Johann Petri, 1498. ルターも参考にした注解付ラテン語聖書（６巻本）の五書の巻．（リヨン市立図書館所蔵）

(1Lc) *Farrago Annotationvm in Genesim, ex ore Huldrychi Zuinglij per Leonem Iudæ & Casparem Megandrum exceptarum*. Tigvri ex ædibus Christophori Froschouer, Anno M. D. XXVII. Mense Martio. ツヴィングリの創世記注釈のレオ・ユートらによる再生、1527 年．（チューリヒ中央図書館所蔵）

(1Ld) *Biblia. Habes in hoc libro prudens lector vtriusq[ue] instrumenti nouam tranlatione[m] æditam à reuerendo sacr[a]e theologiæ doctore Sancte pagnino luce[n]si concionatore apostolico prædicatorij ordinis, necnon & librum de interpretamentis hebraicorum, aram[a]eoru[m], græcorumq[ue] nominum, sacris in literis contentoru[m], in quo iuxta idioma cuiuscu[m]q[ue] linguæ, propriæ ponuntur interpretationes, deriuationes ac eor[um] compositiones adamussim disquiruntur, citantur loca, & codicu[m] latinoru[m] varietates subnotantur, & corrupta ac deprauata propriæ restituu[n]tur scriptioni, acce[n]tus quoq[ue] per impositas virgulas co[m]mo[n]strant, singulis in capitibus quot sint versus in hebræis, codicibus, rece[n]setur vt pauca sint desideranda. Habes & in libri fronte eiusdem* ἐπιτομήν. *i. Abbreuiationem librorum historialium veteris instrumenti, & erratorum castigationes quas quisq[ue] exacte conspiciens suum corrigat librum, duas Ioannis Francisci Pici mirandulæ domini egregias, Epistolas ad eundem, Epistolam translatoris ad Clementem septimum Pontificem maximum, & proemium in quo maximis efferuntur laudibus sacræ literæ.* Santes Pagninus, Giovanni Francesco Pico della Mirandola, Dominique Bertus, et al. [Lugduni: per Antonium de Ry], 1528.　パグニヌスのラテン語訳聖書．（バイエルン州立図書館所蔵）

(1Le) *Biblia Sacra. Vtrivsqve Testamenti, et Vetvs qvidem post omnes omnivm hactenus æditiones, opera D. SEBAST. MVNSTERI euulgatum, & ad Hebraicam ueritatem quoad fieri potuit redditum, collatis ubiq[ue] uetustissimis & probatissimis eius linguæ scriptoribus. NOVVM uero non solum ad Græcam ueritatem, uerum etiam ad multorum utriusq[ue] linguæ & interpretum & codicum fidem, opera D. ERAS. ROT. ultimo*

recognitum & æditum. Additi sunt è LXX. uersione et Apocryphi libri siue Ecclesiastici, qui habentur extra Canonem. Tigvri: Christophorvm Froschovervm, Anno M. D. XXXIX.　ミュンスターとエラスムスのラテン語訳を収録した 1539 年のラテン語聖書.　（ゲント大学図書館所蔵）

(1Lf) *Biblia sacra ex Santis Pagnini tralatione, sed ad Hebraicæ linguæ amussim nouissimè ita recognita, & scholiis illustrata, ut planè noua editio uideri possit. Acceßit præterea Liber interpretationum Hebraicorum, Arabicorum, Græcorumq[ue] nominum, quæ in sacris literis reperiuntur, ordine alphabetico digestus, eodem authore.* Lvgdvni, Apud Hvgonem à Porta. M. D. XLII. Cum priuilegio ad annos sex.　パグニヌスのラテン語訳のセルヴェトゥスによる再版、1542 年.　（オーストリア国立図書館所蔵）

(1Lg) *Biblia Sacrosancta Testame[n]ti Veteris & Noui, è sacra Hebræorum lingua Græcorúmque fontibus, consultis simul orthodoxis interpretib. religiosissime translata in sermonem Latinum. Authores omnemq[ue] totius operis rationem ex subiecta intelliges Præfatione.* PAVLVS ROM. XV. Quaecunque scripta sunt, ad nostram doctrinam scripta sunt, ut per patientiam & consolationem scripturarum spem habeamus. Tigvri: Excvdebat C. Froschovervs. Anno M.D. XLIII.　ラテン語版チューリヒ聖書 1543 年（Versio Tigurina）.　（ローマ国立中央図書館所蔵）

(1Lh) *Moses Latinus ex Hebraeo Factvs: et in eundem Præfatio, qua multiplex eius doctrina ostenditur: & Annotationes, in quibus translationis ratio, sicubi opus est, redditur, & loci difficiliores explicantur. Per Sebastianvm Castalionem. Videbis, lector, Mosem nunc demum et latine loquentem, et aperte.* Basileae. [Oporinus, 1546].　カステリョの五書ラテン語訳（創世記 18：19 の訳は全訳版と同じ）.　（オーストリア国立図書館所蔵）

(1Li) *Biblia, Interprete Sebastiano Castalione. Vna cvm eivsdem Annotationibus. Typographus lectori. In recenti hac translatione, Lector, fideliter expressam Hebrææ atq[ue] Græc[a]e sente[n]tiæ Veteris ac Noui Testamenti ueritate[m], Latini sermonis puritate & perspicuitate seruata, es habiturus: id quod ipse legendo, & cum cæteris editionib. confere[n]do, item ex Præfatione & Annotationibus, illustres rerum difficiliorum Imagines habentibus, plenissime cognosces*. Basilae : Per Ioannem Oporinum, [1551].　カステリョのラテン語訳聖書（フランス語版は 2Fc）.　（大英図書館所蔵）

(1Lj) *In Genesin Enarrationvm Reverendi Patris, Domini Doctoris Martini Lvtheri, Bona Fide & diligenter collectarum, per Vitum Theodorum. Tomvs Secvndvs, In Lvcem Aeditvs.* ROMANOR. XIIII Credidit Abraham Deo, & reputatum est illi ad iustitiam. HEBRE. XI　Fide & ipsa Sara sterilis uirtutem in conceptione feminis accepit, & praeter tempus aetatis peperit: Quoniam fidelem credidit esse eum, qui promiserat.　NORIMRERG AE, M. D. L.　ルターの創世記講義 1550 出版.　（レーゲンスブルク州立図書館所蔵）

D. Martin Luthers Werke: kritische Gesamtausgabe. Band 43 [Genesisvorlesung (cap. 18-30) 1538/42]. Weimar, H. Böhlaus Nachfolger, 1912.

(1Lk) *Im primvm Mosis librum, qui Genesis vulgo dicitur, Commentarius Iohannis Caluini.* [Genevae:] Oliua Roberti Stephani. M. D. LIIII.　カルヴァンのラテン語による創世記注解書 1554 年.　（オーストリア国立図書館所蔵）

(1Lk’)『カルヴァン旧約聖書註解 創世記１』渡辺信夫訳．カルヴァン著作集刊行会・新教出版社，1984 年．（底本は *Joannis Calvini in librum Geneseos Commentarius. ad editionem Amstelodamensem: Acccratissihe exscribi curavit E. Hengstenberg.* Pars Prior. Berolini: Apud Gustavum Bethge, 1838.）

(1Ll) *Biblia Vtriusque Testamenti. De qvorvm nova interpretatione et copiosissimis in eam annotationibus lege quam in limine operis habes epistolam.* [Genevae:] Oliva Rob. Stephani. M.D. LVII.　エティエンヌ編訳のラテン語聖書 1557 年第一巻（創世記～シラ書）．　（ジュネーヴ図書館所蔵）

(1Lm) *Testamenti Veteris Biblia Sacra, sive, Libri Canonici Priscæ Judæorum Ecclesiæ à Deo traditi, Latini recens ex hebræo facti, brevibusq[ue]; Scholiis illustrati ab Immanuele Tremellio & Francisco Junio. Accesserunt libri qui Vulgo dicuntur Apocryphi, Latinè redditi, et notis quibusdam aucti à Francisco Junio. Multò omnes quàm antè emendatiùs editi et aucti locis innumeris: quibus etiam adjunximus Novi Testamenti libros ex sermone Syro ab eodem Tremellio, et ex Græco à Theodoro Beza in Latinum versos, notisq[ue] itidem illustratos*. Secunda cura Francisci Junii. Genevæ: apud Ioan. Tornæsium, Impensis And. Wecheli Hæredum, Claudii Marnii, & Ioannis Aubrii, M. D. XC.　トレメリウスのラテン語訳 1590 年．（ジュネーヴ図書館所蔵）　（初出：フランクフルト、1575 年）

(1Ln) *Commentarius in Genesin, id est, Librum Primum Mosis: In quo distincte & ordine proponuntur I. Analysis Logica singulorum capitum. II. Scholia. III. Observationes locorum communium*. *Authore, Johanne Piscatore, professore sacrarum literarum in illustri schola Nassovica Herbornensi.* Herbornae Nassoviorum: Ex officina Christophori Corvini. CIƆ IƆ CI.　ピスカートルのラテン語による創世記注解書 1601 年．（ヘルツォーク・アウグスト図書館所蔵）

《古代中世ユダヤ・キリスト教文書と宗教改革期のヘブライ語辞書》 D

(1Da) *Midrash Rabbah. Genesis 1. Translated into English with Notes, Glossary and Indices under the Editorship of Rabbi Dr. H. Freedman and Maurice Simon.* London: Soncino Press, 1961 (1st ed., 1939).　ヘブライ語原文は Sefaria (A Living Library of Jewish Texts) 提供の電子ファイルを使用．

(1Db) *The Babylonian Talmud*. *Seder Nashim*. Ed. Isidore Epstein. Trans. by Samuel Daiches, and Israel W. Slotki. London: Soncino Press, 1936.　『バビロニア・タルムード』　第三セデル「ナシム」．ヘブライ語原文は Mechon Mamre 提供の電子ファイルを使用．

(1Dc) *Raschi [Salomonis Isaacidis] in Pentateuchum Commentarius. E. codd. manuscriptis atque editus, auctoris in Talmud commentariis, fontibusque praeterea opimis, critice primum edidit et auxit fontium indices locupletes variasque observationes*. ed. Abraham Berliner. Berolini, Sumptibus Editoris, 1866. ラシの五書注解書．（コロンビア大学所蔵）　（初出：レッジョ、1475 年）．

(1Dd) *Sefer ha-shorashim*（ספר השרשים לרבי דויד בן יוסף קמחי）. Neapel: [Yehoshua Shelomoh Sontino, 1491（1～2 頁欠落）　ラビ・ダヴィド・キムヒの聖書ヘブライ語辞書（ゲーテ大学所蔵）　表紙図版には 1490 年版を示す．　（初出：ローマ、1469～73 年）．

(1De) *[Nicolas de Lyre: Postilla super totam Bibliam]*. Venetiis: [Bonetus Locatellus], 1488.　リラのニコラスの聖書注解．（ハーティトラスト所蔵）　（初出：ローマ、1471—72 年）

(1Df) *Principivm Libri: Ioannis Revchlin Phorcensis Ll. Doc. Ad Dionysivm Fratrem Svvm Germanvm De Rvdimentis Hebraicis*. [Colophon] Phorce in Aedib. Tho. Anshelmi Sexto. Kal. Apriles. Anno. MD.VI. ロイヒリンのヘブライ語入門書兼辞書（Rudimenta linguae hebraicae）1506 年. （バイエルン州立図書館所蔵）

(1Dg) ערוך השורשות *Dictionarivm Hebraicvm, nunc primum æditum & typis excusum, Adiectis Chaldaicis uocabulis non parum multis. Autore F. Sebastiano MunsteroMinorita.* [Basileae:] Apud Frob. M. D. XXIII. Mense Ivnio. Cum priuilegio Cæsareo. ミュンスターの最初の辞書 1523 年. （バイエルン州立図書館所蔵）

(1Dh) סֵפֶר הַשֳּׁרָשִׁים עִם נִגְזָרִים *Dictionarivm Hebraicvm, Iam Tertio ab autore Sebastiano Munstero ex Rabinis, præsertim ex radicibus Dauid Kimhi, auctum & locupletatum*. Froben. Basileae, Anno M D XXXV Mense Avgvsto. ミュンスターの辞書第三版 1535 年. （バイエルン州立図書館所蔵）

(1Di) אוֹצַר לְשׁוֹן הקֹּדֶשׁ *Hoc est, Thesavrvs lingvae sanctae. Sic enim inscribere placuit Lexicon hoc Hebraicum: quòd quem admodum ex thesauro pretiosissima quæque depromere in procliui est, ita ex hoc uno, non solum uocularum significata, sed & abstrusiores quosq[ue] sacræ scripturæ sensus, è uarijs Rabinorum commentarijs selectos, haurire liceat. Autore reuerendo patre Sancte Pagnino Lucensi, idiomatum eruditiorum & parente & Antistite*. Seb. uerò Gryphio excudente LVGD. [Colophon] Sebastianvs Gryphivs Germanvs Excvdebat Lvgdvni, Anno M. D. XXIX. パグニヌスのヘブライ語辞書 1529 年. （バイエルン州立図書館所蔵）

(1Dj) *Dictionarivm hebraicvm novvm, non ex rabinorvm commentis, nec nostrativm doctorvm: stulta imitatione descriptum, sed ex ipsis thesauris sacrorum Bibliorum, et eorundem accurata locorum collatione depromptum, cum phrasibus scripturæ Veteris et Noui Testamenti diligenter annotatis, Autore Joanne Forstero Augustano, sacrae Thologiæ Doctore, ac Hebraicæ Linguæ professore in Academia Vuitebergensi. Cui in fine adnexus est locorum S. scrituturæ in eo explicatorumIindex fidelißimus*. Froben. Basileae, M D VLII. Cautum priuilegio Imp. Maiest, ne quis imitetur. フォルスターのヘブライ語辞書 1557 年. （バイエルン州立図書館所蔵）

(1Dk) *Johannis Buxtorfi Epitome Radicum Hebraicarum et Chaldaicarum, complectens Omnes voces, tam primas quàm derivatas, quæ in Sacris Bibliis, Hebræâ et ex parte Chaldæâ linguâ scriptis, extant: Interpretationis fide, exemplorum Biblicorum copia, locorum plurimorum difficilium ex variis Hebræorum Commentariis explicatione, novè aucta, illustrata, locupletata: Adjectus est index vocum latinarum copiosißimus.*Genes. 40. vers. 8. הֲלוֹא לֵאלֹהִים פִּתְרֹנִים Basileæ, Per Conradum Waldkirch, CIↃ IↃ CVII. ブクストルフのヘブライ語アラム語辞書1607年. （リヨン市立図書館所蔵［Bibliothèque jésuite des Fontaines 寄贈］）

(1Dk') *Johannis Buxtorfi Lexicon Hebraicum et Chaldaicum, complectens Omnes voces, tam primas quàm derivatas, quæ in Sacris Bibliis, Hebræâ et ex parte Chaldæâ linguâ scriptis, extant: Interpretationis fide ... Acceßit Lexicon breve Rabbinico-Philosophicum, communiora vocabula continens, quæ in Commentariis paßim occurunt. Cum indice vocum Latino*. Basileæ: Typis Conradi Waldkirchi, Impensis Ludovici König, CIↃ IↃC XV. ブクストルフの辞書第二版 1615 年. （マドリード・コンプルテンセ大学所蔵）

２．創世記の日常語訳（16 世紀中心）

《ドイツ語訳》 G

(2Ga) *Das Allte Testament deutsch. M. Luther*. Vvittenberg. [Melchior Lotter d.J., 1523]. ルターによる最初の旧約聖書ドイツ語訳（モーセ五書）．（ザクセン＝アンハルト大学・州立図書館所蔵）

(2Gb) *Biblia, das ist, die gantze Heilige Schrifft Deudsch. Mart. Luth. Wittemberg. Begnadet mit Kürfurstlicher zu Sachsen freiheit*. Gedrucked durch Hans Lufft. M. D. XXXIIII. ルターによる聖書全体のドイツ語訳 1534 年、第一巻. （チェコ共和国国立図書館所蔵）

(2Gc) *Biblia: das ist: Die gantze Heilige Schrifft: Deudsch. Auffs new zugericht. D. Mart. Luth. Begnadet mit Kurfürstlicher zu Sachsen Freiheit*. Gedruckt zu Wittemberg, Durch Hans Lufft. M. D. XLV. ルター自身による死の前年、1545 年の改訂版.（オーストリア国立図書館所蔵）.（*D. Martin Luthers Werke. Kritische Gesamtausgabe. Die Deutsche Bibel. 8 band*. [Weimar: H. Böhlaus, 1954]では、1523 年版と 1545 年版を左右に並べて表示）.

(2Gd) 徳善義和監訳「ルター 旧約聖書序文（1523年）」『宗教改革著作集４ ルターとその周辺Ⅱ』教文館，2003年. （原文は 2Ga）

(2Ge) *Ein sendbrieff D. M. Luthers. Von Dolmetzschen[n] vnd Fürbit der heiligenn.* [Nürnberg: Rottmaier], M.D.XXX..（WA30 に収録） ルター「翻訳についての書簡」1530 年. （バイエルン州立図書館所蔵）

(2Gf) *Vom SchemHamphoras: Vnd vom Geschlecht Christi: Matthei am j. Capitel. D. Mart. Luth*. Wittemberg. M. D. XLIII. [Colophon] Gedruckt zu Wittemberg, durch Georgen Rhaw. （WA53 Schriften 1542/43 に収録）「シェーム・ハメフォーラーシュについて、およびキリストの家系について（マタイ第１章）」1543年. （バイエルン州立図書館所蔵）

(2Gg) *Das Alt Testament dütsch, der vrsprünglichen Ebreischen waarheyt nach vff das aller trüwlichest verdütschet*. Getruckt zuo Zürich, durch Christophorum Froschouer, jm Hornung des jahrs, M.D.XXV. フロシャウアーがチューリヒで出版したドイツ語訳旧約聖書1525年. （チューリヒ中央図書館所蔵）

(2Gh) *Die gantze Bibel der vrsprüngliche[n] Ebraischen vnd Griechischen waarheyt nach, auffs aller treüwlichest verteütschet*. Getruckt zuo Zürich, bey Christoffel Froschouer, im Jar als man zalt, M. D. XXXI.. ツウィングリらによるチューリヒ聖書 1531 年（Die Zürcher Bibel von 1531）. （チューリヒ中央図書館所蔵）

(2Gi) *Biblia, beider Allt vnnd Newen Testamenten, fleissig, treülich vn[d] Christlich, nach alter, inn Christlicher kirchen gehabter Translation, mit aufzlegung etlicher dunckeler ort, vnnd besserung viler verrückter wort vnd sprüch, so biß anhere inn andernn kurtz aufzgangnen theutschen Bibeln gespürt vnd gesehen. Durch D. Johan Dietenberger, new verdeutscht. Gott zuo ewiger ehre, vnnd wolfarth seiner heiligen Christlichen Kirchen. Mit Röm. König. Ma. Gnad vnd Freyheit.* Getruckt zuo Meyntz Jm jar nach Christi Gepuort. XVC. XXXIIII. ディーテンベルガーのドイツ語訳 1534 年. （バイエルン州立図書館所蔵）

(2Gj) *Biblia, Das ist: Alle bücher der H. Schrift des alten vnd newen Testaments: Aus Hebreischer vnd Griechischer spraach, in welchen sie anfangs von den Propheten vnd Aposteln geschriben, ietzund aufs new*

vertheutscht: Auch eines ieden buchs vnd capitels inhalt, samt beygefügten concordantzen, vnd angehengter erklärung der tunckeln geschichten, worten, reden vnd sachen, aufs kürtzest vnd einfeltigst verfasset: Darneben sind auch bey einem ieden capitel hinzugesetzt allerhand nutzliche notwendige lehren: Ferner die Apocrypha, das ist, die bücher, welche von alters an das alte Testament angehengt werden, wiewol sie nicht durch prophetischen gaist, noch in Hebreischer spraach geschriben sind, aufs new vertheutscht: Jtem am ende eine Chronologia oder Zeitregister, Historienregister, Landtafeln, vnd ein Summarischer Bericht von den hauptstücken Christlicher Religion: wie auch, warumb, vnd wie ein Christ die H. Schrift mit nutz vnd erbawung lesen, anhören, vnd betrachten solle vnd könne: Durch Johan Piscator, Professor der H. Schrift zu Herborn, mit raht vnd hülf Christliebender gelehrter männer, derselben dolmetschungen vnd erklärungen, verfertiget. Gedruckt zu Herborn in der Grafschaft Naßaw Catzenelenbogen, durch Christoff Raben, 1602. ピスカートルのドイツ語訳聖書第一巻．（バイエルン州立図書館所蔵）

《フランス語訳》F

(2Fa) *La saincte Bible. en Francoys, translatee selon la pure et entiere traduction de sainct Hierome, conferee et entierement reuisitee, selon les plus anciens et plus correctz exemplaires. Ou sus vng chascun Chapitre est mis brief argume[n]t, auec plusieurs figures et histoires: aussy les Concordances en marge au dessus des estoilles, diligemment reuisitees. Auec ce sont deux Tables: lune pour les matieres des deux Testame[n]tz : Lautre pour trouuer toutes les Epistres, tant de Lancien comme du Noуueau Testament & les Euangiles, qui sont leutes en Leglise par toute Lannee: tant es Dime[n]ches co[m]me es iours feriauly et festes.* Imprime en Anuers par Martin Lempereur, An. M. D. et xxx. Cum Gratia et Priuilegio Imperiali.　ルフェーブル訳 1530 年．（ゲント大学図書館所蔵所蔵）

(2Fb) *La Bible. Qui est toute la Saincte escripture. En laquelle sont contenus, le Uieil Testament & le Nouueau, translatez en Francoys. Le Uieil, de Lebrieu: & le Nouueau, du Grec. Aussi deux amples tables, lune pour linterpretation des propres nome: lautre en forme Dindice, pour trouuer plusieurs sentences et matieres.* Dieu en tout. Isaiah. I. Escoutez cieulx, et toy terre preste laureille: car Letemel parle. [Colophon] Acheue dimprimer en la Ville et Conte de Neufchastel, par Pierre de wingle, dict Pirot Picard. Lan. M. D. xxxv. le iiij^{e} iour de Iuing. オリヴェタン聖書 1535 年．（ジュネーヴ図書館所蔵）

(2Fb') *La Bible, Qui est toute la Saincte Escripture contenant le Vieil & Nouueau Testament, ou Alliance*. Isaie I. Escoutez cieulx, & toy terre preste l'oreille: car l'Eternel parle. L'Oliuier de Robert Estienne. M. D. LIII. [Colophon] Imprime par Robert Estienne [à Genève], Lan M. D. LIII, Le IX, Ivin. オリヴェタン聖書の 1553 年改訂版．節番号導入．（ジュネーヴ図書館所蔵）

(2Fc) *La Bible novvellement translatee, Auec la suite de l'histoire depuis le tems d'Esdras, iusqu'aux Maccabées: e depuis les Maccabées iusqu'a Christ. Item auec des Annotacions sur les passages difficiles, par Sebastian Chateillon.* Bale, Iehan Heruage, l'an M. D. LV. カステリョのフランス語訳聖書 1555 年．（オーストリア国立図書館所蔵）

(2Fd) *Commentaire de M. Iean Calvin, svr le premier livre de Moyse, dit Genese*. Non veni vt mitterem Pacem in terram, sed gladivm. Matth. X. A Geneue, Chez Iean Gerard, M. D. LIIII.　カルヴァンの創世記注解書のフランス語訳 1554 年.　（ジュネーヴ図書館所蔵）

(2Fd') *Commentaires de M. Iean Caluin, sur les cinq liures de Moyse. Genese est mis à part, les autres quatre liures sont disposez en forme d'Harmonie: auec cinq indices, dont les deux contenans les passages alleguez et exposez par l'autheur, sont adioustez de noueau en ceste traduction*. A Geneve. Imprimé par Francois Estiene, M. D. LXIIII. カルヴァン自身による五書注解書フランス語訳（創世記は 2Fd の改訂版）1564 年.　（ジュネーヴ宗教改革歴史博物館所蔵）

(2Fe) *La Bible, qvi est tovte la Saincte Escriture du Vieil & du Noueau Testament: Autrement, l'Anciene & la Nouuelle Alliance*. *Le tout reueu & conferé sur les textes Hebrieux & Grecs par les Pasteurs & Professeurs de l'Eglise de Geneue*. A Geneue [Éditeur non identifié], M. D. LXXXVIII.　ジュネーヴ聖書 1588 年.（ジュネーヴ図書館所蔵）

(2Ff) *La Sainte Bible. Contenant le Vieil & le Noueau Testament, Traduicte de Latin en François, et approuuee par les Theologiens de Louvain. Auec les Annotations des anciens Peres et Docteurs de l'Eglise, aux marges, pour l'intelligence asseuree de plusieurs passages & lieux de l'Escriture saincte. Ensemble une table bien ample, docte et Catholique, traduicte du Latin de Monsieur Maistre Iean Harlemius Docteur en Theologie de la Compagnie de IESVS à Louuain*. *Au tres-Chrestien, & tres-Religieux Henry troisiesme, Roy de France & de Pologne.* A Paris, chez Abel L'Angelier av premier pillier de la grand' Salle du Palais. M. D. LXXXVII. Avec privilege dv Roy.　カトリックによるフランス語訳 1587 年.　（フランス国立図書館所蔵）

《英語訳》 E

(2Ea) *[The Pentateuch]*. William Tyndale. Hesse: Malborow, 1530. [Colophon] Emprented at Malborow in the lande of Hesse, by me Hans Luft, the yere of oure Lorde. M.CCCCC.xxx. the. xvij. dayes of Januarij ([17 Jan. 1530]. ティンダルのモーセ五書英語訳.　（ケンブリッジ大学図書館所蔵）

(2Ea') *William Tyndale's Five Books of Moses, Called the Pentateuch, Being a Verbatim Reprint of the Edition of M.CCCC.XXX. Compared with Tyndale's Genesis Of 1534, and the Pentateuch in the Vulgate, Luther, and Matthew's Bible, with Various Collations and Prolegomena*. Ed. J. I. Mombert. New York: Anson D. F. Randolph & Co; London: Samuel Bagster & Sons, Limited. 1884.

(2Eb) *Biblia. The Bible, that is the holy Scripture of the Olde and New Testament, faithfully and truly translated out of Douche and Latyn in to Englyshe.* M.D. XXXV. S. Paul. II. Tessa. III. Praie for vs, that the worde of God maie haue fre passage, and be glorified. et cetera. S. Paul Col. III. Let the worde of Christ dwell in you plenteously in all wyzdome et cetera. Josue I. Let not the boke of this lawe departe out of thy mouth, but exercyse thyselfe therin daye and nighte et cetera. [Colophon] Prynted in the yeare of our LORD M.D.XXXV. and fynished the fourth daye of October. カヴァデイル聖書「大陸版」1535 年.（CC No. 765).（本文未見）

(2Eb') *Biblia. The Byble: that is, the holy Scrypture of the Olde and New Testament, faythfully translated in to Englyshe.* M.D. XXXV. S. Paul. II. Tessal. III. ... S. Paul: Colloss. III. ... Josue I.　[Colophon] Prynted in the

yeare of oure LORDE M.D. XXXV. and fynished the fourth daye of October. カヴァデイル聖書「イギリス版」1535 年. (CC No. 771). （Bibles-Online.net、ファクシミリ聖書）

(2Ec) *The Byble, which is all the holy Scrypture: In whych are contayned the Olde and Newe Testament truly and purely translated into Englysh by Thomas Matthew.* Esaye. 1. Hearcken to ye heauens and thou earth geaue eare: for the Lorde speaketh. M, D, XXXVII, Set forth with the Kinges most gracyous lyce[n]ce. [Colophon] The ende of the newe Testament, and of the whole Byble, To the honoure and prayse of God was this Byble prynted and fynesshed, in the yere of oure Lorde God a, M, D, XXXVII [Antwerp? printed by Jacob van Meteren? and published in London by R. Grafton and E. Whitchurch]. マシュー訳聖書1537年. （Bibles-Online.net、ファクシミリ聖書） 奥付情報（著者の用いたコピーには欠落）は 3Bb, 122（CC No. 792）による.

(2Ed) *The Most Sacred Bible, Whiche is the holy scripture, conteyning the old and new testament, translated into English, and newly recognised with great diligence after most faythful exemplars, by RYCHARD TAVERNER.* Harken thou heuen, and thou earth gyue eare: for the Lorde speaketh. Esaie. i. Prynted at London in Fletestrete at the sygne of the sonne by John Byddell, for Thomas Barthlet. Cvm Privilegio ad imprimendum solum., M. D. XXXIX. タヴァナー聖書 1539 年. （Original Bibles［originalbibles.com］提供の電子ファイル）

(2Ee) *The Byble in Englyshe, that is to saye the content of all the holy scrypture, bothe of y^e^ olde and newe testament, truly translated after the veryte of the Hebrue and Greke textes, by y^e^ dylygent studye of dyuerse excellent learned men, expert in the forsayde tonges.* Prynted by Rychard Grafton & Edward Whitchurch. Cum priuilegio ad imprimendum solum, 1539. [Colophorn] The ende of the newe Testame[n]t: and of the whole Byble, Fynisshed in Apryll. Anno M.CCCCC.XXXIX. 大聖書 1539 年. （CC No. 813）. （本文は下記によって確認）

(2Ee') 同ファクシミリ版 *The Great Bible: a facsimile of the 1539 edition, with an introduction by Yoshio Terasawa*. Tokyo: Elpis, 1991.

(2Ee'') *The Byble in Englyshe, that is to saye the conte[n]t of al the holy scrypture, bothe of y^e^ olde, and newe testame[n]t, with a prologe therinto, made by the reuerende father in God, Thomas archebysshop of Cantorbury. This is the Byble apoynted to the vse of the churches.* Prynted by Edward Whytchurche Cum priuilegio ad imprimendum solum, M.D.xl. [Colophon] The ende of the newe Testament: and of the whole Byble, Fynysshed in Apryll, Anno. M, CCCCC. XL. 大聖書（クランマー聖書）1540 年. （CC No. 817）. （Original Bibles［originalbibles.com］提供の電子ファイル）

(2Ef) *The Bible and Holy Scriptvres conteyned in the Olde and Newe Testament. Translated according to the Ebrue and Greke, and conferred With the best translations in diuers languages. With moste profitable annotations vpon all the Lord* [sic] *places, and other things of great importance as may appeare in the Epistle to the Reader.* Feare ye not. Stand still, and beholde the saluacion of the Lord, which he wil shewe to you this day. Exod. 14, 13. The Lord shal fight for you, therefore holde you your peace. Exod. 14, vers. 14. At Geneva. Printed by Rouland Hall, M. D. LX. ジュネーヴ聖書 1560 年. （Internet Archive Community Texts）

(2Ef') 同ファクシミリ版　*The Geneva Bible: a facsimile of the 1560 Edition, with an introduction by Lloyd E. Berry.* Madison: University of Wisconsin Press, 1969.

(2Eg) *The. holie. Bible. conteynyng the olde Testament and the newe*. Non me pudet Euangelij Christi. Virtus enim Dei est ad salutem Omni credenti Rom i. [Colophon] Imprinted at London in povvles Churchyarde by Richarde Iugge, printer to the Queenes Maiestie. Cum priuilegio Regiae Maiestatis. [1568].　主教訳 1568 年．（プリンストン神学校図書館所蔵）奥付情報はEEBO-TCP: Early English Books Online による．

(2Eh) *The Holy Bible Faithfvlly Translated into English, Ovt Of The Avthentical Latin. Diligently conferred with the Hebrew, Greeke, and other Editions in diuers languages. With Argvments of the Bookes, and Chapters: Annotations: Tables: and other helpes, for better understanding of the text: for discouerie of Corrvptions in some late translations: and for clearing Controversies in Religion. By the English Colledge of Doway.* Haurietis aquas in gaudio de fontibus Saluatoris. Isaiæ 12. You shal draw waters in ioy out of the Sauiours fountaines. Printed at Doway by Lavrence Kellam, at the signe of the holie Lambe. M. DC. IX.　ドゥエイ聖書 1609 年[Vo. 1 創世記～ヨブ記]．（CC No. 1024）．（ボストン公共図書館所蔵）

(2Ei) *The Holy Bible, Contayning the Old Testament and the New: Newly Translated out of the Originall tongues; & with the former Translations diligently compared and reuised, by his Maiesties speciall Com[m]andment. Appointed to be read in Churches.* Imprinted at London by Robert Barker. Printer to the Kings most excellent Maiestic. ANNO DOM.　欽定訳 1611 年．（Internet Archive Community Texts）

(2Ei') 同､縮小ファクシミリ版　*The Holy Bible. a facsimile in a reduced size of the Authorized Version published in the year 1611, with an introduction by A. W. Pollard and illustrative documents*. London: Oxford University Press, 1911.　（トロント大学所蔵）

３．目録、事典、辞書、文法書．総論／概説

《目録、事典、辞書、文法書》テーマと年代順　B

(3Ba) Schaeper, Silke. "Inventory of Hebrew Incunabula". Vol. 6 of *A Catalogue of Books Printed in the Fifteenth Century now in the Bodleian Library*. Eds. Alan Coates et al. Oxford: Oxford University Press, 2005.

(3Bb) CC＝Bullen, George ed. *Caxton Celebration, 1877. Calalogue of the Loan Collection of Antiquities, Curiosities, and Appliances Connected with the Art of Printing, South Kensington*. London: N. Trübner and Co., 1877.

(3Bc) Darlow, T. H., Moule, H. F. and British and Foreign Bible Society Libra, *Historical Catalogue of the Printed Editions of Holy Scripture in the Library of the British and Foreign Bible Society*, Vol. 1 (Printed Bibles in English). New York: Kraus Reprint, 1963.

(3Bd) *The unedited full-text of the 1906 Jewish Encyclopedia* (originally published between 1901-1906 in 12 volumes).　JewishEncyclopedia.com のウェブ版.

(3Be) *Lexicon manvale hebraicvm et chaldaicvm in Veteris Testamenti libros: post editionem germanicam tertiam latine elaboravit mvltisqve modis retractavit et avxit Gvil. Gesenius.* Lipsiae: Vogel, 1833.

(3Bf) *Gesenius' Hebrew and Chaldee Lexicon to the Old Testament Scriptures.* Trans. by Samuel P. Tregelles. Grand Rapids, Michigan: Eerdmans, 1980 (1st ed., 1949).

(3Bg) Brown, F., Driver, S. R. and Briggs, C. A. *The Brown, Driver, Briggs Hebrew and English lexicon: with an Appendix containing the Biblical Aramaic*. Peabody, Mass.: Hendrickson, 2010 (1st ed., 1906).

(3Bh) Rajpurkar, Joseph E. *Kethoneth Yoseph: A Hand-Book of Hebrew Abbreviations, with their Explanations in Hebrew and English, for the Use of Students of the Oral Law and Rabbinical literature.* Bombay: Anglo-Jewish and Vernacular Press, 1887.

(3Bi) *Gesenius'Hebrew grammar: as edited and enlarged by E. Kautzsch. 2nd English ed., Rev. in accordance with the 28th German ed. (1909) by A. E. Cowley.* Oxford: Clarendon, 1980 (1st ed., 1910).

(3Bj) Jastrow, Marcus. *A Dictionary of the Targumim, the Talmud Babli and Yerushalmi, and the Midrashic Literature*. 2 vols. Brooklyn; New York: P. Shalom, 1967 (1st ed., 1903).

(3Bk) Liddell, H. G. and Scott, R. *A Greek-English lexicon, with a Revised Supplement*. Oxford: Clarendon, 1996.

(3Bl) Muraoka, T. *A Greek-English lexicon of the Septuagint.* Louvain: Peeters. 2009.

(3Bm) 田中秀央編『羅和辞典 増訂新版』研究社、1980年（初版1966年）.

(3Bn) Glare, P. G. W. *Oxford Latin dictionary*. 2nd ed. 2 vols. Oxford : Oxford University Press, 2012.

(3Bo) Cappelli, Adriano. *Lexicon abbreviaturarum: Wörterbuch lateinischer und italienischer Abkürzungen wie sie in Urkunden und Handschriften besonders des Mittelalters gebräuchlich sind, dargestellt in über 14000 Holzschnittzeichen*. 2. verb. Aufl. Leipzig: J. J. Weber, 1928.

(3Bp)『キリスト教人名辞典』日本基督教団出版局、1986年. これに含まれない英国人名は主として Oxford Dictionary of National Biography Online による.

(3Bq) 長窪専三『古典ユダヤ教事典』教文館、2008 年.

(3Br) 上智学院新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典』全６巻. 研究社, 1996-2010 年. 特に以下の項目――「ウルガタ訳聖書」、「聖書解釈の歴史」、「聖書の出版」、「聖書の章節区分」、「聖書の翻訳」（古代語、英語、ドイツ語、フランス語）、「ヒエロニムス」.

(3Bs) ギルモア・A（本多峰子訳）『英語聖書の歴史を知る事典』教文館、2002 年.

《総論／概説》 G

(3Ga) Simon, Richard. *Histoire critique du Vieux Testament, par le R. P. Richard Simon, Prêtre de la Congregation de l'Oratoire. Nouvelle Edition, et qui est la première imprimée sur la Copie de Paris, augmentée d'une Apologie générale, de plusieurs Remarques Critiques, d'une Résponse par un Theologien Protestant*. A Rotterdam: Chez Reinier Leers, 1685.

(3Gb) Townley, James. *Illustrations of Biblical literature: exhibiting the history and fate of the sacred writings, from the earliest period to the present century; including biographical notices of translators and other eminent Biblical scholars*. Vol. 2. London: Longman, Hurst, Rees, Orme, and Brown, 1821.

(3Gc) Townley, James. *Illustrations of Biblical literature: exhibiting the history and fate of the sacred writings, from the earliest period to the present century; including biographical notices of translators and other eminent Biblical scholars*. Vol. 3. London : Longman, Hurst, Rees, Orme, and Brown, 1821.

(3Gd) Lampe, G. W. H. ed. *The Cambridge History of the Bible. Volume 2: The West from the Fathers to the Reformation*. Cambridge Histories Online: Cambridge University Press, 2008 (1st ed., 1969).

(3Ge) Greenslade S. L. ed. *The Cambridge History of the Bible. Volume 3: The West from the Reformation to the Present Day*. Cambridge: Cambridge University Press, 1963.

(3Gf) D'Aubigne, J. H. Merle. *History of the Reformation of the sixteenth Century from its Commencement until the days of Calvin*. Translated From The Author's Latest French Edition. London: Ward, Lock, & Co., 1838.

(3Gg) Bedouelle, Guy et Roussel, Bernard direct. *Le Temps des Reformes et la Bible*. Paris: Beauchesne, 1989.

(3Gh) Muller, R. A. "Biblical Interpretation in the Sixteenth and Seventeenth Centuries." In: Donald K. McKim ed., *Historical Handbook of Major Biblical Interpreters* (Downers Grove, Illinois: InterVarsity Press, 1998), pp. 123-152.

(3Gi) 中村賢二郎他編訳『原典宗教改革史』ヨルダン社、1976年.

(3Gj) 土岐健治・川島第二郎「聖書翻訳史における元約・口語訳・新共同訳――旧約聖書特に創世記を中心として」『一橋大学研究年報人文科学研究』27 号（1988 年）、53-149 頁.

(3Gk) 土岐健治「聖書翻訳小史」『聖書の世界』（木田献一，土岐健治，山内真編．全訂新版．自由國民社，2001 年）、426-439 頁.

(3Gl) 土岐健治『初期ユダヤ教と聖書』日本基督教団出版局、1994 年.

(3Gm)『宗教改革著作集』教文館、1983-2003 年.

第３—４巻 ルターとその周辺（徳善義和他）

第５—６巻 ツヴィングリとその周辺（出村彰他訳）

第９—１０巻 カルヴァンとその周辺（久米あつみ他）

第１１—１２巻 イングランド宗教改革（八代崇他訳）

(3Gn) 出村彰・宮谷宣史編『聖書解釈の歴史』日本基督教団出版局、1986年.

堀田雄康「フランシスコ会学派の聖書解釈――盛期スコラ学派に関連して」．225－250頁.

笠利尚「ルター派の聖書解釈――改革者ルターを中心として」．311－333頁.

渡辺信夫「改革派」．334－359頁.

澤田和夫「第十六世紀のカトリック」．385－417 頁.

(3Go) 田川建三『書物としての新約聖書』勁草書房、1997 年.

４．各論（言語ごと）

《ヘブライ語聖書、ヘブライ語本文、ヘブライ語辞書》 H

(4Ha) Ginsburg, Christian D. *Introduction to the Massoretico-critical edition of the Hebrew Bible*. London: Trinitarian Bible Society, 1897.

(4Hb) Whittaker, J. W. *An Historical and Critical Enquiry into the Interpretation of the Hebrew Scriptures: With Remarks on Mr. Bellamy's New Translation.* Cambridge: J. Smith, 1819.

(4Hc) Amram, David Werner. *The Makers of Hebrew books in Italy; being chapters in the history of the Hebrew printing press*. Philadelphia: J. H. Greenstone, 1909.

(4Hd) Levy, Barry B. "Rabbinic Bibles, Mikra'ot Gedolot, and Other Great Books." *Tradition – A Journal of Orthodox Jewish Thought* 25 (1991), pp. 65-81.

(4He) Burnett, Stephen G. "Christian Hebrew Printing in the Sixteenth Century: Printers, Humanism and the Impact of the Reformation." *Faculty Publications by the Classics and Religious Studies Department* (Helmantica: Revista de Filología Clásica y Hebrea, 51-154 [2000]), pp. 13-42.

(4Hf) Sæbø, Magne ed. *Hebrew Bible / Old Testament: the History of Its Interpretation. Vol. II: From the Renaissance to the Enlightenment*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2008.

Smith, Lesley. "Nicholas of Lyra and Old Testament Interpretation." Pages 49-63.

Vanderjagt, Arjo. "*Ad fontes!* The Early Humanist Concern for the Hebraica veritas." Pages 154-89.

Mesguich, Sophie K. "Early Christian Hebraists." Pages 254-275.

Schenker, A. "From the First Printed Hebrew, Greek and Latin Bibles to the First Polyglot Bible, the Complutensian Polyglot: 1477-1577." Pages 276-294.

Raeder, Siegfried. "The Exegetical and Hermeneutical Work of Martin Luther." Pages 363-406.

Opitz, Peter. "The Exegetical and Hermeneutical Work of John Oecolampadius, Huldrych Zwingli and John Calvin." Pages 407-451.

Hobbs, R. Gerald. "Pluriformity of Early Reformation Scriptural Interpretation." Pages 452-511.

Schwarzbach, B. E. "Three French Bible Translations." Pages 553-575.

(4Hg) Burnett, Stephen G. "The Strange Career of the Biblia Rabbinica among Christian Hebraists, 1517–1620." In: B. Gordon and M. McLean ed., *Shaping the Bible in the Reformation: Books, Scholars and Their Readers in the Sixteenth Century* (Leiden: Brill, 2012), pp. 63–83.

(4Hh) Williams, Benjamin. "The 1525 Rabbinic Bible and How to Read it: A Study of the Annotated Copy in the John Rylands Library." *Bulletin of the John Rylands Library* 92-1 (2016), pp. 53-72.

(4Hi) Talmon, Shemaryahu. "The Old Testament Text." In F. M. Cross and S. Talmon ed., *Qumran and the History of the Biblical Text* (Mass.: Harvard University Press, 1975), pp. 1-41.

(4Hj) Newman, Louis I. *Jewish Influence On Christian Reform Movements*. Columbia University Oriental Studies Vol. XXIII. New York: Columbia University Press, 1925.

(4Hk) Burnett, Stephen G. "Philosemitism and Christian Hebraism in the Reformation Era (1500-1620)." In: Irene A. Diekmann & Elke-Vera Kotowski ed., *Geliebter Feind Gehasster Freund: Antisemitismus und Philosemitismus in Geschichte und Gegenwart: Festschrift zum 65. Geburtstag Vvon Julius Schoeps*. (Berlin: Verlag für Berlin-Brandenburg, 2009), pp. 135-146.

(4Hl) Burnett, Stephen G. *Christian Hebraism in the Reformation Era (1500-1660): Authors, Books, and the T ransmission of Jewish Learning.* Leiden: Brill, 2012.

(4Hm) Brekka, Pamela M. *The Antwerp Polyglot Bible (1572): Visual Corpus, New World 'Hebrew-Indian' Map, and the Religious Crosscurrents of Imperial Spain*. A Dissertation Presented to the Graduate School of the University of Florida in Partial Fulfillment of the Requirements for the Degree of Doctor of Philosophy. Florida: University of Florida, 2012.

(4Hn) ヴュルトヴァイン・エルンスト（鍋谷堯爾、本間敏雄訳）『旧約聖書の本文研究 「ビブリア・ヘブライカ」入門』日本基督教団出版局、1997年.

(4Ho) Brisman, Shimeon. *A History and Guide to Judaic Dictionaries and Concordances*. Volume 3, Part 1 of Jewish Research Literature. Ktav Publishing House, Hoboken, NJ., 2000.

《ラテン語聖書》L

(4La) Knight, Sarah and Tilg, Stefan eds.. *The Oxford Handbook of Neo-Latin*. Oxford Medical Handbooks Series. Oxford: Oxford University Press, 2015.

(4Lb) Eskhult, Josef. "Latin Bible Versions in the Age of Reformation and Post-Reformation: On the development of new Latin versions of the Old Testament in Hebrew and on the Vulgate as revised and evaluated among the Protestants." *Kyrkohistorisk Årsskrift*, 2006, pp. 31-67.

(4Lc) Gordon, Bruce. "»Our Philosophy«: Heinrich Bullinger's Preface to the 1539 Latin Bible." In: Ch. Moseret al. ed., *Bewegung und Beharrung: Aspekte des reformierten Protestantismus, 1520-1650: Festschrift für Emidio Campi.* Studies in the history of Christian traditions 144. (Leiden: Bbrill, 2009), pp. 283-93.

(4Ld) Elliott, Mark W. "Looking Backwards: The Protestant Latin Bible in the Eyes of Johannes Piscator and Abraham Calov." In: B. Gordon and M. McLean ed., *Shaping the Bible in the Reformation: Books, Scholars and Their Readers in the Sixteenth Century* (Leiden: Brill, 2012), pp. 291–302.

《ルターのドイツ語訳》 G

(4Ga) Schaff, Philip. *History of the Christian Church. Volume 6. Modern Christianity: the German reformation.* New York: Scribner's, 1904 (1st ed., 1888).

(4Gb) Geiger, Ludwig. *Das Studium der hebräischen Sprache in Deutschland vom Ende des XV. bis zur Mitte des XVI. Jahrhunderts*. Breslau: Schletter'sche Buchhandlung, 1870.

(4Gc) Reu, Johann M. *Luther's German Bible: An Historical Presentation, Together with a Collection of Sources*. Concordia heritage series. Columbus, Ohio: Lutheran Book Concern, 1934.

(4Gd) Bornkamm, H. *Luther und das Alte Testament*. Tübingen: Mohr, 1948.

(4Ge) Hagen, K. *A Theology of Testament in the Young Luther: The Lectures on Hebrews*. Studies in medieval and Reformation Thought, vol. 12. Leiden: Brill Archive, 1974.

(4Gf) Strand, Kenneth A. "Luther's First Edition of the Pentateuch." *Andrews University Seminary Studies* 27-1 (1989), pp. 39-52.

(4Gg) Nestingen, J. A. "Luther in Front of the Text: The Genesis Commentary." *Word & World* 14 (1994), pp. 186-194.

(4Gh) Burnett, Stephen G. "Reassessing the 'Basel-Wittenberg Conflict': Dimensions of the Reformation-Era Discussion of Hebrew Scholarship." *Faculty Publications, Classics and Religious Studies Department*. Paper 61 (2004), pp. 181-201.

(4Gi) Kolb, Robert et al. ed. *The Oxford Handbook of Martin Luther's Theology*. Oxford University Press, 2014.

(4Gj) Maxfield, John A. *Luther's Lectures on Genesis and the Formation of the Evangelical Identity*. Sixteenth Century Essays & Studies 80. Missouri: Truman State University Press 2016.

(4Gk) Whiting, Michael S. *Luther in English: the Influence of His Theology of Law and Gospel on Early English Evangelicals (1525-35)*. Eugene, Oregon: Pickwick Publications, 2010.

(4Gl) コーイマン, W・J. （岸千年訳）『ルターと聖書』（ルター神学研究双書 7）．聖文舎、1971 年.

(4Gm) 塩谷饒『ルター聖書 抜粋・訳注』大学書林、1983年.

《ツヴィングリとチューリヒ聖書》Z

(4Za) Mezger, Johann Jakob. *Geschichte der deutschen Bibelübersetzungen in der schweizerisch-reformirten Kirche, von der Reformation bis zur Gegenwart; ein Beitrag zur Geschichte der reformirten Kirche*. Basel: Bahnmaier, 1876.

(4Zb) Schaff, Philip. *History of the Christian Church. Volume 7. Modern Christianity: the Swiss reformation.* New York: Scribner's, 1892.

(4Zc) Lavater, Hans Rudolf. "Die Zürcher Bibel Von 1524 bis heute." In: Urs Joerg et al. ed., *Die Bibel in der Schweiz. Ursprung und Geschichte.* (Urs Joerg, 1997), S. 199-218.

(4Zd) Lavater-Briner, H. R. *Die Froschauer-Bibe1 1531: Entstehung - Sprachliche Eigenart – Ausstattung. Theo1ogischer Verlag.* Zürich, 2011.

(4Ze) Migsch, Herbert. "Huldreich Zwinglis hebräische Bibel." *Zwingliana* XXXII (2005), S. 39-44.

(4Zf) Migsch, Herbert. "Noch einmal: Huldreich Zwinglis hebräische Bibel." *Zwingliana* XXXVI (2009), S. 41-48.

《フランス語訳》F

(4Fa) Emmanuel, Pétavel. *La Bible en France, ou les traductions françaises des Saintes Écritures: Étude historique et littéraire*. Paris: Libr. française et étrangère, 1864.

(4Fb) Lortsch, Daniel. *Histoire De La Bible en France et Fragments Relatifs à l'Histoire Générale de la Bible*, 1910.　Bibliquest (Bible, Évangile et Études Bibliques) によるウェブ版.

(4Fc) Reuss , Eduard. W. E. *La Bible d'Olivétan*. Strasbourg: Treuttel et Wurtz, 1866.

(4Fd) Linder, R. D. "The Bible and the French Protestant Reformation of the Sixteenth Century." *Andrews University Seminary Studies*, 25-2 (1987), pp. 145-161.

(4Fe) Baumgartner, A. J. *Calvin hébraïsant et interprète de l'Ancien Testament.* Paris: Librairie Fischbacher, 1889.

(4Ff) Lane, Anthony N. S. *John Calvin Student of Church Fathers*. London: A & C Black, 1999.

(4Fg) Puckett, David L. *John Calvin's Exegesis of the Old Testament*. Columbia series in Reformed theology. Westminster. Atlanta: John Knox Press, 1995.

(4Fh) 出村彰『スイス宗教改革史研究』第二版、日本基督教団出版局，1983年.

《英語訳》E

(4Ea) Westcott, B. F. *A General View of the History of the English Bible*. 3rd ed., rev. London, New York: Macmillan, 1905.

(4Eb) Pollard, Alfred W. *Records Of The English Bible The Documents: The Documents Relating to the Translation and Publication of the Bible in English, 1525-1611.* London, New York, Toronto, and Melbourne: Henry Frowde Oxford University Press, 1911.

(4Ec) Lloyd Jones, G. *The Discovery of Hebrew in Tudor England: A Third Language*. Manchester: Manchester University Press, 1983.

(4Ed) Slater, John R. *The Sources of Tyndale's Version of the Pentateuch: A Dissertation Submitted to the Faculty of the Graduate Divinity School in Candidacy for the Degree of Doctor of Philosophy (Department of Old Testament Literature and Interpretation)*. Chicago: University of Chicago Press, 1906.

(4Ee) Trinterud, L. J. "A Reappraisal of William Tyndale's Debt to Martin Luther". *Church History* 31-1 (1962), pp. 24-45.

(4Ef) Hammond, Gerlad. "William Tyndale's Pentateuch: Its Relation to Luther's German Bible and the Hebrew Original." *Renaissance Quarterly* 33-3 (1980), pp. 351-385.

(4Eg) O'Donnell, Anne M. and Wicks, Jared eds. *The Independent Works of William Tyndale Volume 3. An Answere Vnto Sir Thomas Mores Dialoge.* Washington DC: CUA Press, 2000.

(4Eh) Price, James D. *King James Onlyism: A New Sect*. Chattanooga, TN: James D. Price Publisher, 2006.

(4Ei) Rosenthal, Erwin I. J. "Rashi and the English Bible." *Bulletin of the John Rylands Library* 24 (1940), pp. 138-167.

(4Ej) ダニエル・D（田川建三訳）『ウィリアム・ティンダル：ある聖書翻訳者の生涯』勁草書房、2001年

(4Ek) 栗山義信「1530年代の聖書英訳事業」『岐阜大学教養部研究報告』Vol.8（1972), 40-55頁.

(4El) 永嶋大典『英訳聖書の歴史』研究社出版、1988 年.

(4Em) 浜島敏『聖書翻訳の歴史――英訳聖書を中心に』（四国学院研究叢書）創言社，2003 年.

(4En) 寺沢芳雄『翻刻版「欽定英訳聖書」――文献学的・書誌学的解説』（研究社，1985 年）.

《人物と作品》 B

(4Ba) 勝村弘也「ラシによる『創世記註解』の翻訳と註解（１）――創世記２２章を例として」『神戸松蔭女子学院大学キリスト教論叢』20（1987）、65-88 頁.

(4Bb) 勝村弘也「ラシによる『創世記註解』の翻訳と註解（２）」『神戸松蔭女子学院大学キリスト教論叢』21（1988）、13-35 頁.

(4Bc) Wood, A. Skevington. "Nicolas of Lyra." *The Evangelical Quarterly* 33.4 (1961), pp. 196-206.

(4Bd) C. L. Patton, "Nicholas of Lyra." In Donald K. Mckim ed. *Historical Handbook of Major Biblical Interpreters*, pp. 116-122. Downers Grove, Ill: Intervarsity Press, 1998.

(4Be) Bromberg, Sarah E. “The Context and Reception History of the Illuminations in Nicholas of Lyra’s Postilla Litteralis Super Totam Bibliam: Fifteenth-Century Case Studies.” A Thesis submitted to the University of Pittsburgh for the degree of Doctor of Philosophy, 2012.

(4Bf) Price, David H. “Christian Humanism and the Representation of Judaism: Johannes Reuchlin and the Discovery of Hebrew.” *Arthuriana* 19 (2009), pp. 80-96.

(4Bg) Posset, Franz. *Johann Reuchlin (1455-1522): A Theological Biography*. Arbeiten zur Kirchengeschichte 129. Berlin: De Gruyter, 2015.

(4Bh) ジークフリート・レーダー（竹原創一訳）「ヨハンネス・ロイヒリン」、日本ルター学編訳『宗教改革者の群像』（知泉書館、2011年）、19—49頁。

(4Bi) Koenig, Walter H. “Luther As a Student of Hebrew.” *Concordia Theological Monthly*, 1953, pp. 845-853.

(4Bj) Lyell, James P. R. *Cardinal Ximenes, statesman, ecclesiastic, soldier and man of letters, with an account of the Complutensian polyglot Bible.* London: Grafton, 1917.

(4Bk) Gauthier, Joseph D. “Sanctes Pagninus, O.P.” *The Catholic Biblical Quarterly* Vol. 7, No. 2 (April, 1945), pp. 175-190.

(4Bl) Bell, Aubrey F. G. *Benito Arias Montano*. Hispanic notes & monographs: essays, studies, and brief biographies issued by the Hispanic Society of America V. Oxford: Oxford University Press, 1922.

(4Bm) Potter, G. R. *Zwingli*. Cambridge: CUP Archive, 1965.

(4Bn) 出村彰『ツヴィングリ』（人と思想シリーズ第２期）日本基督教団出版局、1974年.

(4Bo) ビュッサー・F（森田安一訳）『ツヴィングリの人と神学』新教出版社、1980年.

(4Bp) グッギスベルク，ハンス・R（出村彰訳）『セバスティアン・カステリョ： 宗教寛容のためのたたかい』新教出版社、2006 年.

(4Bq) Gilmont, Jean Francois. *John Calvin and the Printed Book*. Sixteenth century essays & studies 72. Kirksville, MO: Truman State Univ Press, 2005.

(4Br) Austin, Kenneth. *From Judaism to Calvinism: The Life and Writings of Immanuel Tremellius (c. 1510-1580).* St. Andrews studies in Reformation history. Farnham, Surrey: Ashgate Publishing, Ltd., 2007.

(4Bs) Austin, Kenneth. “A Wandering Jew in the Service of Reform: Immanuel Tremellius and International Calvinism.” *Dimensioni e Problemi della Ricerca Storica,* 2010-2, pp. 137-149.

(4Bt) Burnett, Stephen G. *From Christian Hebraism to Jewish Studies: Johannes Buxtorf (1564-1629) and Hebrew Learning in the Seventeenth Century*. Studies in the History of Christian Thought 68. Leiden: Brill, 1996.

旧約聖書翻訳関連年表

347～419／20　ヒエロニムス（Sophronius Eusebius Hieronymus） 1040～1105　ラシ（Rashi＝Rabbi Shelomoh ben Yitzhaki） 1092／93～1167　アブラハム・イブン・エズラ（Rabbi Abraham ben Meir ibn Ezra） 1160 頃～1235　ダヴィド・キムヒ（Rabbi David Kimḥi） 1270 頃～1349　リラのニコラス（Nicolas de Lyre／Nicolaus Lyranus）				
年	ヘブライ語聖書、多言語聖書、辞書、注解書	ラテン語訳、ラテン語による注解書	日常語訳（**G**, **F**, **E**）	関連事項
1322～31		リラのニコラス Postilla litteralis super totam Bibliam 執筆		
1384 頃			**E** ウィクリフ派聖書の完成．オックスフォード	
1455 頃		グーテンベルク、四十二行聖書の印刷．マインツ		
1466 頃			**G** メンテリン聖書．ストラスブール	
1469～73	キムヒの語根の書．ローマ（1Dd）			
1471～72		リラのニコラス Postilla litteralis et moralis in Vetus et Novum Testamentum 出版．ローマ（1De）		
1475	ラシの五書注解書（本文と注解）出版．レッジョ（1Dc）			
1488	ヨシュア・ソロモン・ソンチーノによる史上初の全ヘブライ語聖書印刷本．ソンチーノ（1Hf）			
1492				コロンブス、第一回航海
1494	ゲルショム・ソンチーノによるヘブライ語聖書．ブレシア（1Hg）			
1495			**F** 歴史物語的聖書．パリ	
1498		注解付ラテン語聖書．バーゼル（1Lb）		
1504	ペリカンのヘブライ語文法書．チューリヒ			
1506	ロイヒリン『ヘブライ語入門』．プフォルツハイム（1Df）			

1513 ～15				ルター、第一回詩編講義
1514 ～17	コンプルートゥム多言語聖書．アルカラ（出版は 1522 年頃）（1Hh） 同第 6 巻、アルフォンソ・デ・サモラのヘブライ語辞書（1Hh'）			
1516				エラスムス、ギリシア語新約聖書の印刷校訂本．バーゼル
1517	プラテンシス編第一ラビ聖書．ヴェニス（1Hi）			ルター、「七つの悔改めの詩編」．ヴィッテンベルク． 10 月 31 日、ルター、「９５箇条の提題」
1519				ツヴィングリ、チューリヒで改革開始
1519 ～21				ルター、第二回詩編講義
1520				ルター、「キリスト者の自由」
1521				ヴォルムス勅令
1522			**G** ルターによる新約聖書ドイツ語訳．ヴィッテンベルク	
1523	ミュンスターの最初のヘブライ語辞書. バーゼル（1Dg）		**G** ルターによる五書ドイツ語訳．ヴィッテンベルク（2Ga） **F** ルフェーブルによる新約聖書のフランス語訳	
1524	ヤコブ・ベン・ハイーム編第二ラビ聖書．ヴェニス（1Hj）			
1525				ツヴィングリ、プロフェツァイ開始
1526		キムヒ「ミクロール」第一部の翻訳に基づく、パグニヌスの文法書．リヨン	**E** ティンダルによる新約聖書英語訳印刷版. ヴォルムス→	
1527		ツヴィングリの創世記注解. チューリヒ（1Lc）		
1528		パグニヌスによるヘブライ語聖書からのラテン語訳．リヨン（1Ld）		

1529	パグニヌスのヘブライ語辞書．リヨン（1Di）		**G** チューリヒで預言書と旧約外典のドイツ語訳	
1530			**F** ルフェーブル・デタープルによる仏語訳．アントワープ（2Fa） **E** ティンダル「モーセ五書」英語訳．アントワープ→（2Ea）	アウクスブルク信仰告白 ルター「翻訳についての書簡」（2Ge）
1531			**G** チューリヒ聖書．チューリヒ（2Gh）	ツヴィングリ、戦死
1534	ミュンスターのラテン語対訳ヘブライ語聖書．バーゼル（1Hk）（ヘブライ語のみの版は 1536 年）		**G** ルターによる全聖書のドイツ語訳．ヴィッテンベルク（2Gb） **G** ディーテンベルガーのドイツ語訳．マインツ（2Gi）	ヘンリー８世､英国国教教会創設
1535	ミュンスターのヘブライ語辞書第三版．バーゼル（1Dh）		**F** オリヴェタン聖書．ヌーシャテル（2Fb） **E** カヴァデイル聖書．ケルン→（2Eb）	
1535 ～45				ルター、創世記講義
1536				カルヴァン『キリスト教綱要』第一版．バーゼル．ジュネーヴの教会改革に参加．
1537			**E** マシュー訳聖書．アントワープ？→（2Ec）	
1539		ミュンスターとエラスムスのラテン語訳を合わせた聖書．チューリヒ（1Le）	**E** タヴァナー聖書．ロンドン（2Ed） **E** 大聖書．パリ→（2Ee）	
1542		セルヴェトゥスによるパグニヌスのラテン語訳の改訳．リヨン（1Lf）		
1543		ラテン語版チューリヒ聖書．チューリヒ（1Lg）		
1544 以後		ルターの創世記講義、出版開始（1Lj）		
1545			**G** ルター訳聖書、ルターの生前最後の改訂版．ヴィッテンベルク（2Gc）	
1546	ミュンスターの対訳聖書第二版．バーゼル（1Hk'）	カステリョの五書ラテン語訳．バーゼル（1Lh）		トリエント公会議でウルガータの使用を決定．ルター死去

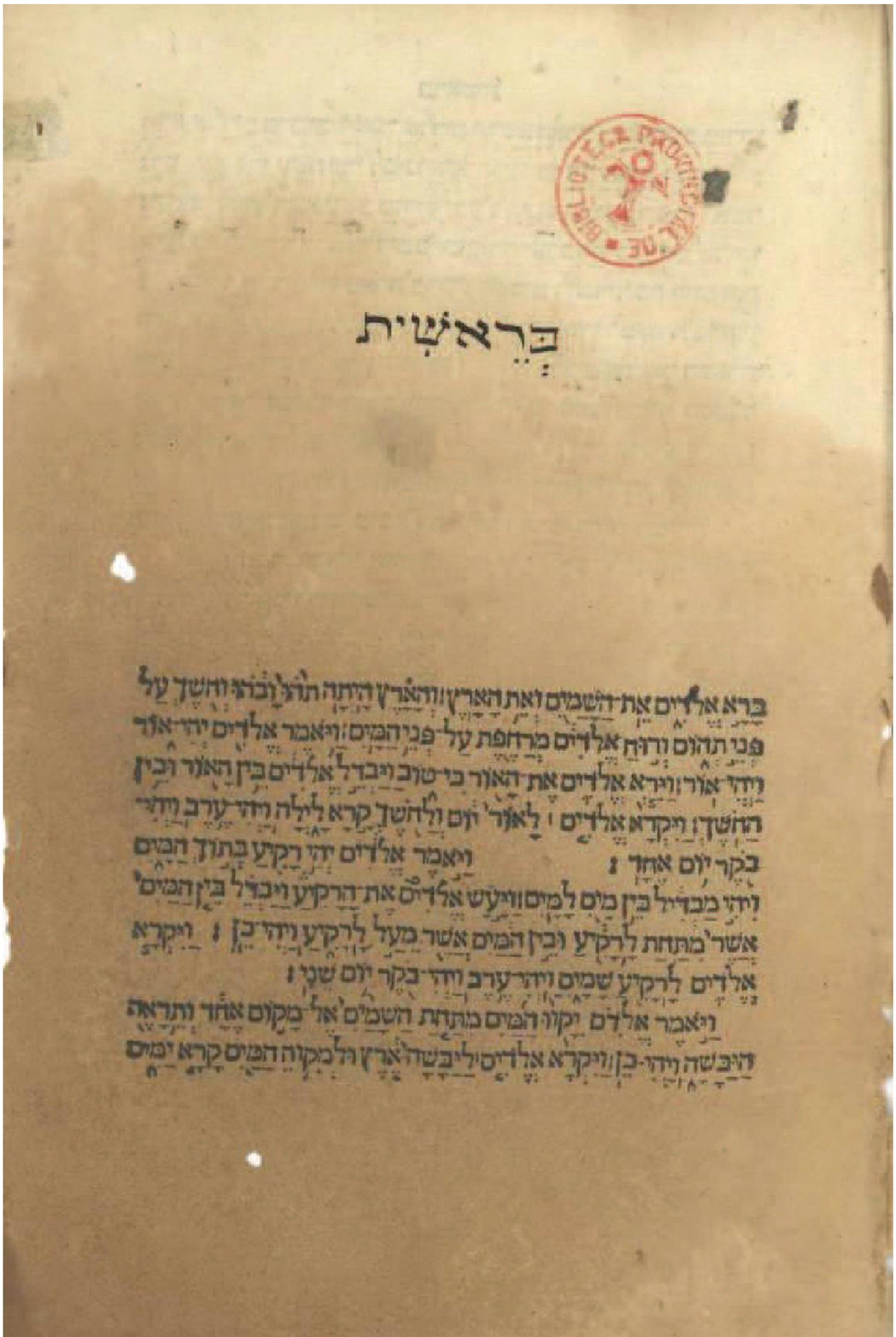
1549				チューリヒ一致信条
1551		カステリョのラテン語訳聖書. バーゼル（1Li）		
1553			**F** オリヴェタン聖書の改訂版． ジュネーヴ（2Fb'）	英国、メアリー女王即位（～1558）
1554		カルヴァンの創世記註解. ジュネーヴ（1Lk）	**F** カルヴァン創世記注解. ジュネーヴ（2Fd）	
1555			**F** カステリョの仏語訳聖書. バーゼル（2Fc）	アウクスブルクの和議 英女王メアリー、プロテスタント迫害
1557	フォルスターのヘブライ語辞書. バーゼル（1Dj）	エティエンヌのラテン語訳. ジュネーヴ（1Ll）		
1558				エリザベス一世即位（～1603）
1560			**E** ジュネーヴ聖書. ジュネーヴ（2Ef）	
1564			**F** カルヴァンの五書註解書. ジュネーヴ（2Fd'）	カルヴァン、死去
1568			**E** 主教訳聖書. ロンドン（2Eg）	
1568 ～72	アントワープ多言語聖書. アントワープ（1Hl）			
1571	パグニヌスのラテン語訳聖書のモンタヌスによる改訂版. アントワープ（1Hl'）			
1575		トレメリウスのラテン語訳. フランクフルト（1Lm）		
1582			**E** リームズ聖書. ランス →	
1587			**F** ブノワ訳. パリ	
1588			**F** ジュネーヴ聖書. ジュネーヴ（2Fe）	
1598				ナントの王令
1601		ピスカートルの創世記注解書． ヘルボルン（1Ln）		
1602			**G** ピスカートルのドイツ語訳． ヘルボルン（2Gj）	
1603				ジェームズ一世即位（～1625）
1607	ブクストルフのヘブライ語辞書. バーゼル（1Dk）			

1609 ～10			**E** ドゥエイ聖書．ドゥエ→（2Eh）	
1611			**E** 欽定訳．ロンドン（2Ei）	
1618 ～19	ブクストルフ編のラビ聖書			
1628 ～45	パリ多言語聖書			
1640				英国でピューリタン革命始まる
1653 ～57	ロンドン多言語聖書			

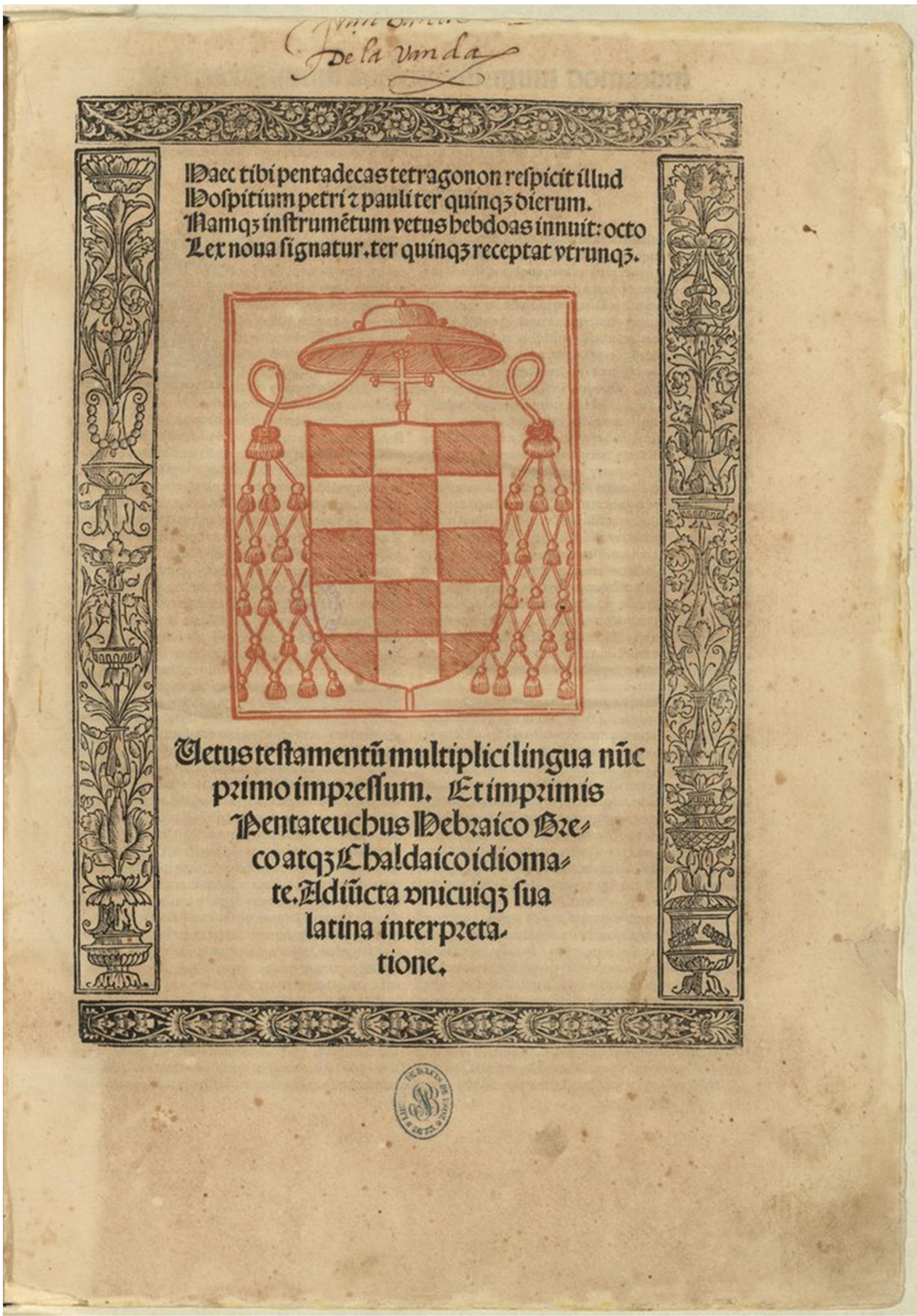
※ → は最初の印刷地から本国に持ち込まれたことを示す。

表紙図版

本書で参照した宗教改革期の聖書、辞書、注解書のタイトル頁を以下に示す．できるだけ原色のものを用いるという原則の下、モノクロのものしか参照できなかった文献については、別サイトから借用した原色の画像をもって代用する．

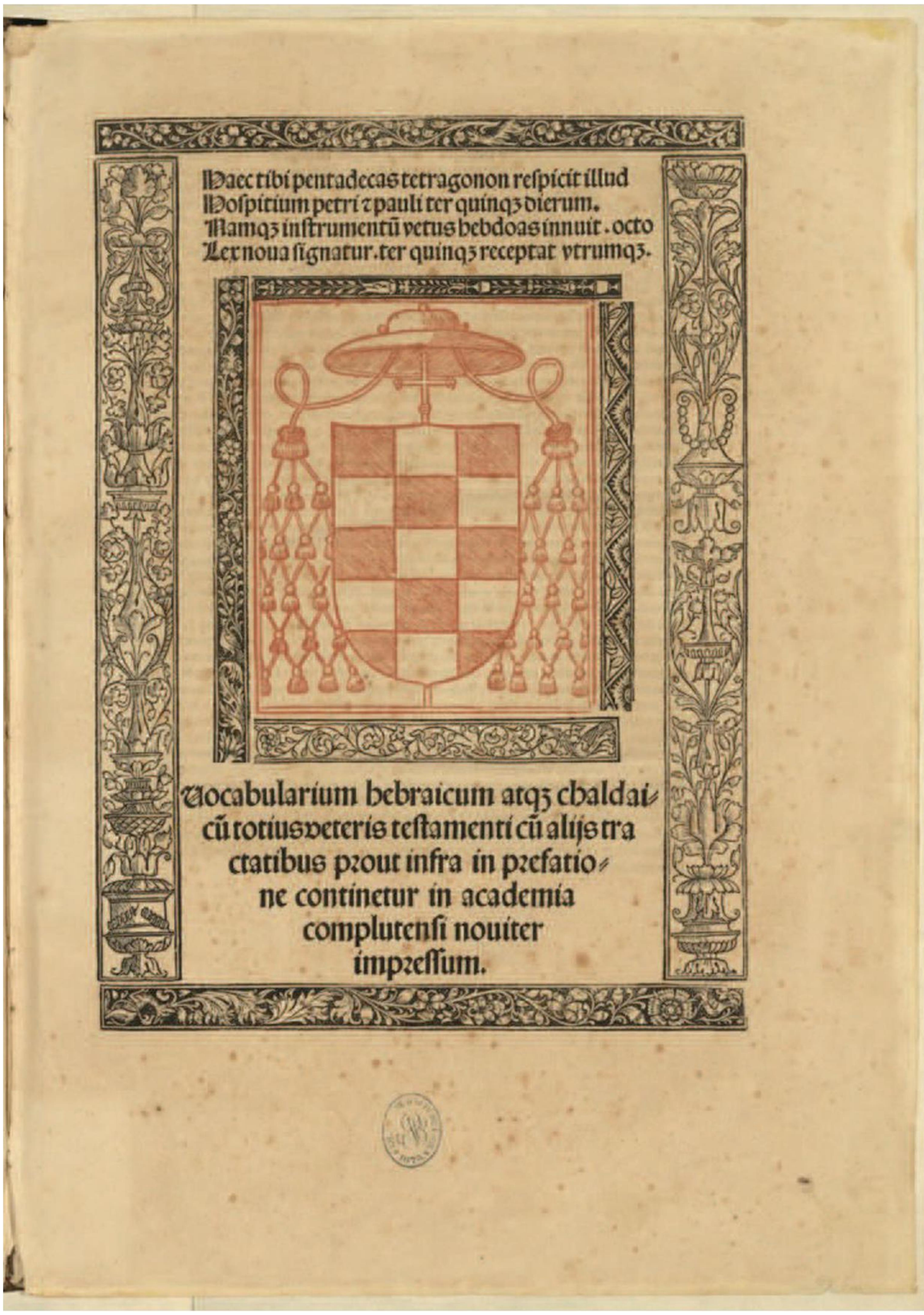

בראשית
ברא אלדים את השמים ואת הארץ: והארץ היתה תהו ובהו וחשך על
פני תהום ורוח אלדים מרחפת על פני המים: ויאמר אלדים יהי אור
ויהי אור: וירא אלדים את האור כי טוב ויבדל אלדים בין האור ובין
החשך: ויקרא אלדים לאור יום ולחשך קרא לילה ויהי ערב ויהי
בקר יום אחד: ויאמר אלדים יהי רקיע בתוך המים
ויהי מבדיל בין מים למים: ויעש אלדים את הרקיע ויבדל בין המים
אשר מתחת לרקיע ובין המים אשר מעל לרקיע ויהי כן: ויקרא
אלדים לרקיע שמים ויהי ערב ויהי בקר יום שני:
ויאמר אלדים יקוו המים מתחת השמים אל מקום אחד ותראה
היבשה ויהי כן: ויקרא אלדים ליבשה ארץ ולמקוה המים קרא ימים

(1Hg) *[Biblia Hebraica: Torah, vel Pentateuchus. Prophetae. Hagiographi]*. Ed. Gershom ben Mosheh Soncino. Brescia, 1494. (Ginsburg No. 13) ルターが使用したのと同じヘブライ語聖書.（カスティーリャ・ラ・マンチャデジタル図書館所蔵）


Haec tibi pentadecas tetragonon respicit illud
Hospitium petri ⁊ pauli ter quinq3 dierum.
Namq3 instrumẽtum vetus hebdoas innuit: octo
Lex noua signatur, ter quinq3 receptat vtrunq3.

Uetus testamentũ multiplici lingua nũc
primo impressum. Et imprimis
Pentateuchus Hebraico Gre-
co atq3 Chaldaico idioma-
te. Adiũcta vnicuiq3 sua
latina interpreta-
tione.

(1Hh) *Uetus testamentu[m] multiplici lingua nu[n]c primo impressum. Et imprimis Pentateuchus Hebraico, Greco atque Chaldaico idiomate. Adiu[n]cta uniquiq[ue] sua latina interpretatione*. Complutum, 1520 (1514). (Ginsburg No. 19) コンプルートゥム多言語聖書の第一巻. （スペイン国立図書館所蔵）


Haec tibi pentadecas tetragonon respicit illud
Hospitium petri τ pauli ter quinqȝ dierum.
Namqȝ instrumentū vetus hebdoas innuit. octo
Lex noua signatur. ter quinqȝ receptat vtrumqȝ.

Vocabularium hebraicum atqȝ chaldai-
cū totius veteris testamenti cū alijs tra
ctatibus prout infra in prefatio-
ne continetur in academia
complutensi nouiter
impressum.

(1Hh’) *Vocabularium hebraecum atq[ue] chaldaicu[m] totius veteris testamenti cu[m] alijs tractatibus pro ut infra in prefatione continetur in academia complutensi nouiter impressum.* 同上、第六巻（アルフォンソ・デ・サモラのヘブライ語アラム語辞典を含む）．（スペイン国立図書館所蔵）



(1Hj) ［*The Second Rabbinic Bible (Mikra'ot Gedolot)* (מקראות גדולות)］. Vol. 1. Ed. Yaakov ben Ḥayyim, Venice, 1524. (Ginsburg No. 23)　第二ラビ聖書第一巻.　（バイエルン州立図書館所蔵）


מִקְדַּשׁ יְיָ

עֶשְׂרִים וְאַרְבַּע סִפְרֵי הַמִּכְתָּב הַקָּדוֹשׁ

EN TIBI LECTOR
HEBRAICA BIBLIA
LATINA PLANEQVE NOVA SEBAST. MVNSTERI
tralatione, post omneis omnium hactenus ubiuis gentium æditiones euulgata,
& quoad fieri potuit, hebraicæ ueritati conformata: adiectis insuper
è Rabinorum cōmentarijs annotationibus haud pœni-
tendis, pulchre & uoces ambiguas, & obscu-
riora quæq; elucidantibus.

PRIOR HIC TOMVS HABET
Mosaicos libros quinque
Iehosuam
Iudicum
Samuelis lib. duos
Regum lib. duos.

BASILEAE
1534

(1Hk) מִקְדַּשׁ יְיָ: עֶשְׂרִים וְאַרְבַּע סִפְרֵי הַמִּכְתָּב הַקָּדוֹשׁ:
En tibi Lector Hebraica Biblia, latina planeqve noua Sebast. Mvnsteri tralatione, post omneis omnium hactenus ubiuis gentium æditiones euulgata, & quoad fieri potuit, hebraicæ ueritati conformata: Basileae, 1534. ミュンスターによる訳注付ヘブライ語ラテン語対訳聖書第一巻（五書～列王記）．（バイエルン州立図書館所蔵）



DR. LEON & HILDE KOLB EDUCATIONAL FOUNDATION

EN TIBI LECTOR

Hebraica Biblia, latina planeq; noua

SEBAST. MVNSTERI TRALATIONE, POST OMNEIS OM-
nium hactenus ubiuis gentium æditiones euulgata, & quoad fieri potuit, he
braicæ ueritati conformata: adiectis insuper è Rabinorum commen-
tarijs annotationibus haud pœnitendis, pulchrè & uoces
ambiguas, & obscuriora quæq; loca
elucidantibus.

Accesserunt in hac secunda æditione multæ nouæ annotationes, præsertim in Pentateucho, atq; in multis locis textus clarior redditus est, & Hebraicæ ueritati magis quàm antea conformatus.

Index quoq; præcipuarum sententiarum & expositionum, toti operi præmissus, iam demum æditus est.

BASILEAE
1546.

DR. LEON & HILDE KOLB EDUCATIONAL FOUNDATION

2 Vol.

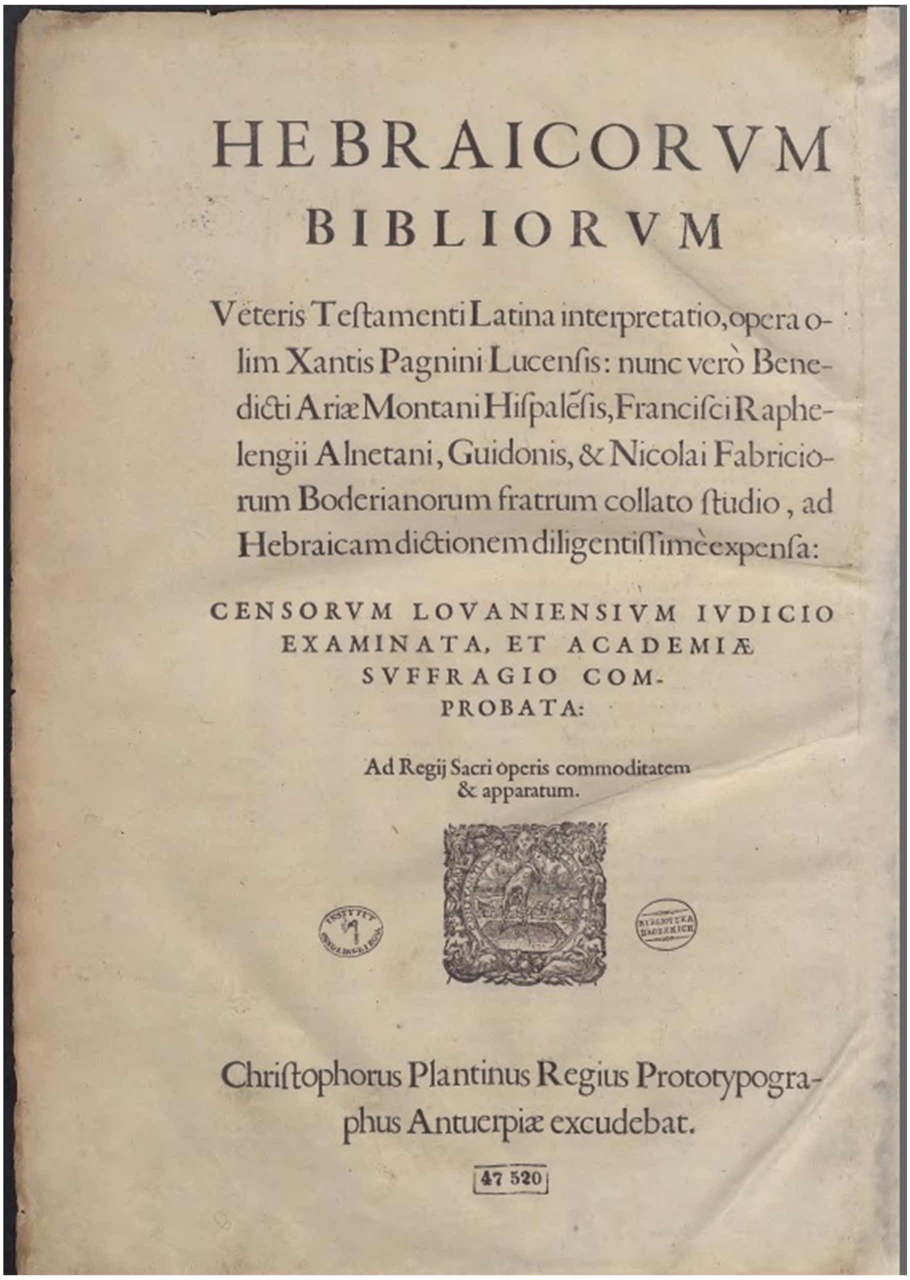
(1Hk’) *En tibi Lector Hebraica Biblia, latina planeq[ue] noua Sebast. Mvnsteri tralatione, post omneis omnium hactenus ubiuis gentium æditiones euulgata, & quoad fieri potuit*. Basileae: 1546.　ミュンスターのヘブライ語ラテン語対訳聖書第二版.　（PBA Galleries のオークション用画像．2017年１月末現在）



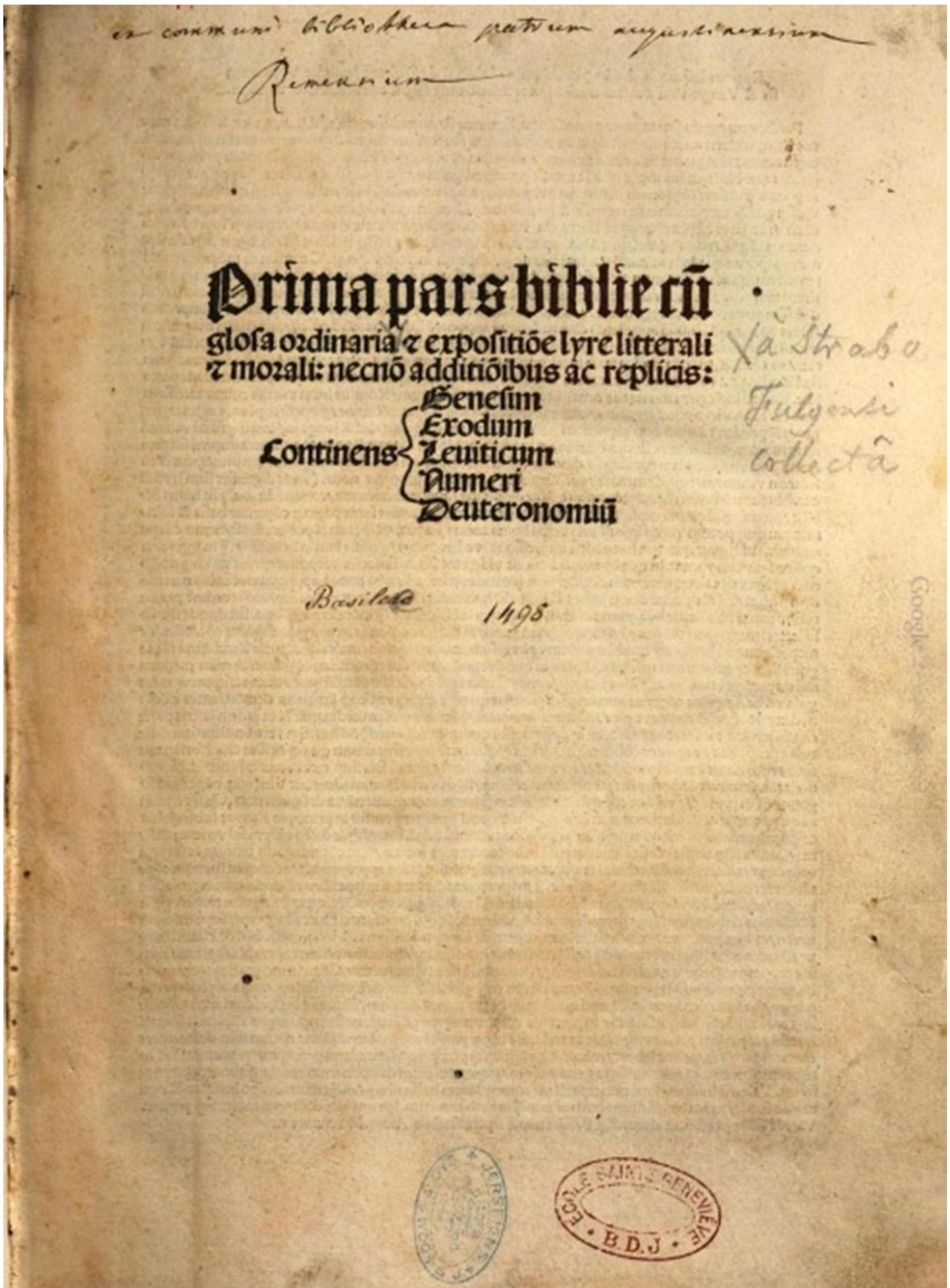
(1Hl) *Biblia Sacra, Hebraice, Chaldaice, Graece & Latine.* Antuerpiae, 1569. アントワープ多言語聖書の第一巻（モーセ五書）．（Yale University Library 提供の画像）



(1Hl) *Biblia Sacra, Hebraice, Chaldaice, Graece & Latine*. Antuerpiae, 1569. アントワープ多言語聖書第一巻の本文直前の中表紙.　（スペイン国立図書館所蔵）

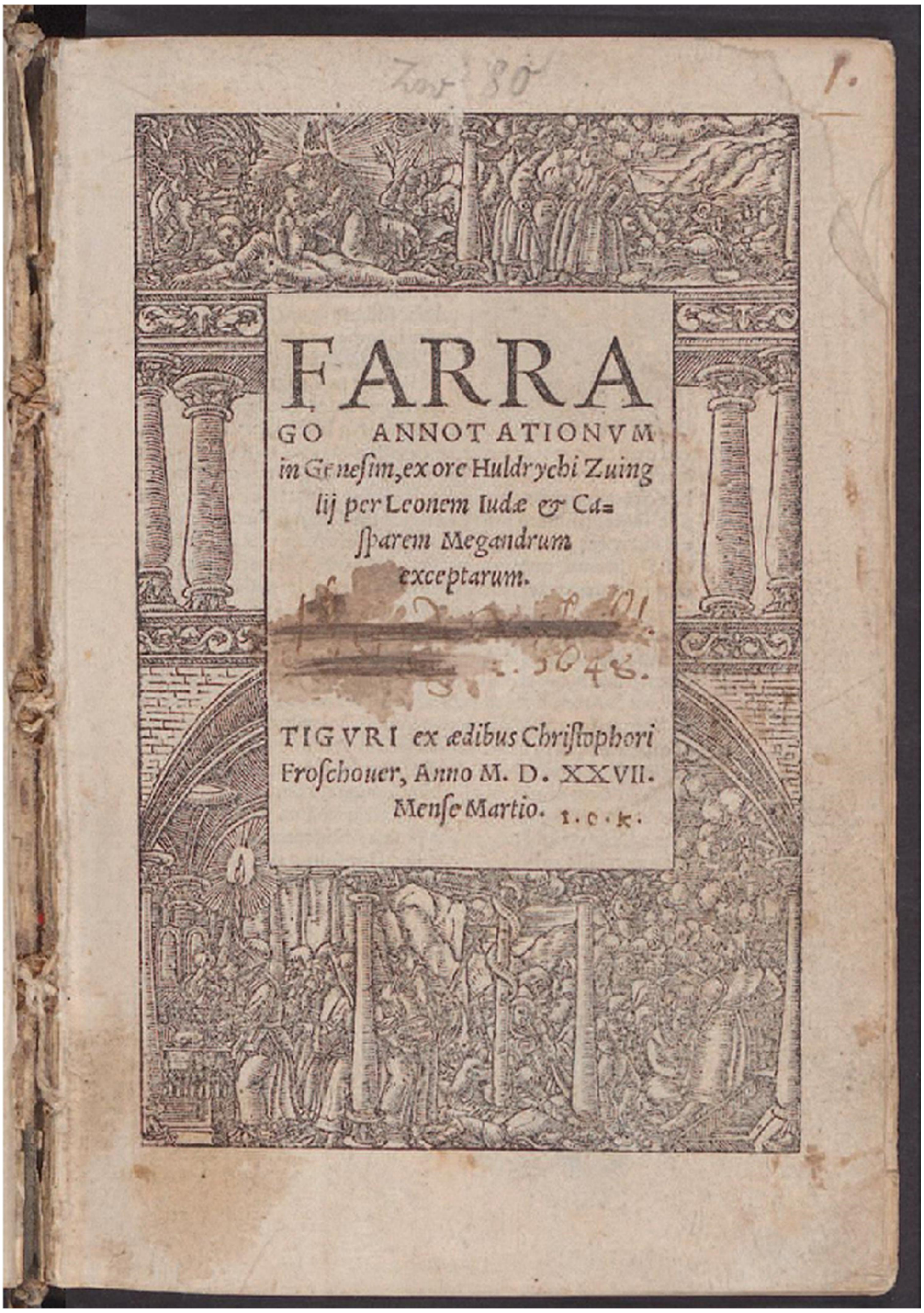

HEBRAICORVM
BIBLIORVM
Veteris Teſtamenti Latina interpretatio, opera olim Xantis Pagnini Lucenſis: nunc verò Benedicti Ariæ Montani Hiſpalẽſis, Franciſci Raphelengii Alnetani, Guidonis, & Nicolai Fabriciorum Boderianorum fratrum collato ſtudio, ad Hebraicam dictionem diligentiſſimè expenſa:
CENSORVM LOVANIENSIVM IVDICIO EXAMINATA, ET ACADEMIÆ SVFFRAGIO COMPROBATA:
Ad Regij Sacri operis commoditatem & apparatum.
Chriſtophorus Plantinus Regius Prototypographus Antuerpiæ excudebat.

(1Hl') *Hebraicorvm Bibliorvm. Veteris Testamenti Latina interpretatio, opera olim Xantis Pagnini Lucensis.* Antverpiae, 1572.　アントワープ多言語聖書の第 7 巻の一部．パグニヌスの訳をアリアス・モンタヌスが修正した行間訳を含む．（下シレジア・デジタル図書館提供の画像）



Prima pars biblie cũ
glosa ordinaria ꝛ expositiõe lyre litterali
ꝛ morali: necnõ additiõibus ac replicis:
Continens Genesim Exodum Leuiticum Numeri Deuteronomiũ

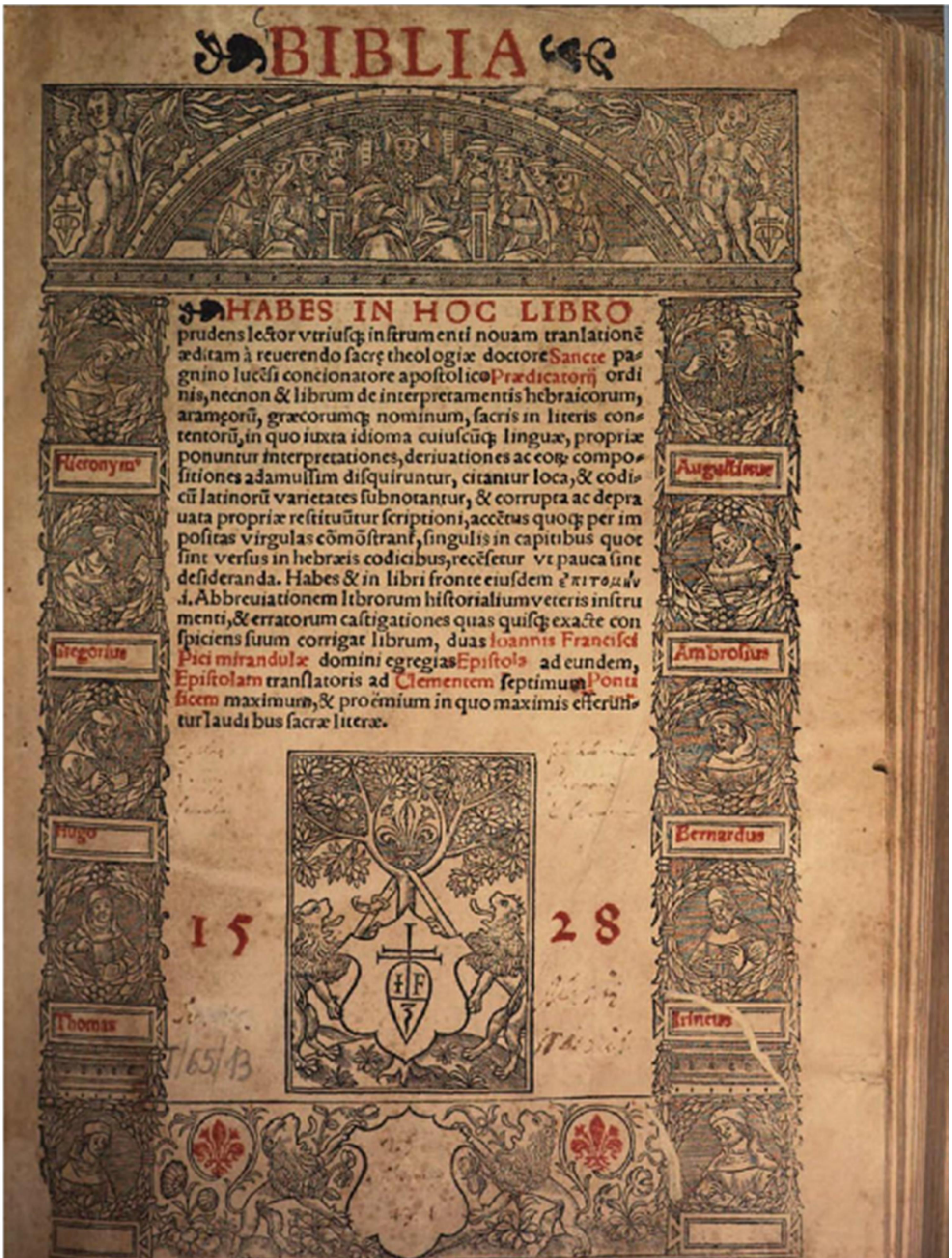
(1Lb) *[Biblia Latina cum glossa ordinaria Walafridi Strabonis aliorumque, et interlineari Anselmi Laudunensis] Prima pars biblie, cum glosa ordinaria & expositione lyre litterali et morali, necnon additionibus ac replicis: Continens Genesim, Exodum, Leuiticum, Numeri, Deuteronomium.* Basel, 1498. ルターも参考にした注解付ラテン語聖書（６巻本）の五書の巻　（リヨン市立図書館所蔵）



FARRA
GO ANNOTATIONVM
in Genesim, ex ore Huldrychi Zuing
lij per Leonem Iudæ & Ca=
sparem Megandrum
exceptarum.

TIGVRI ex ædibus Christophori
Froschouer, Anno M. D. XXVII.
Mense Martio.

(1Lc) *Farrago Annotationvm in Genesim, ex ore Huldrychi Zuinglij per Leonem Iudæ & Casparem Megandrum exceptarum*. Tigvri, 1527. ツヴィングリの創世記注釈のレオ・ユートらによる再生（チューリヒ中央図書館所蔵）



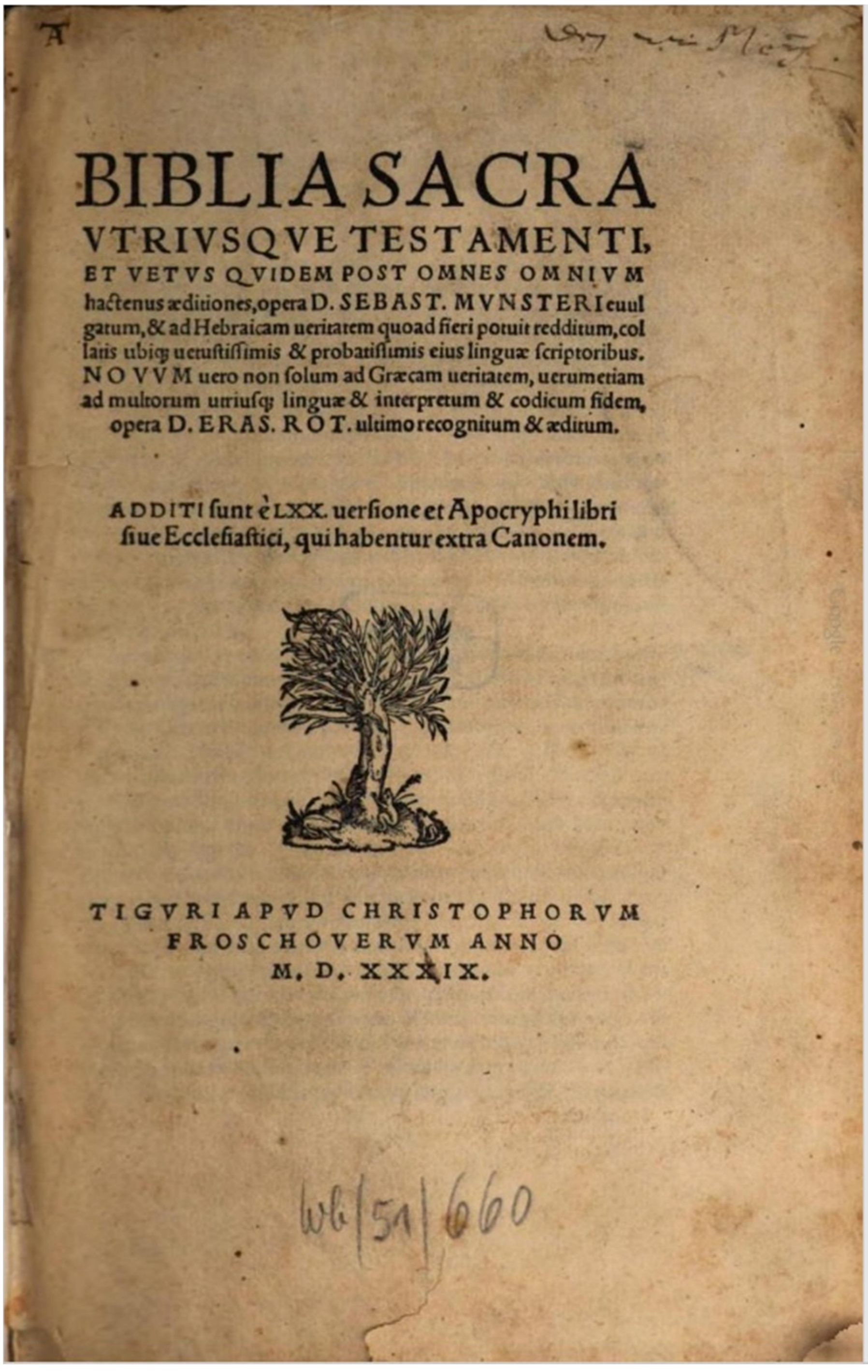
BIBLIA

HABES IN HOC LIBRO prudens lector vtriusq; instrumenti nouam tranlationē æditam à reuerendo sacrę theologiæ doctore Sancte pagnino lucēsi concionatore apostolico Prædicatorū ordinis, necnon & librum de interpretamentis hebraicorum, aramęorū, græcorumq; nominum, sacris in literis contentorū, in quo iuxta idioma cuiuscūq; linguæ, propriæ ponuntur interpretationes, deriuationes ac corū compositiones adamussim disquiruntur, citantur loca, & codicū latinorū varietates subnotantur, & corrupta ac deprauata propriæ restituūtur scriptioni, accētus quoq; per impositas virgulas cōmōstrant, singulis in capitibus quot sint versus in hebræis codicibus, recēsetur vt pauca sint desideranda. Habes & in libri fronte eiusdem ἐπιτομὴν .i. Abbreuiationem librorum historialium veteris instrumenti, & erratorum castigationes quas quisq; exacte conspiciens suum corrigat librum, duas Ioannis Francisci Pici mirandulæ domini egregias Epistolas ad eundem, Epistolam translatoris ad Clementem septimum Pontificem maximum, & proœmium in quo maximis efferuntur laudibus sacræ literæ.

Hieronymus / Augustinus / Gregorius / Ambrosius / Hugo / Bernardus / Thomas / Irineus

15 28

(1Ld) *Biblia. Habes in hoc libro prudens lector vtriusq[ue] instrumenti nouam tranlatione[m] æditam à reuerendo sacr[a]e theologiæ doctore Sancte pagnino luce[n]si concionatore apostolico prædicatorij ordinis.* Lugduni, 1528.　パグニヌスのラテン語訳聖書.　（バイエルン州立図書館所蔵）



BIBLIA SACRA
VTRIVSQVE TESTAMENTI,
ET VETVS QVIDEM POST OMNES OMNIVM
hactenus æditiones, opera D. SEBAST. MVNSTERI euulgatum, & ad Hebraicam ueritatem quoad fieri potuit redditum, collatis ubiq; uetustissimis & probatissimis eius linguæ scriptoribus.
NOVVM uero non solum ad Græcam ueritatem, uerumetiam ad multorum utriusq; linguæ & interpretum & codicum fidem, opera D. ERAS. ROT. ultimo recognitum & æditum.

ADDITI sunt è LXX. uersione et Apocryphi libri siue Ecclesiastici, qui habentur extra Canonem.

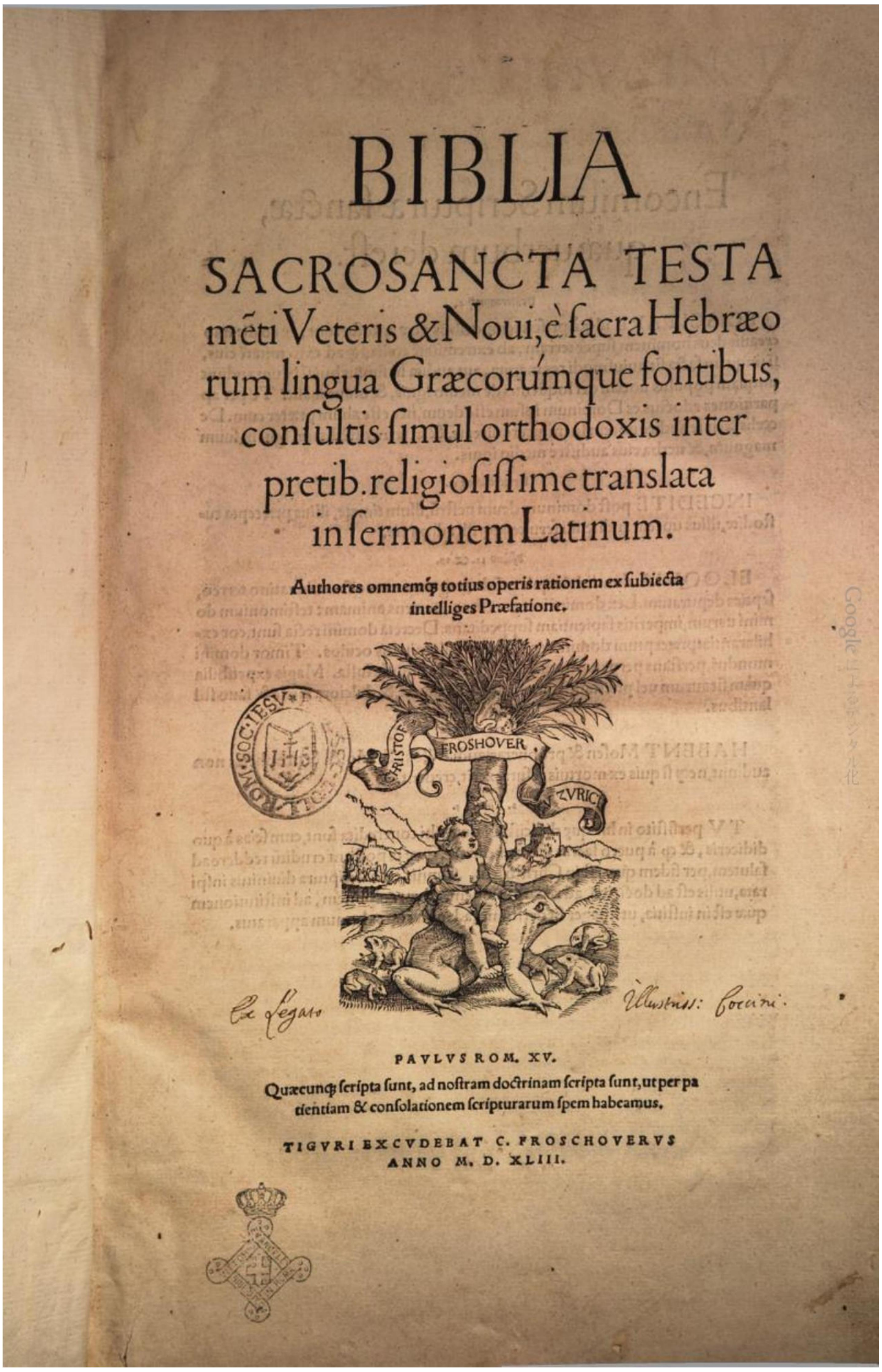
TIGVRI APVD CHRISTOPHORVM FROSCHOVERVM ANNO M. D. XXXIX.

(1Le) *Biblia Sacra. Vtrivsqve Testamenti.* Tigvri1539. ミュンスターとエラスムスのラテン語訳を収録したラテン語聖書 （ゲント大学図書館所蔵）

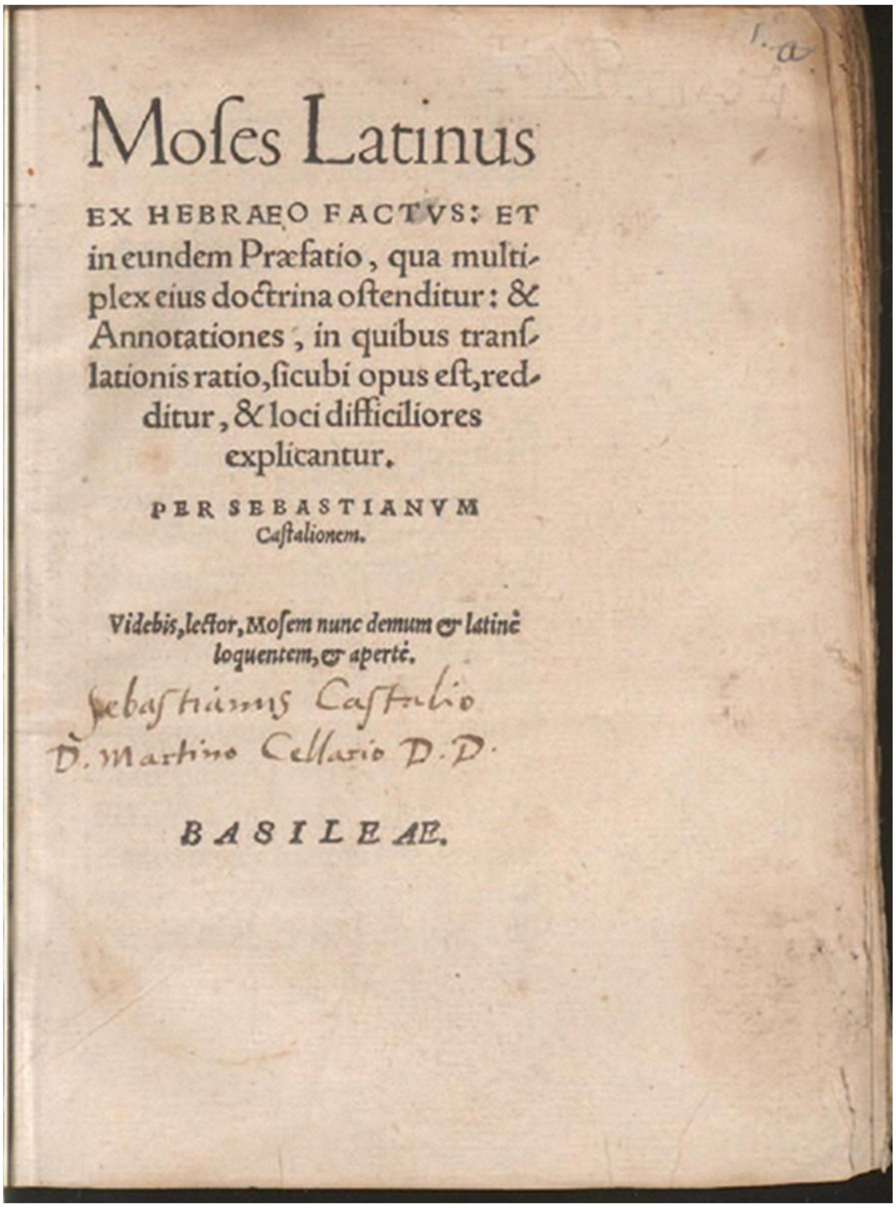

BIBLIA
ſacra ex Santis Pagnini trala-
TIONE, SED AD HEBRAI-
cæ linguæ amuſſim nouiſsimè ita recognita, &
ſcholiis illuſtrata, ut planè noua edi-
tio uideri poſsit.
Acceſſit præterea Liber interpretationum Hebraicorum, Arabicorum, Græcorumq́ nominum, quæ in ſacris literis reperiuntur, ordine alphabetico digeſtus, eodem authore.

LVGDVNI,
Apud HVGONEM à Porta.
M. D. XLII.
Cum priuilegio ad annos ſex.

(1Lf) *Biblia sacra ex Santis Pagnini tralatione, sed ad Hebraicæ linguæ amussim nouissimè ita recognita, & scholiis illustrata, ut planè noua editio uideri possit.* Lvgdvni, 1542.　パグニヌスのラテン語訳のセルヴェトゥスによる再版.　（オーストリア国立図書館所蔵）



(1Lg) *Biblia Sacrosancta Testame[n]ti Veteris & Noui, è sacra Hebræorum lingua Græcorúmque fontibus, consultis simul orthodoxis interpretib[us], religiosissime translata in sermonem Latinum.* Tigvri, 1543. ラテン語版チューリヒ聖書（Versio Tigurina）　（ローマ国立中央図書館所蔵）



Moses Latinus

EX HEBRAEO FACTVS: ET in eundem Præfatio, qua multiplex eius doctrina ostenditur: & Annotationes, in quibus translationis ratio, sicubi opus est, redditur, & loci difficiliores explicantur.

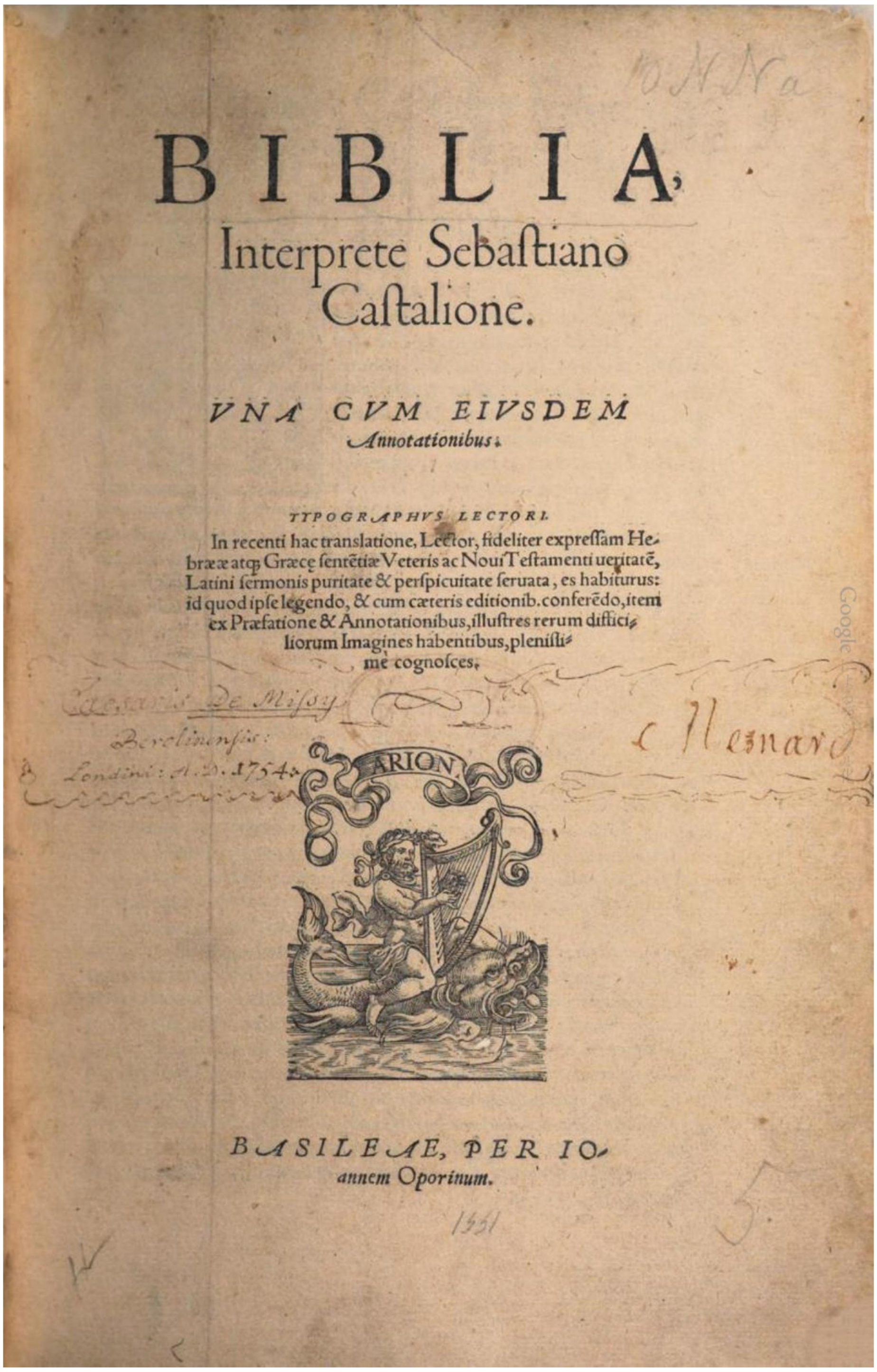
PER SEBASTIANVM Castalionem.

Videbis, lector, Mosem nunc demum & latinè loquentem, & apertè.

Sebastianus Castalio
D. Martino Cellario D.D.

BASILEAE.

(1Lh) *Moses Latinus ex Hebraeo Factvs: et in eundem Præfatio, qua multiplex eius doctrina ostenditur ... Per Sebastianvm Castalionem.* Basileae, 1546.　カステリョの五書ラテン語訳（創世記 18：19 の訳は全訳版と同じ）（オーストリア国立図書館所蔵）


BIBLIA,
Interprete Sebastiano
Castalione.

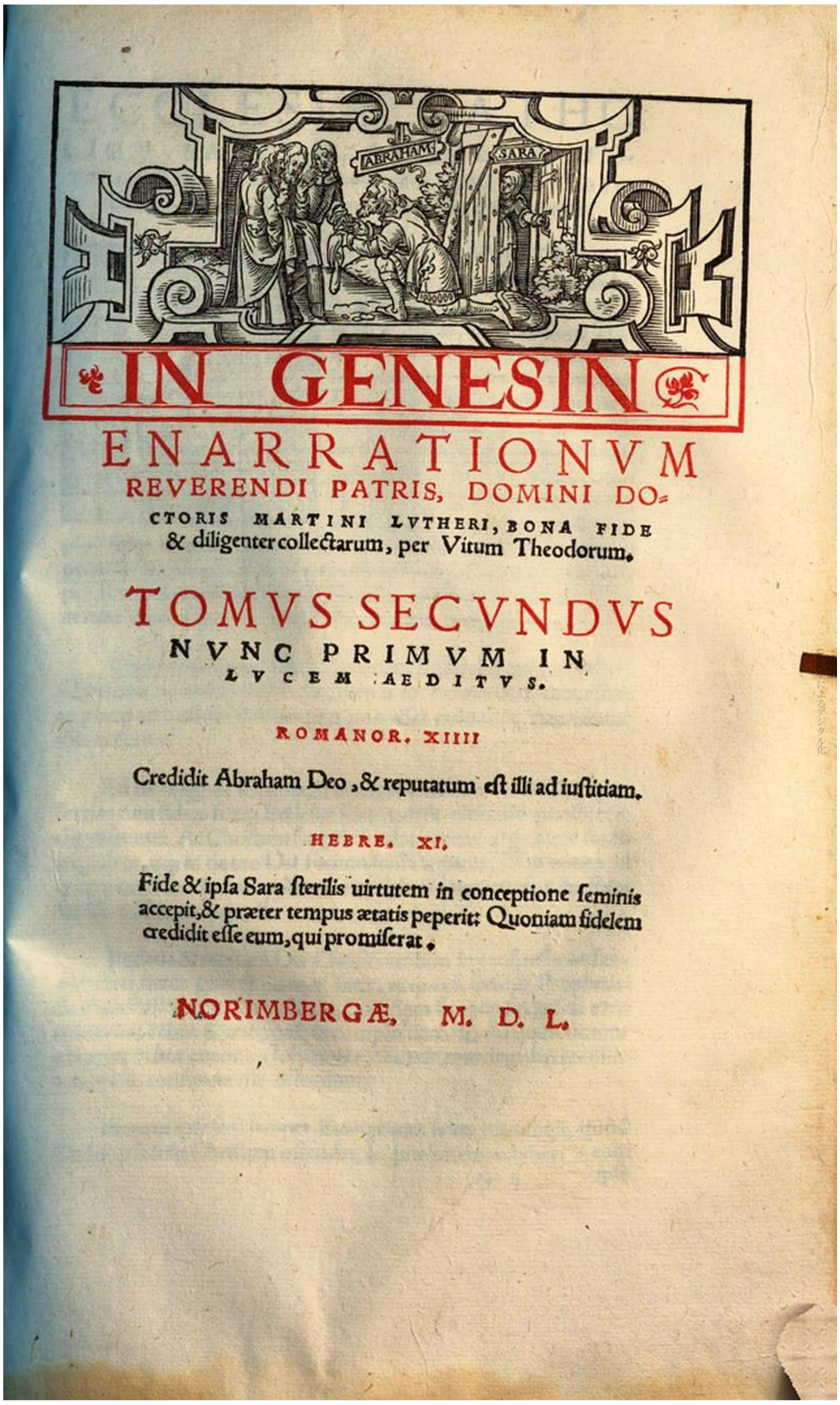
VNA CVM EIVSDEM
Annotationibus.

TYPOGRAPHVS LECTORI.
In recenti hac translatione, Lector, fideliter expressam Hebrææ atq; Græcę sententiæ Veteris ac Noui Testamenti ueritatē, Latini sermonis puritate & perspicuitate seruata, es habiturus: id quod ipse legendo, & cum cæteris editionib. conferēdo, item ex Præfatione & Annotationibus, illustres rerum difficiliorum Imagines habentibus, plenissime cognosces.

ARION

BASILEAE, PER IOannem Oporinum.

(1Li) *Biblia, Interprete Sebastiano Castalione. Vna cvm eivsdem Annotationibus.* Basilae, 1551. カステリョのラテン語訳聖書. （大英図書館所蔵）



ABRAHAM SARA

IN GENESIN

ENARRATIONVM

REVERENDI PATRIS, DOMINI DO-
CTORIS MARTINI LVTHERI, BONA FIDE
& diligenter collectarum, per Vitum Theodorum.

TOMVS SECVNDVS

NVNC PRIMVM IN
LVCEM AEDITVS.

ROMANOR. XIIII

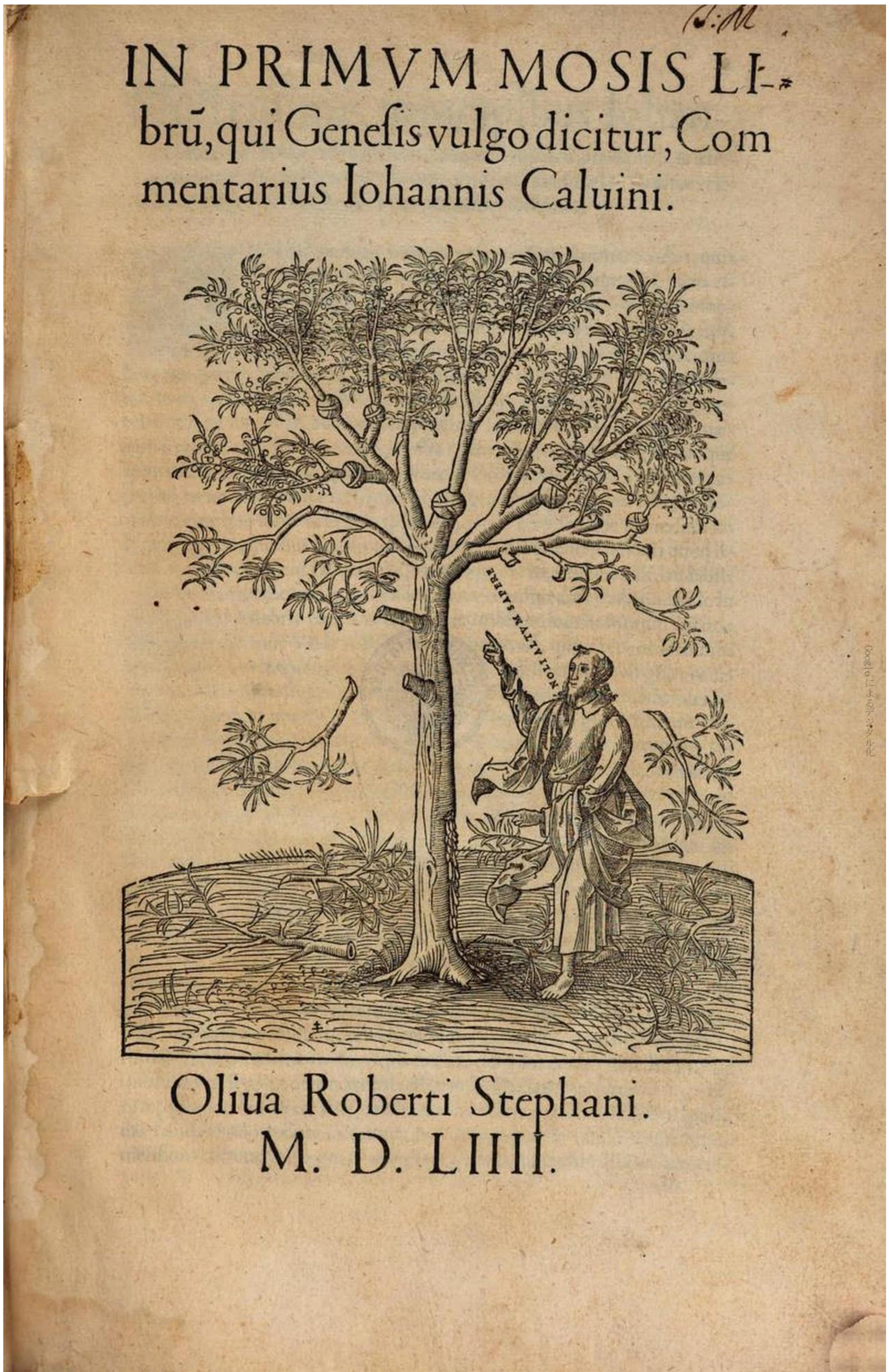
Credidit Abraham Deo, & reputatum est illi ad iustitiam.

HEBRE. XI.

Fide & ipsa Sara sterilis uirtutem in conceptione seminis accepit, & præter tempus ætatis peperit: Quoniam fidelem credidit esse eum, qui promiserat.

NORIMBERGÆ, M. D. L.

(1Lj) *In Genesin Enarrationvm Reverendi Patris, Domini Doctoris Martini Lvtheri, Bona Fide & diligenter collectarum, per Vitum Theodorum. Tomvs Secvndvs*. Nürnberg, 1550. ルターの創世記講義 1550 年出版. ROMANOR. XIIII は、ロマ 4：3 の誤記. （レーゲンスブルク州立図書館所蔵）



IN PRIMVM MOSIS LI-
brū, qui Genesis vulgo dicitur, Com
mentarius Iohannis Caluini.

Oliua Roberti Stephani.
M. D. LIIII.

(1Lk) *Im primvm Mosis librum, qui Genesis vulgo dicitur, Commentarius Iohannis Caluini.* Genevae, 1554.
カルヴァンのラテン語による創世記注解書 1554 年. （オーストリア国立図書館所蔵）


BIBLIA

Vtriusque Testamenti.

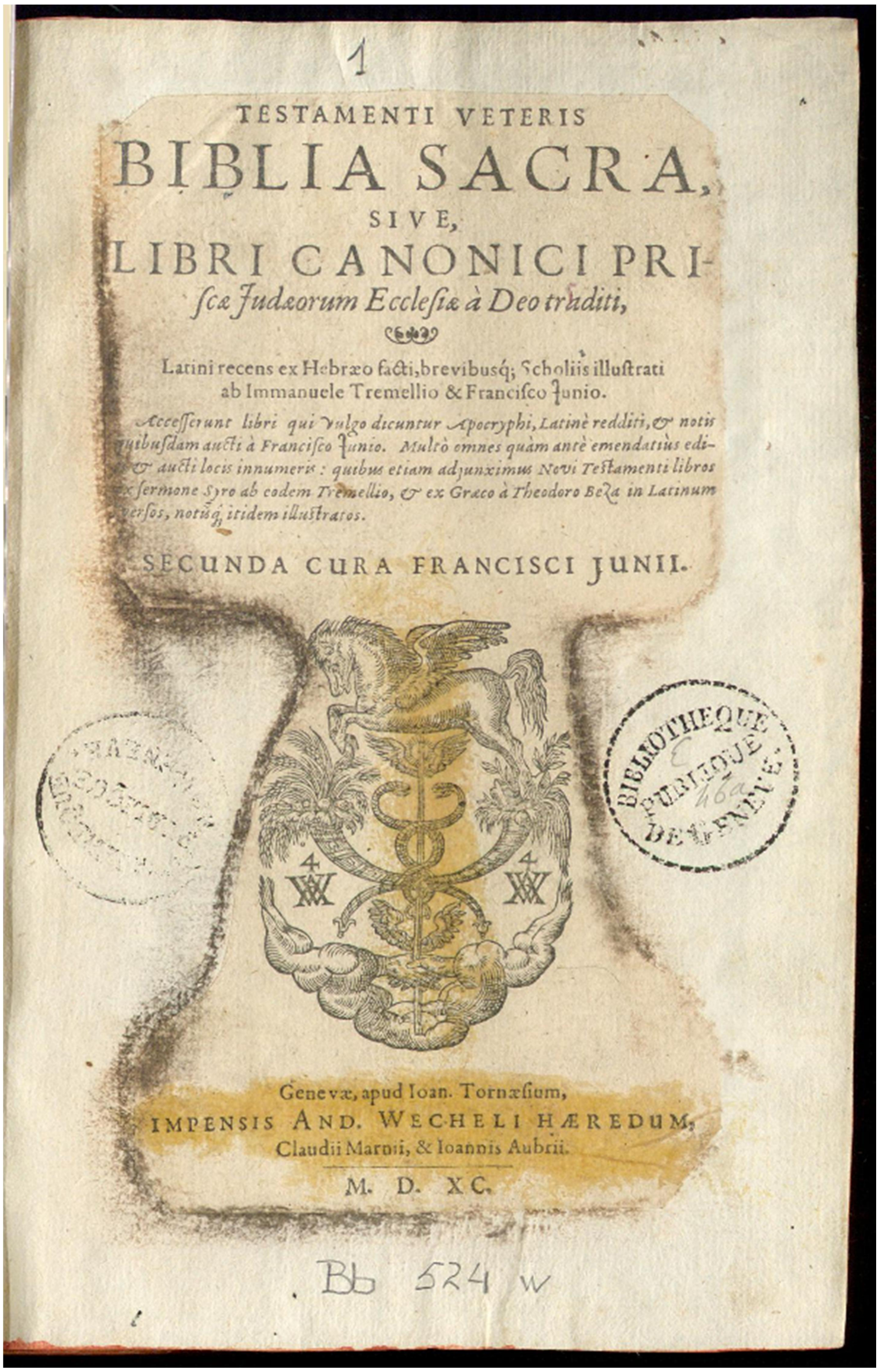
DE QVORVM NOVA INTERPRETATIONE ET COpiosissimis in eam annotationibus lege quam in limine operis habes epistolam.

NOLI ALTVM SAPERE

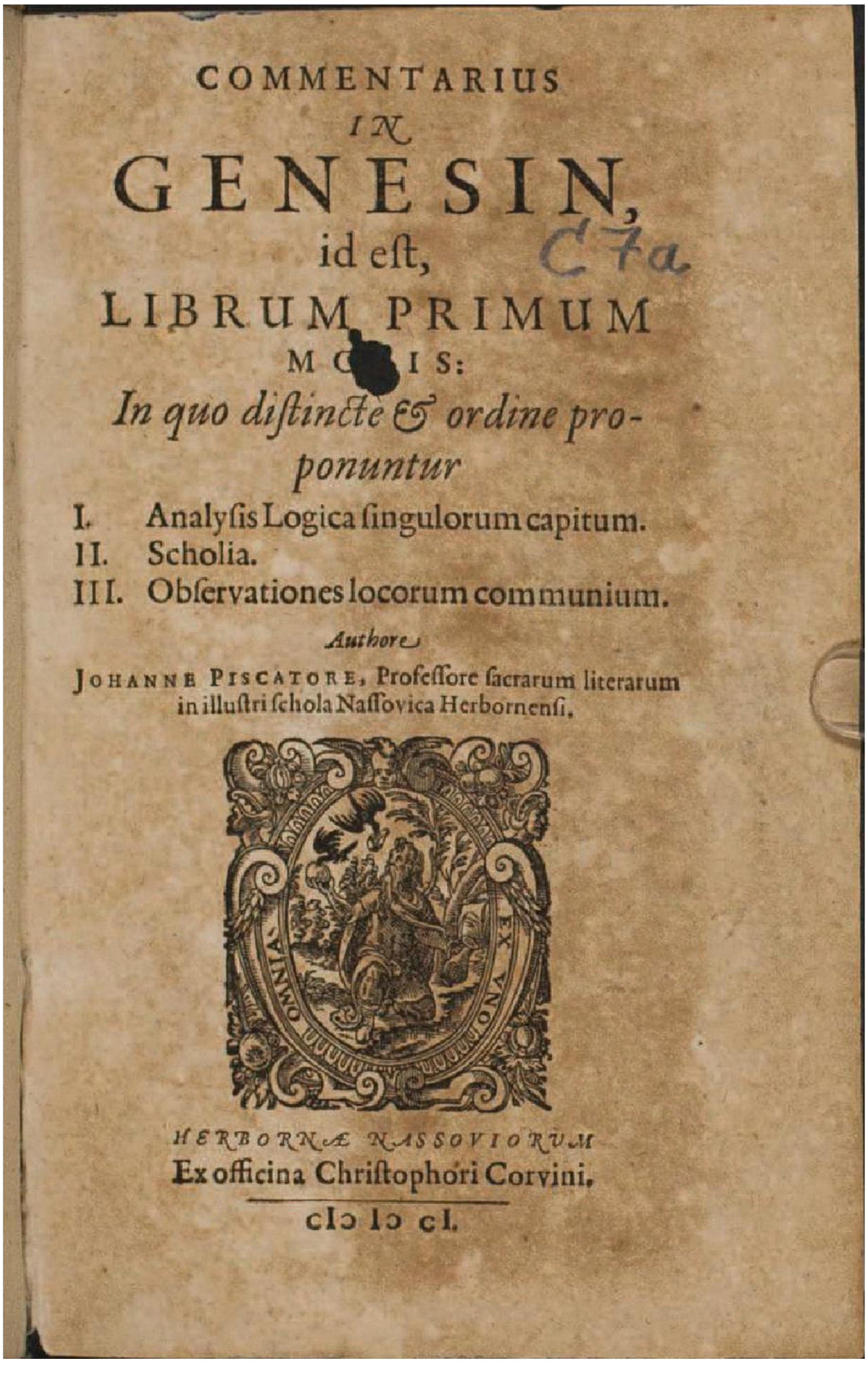
OLIVA ROB. STEPHANI.

M. D. LVII.

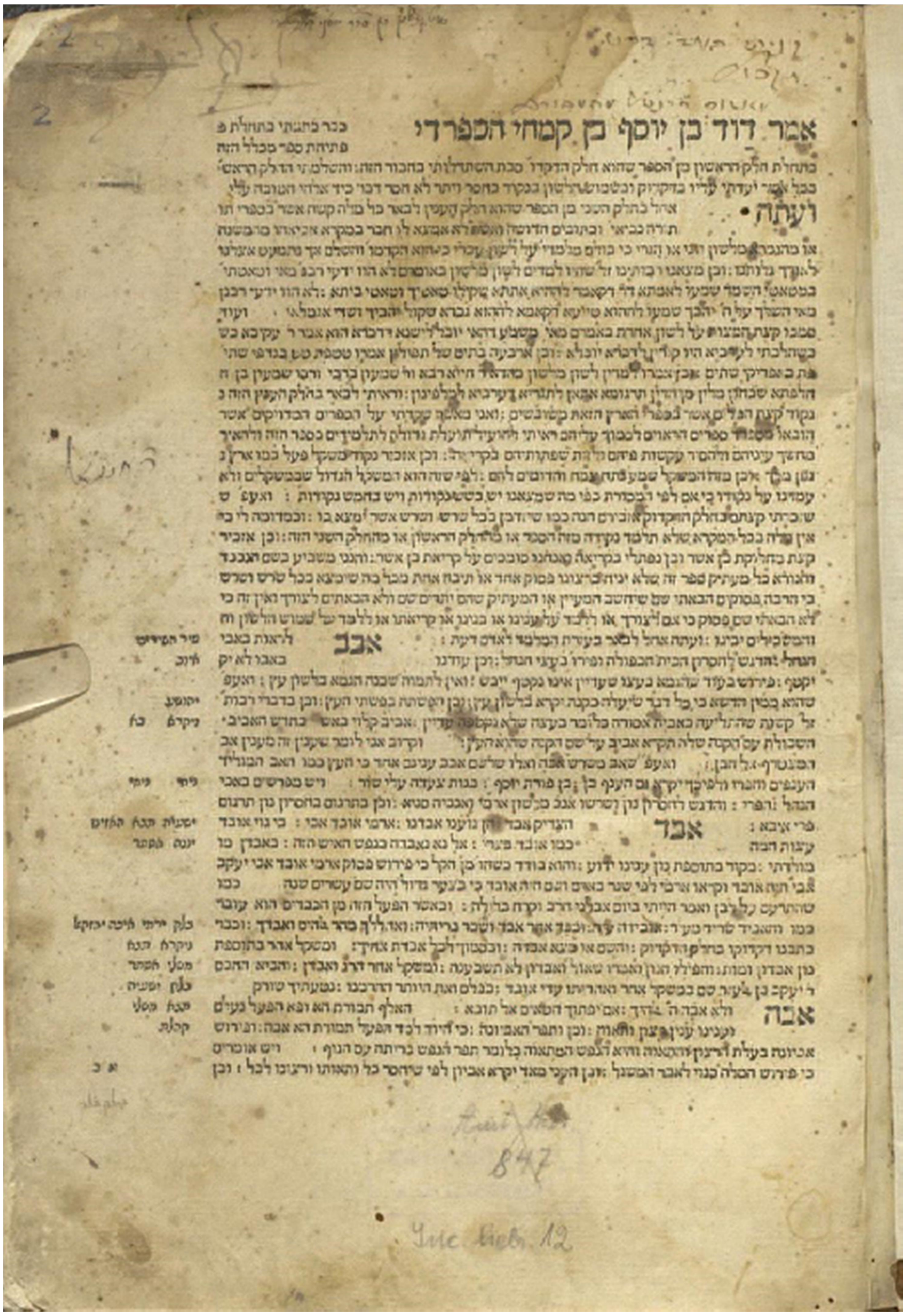
(1Ll) *Biblia Vtriusque Testamenti. De qvorvm nova interpretatione et copiosissimis in eam annotationibus lege quam in limine operis habes epistolam.* Genevae, 1557.　エティエンヌ編訳のラテン語訳聖書第一巻（創世記～エステル記）．（ジュネーヴ図書館所蔵）



(1Lm) *Testamenti Veteris Biblia Sacra, sive, Libri Canonici Priscæ Judæorum Ecclesiæ à Deo traditi, Latini recens ex hebræo facti, brevibusq[ue]*. Secunda cura Francisci Junii. Genevae, 1590. トレメリウスのラテン語訳.　（ジュネーブ図書館所蔵）

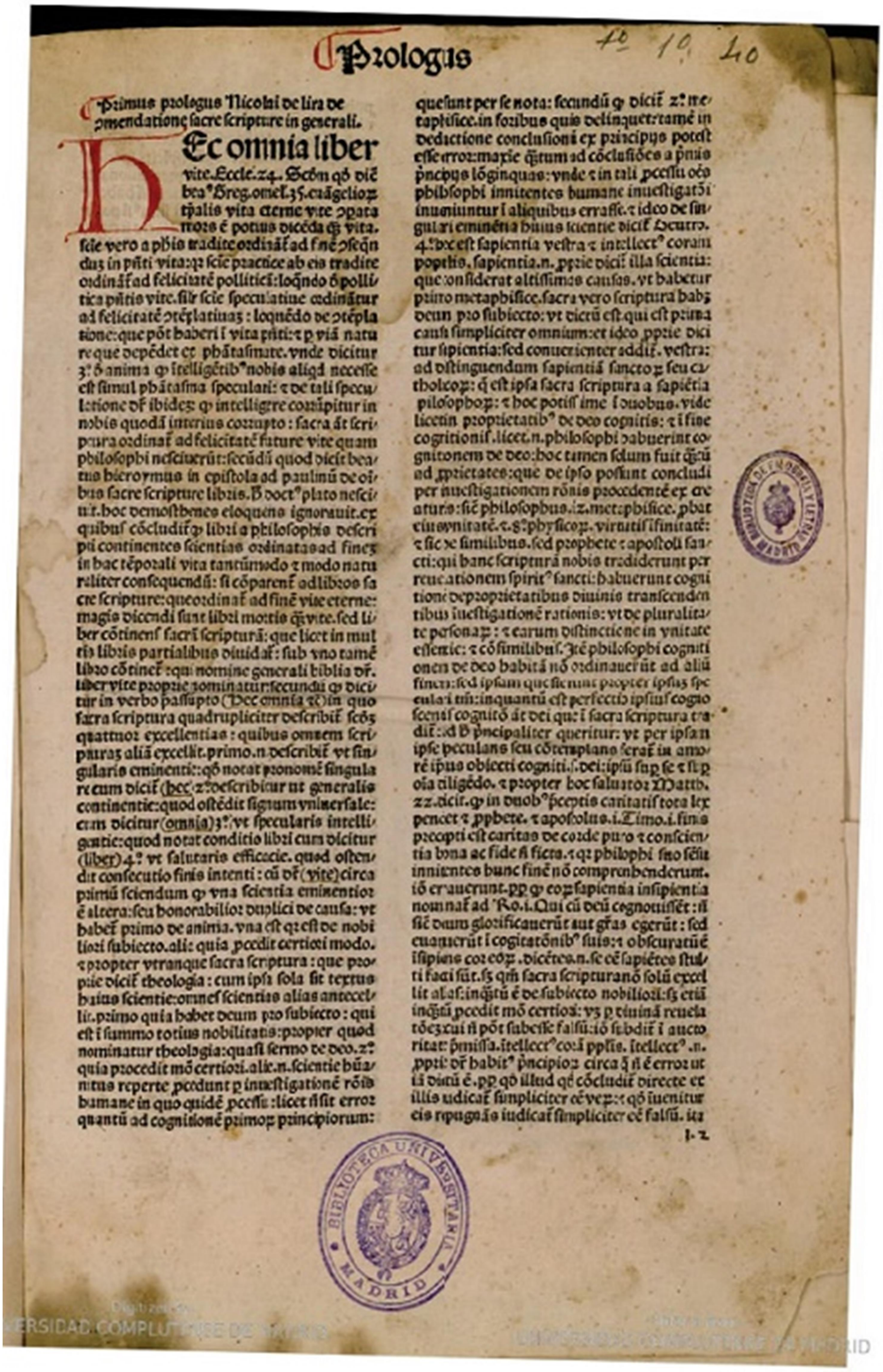


(1Ln) *Commentarius in Genesin, id est, Librum Primum Mosis: In quo distincte & ordine proponuntur I. Analysis Logica singulorum capitum. II. Scholia. III. Observationes locorum communium. Authore, Johanne Piscatore.* Herbornae Nassoviorum1601.　ピスカートルのラテン語による創世記注解書.　（ヘルツォーク・アウグスト図書館所蔵）


אמר דוד בן יוסף בן קמחי הספרדי

(1Dd) *Sefer ha-shorashim.* Neapel: [Yosef ben Yaakov Ashkenazi], 1490.　ラビ・ダヴィド・キムヒの聖書ヘブライ語辞書 1490 年版の最初の頁　（ゲーテ大学所蔵）

אמר דוד בן יוסף בן קמחי הספרדי　「スペイン人ヨセフ・ベン・〔イサク・〕キムヒの息子ダヴィドは言った」

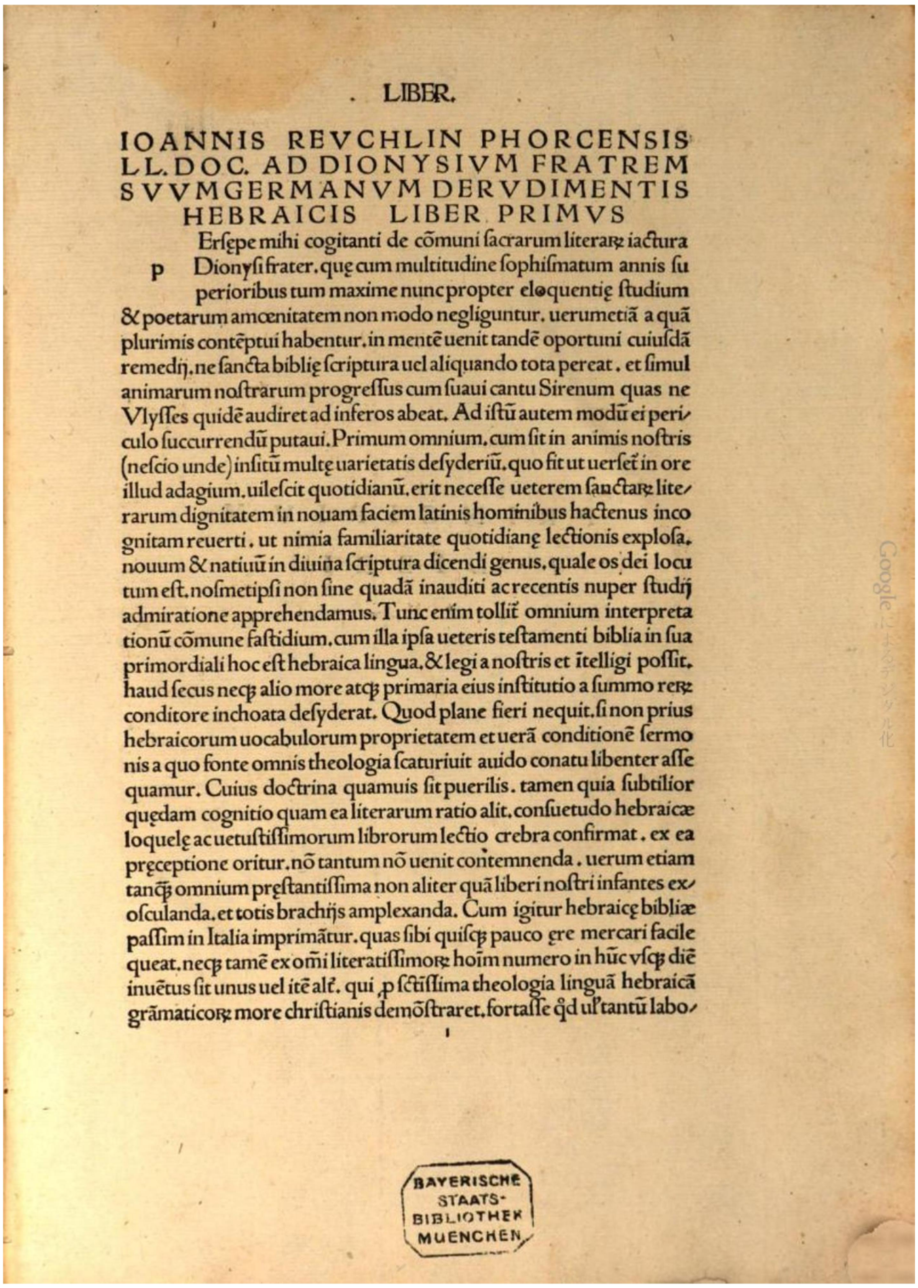


Prologus

Primus prologus Nicolai de lira de commendatione sacre scripture in generali.

Hec omnia liber vite. Eccle. 24.

(1De) *[Nicolas de Lyre: Postilla super totam Bibliam]*. Venetiis, 1488. リラのニコラスの聖書注解　（ハーティトラスト所蔵）

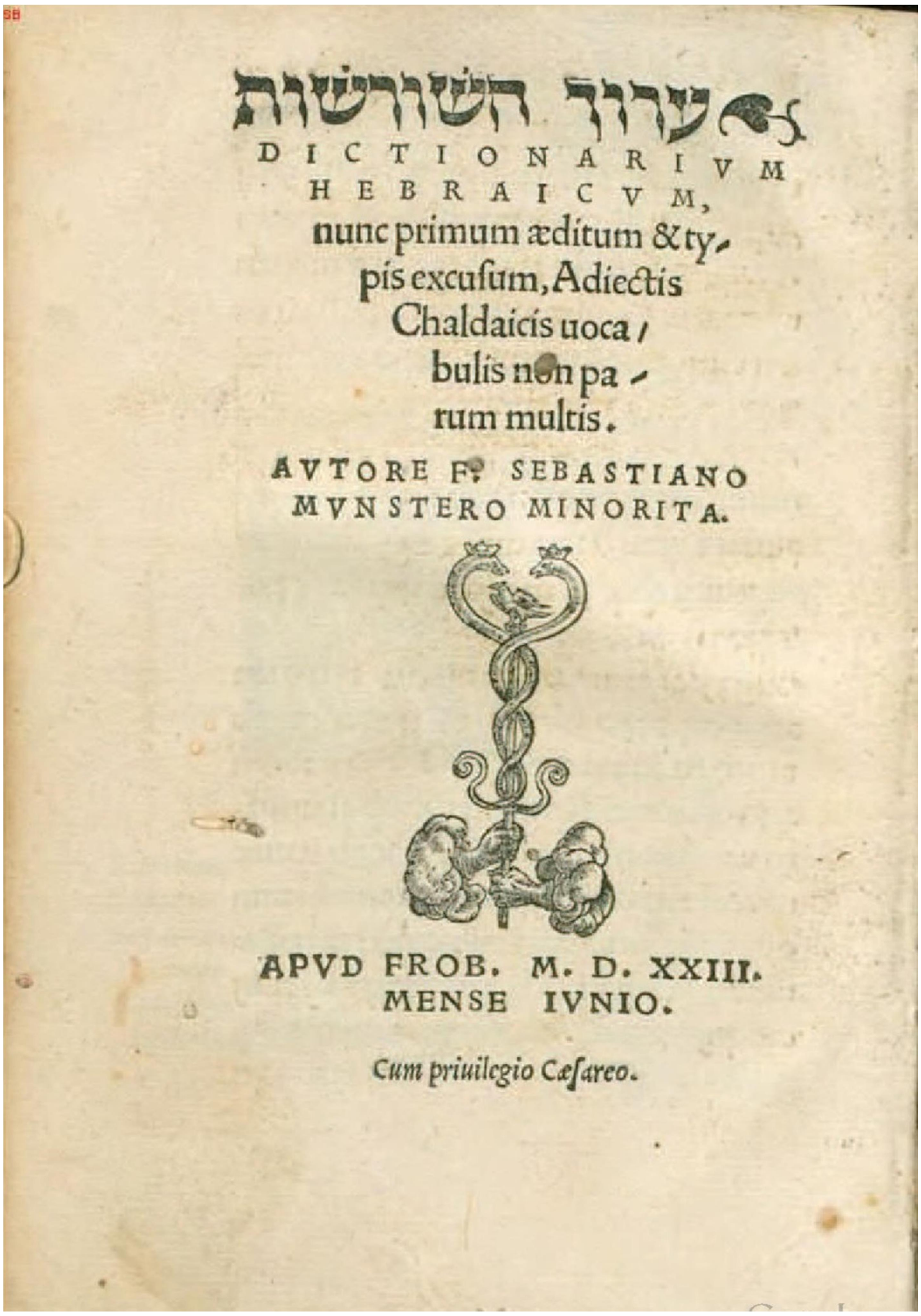


LIBER.

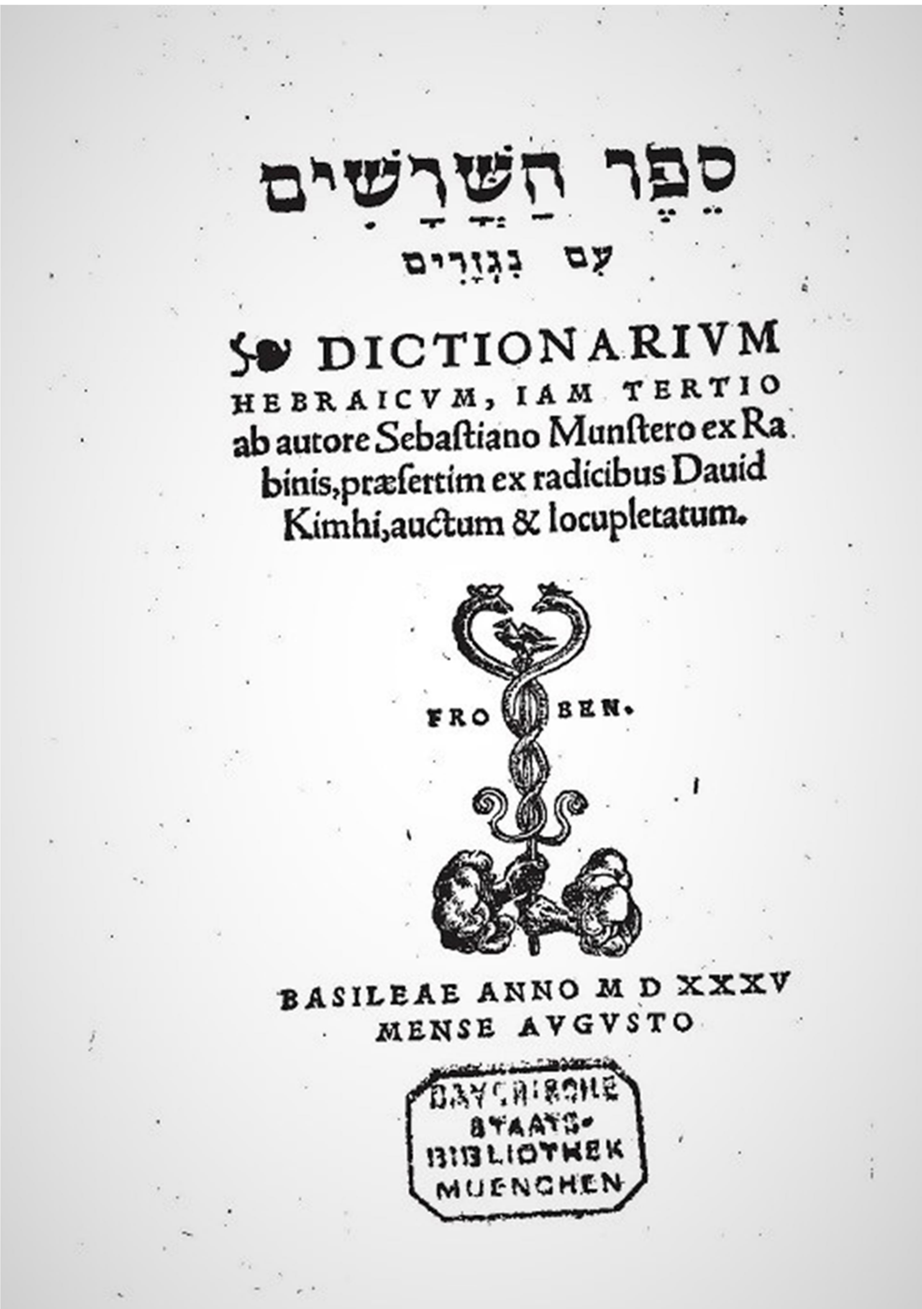
IOANNIS REVCHLIN PHORCENSIS LL. DOC. AD DIONYSIVM FRATREM SVVM GERMANVM DE RVDIMENTIS HEBRAICIS LIBER PRIMVS

P Erſępe mihi cogitanti de cõmuni ſacrarum literarꝝ iactura Dionyſi frater. quę cum multitudine ſophiſmatum annis ſuperioribus tum maxime nunc propter eloquentię ſtudium & poetarum amœnitatem non modo negliguntur. uerumetiã a quã plurimis contẽptui habentur. in mentẽ uenit tandẽ oportuni cuiuſdã remedij. ne ſancta biblię ſcriptura uel aliquando tota pereat. et ſimul animarum noſtrarum progreſſus cum ſuaui cantu Sirenum quas ne Vlyſſes quidẽ audiret ad inferos abeat. Ad iſtũ autem modũ ei periculo ſuccurrendũ putaui. Primum omnium. cum ſit in animis noſtris (neſcio unde) inſitũ multę uarietatis deſyderiũ. quo fit ut uerſet̃ in ore illud adagium. uileſcit quotidianũ. erit neceſſe ueterem ſanctarꝝ literarum dignitatem in nouam faciem latinis hominibus hactenus incognitam reuerti. ut nimia familiaritate quotidianę lectionis exploſa. nouum & natiuũ in diuina ſcriptura dicendi genus. quale os dei locutum eſt. noſmetipſi non ſine quadã inauditi ac recentis nuper ſtudij admiratione apprehendamus. Tunc enim tollit̃ omnium interpretationũ cõmune faſtidium. cum illa ipſa ueteris teſtamenti biblia in ſua primordiali hoc eſt hebraica lingua. & legi a noſtris et ĩtelligi poſſit. haud ſecus neq3 alio more atq3 primaria eius inſtitutio a ſummo rerꝝ conditore inchoata deſyderat. Quod plane fieri nequit. ſi non prius hebraicorum uocabulorum proprietatem et uerã conditionẽ ſermonis a quo fonte omnis theologia ſcaturiuit auido conatu libenter aſſequamur. Cuius doctrina quamuis ſit puerilis. tamen quia ſubtilior quędam cognitio quam ea literarum ratio alit. conſuetudo hebraicæ loquelę ac uetuſtiſſimorum librorum lectio crebra confirmat. ex ea pręceptione oritur. nõ tantum nõ uenit contemnenda. uerum etiam tanq3 omnium pręſtantiſſima non aliter quã liberi noſtri infantes exoſculanda. et totis brachijs amplexanda. Cum igitur hebraicę bibliæ paſſim in Italia imprimãtur. quas ſibi quiſq3 pauco ęre mercari facile queat. neq3 tamẽ ex omĩ literatiſſimorꝝ hoĩm numero in hũc vſq3 diẽ inuẽtus ſit unus uel itẽ alt̃. qui ꝓ ſctiſſima theologia linguã hebraicã grãmaticorꝝ more chriſtianis demõſtraret. fortaſſe q̃d ul̃ tantũ labo-

(1Df) *Principivm Libri: Ioannis Revchlin Phorcensis Ll. Doc. Ad Dionysivm Fratrem Svvm Germanvm De Rvdimentis Hebraicis*. Phorce, 1506. ロイヒリンのヘブライ語入門書兼辞書　　（バイエルン州立図書館所蔵）


ערוך השורשות
DICTIONARIVM
HEBRAICVM,
nunc primum æditum & ty-
pis excusum, Adiectis
Chaldaicis uoca-
bulis non pa-
rum multis.
AVTORE F. SEBASTIANO
MVNSTERO MINORITA.
APVD FROB. M. D. XXIII.
MENSE IVNIO.
Cum priuilegio Cæsareo.

(1Dg) ערוך השורשות *Dictionarivm Hebraicvm, nunc primum æditum & typis excusum, Adiectis Chaldaicis uocabulis non parum multis. Autore F. Sebastiano MunsteroMinorita.* Basileae, 1523. ミュンスターの最初の辞書. （バイエルン州立図書館所蔵）


סֵפֶר הַשָּׁרָשִׁים

עִם נִגְזָרִים

DICTIONARIVM HEBRAICVM, IAM TERTIO ab autore Sebaſtiano Munſtero ex Rabinis, præſertim ex radicibus Dauid Kimhi, auctum & locupletatum.

FRO BEN.

BASILEAE ANNO M D XXXV MENSE AVGVSTO

(1Dh) סֵפֶר הַשָּׁרָשִׁים עִם נִגְזָרִים *Dictionarivm Hebraicvm, Iam Tertio ab autore Sebastiano Munstero ex Rabinis, præsertim ex radicibus Dauid Kimhi, auctum & locupletatum*. Basileae, 1535. ミュンスターのヘブライ語辞書第三版. （バイエルン州立図書館所蔵）


ARISTOTELES · PLATO · SALOMON · REX · SOCRATES · PYTHAGORAS

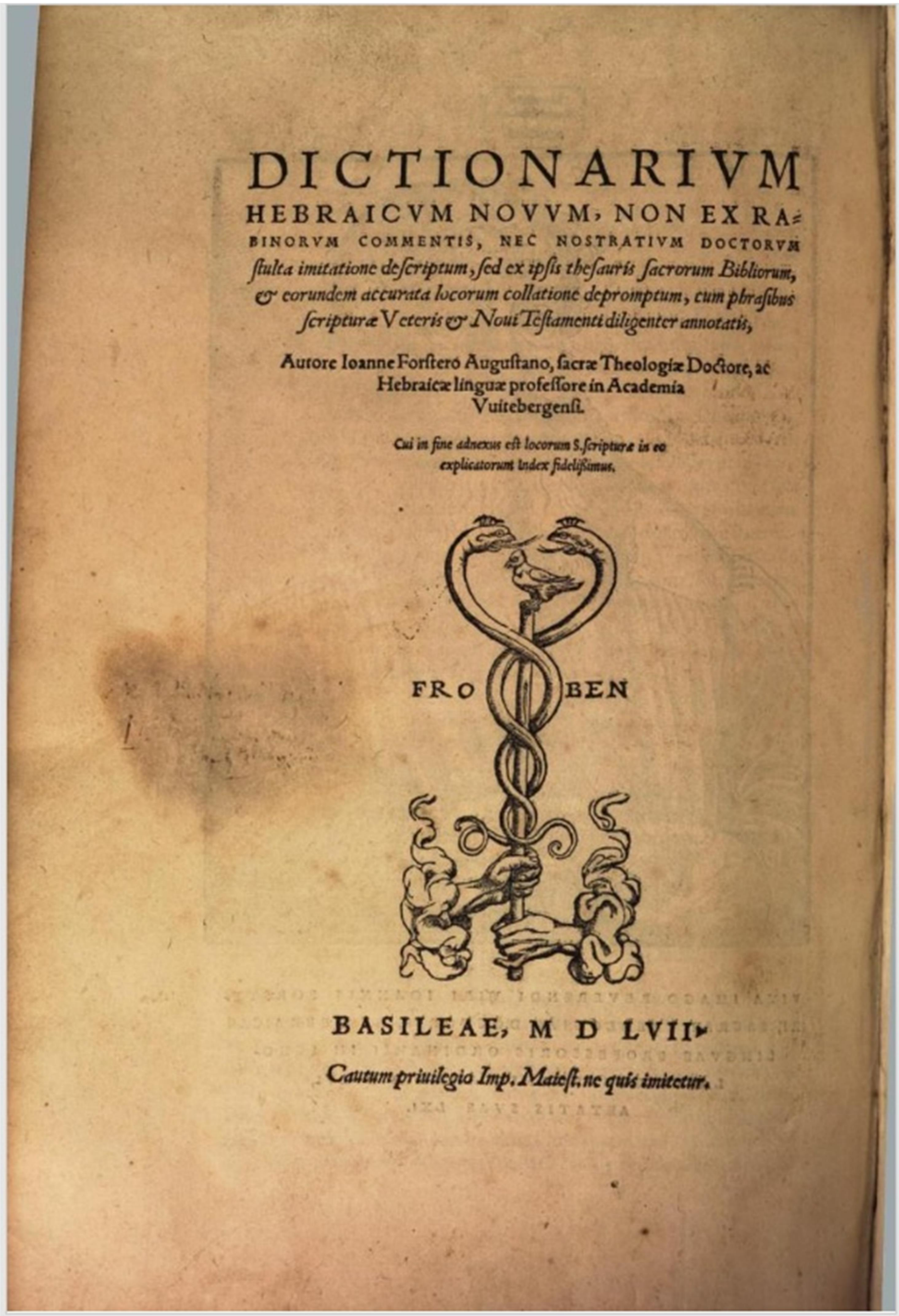
אוֹצַר
לְשׁוֹן הַקֹּדֶשׁ
HOC EST,
THESAVRVS
LINGVAE SAN
CTAE.

SIC ENIM INSCRIBERE placuit Lexicon hoc Hebraicum: quòd quem admodum ex thesauro pretiosissima quæque depromere in procliui est, ita ex hoc uno, non solum uocularum significata, sed & abstrusiores quosque sacræ scripturæ sensus, è uarijs Rabinorum commentarijs selectos, hauri re liceat.

Autore reuerendo patre SANCTE PAGNINO Lucensi, idiomatum eruditiorum & parente & Antistite.

SEB. verò GRYPHIO excudente LVGD.

(1Di) אוֹצַר לְשׁוֹן הַקֹּדֶשׁ *Hoc est, Thesavrvs lingvae sanctae. Sic enim inscribere placuit Lexicon hoc Hebraicum. Autore reuerendo patre Sancte Pagnino Lucensi*. LVGD. 1529.　パグニヌスのヘブライ語辞書.　　（バイエルン州立図書館所蔵）



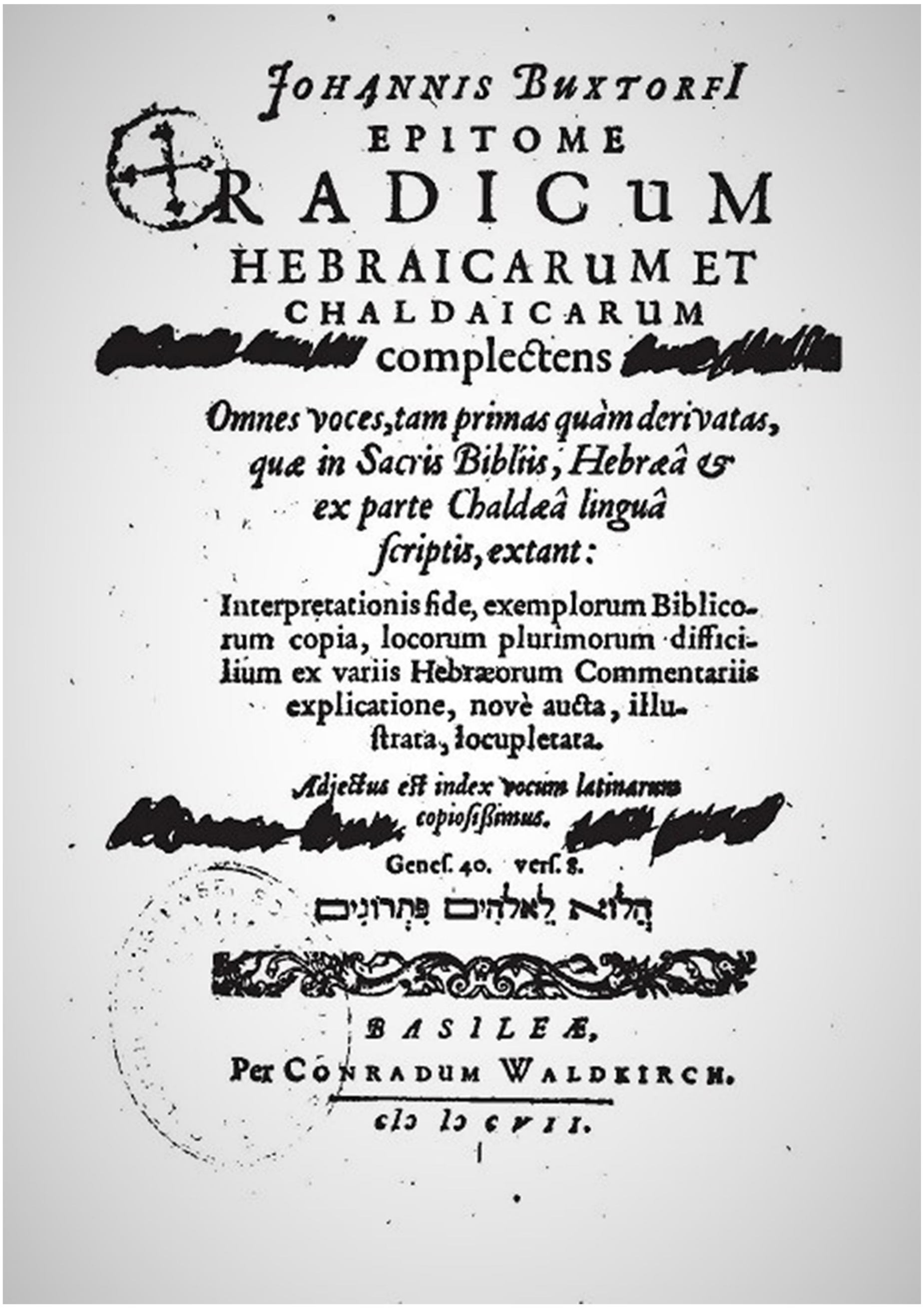
DICTIONARIVM
HEBRAICVM NOVVM, NON EX RA-
BINORVM COMMENTIS, NEC NOSTRATIVM DOCTORVM
stulta imitatione descriptum, sed ex ipsis thesauris sacrorum Bibliorum,
& eorundem accurata locorum collatione depromptum, cum phrasibus
scripturæ Veteris & Noui Testamenti diligenter annotatis,

Autore Ioanne Forstero Augustano, sacræ Theologiæ Doctore, ac
Hebraicæ linguæ professore in Academia
Vuitebergensi.

Cui in fine adnexus est locorum S. scripturæ in eo
explicatorum index fidelissimus.

BASILEAE, M D LVII.
Cautum priuilegio Imp. Maiest. ne quis imitetur.

(1Dj) *Dictionarivm hebraicvm novvm, non ex rabinorvm commentis, nec nostrativm doctorvm*. Basileae, 1557.
フォルスターのヘブライ語辞書.　　（バイエルン州立図書館所蔵）



JOHANNIS BUXTORFI
EPITOME
RADICUM
HEBRAICARUM ET
CHALDAICARUM
[redacted] complectens [redacted]

Omnes voces, tam primas quàm derivatas, quæ in Sacris Bibliis, Hebræâ & ex parte Chaldæâ linguâ scriptis, extant:

Interpretationis fide, exemplorum Biblicorum copia, locorum plurimorum difficilium ex variis Hebræorum Commentariis explicatione, novè aucta, illustrata, locupletata.

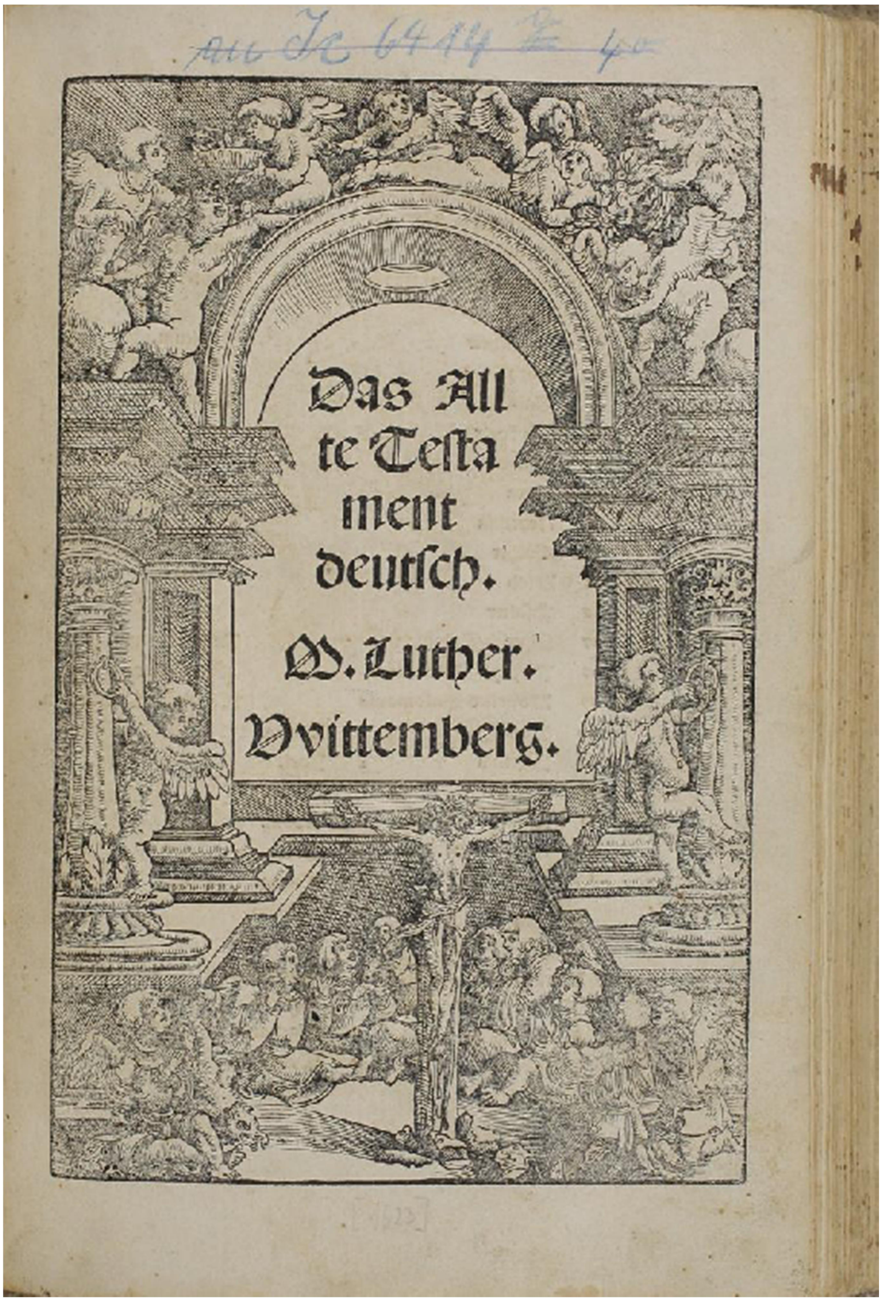
Adjectus est index vocum latinarum
[redacted] *copiosissimus.* [redacted]

Genes. 40. vers. 8.

הֲלוֹא לֵאלֹהִים פִּתְרוֹנִים

BASILEÆ,
Per CONRADUM WALDKIRCH.
clɔ lɔ c VII.

(1Dk) *Johannis Buxtorfi Epitome Radicum Hebraicarum et Chaldaicarum.* Basileæ, 1607. ブクストルフのヘブライ語アラム語辞書. （リヨン市立図書館所蔵）



(2Ga) *Das Allte Testament deutsch. M. Luther*. Wittenberg, 1523.　ルターによる最初の旧約聖書ドイツ語訳（モーセ五書）．（ザクセン＝アンハルト大学・州立図書館所蔵）

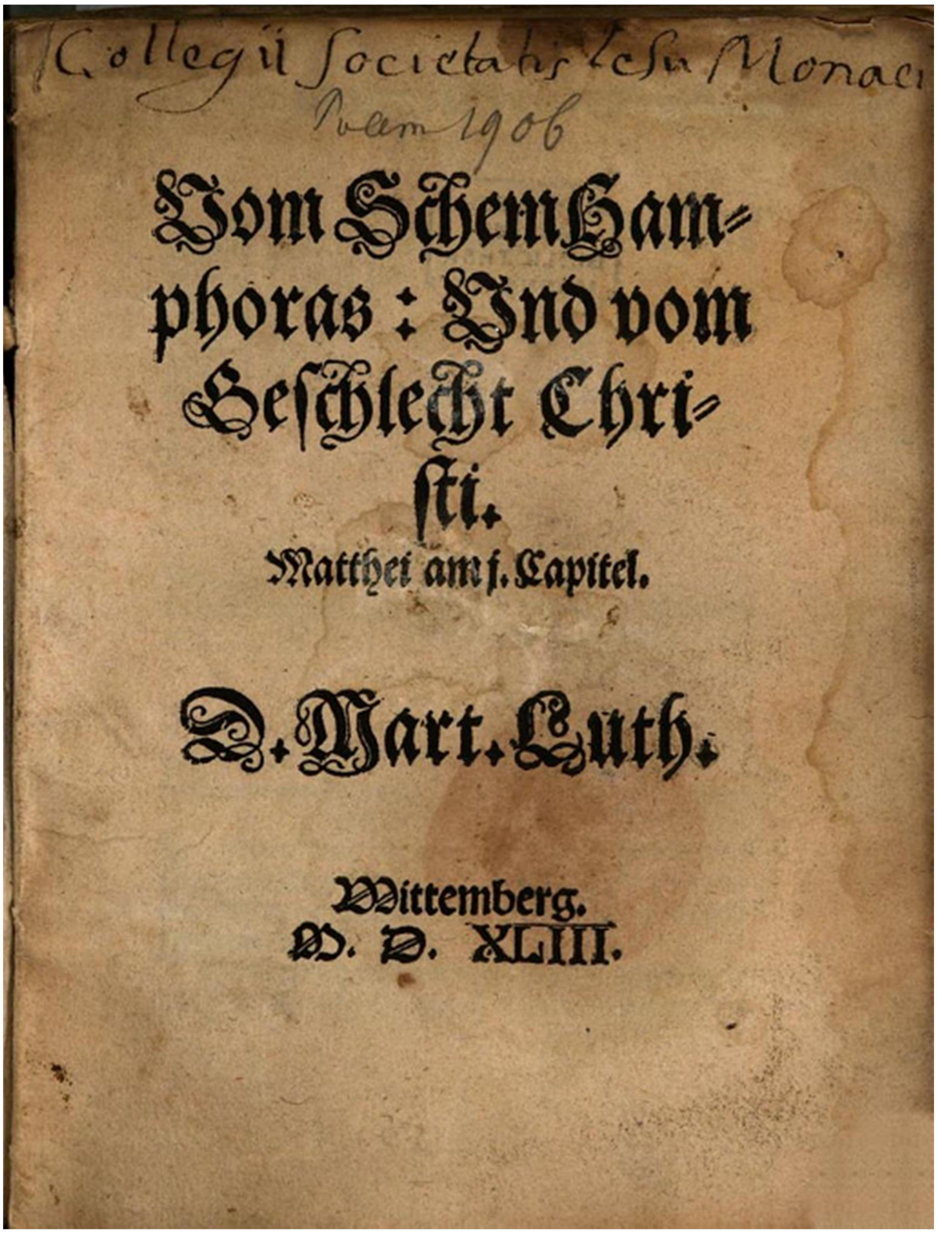


(2Gb) *Biblia, das ist, die gantze Heilige Schrift Deudsch. Mart. Luth. Wittemberg. Begnadet mit Kürfurstlicher zu Sachsen freiheit*. Wittenberg, 1534.　ルターによる聖書全体のドイツ語訳第一巻.　（アンナ・アマリア図書館協会提供の画像）

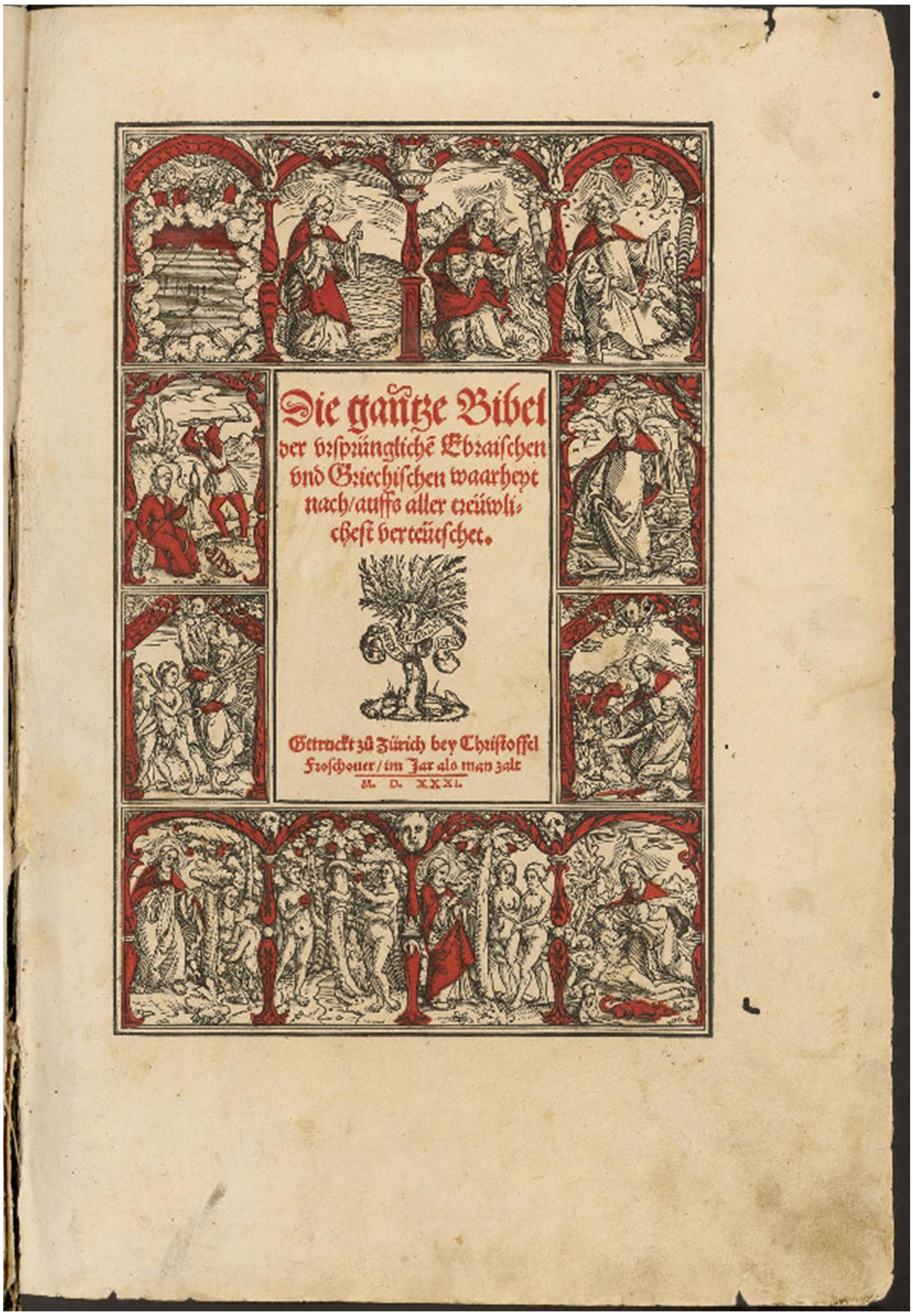


Biblia: das ist:
Die gantze Heilige
Schrifft: Deudsch
Auffs new zugericht.
D. Mart. Luth.
Begnadet mit Kur-
fürstlicher zu Sachsen Freiheit.
Gedruckt zu Wittem-
berg/ Durch Hans Lufft.
M.D.XLV.

(2Gc) *Biblia: das ist: Die gantze Heilige Schrifft: Deudsch. Auffs new zugericht. D. Mart. Luth. Begnadet mit Kurfürstlicher zu Sachsen Freiheit*. Wittenberg, 1545. ルター自身による死の前年の改訂版. （オーストリア国立図書館所蔵）

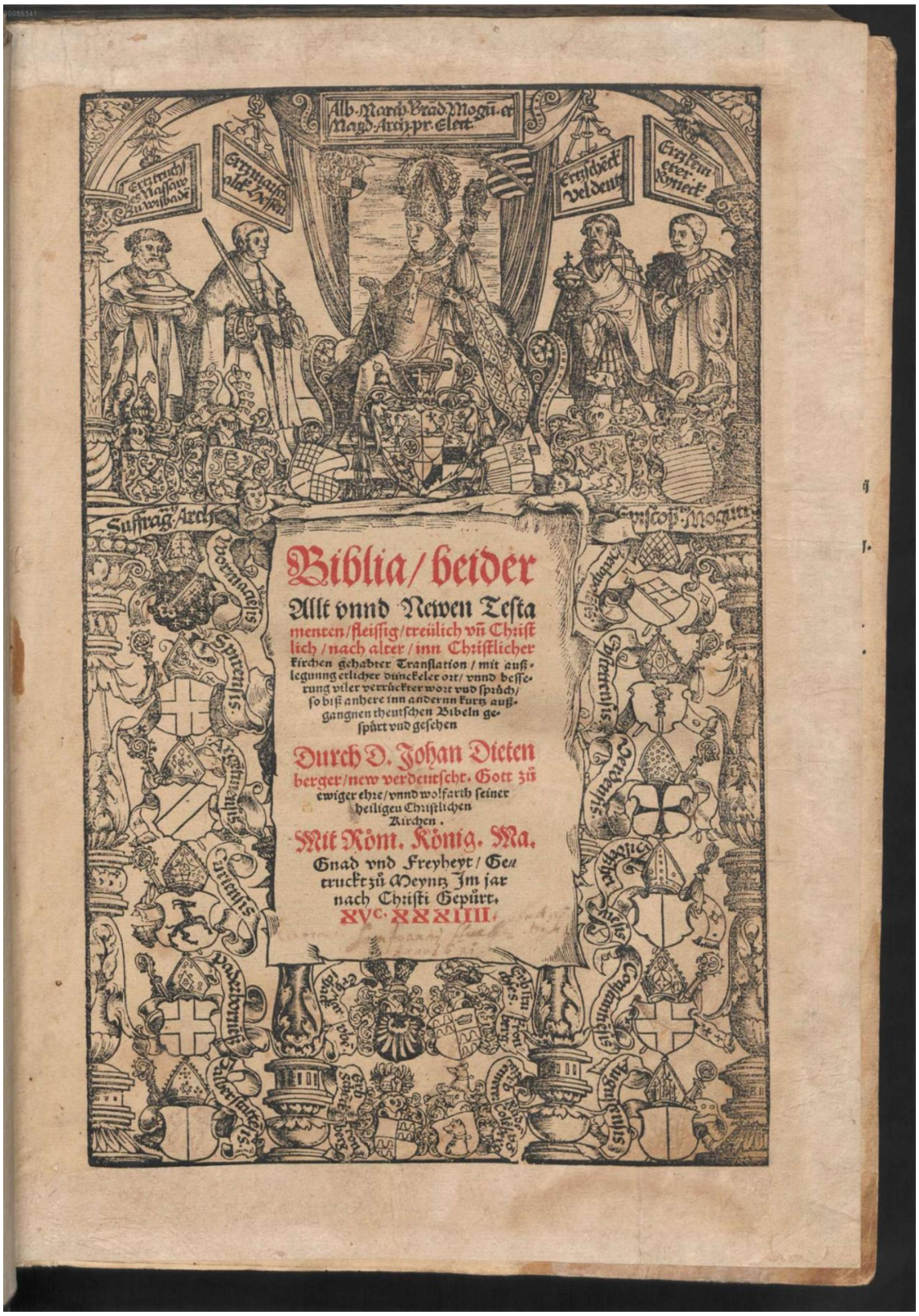


(2Gf) *Vom SchemHamphoras: Vnd vom Geschlecht Christi: Matthei am j. Capitel. D. Mart. Luth*. Wittenberg, 1543. 「シェーム・ハメフォーラーシュについて、およびキリストの家系について（マタイ第１章）」，（バイエルン州立図書館所蔵）

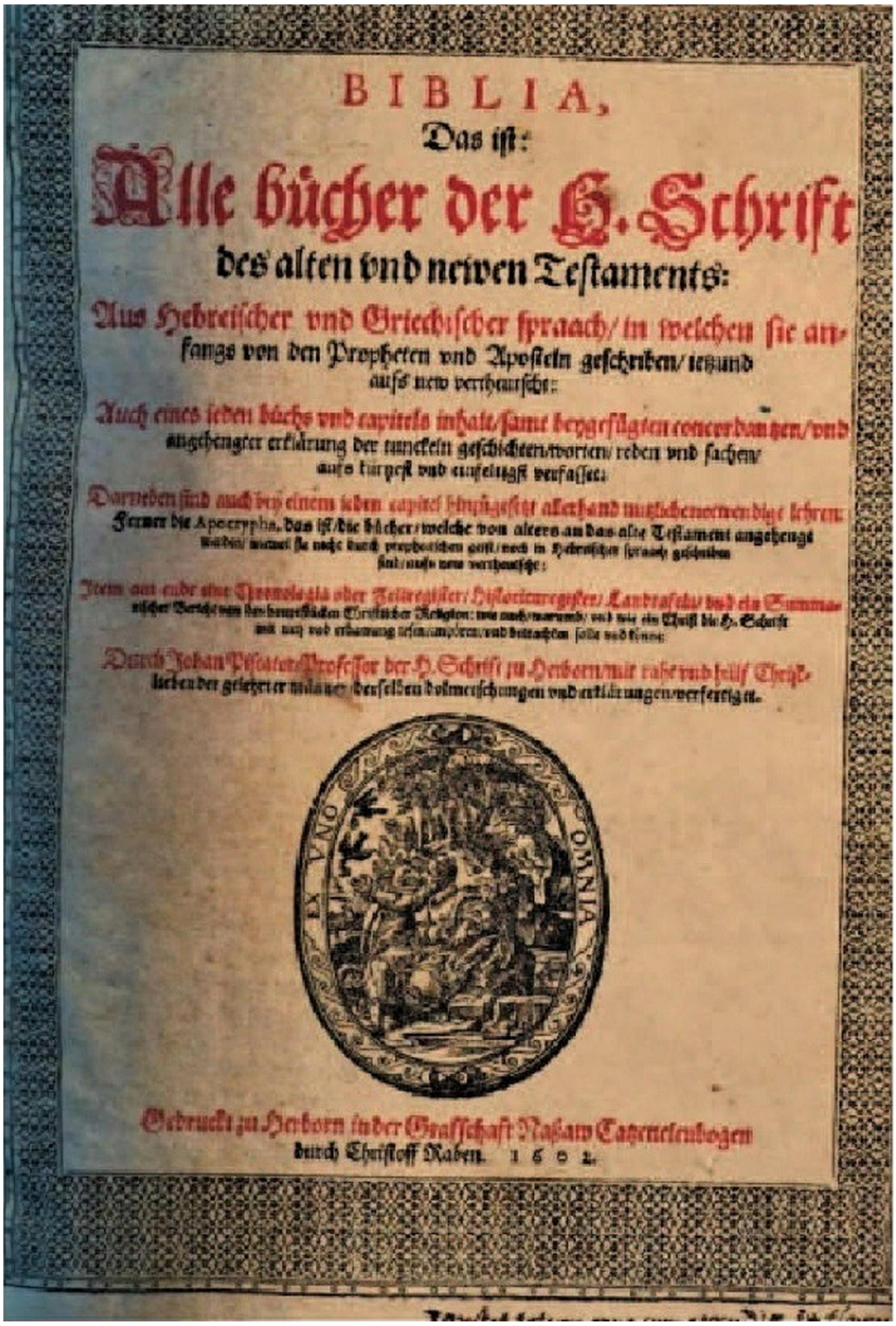

Die gantze Bibel
der vrsprüngliche Ebraischen
vnd Griechischen waarheyt
nach/auffs aller treüwli-
chest verteütschet.

Getruckt zů Zürich bey Christoffel
Froschouer/im Jar als man zalt
M. D. XXXI.

(2Gh) *Die gantze Bibel der vrsprüngliche[n] Ebraischen vnd Griechischen waarheyt nach, auffs aller treüwlichest verteütschet*. Zürich, 1531. ツウィングリらによるチューリヒ聖書. （チューリヒ中央図書館所蔵）



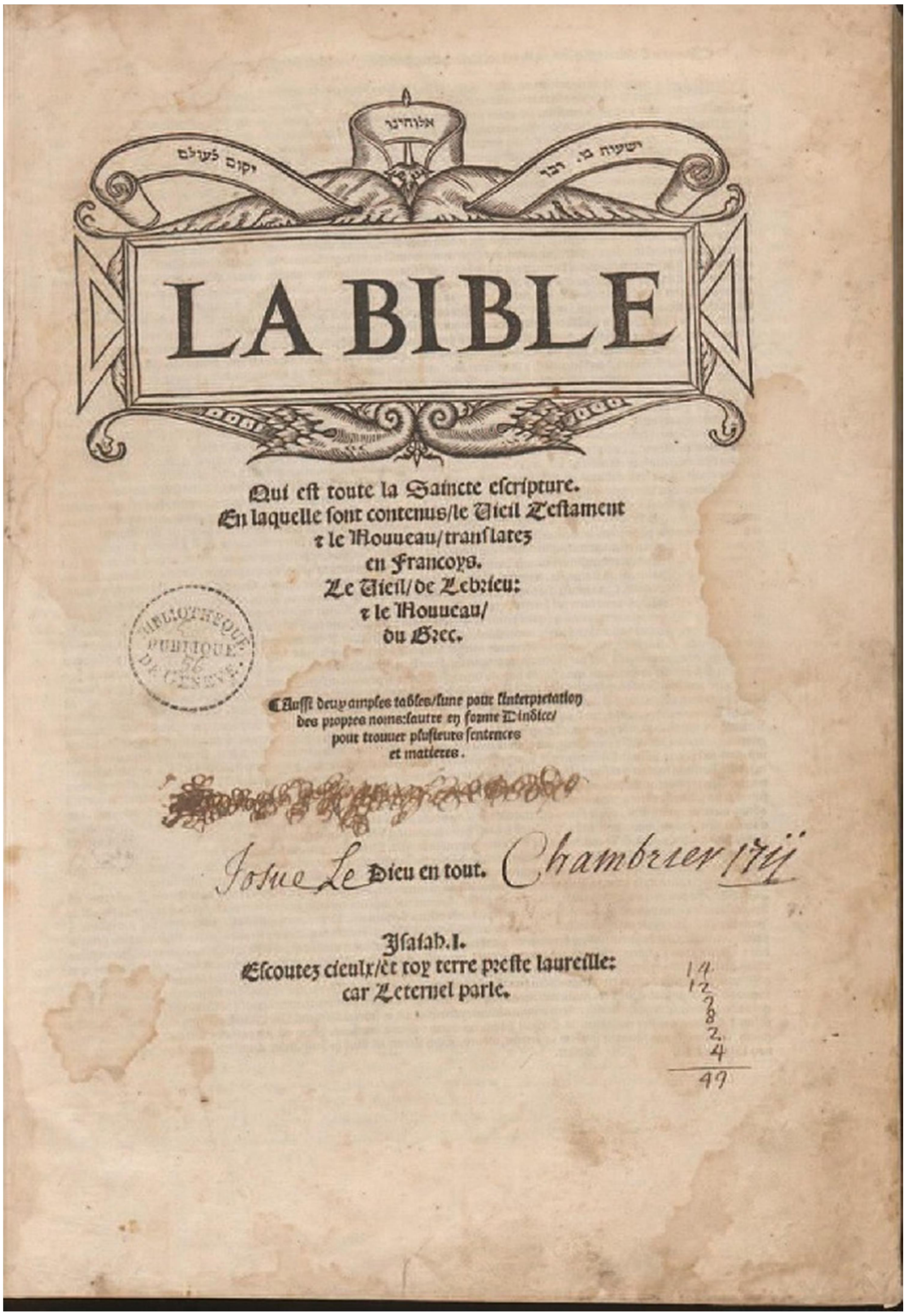
(2Gi) *Biblia, beider Allt vnnd Newen Testamenten*. *Durch D. Johan Dietenberger, new verdeutscht.* Mainz, 1534.
ディーテンベルガーのドイツ語訳.　　（バイエルン州立図書館所蔵）



(2Gj) *Biblia, Das ist: Alle bücher der H. Schrift des alten vnd newen Testaments: Durch Johan Piscator.* Herborn, 1602.　ピスカートルのドイツ語訳聖書第一巻.　（バイエルン州立図書館所蔵）



(2Fa) *La saincte Bible. en Francoys, translatee selon la pure et entiere traduction de sainct Hierome.* Anuers, 1530.　ルフェーブル訳.　（ゲント大学図書館所蔵所蔵）



LA BIBLE

Qui est toute la Saincte escripture.
En laquelle sont contenus/le Uieil Testament
& le Nouueau/translatez
en Francoys.
Le Uieil/de Lebrieu:
& le Nouueau/
du Grec.

Aussi deux amples tables/lune pour linterpretation
des propres noms:lautre en forme Dindice/
pour trouuer plusieurs sentences
et matieres.

Dieu en tout.

Isaiah.I.
Escoutez cieulx/et toy terre preste laureille:
car Leternel parle.

(2Fb) *La Bible. Qui est toute la Saincte escripture. En laquelle sont contenus, le Uieil Testament & le Nouueau, translatez en Francoys.* Neufchastel, 1535.　オリヴェタン聖書.　（ジュネーブ図書館所蔵）


LA BIBLE,

Qui eſt toute la Saincte Eſcripture contenant le Vieil & Nouueau Teſtament, ou Alliance.

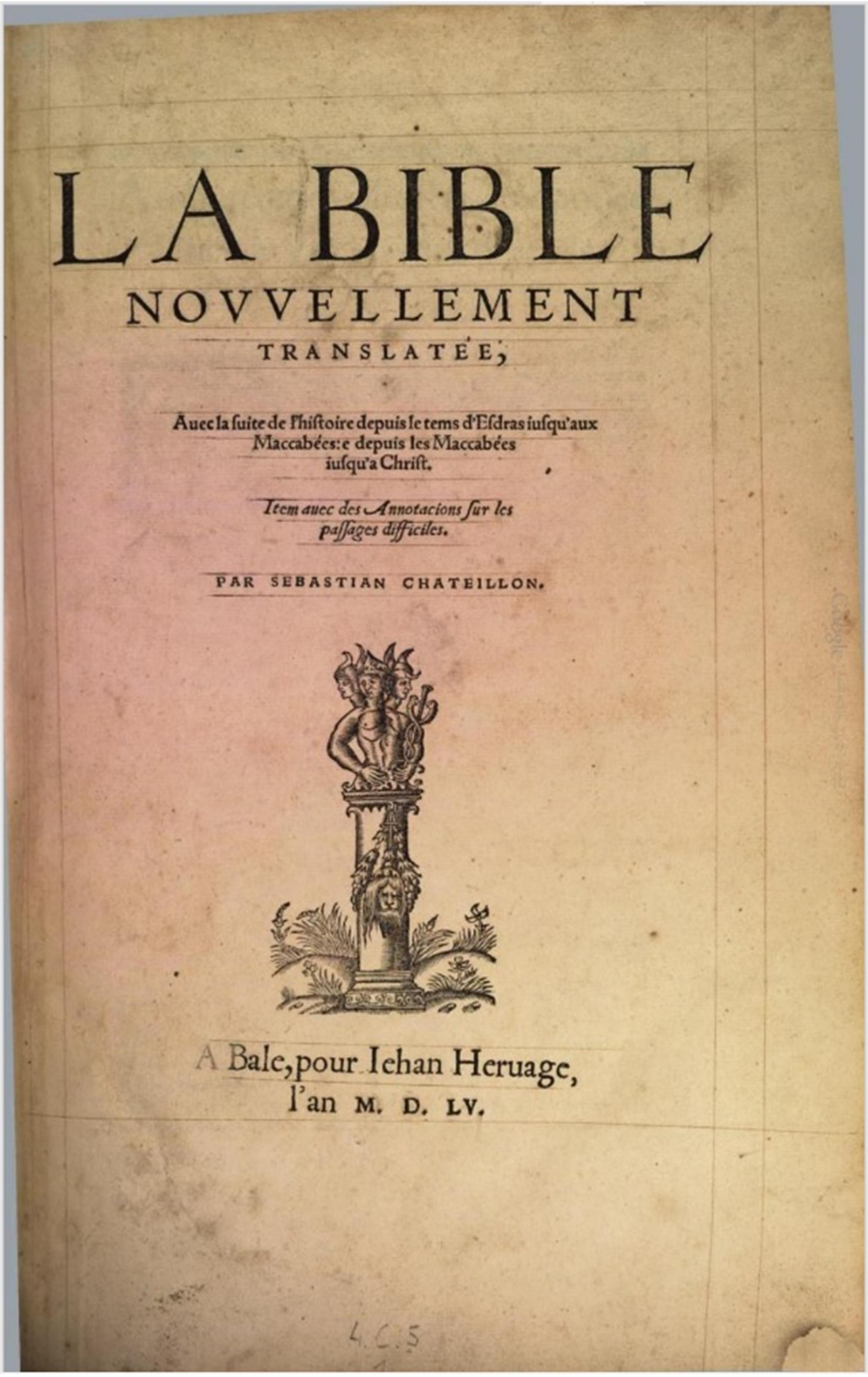
Eſaie I.

Eſcoutez cieulx, & toy terre preſte l'oreille: car l'Eternel parle.

L'Oliuier de Robert Eſtienne.

M. D. LIII.

(2Fb') *La Bible, Qui est toute la Saincte Escripture contenant le Vieil & Noueau Testament, ou Alliance*. Genève, 1553. オリヴェタン聖書の 1553 年改訂版．（ジュネーブ図書館所蔵）



(2Fc) *La Bible novvellement translatee, Auec la suite de l'histoire depuis le tems d'Esdras, iusqu'aux Maccabées.* Bale, 1555. カステリョのフランス語訳聖書.　（オーストリア国立図書館所蔵）

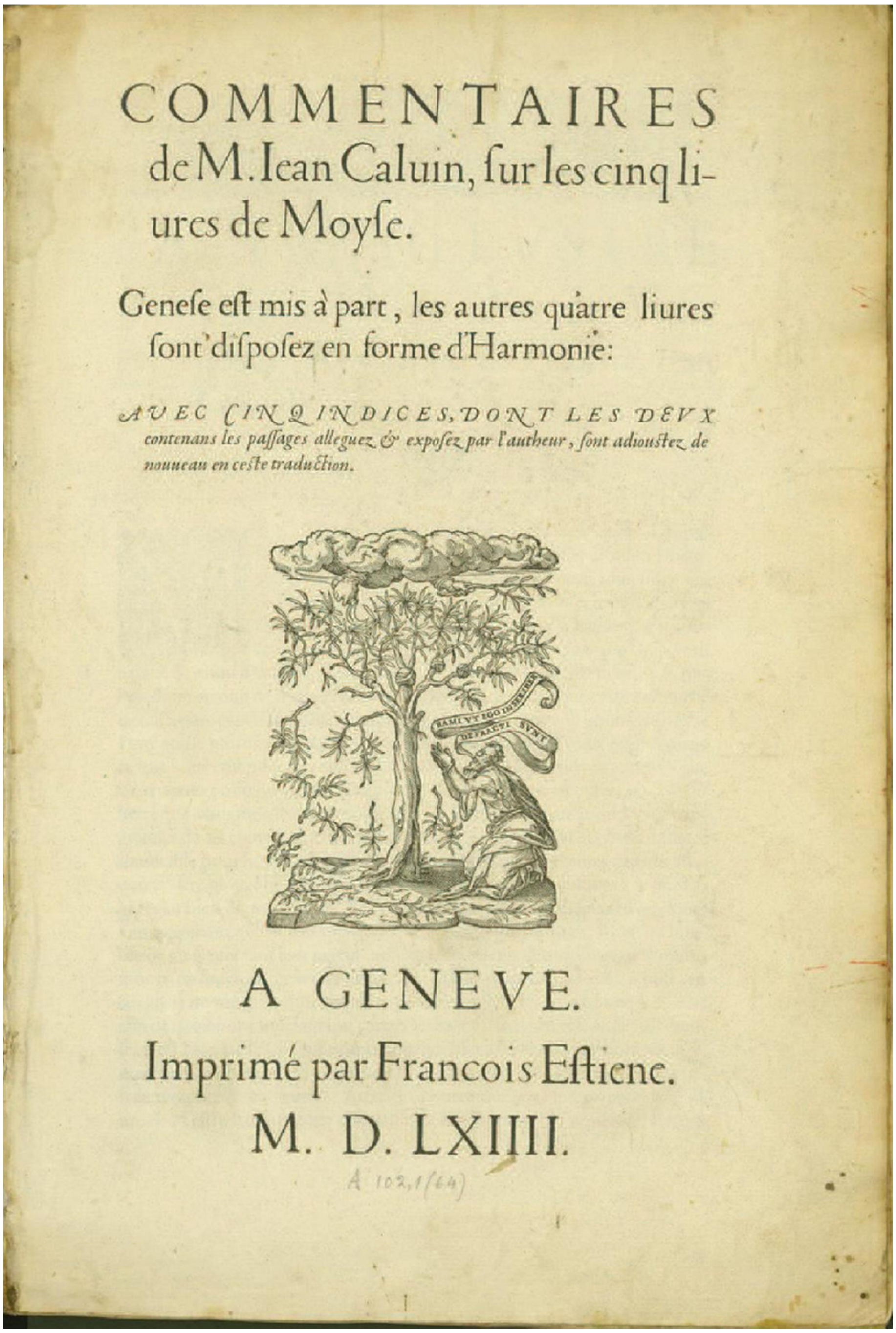


COMMENTAIRE
DE M. IEAN CALVIN,
SVR LE PREMIER LI-
VRE DE MOYSE, DIT
GENESE.

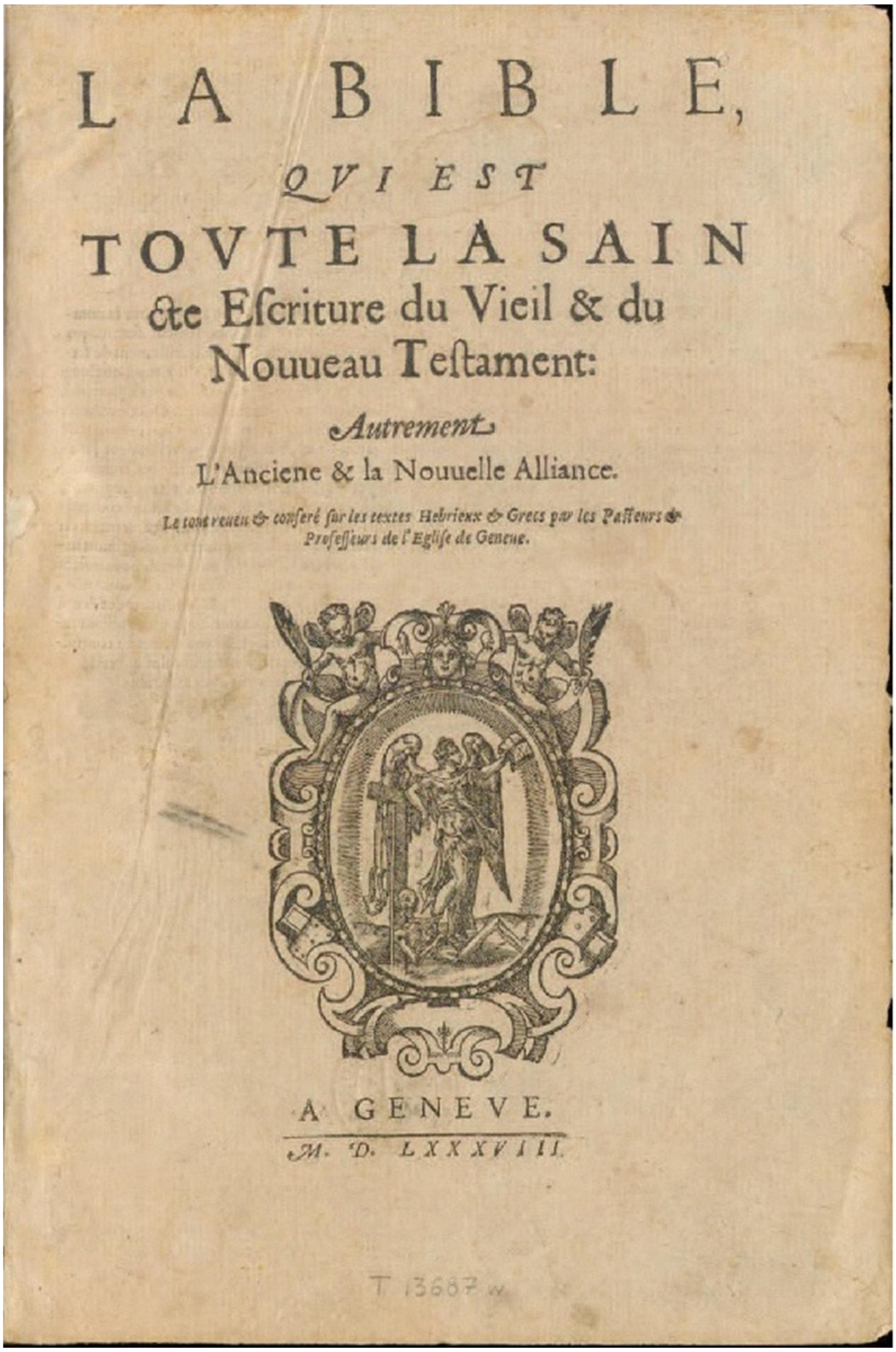
PACEM IN TERRAM,
NON VENIVT MITTEREM
SED GLADIVM. MATTH. X.

A Geneue,
CHEZ IEAN GERARD,
M. D. LIIII.

(2Fd) *Commentaire de M. Iean Calvin, svr le premier livre de Moyse, dit Genese*. Geneue, 1554.　カルヴァンの創世記注解書のフランス語訳 1554 年.　　（ジュネーブ図書館所蔵）



(2Fd') *Commentaires de M. Iean Caluin, sur les cinq liures de Moyse.* Genève, 1564. カルヴァンのフランス語版五書注解書 1564 年.　（ジュネーブ宗教改革歴史博物館所蔵）


LA BIBLE,

QVI EST

TOVTE LA SAIN
cte Escriture du Vieil & du
Nouueau Testament:

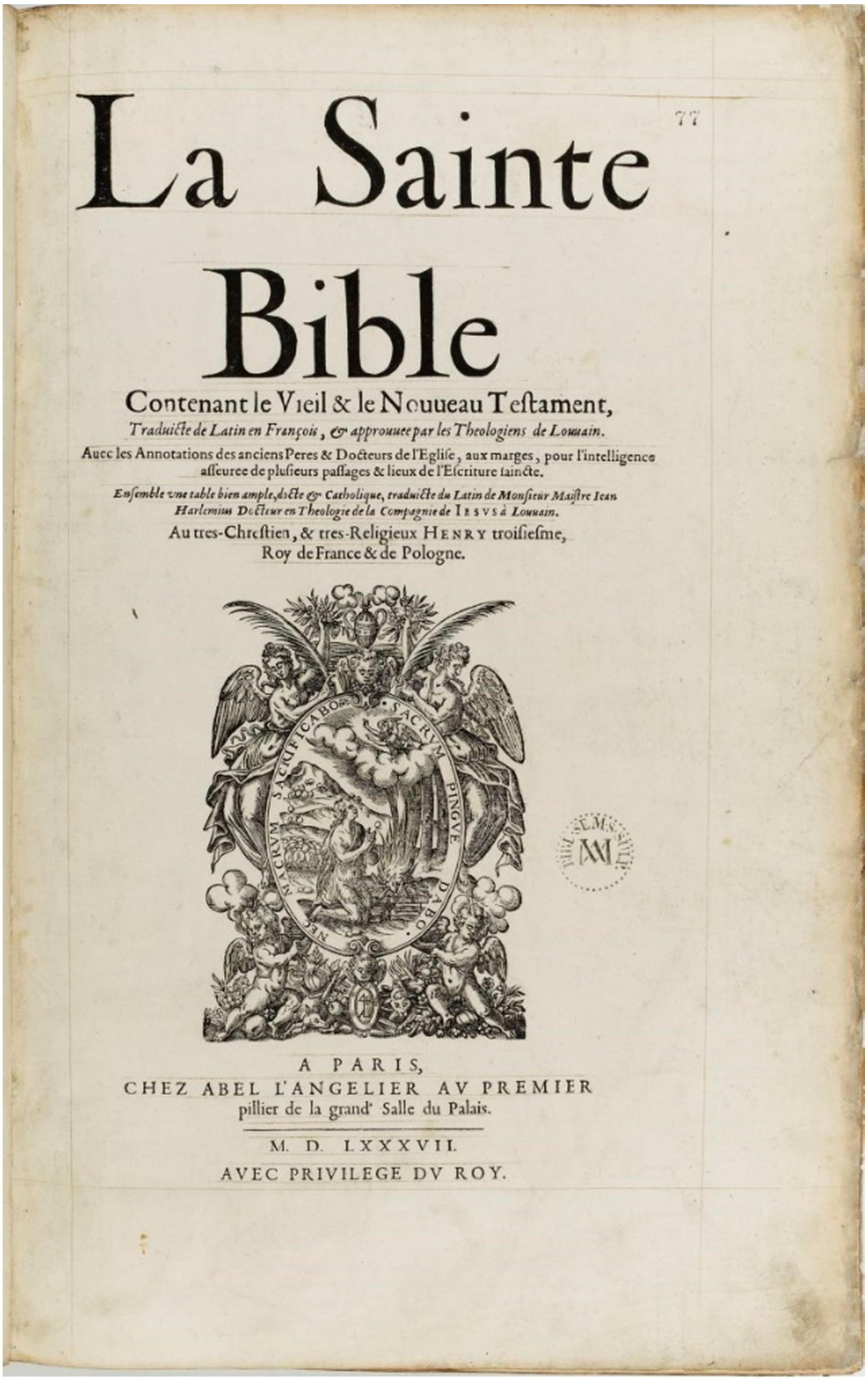
Autrement
L'Anciene & la Nouuelle Alliance.

Le tout reueu & conferé sur les textes Hebrieux & Grecs par les Pasteurs & Professeurs de l'Eglise de Geneue.

A GENEVE.

M. D. LXXXVIII.

(2Fe) *La Bible, qvi est tovte la Saincte Escriture du Vieil & du Noueau Testament: Autrement, l'Anciene & la Nouuelle Alliance*. Genève, 1588.　ジュネーブ聖書.　（ジュネーブ図書館所蔵）



La Sainte

Bible

Contenant le Vieil & le Nouueau Testament,

Traduicte de Latin en François, & approuuee par les Theologiens de Louuain.

Auec les Annotations des anciens Peres & Docteurs de l'Eglise, aux marges, pour l'intelligence asseuree de plusieurs passages & lieux de l'Escriture saincte.

Ensemble vne table bien ample, docte & Catholique, traduicte du Latin de Monsieur Maistre Iean Harlemius Docteur en Theologie de la Compagnie de IESVS *à Louuain.*

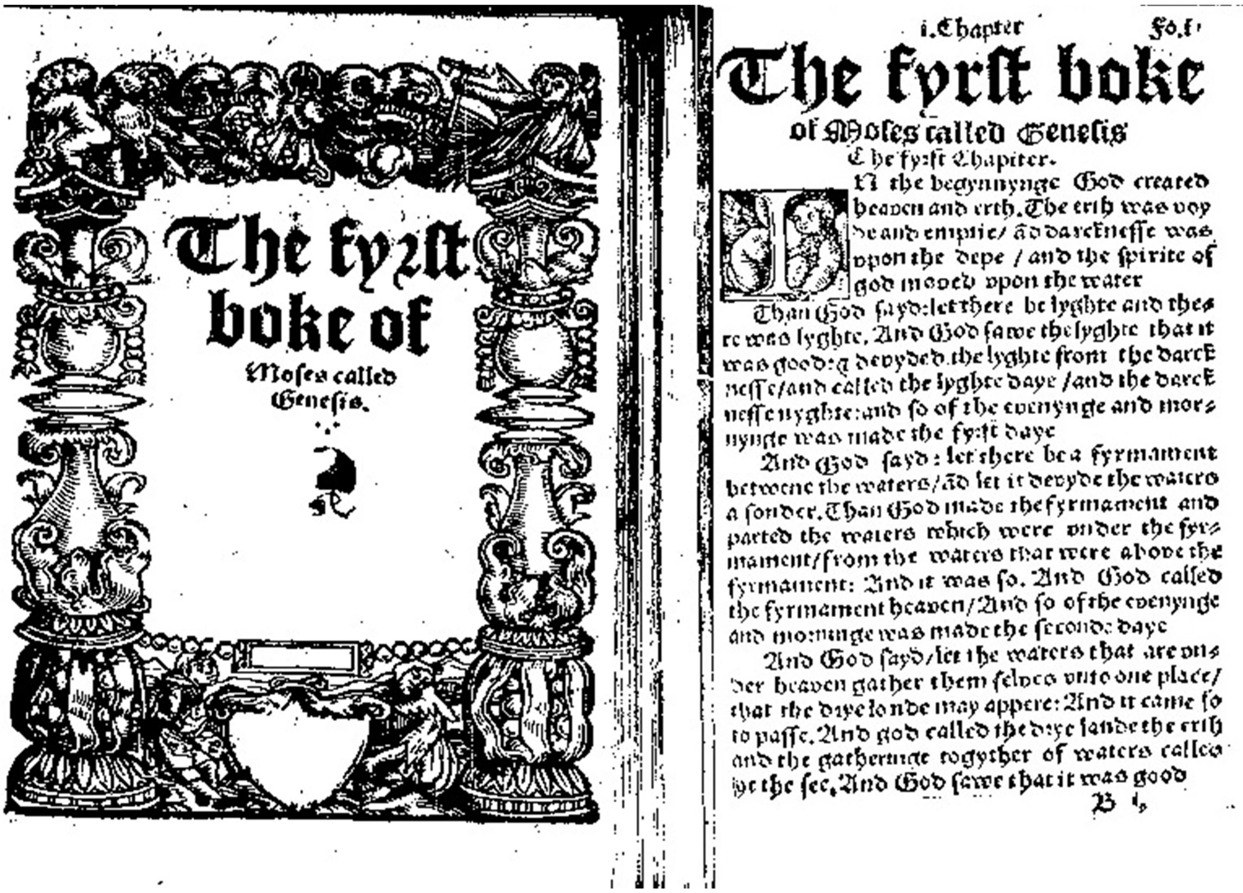
Au tres-Chrestien, & tres-Religieux HENRY troisiesme, Roy de France & de Pologne.

A PARIS,
CHEZ ABEL L'ANGELIER AV PREMIER
pillier de la grand' Salle du Palais.

M. D. LXXXVII.

AVEC PRIVILEGE DV ROY.

(2Ff) *La Sainte Bible. Contenant le Vieil & le Nouueau Testament, Traduicte de Latin en François, et approuuee par les Theologiens de Louvain.* Paris, 1587. カトリックによるフランス語訳 1587 年. （フランス国立図書館所蔵）



The fyrst
boke of
Moses called
Genesis.

i.Chapter Fo.i

The fyrst boke

of Moses called Genesis

The fyrst Chapiter.

IN the begynnynge God created
heaven and erth. The erth was voy
de and emptie / & darcknesse was
upon the depe / and the spirite of
god moved upon the water

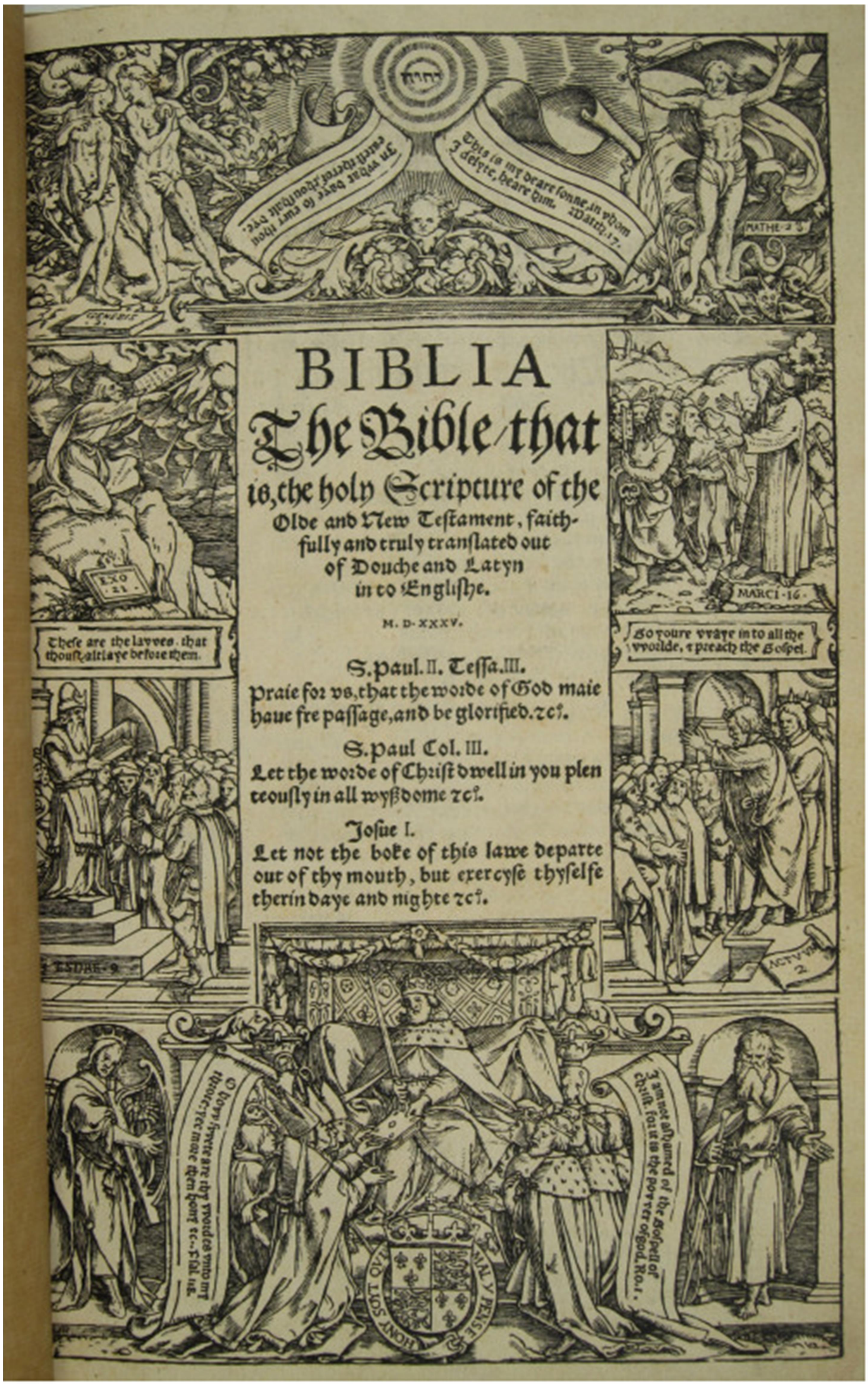
Than God sayd: let there be lyghte and the-
re was lyghte. And God sawe the lyghte that it
was good: & devyded the lyghte from the darck
nesse / and called the lyghte daye / and the darck
nesse nyghte: and so of the evenynge and mor-
nynge was made the fyrst daye

And God sayd: let there be a fyrmament
betwene the waters / & let it devyde the waters
a sonder. Than God made the fyrmament and
parted the waters which were vnder the fyr-
mament / from the waters that were above the
fyrmament: And it was so. And God called
the fyrmament heaven / And so of the evenynge
and mornynge was made the seconde daye

And God sayd / let the waters that are vn-
der heaven gather them selves vnto one place /
that the drye londe may appere: And it came so
to passe. And god called the drye lande the erth
and the gatherynge togyther of waters called
he the see. And God sawe that it was good

B i

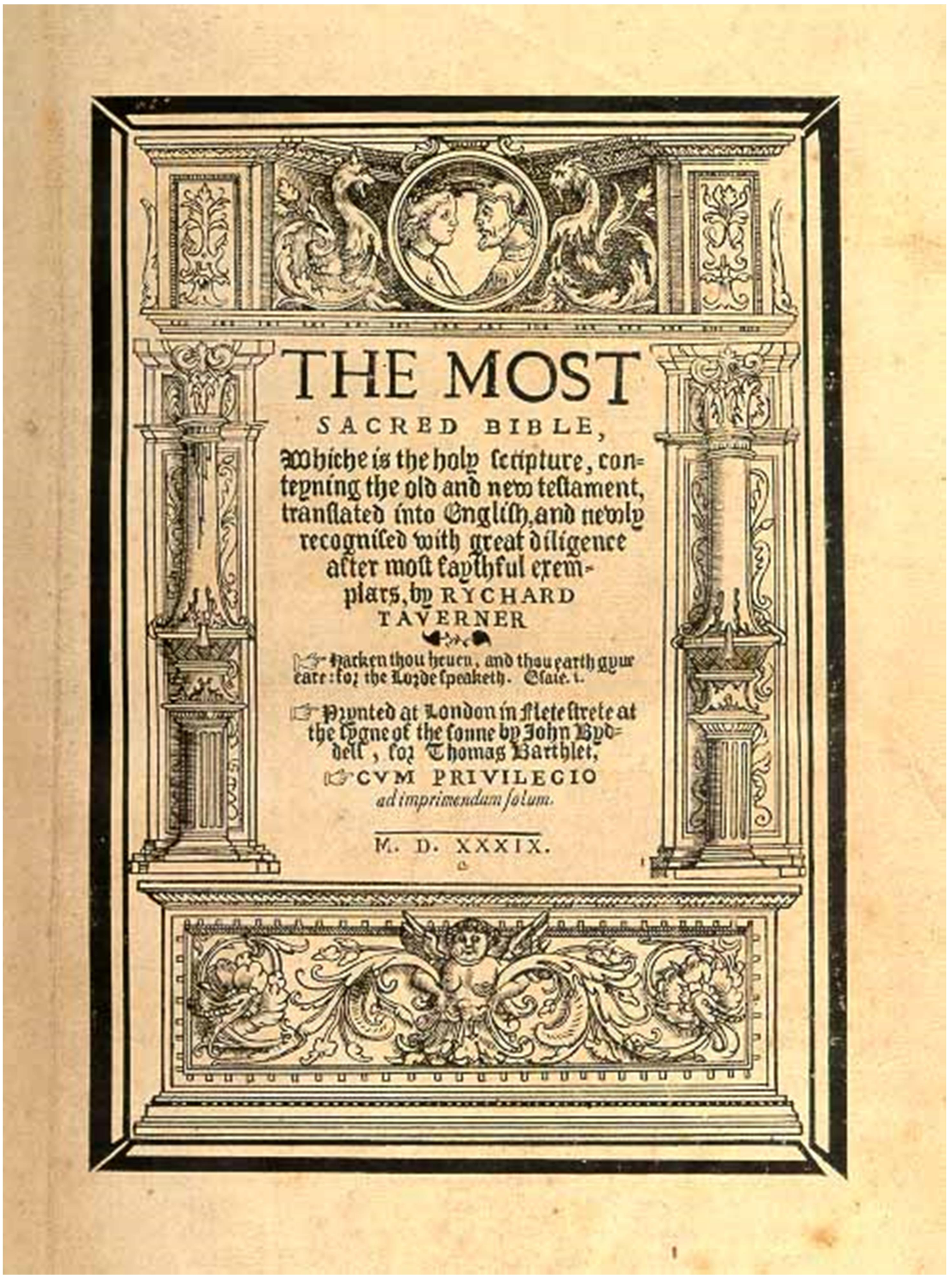
(2Ea) *[The Pentateuch]*. William Tyndale. Hesse: Malborow, 1530. ティンダルのモーセ五書英語訳. （ケンブリッジ大学図書館所蔵） タイトル頁と創世記冒頭の頁を並べて示す.



(2Eb) *Biblia. The Bible, that is the holy Scripture of the Olde and New Testament, faithfully and truly translated out of Douche and Latyn in to Englyshe.* 1535. カヴァデイル聖書「大陸版」. (CC No. 765) （Rare Bible Collection @ MOBIA 提供の画像） 聖書引用は、２テサ 3：1、コロ 3：16、ヨシュ 1：8.



(2Ec) *The Byble, which is all the holy Scrypture: In whych are contayned the Olde and Newe Testament truly and purely translated into Englysh by Thomas Matthew*. 1535.　マシュー訳聖書.　（Bibles-Online.net、ファクシミリ聖書）



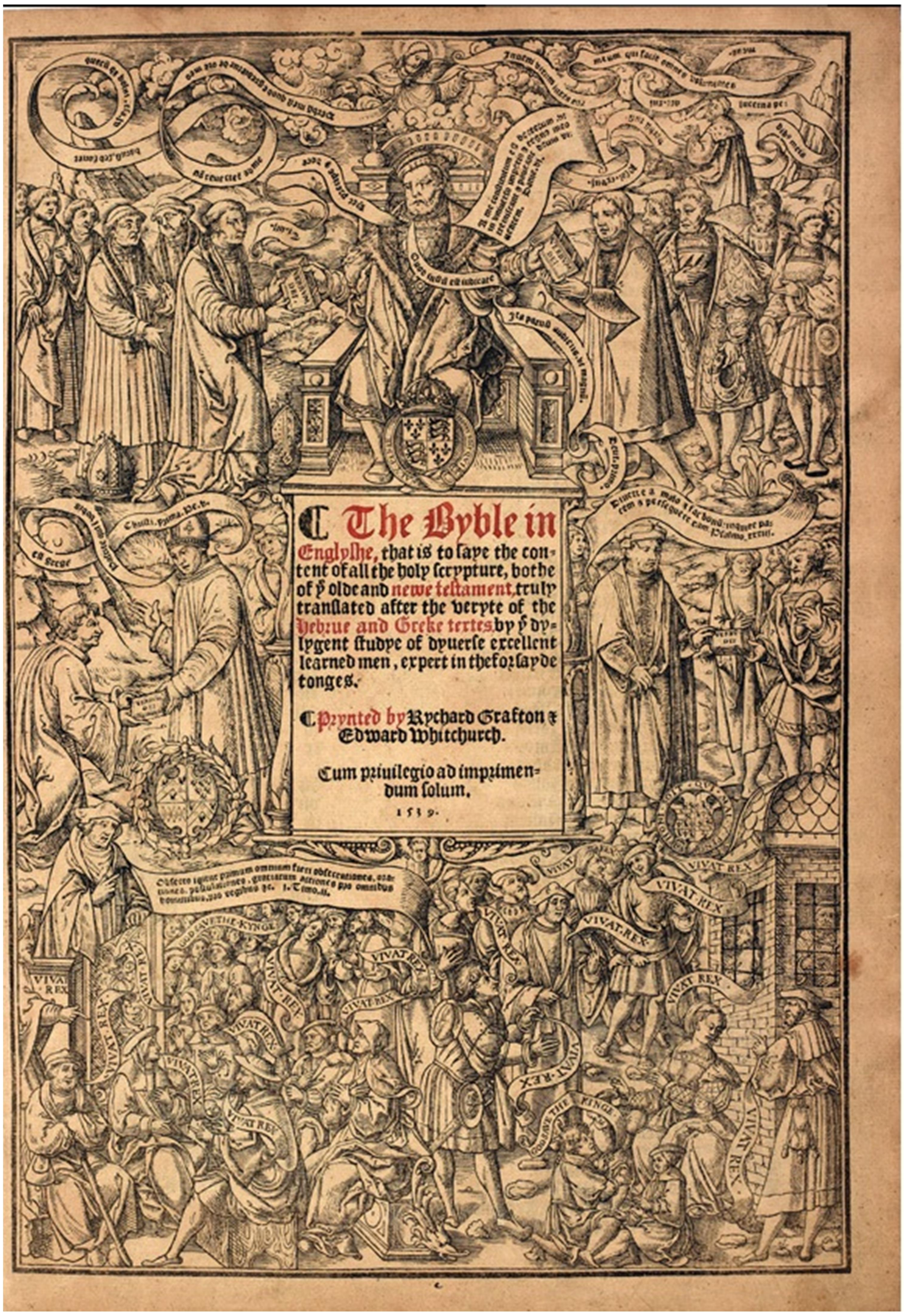
THE MOST
SACRED BIBLE,
Whiche is the holy scripture, con-
teyning the old and new testament,
translated into English, and newly
recognised with great diligence
after most faythful exem-
plars, by RYCHARD
TAVERNER

Harken thou heuen, and thou earth gyue
eare: for the Lorde speaketh. Esaie. i.

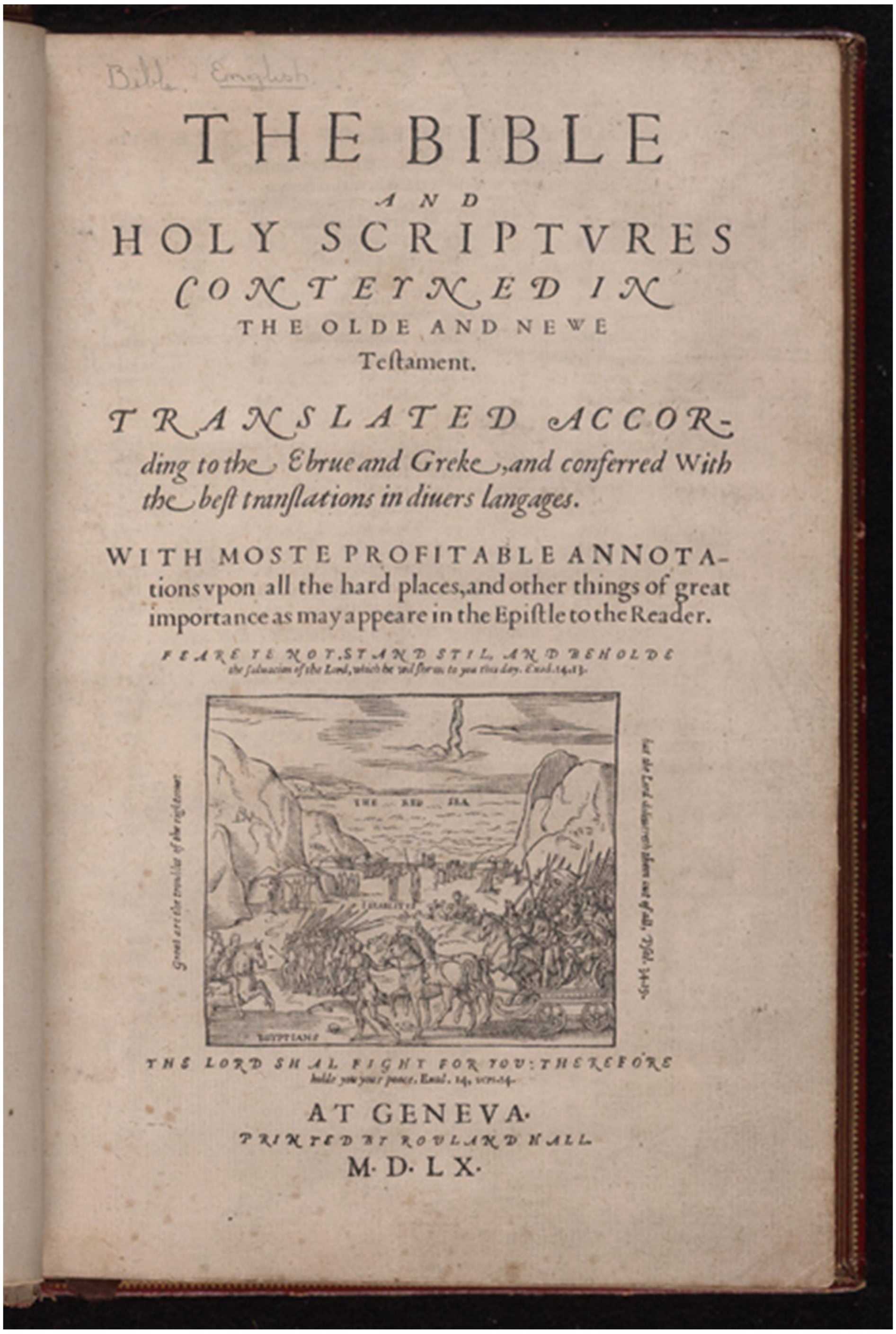
Prynted at London in Fletestrete at
the sygne of the sonne by John Byd-
dell, for Thomas Barthlet,
CVM PRIVILEGIO
ad imprimendum solum.

M. D. XXXIX.

(2Ed) *The Most Sacred Bible, Whiche is the holy scripture, conteyning the old and new testament, translated into English ... by RYCHARD TAVERNER.* London, 1539. タヴァナー聖書.（グラスゴー大学提供の画像［特別コレクション］）


The Byble in Englyshe, that is to saye the content of all the holy scrypture, bothe of ẏ olde and newe testament, truly translated after the veryte of the Hebrue and Greke textes, by ẏ dylygent studye of dyuerse excellent learned men, expert in the forsayde tonges.
Prynted by Rychard Grafton & Edward Whitchurch.
Cum priuilegio ad imprimendum solum.
1539.

(2Ee) *The Byble in Englyshe, that is to saye the content of all the holy scrypture, bothe of* y^e *olde and newe testament, truly translated after the veryte of the Hebrue and Greke textes.* 1539. 大聖書. （CC No. 813）
（グラスゴー大学図書館提供の画像）



THE BIBLE
AND
HOLY SCRIPTVRES
CONTEYNED IN
THE OLDE AND NEWE
Testament.

TRANSLATED ACCORding to the Ebrue and Greke, and conferred With the best translations in diuers langages.

WITH MOSTE PROFITABLE ANNOTAtions vpon all the hard places, and other things of great importance as may appeare in the Epistle to the Reader.

FEARE YE NOT, STAND STIL, AND BEHOLDE the saluacion of the Lord, which he wil shewe to you this day. Exod. 14,13.

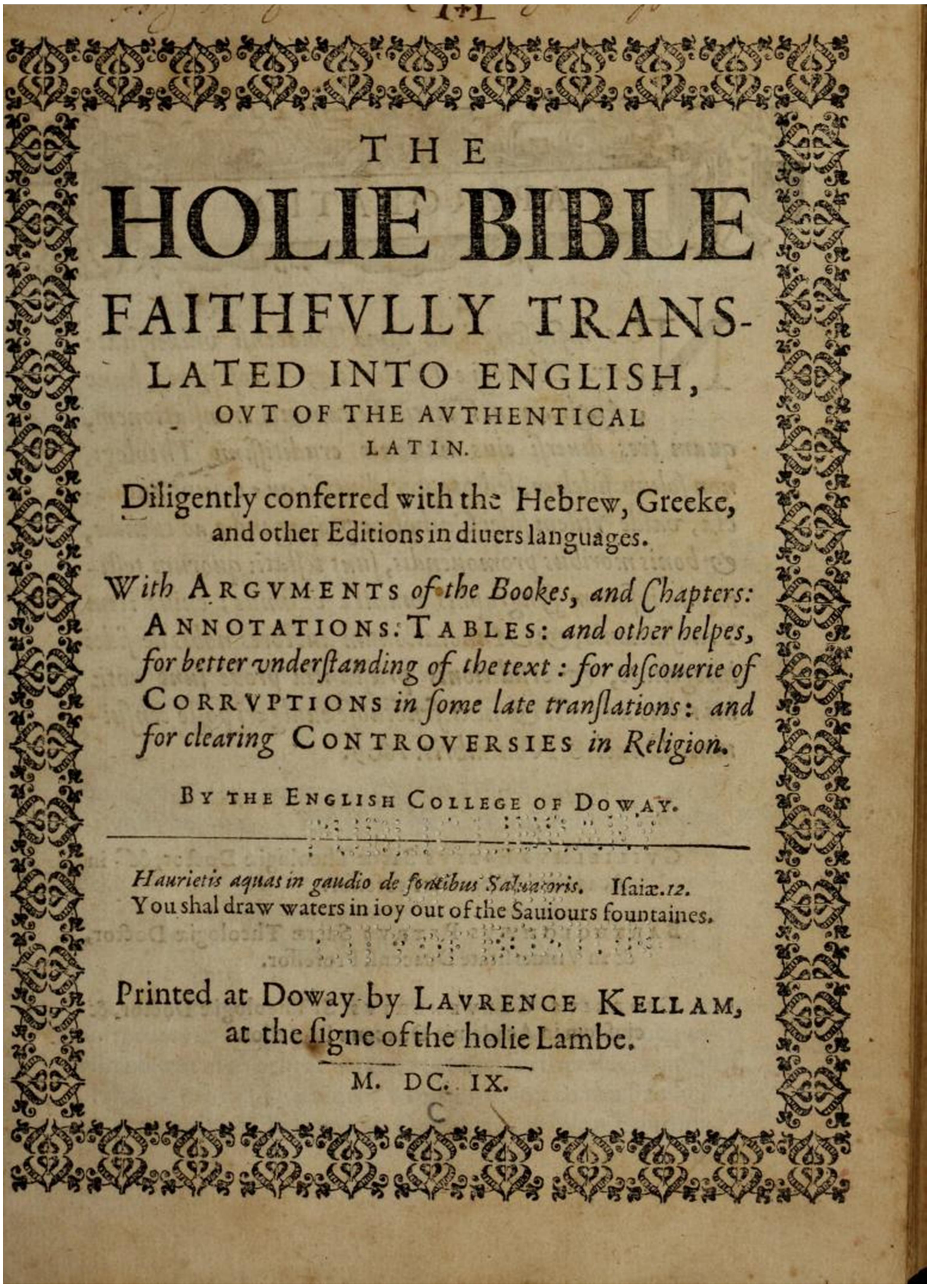
THE LORD SHAL FIGHT FOR YOU: THEREFORE holde you your peace. Exod. 14, vers. 14.

AT GENEVA.
PRINTED BY ROVLAND HALL.
M. D. LX.

(2Ef) *The Bible and Holy Scriptvres conteyned in the Olde and Newe Testament. Translated according to the Ebrue and Greke, and conferred With the best translations in diuers languages.* Geneva, 1560.　ジュネーブ聖書.　（アメリカ議会図書館提供の画像）



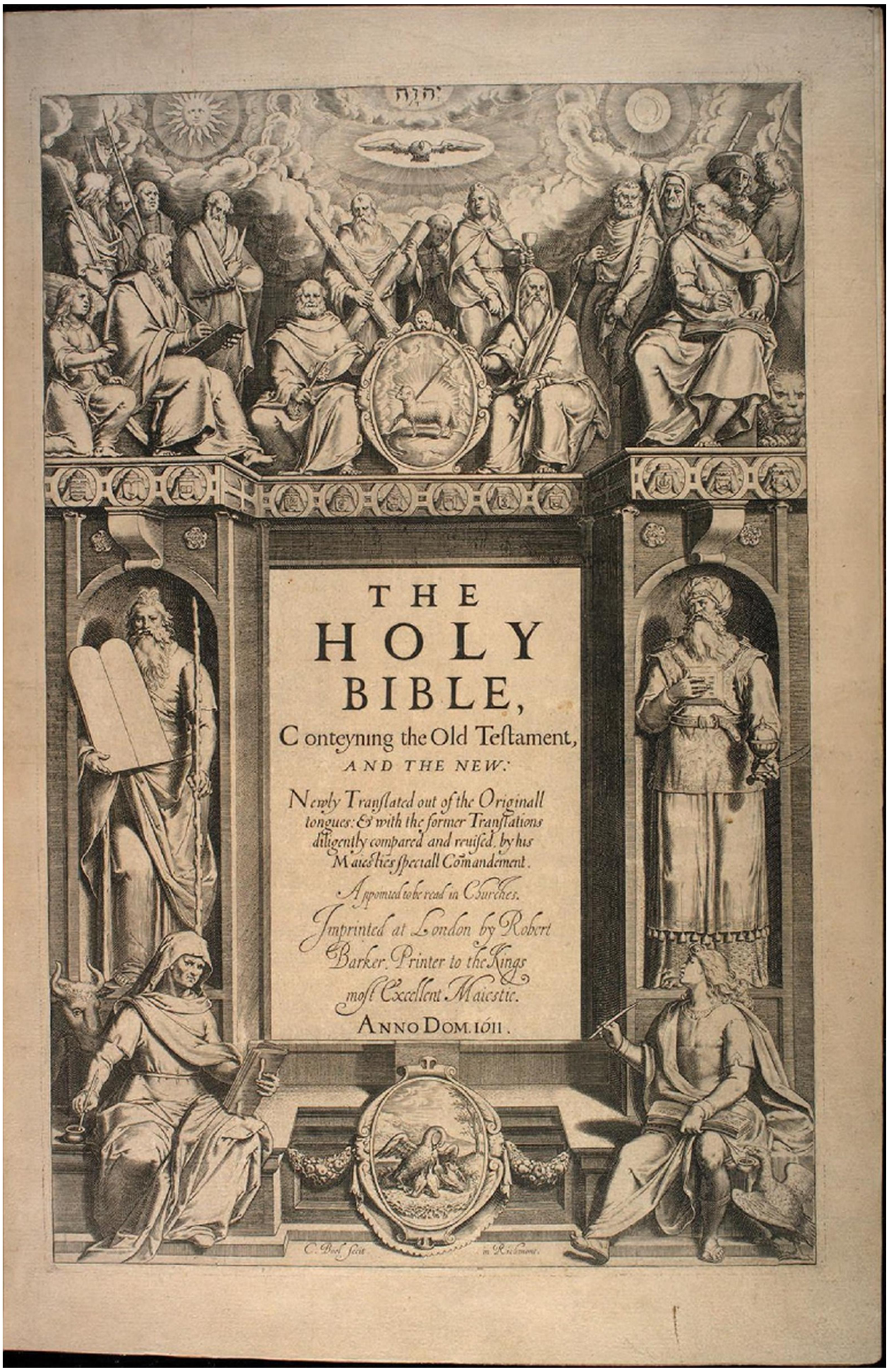
(2Eg) *The. holie. Bible. conteynyng the olde Testament and the newe*. London, 1568.　　主教訳.　　（プリンストン神学校図書館所蔵）


THE
HOLIE BIBLE
FAITHFVLLY TRANS-
LATED INTO ENGLISH,
OVT OF THE AVTHENTICAL
LATIN.
Diligently conferred with the Hebrew, Greeke,
and other Editions in diuers languages.
With ARGVMENTS *of the Bookes, and Chapters:*
ANNOTATIONS: TABLES: *and other helpes,*
for better vnderſtanding of the text: for diſcouerie of
CORRVPTIONS *in ſome late tranſlations: and*
for clearing CONTROVERSIES *in Religion.*
BY THE ENGLISH COLLEGE OF DOWAY.

Haurietis aquas in gaudio de fontibus Saluatoris. Iſaiæ.12.
You shal draw waters in ioy out of the Sauiours fountaines.

Printed at Doway by LAVRENCE KELLAM,
at the ſigne of the holie Lambe.
M. DC. IX.

(2Eh) *The Holy Bible Faithfvlly Translated into English, Ovt Of The Avthentical Latin. Diligently conferred with the Hebrew, Greeke, and other Editions in diuers languages.* Doway, 1609.　ドゥエイ聖書.［Vo. 1 創世記〜ヨブ記］.（CC No. 1024）　（ボストン公共図書館所蔵）



(2Ei) *The Holy Bible, Contayning the Old Testament and the New: Newly Translated out of the Originall tongues* London, 1611.　欽定訳.　（Internet Archive Community Texts）